栃木県埋蔵文化財調査報告書　第31集

北の内遺跡

昭和54年10月

栃木県教育委員会

序

足尾山地の南端佐野市北西部の洪積台地上には，弥生時代再葬墓で著名な出流原遺跡をはじめとして，数多くの埋蔵文化財の包蔵地が所在することで知られております。

昭和51年６月当時，佐野市赤見地区において国道293号線の道路改良工事が実施されておりましたが，その工事中，数多くの土器破片とともに，縄文時代の住居跡が露出している旨，地元研究者より当教育委員会に連絡がありました。当教育委員会では埋蔵文化財の取扱いについて，県土木部と協議し，現状保存が不可能なことから，記録保存調査を実施することにいたしました。

発掘調査につきましては，ちょうどこの時期，当教育委員会において数遺跡の発掘調査を実施中であり，本遺跡の発掘調査体制を組織することが困難な状態でありましたので，細谷正策，尾花源司の両先生に調査に関する御指導をお願いすることとなった次第であり，公務御多端の折，両先生の調査及び整理作業の両面にわたる献身的な御努力に対して深甚なる謝意を表するものであります。

このたび，これら調査結果を整理し，報告書として公刊する運びとなりました。不備な点もあろうかと存じますが，関係各方面において御活用いただければ幸いです。

最後に，調査に際しまして，種々御協力いただいた佐野市教育委員会，地元関係者の方々，更には県土木部，佐野土木事務所の方々に対しまして厚くお礼申上げます。

昭和54年10月

栃木県教育委員会
教育長　渡　辺　幹　雄

例　　言

1．本書は一般国道293号線・佐野道路改良工事「佐野市赤見地区」にともなう北の内遺跡発掘調査報告書である。

2．発掘調査および報告書作成までの費用は県土木部の負担により県教育委員会が主体となり実施した。

3．調査は，川原由典，岩上照朗，細谷正策，尾花源司が担当し，佐野土木事務所，佐野市教育委員会に御協力いただいた。

4．本書の執筆責任者は目次記載のとおりであるが，遺構トレース，写真図版は岩上が，遺物実測は岩上，細谷，尾花がおこない，トレースについては川原，岩上が担当した。

5．本書の編集は，川原，細谷，尾花の協力を受けて岩上が担当した。

6．発掘調査，報告書作成については多くの人々の御指導，御協力を受けた。御芳名を記し謝意を表したい。

佐野中央公民館矢島俊雄，細谷小教諭梁木誠，文化課文化財調査係，海老原郁雄，大金宣亮，橋本澄朗，八巻一夫，田熊清彦，熊倉直子，初山孝行，桜岡正信，芹沢清八，中山晋。

（敬称略）

本　文　目　次

序 ……
例言 ……
Ⅰ発掘調査の経緯と経過 …… 1
1．発掘調査に至る経緯（川原由典） …… 1
2．発掘調査の経過（川原由典・岩上照朗） …… 2
Ⅱ遺跡の環境 …… 5
1．遺跡の立地（川原由典） …… 5
2．周辺の遺跡（川原由典） …… 5
Ⅲ発掘調査 …… 7
調査の状況（岩上照朗） …… 7
1．Ⅰ区の発掘調査（細谷正策） …… 8
2．Ⅱ区の発掘調査（尾花源司） …… 19
3．Ⅲ区の発掘調査（岩上照朗） …… 23
4．Ⅳ区の発掘調査（岩上照朗） …… 26
5．Ⅴ区の発掘調査（岩上照朗） …… 31
6．北の内遺跡出土石器（岩上照朗） …… 48
7．北の内遺跡出土土製品（岩上照朗） …… 53
Ⅳ北の内遺跡出土土器 …… 54
1．縄文時代中期後半（岩上照朗） …… 54
2．称名寺式土器について（岩上照朗） …… 57
3．三十稲場式土器について（岩上照朗） …… 63
4．歴史時代土器について（岩上照朗） …… 66
Ⅴまとめ（岩上照朗） …… 71

Ⅰ　発掘調査の経緯と経過

1　発掘調査に至る経緯

昭和51年６月初めに佐野市史編さん室矢島俊雄氏（現佐野市中央公民館）より，佐野市赤見地区の道路改良工事現場から土器類がかなりの量出土している旨の連絡が県教育委員会文化課によせられた。当該地は県遺跡地図でNo－892番の出流原遺跡(弥生時代再葬墓を主に検出）の南に隣接したところであり，県教委としては未登録の遺跡ではあったが，地元では北の内遺跡として知られていた。このため当委員会では現地調査が実施できる６月23日まで工事を一時中止してもらいたいとの旨を，県土木部，佐野土木事務所に口頭による申し入れをおこなった。この申し入れは受け入れられ，現地立合いののち遺跡の取り扱いについて協議することとなった。

６月23日，文化課，県土木部，佐野土木事務所の関係者が現場立合いを行なった。現場は既に側溝の埋設が終了し，路盤の削掘がはじまり，一部には路床のバラスが敷かれ始めており，事は緊急を要する状態であった。

このため遺跡は発掘調査により記録保存を計ることとなったが，現状では遺物の出土は認められるも，遺構検出がなされていないため，翌日24日にバックホーンにより遺構の確認を実施することとした。その結果，縄文時代，平安時代の遺構が検出されたのである。

しかし，早急に発掘調査を実施するとしても，県教委においては既に数遺跡の発跡調査が進行中であり，北の内遺跡を担当する人的な余裕がなく，担当者を外部に求めなければならず，多少の曲折はあったものの，岩上照朗（現文化課指導主事，当時氏家高校教諭），細谷正策（旗川小教諭），尾花源司（石塚小教諭）の各先生方に担当者として引受けられるか否かを打診したところ快諾を得たことにより，調査は夏休みが利用できる７月26日～８月30日（実働30日）の期間に実施することとした。

調査体制は下記のとおりである。

事務局

鹿目文雄　文化課長（現栃木県社会福祉協議会事務局長）

富祐次　文化課長補佐（現博物館建設準備班学芸嘱託）

池田進一　文化財調査係長（現住宅課副主幹兼住宅管理係長）

川原由典　文化財調査係技師

発掘調査担当

岩上照朗（現文化課指導主事）

細谷正策（佐野市立旗川小学校教諭）
尾花源司（　〃　石塚小学校教諭）

（川原由典）

2　発掘調査の経過

(1)　発掘調査

発掘調査は，既に道路予定地内で一部の工事が開始されており，表土の削平がなされ，バラス等の敷設がおこなわれているため，人力による排土は困難であるとの判断にたち，重機（バックホーン）による排土を行なうこととした。バックホーンによる残土は逐次ダンプカーに積載のうえ別地点に運搬することとした。遺構の検出されるのは黒色土下のローム層からのため，排土はこの面まで重機により一度に実施することとなり，その後は作業員による精査をおこない，遺構確認ののちに内部調査を実施することによって作業能率を高めることにした。（川原由典）

(2)　発掘調査日誌抄

昭和51年７月26日（晴れ）

発掘調査現地に調査担当者集合。調査の方法の検討，調査範囲・期間の確認を行なう。調査対象部分全面砂利が敷かれているため，27日から29日まで重機による削平を行ない，遺構の確認を行なうこととする。

７月30日（晴れ）

レベル原点，実測基準点を設定。Ⅰ区からⅢ区まで確認された遺構順に番号を付す。Ⅳ区東半，人力による表土剝ぎ。佐野市史編さん室矢島俊雄氏来訪（以後絶大な御協力を頂く。）

７月31日　　晴のち曇（夕方遠方に雷鳴）

Ⅰ区，人力による遺構確認の段階。（埋積土とローム層の区別が難しい）Ⅱ区古墳時代住居跡荒掘り。Ⅲ区，称名寺式土器片の出土が多いことから，該期の住居跡を想定して，その平面形をつかもうとする。Ⅳ区，表土剝ぎ。

８月１日～５日（８月３日雨天中止）

Ⅰ区，先述の通り土壙内の埋積土と周辺のローム層上面と判別がつき難いため，ローム層をある程度掘下げて土壙の平面形をつかもうとした。（ローム上面にて東西に二本，南北に五本の試掘溝を設けて掘下げようとした。）Ⅱ区，住居跡完掘する。実測，清掃後写真撮影Ⅱ区はこの他楕円形を呈する土壙（前期土壙），袋状土壙，円形土壙，柱穴様小ピットが確認されている。８月４日よりこれらの調査開始。Ⅲ区，Ⅳ区歴史時代住居跡の西半部

分を完掘（4日），一応長方形を呈するらしいが，壁の立ち上がりは不明瞭であった。5日より埋甕周辺に付属の施設等の確認のため精査。その結果，垂飾1点（図—78の3）と1号埋甕の蓋として使用されたと思われる石灰岩製の板石検出。Ⅳ区の敷砂利の排除開始。Ⅳ区,歴史時代住居跡については,Ⅲ区と連続するので8月1日より人力によって調査を続行。8月5日の段階で縄文土器片を多量に散布する地点3ヶ所，土師器片を多量に散布する部分を1ヶ所確認。

8月6日～8月10日（8月7日雨天）

Ⅰ区，土師住居跡，二基を荒掘り開始（8月10日より)。同時に縄文時代土壙に遺構番号を付す。（この段階では総計40基の土壙を確認。)8月9日,土師住居跡は二基とも半分が調査区域外にかかることが判明，その調査法について協議するが，国道側溝下にかかることにより調査不可となる。Ⅱ区，土壙三基のうち一基（楕円形土壙）は，埋積土の上面より後期初頭，底面近くより繊維土器が出土することを確認(8月9日）。同時に他の一基(2号土壙）は袋状を呈していることが判明する。Ⅲ区，埋甕の埋設のための掘り方，埋甕内の土壌観察のため，埋甕とその周辺を半分に断ち割る。（8月9日～10日）Ⅳ区，表土削ぎの結果，住居跡は検出されず，屋外の埋甕と縄文時代の土壙，歴史時代の土壙，同溝状遺構を検出(8月8日～10日)。Ⅳ区より柱穴様小ピットをいくつか検出したが，その並び方に規則性がない。

8月11日～15日（11日，15日雨天中止）

Ⅰ区，小土壙より爪形文土器出土。知見にない土器片であったので，土壙内埋積土を注意して掘り下げたが，下位より称名寺式期の土器片が出土した。（草創期の爪形文を意識していた我々は多少がっかりする。)その他の土壙の精査。Ⅱ区，各遺構清掃後，写真撮影。Ⅲ区，各埋甕の出土状況を実測。Ⅳ区，歴史時代位居跡精査しカマドが二つあったことを確認。埋甕の出土状況写真撮影，実測。

8月16日～20日（16日雨天中止）

Ⅰ区，縄文時代の土壙の調査，古墳時代住居跡2基完掘。2号住居跡の東側に貼床を検出，貼床下に縄文時代の土壙あり。Ⅱ区，ほゞ調査完了。Ⅲ区，ほゞ調査完了。Ⅳ区，各埋甕の出土状況実測。各埋甕の埋設のための掘り方を観察するため。それぞれ半分に断ち割って調査する。Ⅳ区，土壙の平面形確認しようとするが，ローム層と土壙内の埋積土の区別がつき難いためかなり難しい。従って遺物が集中して出土している部分を中心に周囲を広げていって土壙の全容をつかもうとする。20日よりⅤ区の調査を開始。

8月21日～8月25日

Ⅰ区，土壙の完堀と実測，写真撮影を行う。Ⅳ区，Ⅰ区と同様。Ⅴ区，8月22日まで，遺構の平面形をつかむため人力による表土剝ぎ。その結果，住居跡と考えられるもの5基，方形（埋積土黒色土）の土壙と円形の土壙を確認した。住居跡は互いに重複関係にあるの

で，新旧関係を確実につかむために調査の方法を検討する。住居跡は，完掘できるものは2基しかなく，他の4基は全て北半が調査区域外になっている。23日より住居跡を掘下げる。土壙については25日までに完掘，実測，写真撮影。

8月26日～8月30日

V区，住居跡の精査。実測，写真撮影（29日まで）。26日より，調査部分全測図作成開始。30日，近辺の山頂より，遺跡の遠景を撮影。　　（岩上照朗）

Ⅱ 遺 跡 の 環 境

1 遺跡の立地 (図－1，2)

本遺跡の所在する佐野市は関東平野の北部に位置し，栃木県の南西部にあたる。佐野市の南を東流する渡良瀬川が境となり，群馬県館林市と接している。北には足尾山地の山なみが接近し関東平野の北端となっている。

北の内遺跡の所在する位置は佐野市街地北西６㎞の出流原町にあり，出流原小学校校庭前の水田，畑地などを中心とする洪積台地上に形成されている。この台地上には北の内遺跡と一部が重複する出流原遺跡が北西に隣接して所在しており，昭和39年，40年に発掘調査され弥生時代中期の再葬墓である約37個の小竪穴が検出されている。この台地は起伏が少なく，平担面を形成し畑地，水田，雑木林となっているが，ここ２～３年は住宅の建設が多くなっている。この附近の標高は約60mであり，西側水田面からの比高約2.5ｍ前後を測る。台地の西には出流川が台地直下を南流し，東1.5㎞には南流する旗川がある。この両河川に狭まれた南に延びる供積台地上には遺跡が密集し，佐野市の遺跡分布の多い地区として知られている。この供積台地は宇都宮近辺でいう宝木台地に比定されている。　(川原由典)

2 周辺の遺跡 (図－1)

北の内遺跡の所在する赤見附近には多数の遺跡の存在が知られているが，そのほとんどは，今日まで何んら保護の手もさしのべられず，悠久の眠りについたままのものもあれば，その眠りすら許されず，開発の手により調査もされず破壊されたものも多く存在する。今回調査された北の内遺跡も開発との事前協議の不手際からおこったものであり，文化財保護にたずさわる者として心の痛みがある。

以下北の内遺跡の周囲に存在する遺跡を若干記してみる。

１．北の内遺跡

出流原遺跡（昭和39・40年に明治大学が調査し，総数37個におよぶ小竪穴と１００個近い弥生式土器が発掘された）

２．ドーギ遺跡（土師器の包含地）

３．千代岡西遺跡（縄文土器・須恵器散布地）

４．町屋遺跡（縄文時代・前期遺物散布地）

５．八長寺跡（板碑等の出土が知られており，古代寺院跡と考えられる。）

6．渕竜寺裏遺跡（縄文時代前期遺物散布地）

7．般若廃寺跡（鬼瓦，布目瓦の出土が知られており，古代の寺院跡ではないかと考えられている。

8．東山古墳群（約11基近くの古墳がならんでいる。主体部は横穴式石室であり，埴輪円筒，須恵器などの出土遺物が知られている。

9．中山古墳群

10．蓮沼古墳群

11．梨の木遺跡（縄文土器包含地）

12．13墓塚古墳（供養塚の可能性もある）

以上が，北の内遺跡を中心とした附近の遺跡を抽出略記したものである。（川原由典）

Ⅲ 発 掘 調 査

調 査 の 状 況

北の内遺跡の発掘調査は，国道新設工事により，ローム層上面まで削平された段階での調査であったので，遺構すべてを，表土層より掘り下げていって調査したのではない。更に調査前，道路敷内は，削平された後（ブルトーザーによる）全面的に砂利が敷かれていた。削平された段階で，各遺構の上部は破壊されていたが，調査を円滑に行うために敷砂利の除去を機械力をもってした。これはなおいっそう各遺構の破壊を進めたものであろう。このことは，次の各遺構に顕著であった。Ⅳ区より出土した屋外埋甕施設，Ⅱ区，Ⅲ区より検出された伏甕の遺構などである。とくにⅣ区の埋甕は，調査の結果，胴下半の残存しかなく，埋甕使用土器の各々の形態・文様を充分につかむことはできなかった。

調査は全域をⅠ～Ⅴの５つの区域に分けて実施したが，図－２でも分かるように，地点を別にする地区を調査したわけではない。道路の予定線は台地を東西に横切るものである。調査区はいわば北の内遺跡の一部に大きな試掘溝を設けるものであったのである。但し，Ⅰ区とⅡ区，Ⅱ区とⅢ区，Ⅲ区とⅣ区，Ⅳ区とⅤ区の間に道路敷を切断するように４本の暗渠排水のための水路が埋設されていた。従って便宜的に５つの区を設定したのである。Ⅰ区については細谷正策が主として担当し，同様にⅡ区は尾花源司，Ⅲ～Ⅴ区については岩上照朗が担当した。

調査は，上記三者とも学校公務の間を縫って行なわれたのであるが，調査期間として利用できる期間は三者とも夏季休業中のみしかなかった。しかし調査を要する範囲は東西約130m，面積約2,200㎡と夏季休業中に完掘するのは不可能のような状態であった。よって三者の協議の上，担当区毎に検出される遺構を全掘するのではなく，各担当者の責任において，各区全面的な遺構の分布状況を見た後，残りの良好なもの或いは，出土遺物の多いと考えられるもの，更には遺構の分布状況を把握する上で重要と考えられるもの（これについても平面形のみをおさえて考えることは困難であるが，遺物の多寡，削平されてもなおかなり残りの良いものなどを指針にした。なお，埋甕，住居跡は必ず精査することとした。）をピックアップして調査することとした。これらについては以下，各区の調査の項で主な遺構として記載した。その他のものについては，各区の調査状況の中に概略を記載した。（図－３参照）

Ⅰ区・土壙	55基（うち断面袋状のもの６基）
・炉穴	１基
・屋外炉	２基

・屋外埋甕施設　　1基
・古墳時代住居跡　　2基
II区・土壙　　10基（うち断面袋状のもの1基，縄文前期土壙1基）
・柱穴様小ピット　　4基
・屋外埋甕施設　　1基
・古墳時代住居跡　　1基
III区・土壙　　2基
・柱穴様小ピット　　9基
・屋外埋甕施設　　3基
IV区・土壙　　10基（1基は歴史時代）
・柱穴様小ピット　　11基
・歴史時代住居跡　　1基
・溝状遺構　　1基
V区・土壙　　8基（うち断面袋状のもの1基）
・縄文時代住居跡　　5基
・屋外炉　　2基（うち1基は住居跡か）

これらの遺構の分布状況は後述する，時期的にかなりの差異はあるが，縄文期のものについては，住居跡を最も東（台地の奥部）にして，埋甕施設，土壙，埋甕，土壙の順に台地の縁辺（西）に向かって各集中地区がある。（岩上照朗）

以下，各区毎に調査状況を記載する。

1　I区の発掘調査

(1) 調査状況（図－3）

第I区の調査範囲は東西およそ40m南北，およそ12mにわたるものである。緊急調査のため，排土の予定，削平状況などから第1区を手はじめとして調査にとりかかることにした。本区はすでにローム面まで工事のため削られており，トレンチ，グリッドによって調査することが無意味な状況であった。そこでまず，全面をはいで，さっそく遺構の確認をはじめた。その過程で遺物の多くのものが移動しており，遺構もかなり削り取られていることが判明した。また，南北の両側には国道側溝が作られており，黒色土からの落ち込みを判別するセクションの設定もあまり信頼性をもちえるものではない。遺構平面プランの確認は東側から西へというふうに進めていく。確認されたプランから発掘を始めたが，かなりの数の土壙が存在するようであった。しかし，一つ一つの土壙の遺存状態はあまり良

好ではなく，その規模，形状を確認し得ないものが多い。従って一つ一つの土壙の精査を望むことができなかった。ここでは主な遺構としていくつかのものについて記載することとする。

検出遺構（主なもののみ）は次のとおりである。古墳時代竪穴住居跡２基，炉穴１基，土壙10基(うち袋状であるもの６基)であった。但し，発掘調査区域は道路の範囲のみであり限定されていたため，完掘できなかったものが数多くある。古墳時代竪穴住居跡は，２基とも大略半分調査区外に延びるので，双方とも半分の調査しか実施できなかった。土壙の大部分からは縄文時代後期の土器片等が検出される。その分布状況は，本調査区内では東端と中央部に集中していることが看取できるが，発掘調査区域全体からみれば，土壙の集中度の濃さを指摘できる。この他，本調査区の西端と南側において炉趾が二基検出されているが，双方ともに工事によるかなりの削平のため，これらの伴う遺構，遺物の出土はなかった。

本調査区は，西端で段丘崖を臨み，水田面の比高を2.5m を測る。 台地の縁辺にあたる部分である。東側は暗渠排水路によって第２区と区別される。調査面積約650㎡。

(2) 検出された主な遺構

１号土壙（図－４，図版－１）

開口部（確認面）では東西約160cm， 南北約140cmをはかり，不整な楕円形を呈している。開口部から約20cm下がったところで断面形はいったんすぼまり，東西約135cm，南北約 130cmとなる。以下はやゝふくらみながら底面に達する。底径約130cmの円形をなし， ほゞ平担な面である。最大の深さ開口面（確認面）から約93cm。埋積土はロームのブロックを多多く含み，上層部において木炭の混入を多くみることができた。(図―４，断面図）これら埋積土はかなり締っており，壁の立ち上がりをつかむことは少々難しかった。

遺物としては，埋積土中位（Ⅳ層下位）より半欠の称名寺式深鉢，称名寺式の土器片の出土があった。

２号土壙（図－５，図版－２）

１号土壙のすぐ西側にあり，開口面（確認面，ローム漸移層）での平面形は，南北 2.3 m，東西約２m の不整な楕円形を呈している。深さは約42cmをはかり，底面は，東西約1.75 m，南北2.15m であり，ほゞ平担な面であった。底面はとり立てて硬くしまっていたりはしていない。南東の開口部に舌状の張り出しが窺えるが，これは本遺構に伴うものとは考えられない。(ローム漸移層を調査時掘り過ぎたものであろう。) 東側に，径約40cm，深さ約75cm（確認面より）の柱穴様のピットが検出された。遺物の検出はなかったが，土壙の開口部（確認面での）を切断する形で構築されていたので，本土壙に伴うものではないと考

えた。

土壙内の埋積土の状況は，図－５の断面図のとおりである。上層（Ⅰ，Ⅱ層）にローム粒の多量の混入，下層（Ⅳ，Ⅴ層）になる程黒色土の混入が多くなるようである。土壙の底面はローム層上層に構築されている。埋積土の状況から，本土壙の埋没が人為的なものであったとは考えられない。なぜなら，人為的に土壙を埋めた場合，その埋積土は，単一層的な様相を示すか，ロームブロックの混入が埋積土下層になる程多くなるものと考えたからである。

遺物は，図示（図－38）したもの全てが，埋積土中位（Ⅱ層下位）より出土した。Ⅱ層は断面図（図－５）でみるように，Ⅰ層の下にレンズ状に堆積した層である。Ⅱ層はどの程度の時間をもって堆積したものであるかは不明であるが，遺物は本土壙が廃棄された後，いくらかの時間をおいてⅡ層の堆積の早い段階に，Ⅱ層内に含まれたものである。更に，遺物のその大きさから（主として図－38の１～５）自然に流れ込んだものとはいえないだろう。これらの遺物はⅡ層の堆積中のいつか，人為的に投げ込まれたものと考えた。従って本土壙より検出された遺物の本土壙に捨てられた時間は少なくとも同時である。

３号土壙（図－７）

本土壙は第１区の南東部に位置する。開口面（確認面－ローム層上面）での平面形は東西約95cm，南北約110cmの不整な楕円形を呈する。深さは約40cmをはかり，底面は東西約75cm，南北約80cmの大略円形である。底面は鍋底状である。形態，規模ともに並みの土壙であるが，これより，瓜形を有する土器（三十稲場式）の出土をみたのは印象的であった。埋積土はロームブロックや炭化物を多く混入する褐色土単一層で，人為的な埋没を感じさせる。瓜形文土器の他何片から称名寺式土器破片が検出されたが，それらは埋積土の上層にて出土した。なお瓜形文土器は半欠品であるが正位に埋設されたような状態で出土し，埋甕施設としての使用されたような感を持たせる。但し本土壙は，道路工事によりかなり削平された段階での検出であるので，原形を確実におさえることはできなかった。

４号土壙（図－６）

本土壙は，第１区の北東端より検出された。国道側溝により北半の調査は不可能であった。開口面（確認面―ローム層上面）は径約130cmの大略円形を呈している。断面形は上が小さく，下の大きい袋状を呈している。底面までの深さは約170cmと深く，底面は平担な面で径約166cmの円形である。埋積土（図－６断面図）は，おおむねレンズ状の堆積を認めることができる。土壙の底面はかなり粘土化したローム層に作られ，平担な面であった。

遺物は埋積土上位（Ⅰ層下位）より多量の称名寺式期の土器片が検出された。以下には

検出されなかった。Ⅰ層は土壙の埋没の最終的な段階で堆積したものであり，遺物は流れ込みの可能性を考えなければならないのであるが，遺物そのものには時期的な差は認められない。

5号土壙（図－6）

4号土壙の西側に隣接して検出されたものである。調査の結果，大小2つの土壙の切合いが確認された。開口面（確認面＝ローム層上面）は，大は径約210cm，小は径約85cm，深さは大は約110cm，小は75cm，底面は大は径220cm，小は約110cm。小は形状的に上小下大の袋状を呈している。埋積土は大については，かなり不規則な堆積である。平面形についても大土壙は不整な形であり，がたがたした感じを持たせる。或いはいくつかの土壙が重複したものであったかもしれない。小土壙については埋積土の調査はできなかった。

遺物は双方ともに顕著なるものはなく，小土壙より若干の土器片（図－42の5，6）が見られるのみであった。

6号土壙（図－8）

本土壙は第1区のほゞ中央にて検出された。開口面（確認面＝ローム層上面）での形状は東西約120cm，南北約112cmの不整な楕円形を呈する。また北半は浅く広いくぼみの一部となっているため約16cm低くなっている。開口面から底面までの深さは約150cm，底面は東西約145cm，南北148cmの不整な円形であり，平担な面である。更に底面中央部には，径約35cm，深さ約18cmのピットが確認された。断面の形状からすると，いわゆる袋状土壙である。埋積土（図－8，断面図）は，おおむねレンズ状の堆積を示しており，自然の埋設と考えられるものであり，上層部には僅少な炭化物，微細な骨片が見られる。下層ではローム粒の混在が著しくなる。

遺物は埋積土上位（Ⅰ層下位～Ⅱ層）より土器片（称名寺式期のもの）が何片か検出された。

7号土壙（図－9）

本土壙は2号土壙の西側すぐにあったものである。開口面（確認面，ローム層上面）での平面形は東西約1.5m，南北約1.65mの楕円形を呈している。深さは最深部で約95cmをはかる。断面形はいわゆる袋状を呈しているが，中間部分でやゝふくらむ形態となっている。底面中央部には，東西約60cm，南北約46cm，土壙底面よりの深さ20cmの小ピットが検出された。この小ピットの断面形はほゞ鍋底状を呈しており，西半部分から土壙の底面にかけて厚さ5.5cmの焼土の堆積を見ることができた。焼土は本土壙が，炉穴様のものとして長い時間使用されたようなしっかりした堆積を示しているのではなく，一時的に燃焼を

うけたもののようであった。但し焼土が底面直上より層をなして検出されたことは，本土壙の使用当初の段階に伴うものと考えられる。底面中央に穿たれた小ピットも，この焼土と何等かの関連があったものではないだろうか。類例は多くは知らないが，黒羽町浅香内８Ｈ遺跡Ｆ１の土壙に見ることができる。（栃木県立黒羽高校社会部「浅香内８Ｈ遺跡」昭和50年２月，15ページから18ページ），土壙内より出土した土器の時期は本土壙のそれよりかなり先行するが，底面中央部北よりの小ピット内の焼土について，小形の掘り込み炉とみて，袋状土壙に初生的に付随するものであろうとし，その用途についてはよく判らないとしている。本土壙についても用途を考察するのに積極的な論拠はもてないが，本土壙の焼土については，厚さが５cm程度と薄く，多少ローム層を混入するなど，それ程明瞭な層ではないので，本土壙の使用当初の段階に伴うものとはいえ，本土壙を使用するに中心的なものではなかったと思う。

遺物は，埋積土の上位に含まれていたものであり，土壙の最初の段階に伴うものではない。土壙がある程度埋没した後，一括して廃棄されたような状態で検出されたものである。遺物は全て称名寺式土器破片であった。

８号土壙（図－10，図版－３）

本土壙は，Ｉ区の中央部やゝ南寄りにて検出された。開口面（確認面＝ローム層上面）での平面形は，東西に長い不整な楕円形である。長径は約90cm，短径は約70cm，深さ46cmをはかり，東西約130cm，南北約190cm，深さ約13cmのなだらかな落ち込みの北側を占めるものである。底面は，東西約76cm，南北約55cmをはかり，ほゞ平担な面である。なお底面は，ローム層となっている。

遺物は，打製石斧が三個のみである。石斧は，土壙の底面より出土し，互いに重なり合っていた。うち２個は，後述するが，１個体の分銅型打製石斧を２つに剝いで，２個としたものであった。３個とも刃部を南北に向けた状態で出土した。

９号土壙（図－11）

本壙は，Ｉ区の南東部，調査区域ぎりぎりの地点より検出された。平面形は，径約115cmの円形であり，深さは約90cmをはかる。断面形はやゝ袋状であるが，明瞭なものではない。底面は平担であり，径約99cmの円形である。埋積土は単調なものであって，明瞭に何層かに分けられるものではないが，下層になる程，ローム粒の混入が多くなっている。

遺物は，埋積土上層（図－11，断面図）II層より縄文土器片４片が検出されたが，いずれも小破片であるので図示しなかった。

土壙の西端より，１つの埋甕が検出された。埋甕は，西側の立ち上がりの一部を破壊して埋設されたものである。

炉　　穴（図－12，図版－2）

本遺構は，隣接する土壙に切断された形で検出された。Ⅰ区の北側の境界線に接している他は周辺部の調査は不充分であった。従って西側に隣接する土壙との関連をつかむことはできなかった。平面形（確認面＝ローム層上面）は，径約135cm，をはかり，深さ約62cmの底面まで壁の立ち上がりはなだらかである。埋積土内には多量の焼土が確認され，底面に近い程，純粋な焼土が堆積している。更に周辺にまで焼土の広がりを見ることができた。黒色土を少量混入する埋積土の中からは微細な骨片が検出され，何の骨であるかは不明であるが，小動物を焼いたかのような感をもたせた。土壙内には焼土の堆積の他，何等施設的なものは検出されない。遺物についても上記骨片以外，縄文土器片3片の検出があった。いずれも繊維を含んだ，縄文早期後半の条痕文系の土器片である。

1号住居跡（図－13）

本住居跡の南半は調査区域外にあるため，全容はつかめない。北辺は約3.6cm，残存壁高は約37cm。おそらく隅丸の方形を呈していたであろうと考える。主柱穴は2本検出され，いずれも径20cm前後，深さ約30cmである。炉跡は地床炉で，何等施設のない単純なものであった。焼土はあまり厚く堆積してはいない。その範囲は40cm×30cmをはかる。底面は，ローム層中にあり，かなり硬くしまっている。とくに炉周辺はよく踏み固められていて，検出が容易であった。壁溝の検出はない。

遺物は，炉の周辺より1個体分の甕形土器の破片が検出されたのみであった。

2号住居跡（図－14，図版－3）

本住居跡も北半は調査区域外であったため全掘できなかった。南辺は5.2m，深さは約23cmをはかる。全体的な形態は不明であるが，おそらく隅丸方形であったろう。住居跡の南側と東隅において，2個の土壙を切断しているようである。東隅の土壙は縄文期の袋状土壙であるが，南側については，本住居跡に伴う張出し部分と考えられる。全体的にロームを踏み固めた貼り床で覆われ，とくに東隅の土壙の上は明瞭であった。西隅に径約88cm，深さ約60cmの小ピットがあるが，この部分よりの遺物の検出はなく性格不明である。

南張出し部を除き，壁下には溝が一周する。（幅約24cm，深さ約8cm）南張出部の北側より木炭が少量検出されたが，焼土などほとんど見ることができず，焼失家屋とはみられない。柱穴は不明である。

南張り出し部は，東西約110cm，南北約110cmをはかり，底面は住居跡床面と同レベルになっている。また張出し部の東隅に径約50cm，深約40cmの円形ピットがある。

遺物は，甕形土器（土師器）1，坏形土器（土師器）3検出された。出土位置は，南東隅より坏，張出部北より甕形土器であった。

2号住居跡内土壙（図—15）

2号住居跡により開口部は破壊されていた。そのためその形状規模ともに不明であるが袋状を呈していたものと考えられる。確認された平面形は長径約300cm，短径約230cmと楕円形である。壁は確認面下40cmで最大となっており，320cm×250cmをはかる。底面はほぼ平担面で，260cm×240cmである。底面南西部に径約60m，深さ約25cmの小ピットが穿たれていた。

埋積土は，上層が2号住居跡の貼り床となっているロームのかなり硬いものがあり，以下，黒色土にローム粒の混入した層が続き（下位になる程ロームの混入は多くなる。），わずかに木炭を含む。

遺物は埋積土中位より，繊維を含んだ土器片2片とチャート製の石鏃1点があった。

(3) 遺物について

1号土壙（図—37，図版—16）

1は，底部の欠損した深鉢である。土壙の中央部に横位の状態で検出されたものである。平縁で口縁下に一条の横走する沈線を持ち，頚部のくびれが弱くスマートな形態である浅いヘラ描沈線によって文様の区画がなされており，沈線間に無節の縄文（L）を充填する。文様の構成は渦巻文，7字文が基調となるが，割付がうまくなく同一文様の繰り返しは見受けられない。また胴部文様帯は上半部下半部とはっきりと分割されない。

2～5は称名寺式期の口縁部近くの破片と胴部の破片である。4を除いて他のものは，浅いヘラ描沈線によって曲線的に区画され，その中に縄文を充填させている。4は称名寺式期の口縁部及び把手に利用される文様である。7は，ミニチュアの壺形土器であり，粗雑な作りで文様は見受けられない。

7を除いて焼成はいずれも良好である。

6は，文様からみて，称名寺期のものと考えにくい。比較的厚手の土器である。

2号土壙（図—38，図版—17）

1の口縁部は無文に作り，かすかな波状を呈している。波頂部には小さな突起が見られる。口縁無文帯と胴部文様とは微粒起によって区別される。胴部文様は，地文に縄文を持ち，口縁の波頂部に対応して「∩」状に，谷部に対応して「V」状に細いヘラ先による沈線が施され，沈線間を磨消している。下半部はヘラによって荒く仕上げられ文様はない。焼成は良好。表面黒褐色，裏面褐色。

2は，胴部中位の大きな破片から復元実測したものである。弱いくびれ部に，地文の縄文に貫入するような横位の磨消帯が見受けられる。磨消の両側には微隆起が認められるが，

これは磨消した結果できたものであろう。裏面はよく磨かれており，丁寧な作りである。焼成良好，色調黒褐色。

3～13は本土壙より検出された土器片であるが，大きく二つのタイプに分けられる。その一つは，8，9のように口縁に無文帯を施し，その下に微隆起線を横に走らせる。加曽利E式末期によく見受けられるもの，一つは称名寺式期のものである。更に称名寺式期のものは，3～5，11，13のようにヘラ描の浅い沈線によって区画されその中に縄文が充填される類と，6，7のように沈線によって区画された中に刺突が施されるものの二タイプある。10の口縁部片は流れ込みの可能性を考えなければならない。

本土壙出土土器群で注目すべきことは，1～2，8～9，12のように単独で検出されれば，加曽利E末期と目されるのであろうものと，3～7，11，13の明らかに称名寺式期とされるものの伴出であろう。長時間に亘る土壙の埋設の結果そうなったのだといわれれば反論の余地は少ないが，同様に加曽利E末期と称名寺式期の伴出した例として，埼玉県志久遺跡第8号住居跡出土土器群をあげることができる。加曽利E末期の細分の可能性を示唆しているものであろう。詳しくは後述する。

3号土壙（図－39，図版－18）

1は，土壙内上層の方から埋甕のように正位の状態で検出された。本土壙は調査を受ける以前にかなり削平されていたので，土壙内充填土上位から検出されたとはいえ，その削平を考えれば，土壙に伴うものと考えて良いと思う。器形的な特徴は口縁部のかすかな外反と口唇内側のわずかな突出，胴部が円筒形であるがやゝふくらみを見せること。文様の特徴を挙げると，口縁に無文帯をつくり，一種の橋状の把手をつけると同時に胴部との境界に断面台形の隆起線を貼付けること，胴部以下は全面に明瞭な瓜形を斜位に施すことである。瓜形は人間の瓜を利用したらしく，一部に指文が残っている。胎土は砂粒を多く含み，表面ざらざらした感じを受けるが，焼成はかなり良い。色調は表面黒褐色，裏面淡褐色である。

2，3は称名寺式の土器破片であり，両者とも曲線的な沈線による区画内に刺突が施されている。2は区画の上と左に隆起線が貼付けられ，その上に刻みが見られる。

1については，口縁部に無文帯を作り，胴部との境に隆起線を持つ口縁にある橋状の把手など，縄文中期末から後期初頭の土器との類似性が高いが，胴部全面に瓜形を付すなど，少なくとも本県出土の中期末から後期初頭の土器群の中から派生し得るものではない。まだ充分に検討していないが，関東一帯から福島県にかけても同様であろう。おそらく搬入品と考えられる土器である。新潟県長岡市三十稲場遺跡出土後期初頭の土器を標準として，地方的な分布を示す三十稲場式土器の中に刺突文，瓜形文を付すものがあるという話を聞く。それと対照できるかもしれないが，今のところ不明といわざるを得ない。ただ，図の

通り本土器と，称名寺式期の土器が本遺跡において伴出することは、注目すべきことであろう。搬入品ということは，そう簡単にいえる性質のものではない。また三十稲場式と対照できるとはいえ，器形的には純粋な三十稲場式のものではないと思う。

4号土壙（図ー40，図版ー18，19）

1～4は称名寺式の把手である。それぞれ形態は異なるが，「C」字形を二つ向かい合わせたような貼付或いは造り出しを持つことが共通の特徴である。また口縁は把手を波頂とした波状口縁であり，口唇部が内側に突出すること，またそこに円形の穴をもつことも大きな特徴であろう。「C」字形の貼付或いは造り出しは，2は内側に3，4は外側，1は上に作られており，1，4においては「C」字形の上に二つの刺突とそれを結ぶ沈線が見られるが，2・3にはない。形態的には，1は筒状，2は橋状の把手を思い起こさせるなど，立体的な造作であるが，3，4はかなり平面的な感を持つ。1，2，3には，浅いへら描沈線による区画が見られ，1，3はその中に縄文が充填される。

5，6，8は称名寺式土器の口縁部破片である。5，6は波状口縁であり，口唇部が内側に突出しその上に円形の穴をもつ。8は口唇の内側への突出が見られるが，平縁であろう。5には，口縁に突起があるが，そこから一条の隆起線が円形の刻みをもって垂下する。その両側に浅い沈線によって区画され中に縄文の充填される区画文様を持つ。7は口縁部に幅広い無文帯を持ち，直下に微隆起が作られ，以下縄文が施文される。9は浅鉢形土器の口縁部破片と考えられ，称名寺式土器の中に含まれよう。

焼成は2，7を除いてかなり良好。色調は2，5，7，9が淡褐色から淡赤褐色，3，6，8が黒褐色，1，4が褐色である。

5号土壙（図ー42，図版ー19）

本土壙より出土した遺物はあまりなく，図示した2破片の他，土器小破片があるのみである。5，6とも称名寺式の口縁部破片である。5は平縁で口唇部内部に突出がある。6は平縁であり口唇の形は単純に丸まる。いずれも破片であるので文様図形は不明であるが，双方ともへラ描沈線による区画がなされている。5の区画は直線的なものと，左下の方で「J」字文あるいは渦巻文が見受けられ，6は曲線的な区画が見られる。5，6とも区画内に縄文が充填される。焼成は双方とも良好であり，色調は5は褐色，6は淡褐色である。

6号土壙（図ー41，42，図版ー19）

土壙内埋積土上層より検出されたものを図示した。この他には微細な骨片，土器小破片の出土があったが図示しなかった。上層よりの出土とはいえ，土壙の検出が道路工事によりローム層上層にまで削平された時点であるので，実際のところの土壙内における遺物

の出土位置は不明といわざるを得ない。

図—41は，深鉢形土器の口縁下部から胴部にかけての大破片である。もともとの器形は，口縁が内彎し，頚部でくびれ，胴部のやゝ張るものであったと思う。頚部に横走する一本の隆起帯を貼り，その上と下を二本単位の隆起帯によって，「H」状，曲線的（渦巻状？）に区画している。区画内不定方向に縄文が施されるが，上半と下半では縄文原体の節の大きさが異なっているのが注意される。これらの施文順序は次の通りである。隆起帯を貼り付ける。区画内に縄文を施文。隆体の両側及び内側を磨消す。焼成はかなり良く，なり　　色調は黒褐色を呈する。大木９式的な文様構成をもつものといえる。

図—42—１は口縁部破片，３は口縁部近くの破片，口縁部を無文につくり，口縁から胴部以下平行する隆起線で，逆「U」字形の磨消部を地文の縄文に貫入させている。１は逆「「U」字形の上部に小突起をつくる。口縁はこの突起を波頂としてかすかに波状を呈している。２は口縁部直下に一条の沈線を施し，以下沈線による区画と区画内の縄文，円形の竹管文が見られる。４は，ヘラ描による浅い沈線によって区画され，縄文の充填と無文部が交互に繰り返されるなど，称名寺式の胴部文様に類似する。焼成は３を除いて良好，色調は，３は淡赤褐色，４は褐色，５は黒褐色，６は淡褐色を呈している。

７号土壙（図—43，図版—20）

本土壙より出土した土器は，破片ではあるが北の内遺跡より出土した称名寺式土器の種類をある程度満足するものであり良好な資料である。ひとつは平縁で沈線による区画内に刺突が施されるか無文であるもの，平縁で区画内に縄文が充填されるもの，多少の波状の口縁を有し区画内に縄文のされるものの三種である。（本遺跡における称名寺式土器の分類については後述する。）

１は，平縁で浅いヘラ描沈線内にヘラ先によって刺突が施されている。２は波状口縁をもち，口唇の内側への突出がうかがえる。区画内には縄文が充填される。３は平縁で，沈線による区画内に撚り方の弱い縄文（Ｌｒ）が充填されている。４～６，８は，胴部および口縁近くの破片であるが，区画内には４は撚り糸，他は単節の縄文（Ｌｒ）が充填されている。７については，称名寺式のものというより，堀の内式の文様に似ている。１の文様図形について胴部上半は「V」字状の区画と垂下する「J」字文或いは渦巻文の組み合わせであろう。（勿論これは破片であるので確実性を欠くし，胴下半の文様は不明である。）２は波頂部に対応した釣針を逆にしたような区画，４には「J」字状の区画がみられる。焼成は７を除きみな良好，色調は１，３が淡褐色と黒色の混り合い，他は黒褐色を呈する。

９号土壙（図—44，図版—21）

土壙内より出土した遺物は少なく，土器小破片４片以外のものはなかった。これらのも

のについては文様等別に見るべきものはなかったので図示しなかった。ただし，土壙の東に接して埋甕が検出されたのでそれについて註記する。土器は胴部以上を欠損するものである。大きな底部から直線的に立ち上がる形で，表面には縄文が見られる。焼成良好，底部近くには二次的な焼成部分がある。

Ⅰ区，出土遺構不明の土器（図－45，図版－21）

1は，深鉢形土器の頸部から胴部にかけてのものである。頸部に隆帯が横走し，胴部文様と区画している。胴部には二本一組で垂下する隆帯と，波状の隆帯が施される。地文は節のあらい縄文（Ｌｒ）が頸部下半まで施され，上半は削られ無文化している。焼成はあまり良好でない。色調赤褐色を呈し，胎土に砂粒を多量に含む。

2は，胴部下半から底部にかけてのものである。やゝ胴部に張りを見せ，内外面とも丁寧に磨かれている。どのような文様構成をもつか不明であるが，浅い沈線によって区画された渦巻文が目立っている。区画内には縄文（Ｌｒ）が施されるが，方向に統一性のみられないことから充填縄文であると考えられる。このような文様構成は，大木10式の古い段階に類似する。焼成は良好，色調内外面，赤褐色を呈する。

3は，称名寺式の深鉢の胴下半部である。文様の特徴は，浅いヘラ描沈線による曲線的（「Ｊ」字文）な区画と，区画内の刺突である。焼成は余り良くなく，淡褐色を呈している。

1号住居跡出土土器（図－46，図版－22）

口径22.1cm，器高39.9cm，底径 7.5cm。

ほゞ完形の土師器甕形土器である。地床炉の周辺に押し潰されたような状態で出土した。頸部以上は大きく立上がり，「く」の字状に外反するが，外反の度合は和泉期のそれ程強くない。胴部最大形は中位よりやゝ上にあり，底部に向かってのすぼまり方が急である。底部は，器全体に比して小さく安定性に欠ける。底面には木葉痕が残される。

内面，口縁部に横方向の粗いハケ目（幅15～20mm），胴部上半，幅３～５mmの横方向の粗いヘラ先による調整，下半はヘラによる撫で，外面，口縁部上位横撫で，頸部から胴部上位斜方向のハケ目，胴部中位から下位，上から下へのヘラ磨き（幅３mm前後のものによる）中位においてヘラ磨き以前にハケによる調整が行なわれた。

色調，赤褐色（一部黒褐色）。胎土，砂粒（石英粒含）を多量に含む。焼成，比較的良好である。

器肉の厚さは，胴中位にて約5mmとかなり薄い。器肉の調整痕は観察できなかったが，器壁の調整は綿密になされている。土器製作の念入りさを窺わせるのである。
五領期末のものとみてよいと思う。

2号住居跡出土土器（図ー47，図版ー22）

土師器甕形土器1，土師器坏形土器3である。

甕形土器(1)は，口縁部の大きく「く」の字状に外反するものである。胴部表面には浅く刷毛目が全面的に施されている。坏形土器(2)は，口縁部の外反するもので，内外面ともに赤彩されている。坏形土器(3)，(4)は，口縁部が内彎気味に開くもので，器形的にも，調整の上でも同巧のものである。それぞれの土器の計測値及び特徴は別表（43頁）にまとめた。

I区，炉穴，2号住居跡内土壙出土土器（図ー79）

1～4が炉穴より出土したもの，5，6が2号住居跡内土壙出土のものである。

いずれの土器破片も胎土中に繊維を多量に混入している。このうち1，4，5はそれぞれ太さは異なるが条痕が施されるものである。1は口縁部の破片であり，表裏全面に横方向の条痕が見受けられる。表面の条痕は裏面に比べて細く，横方向を主とするがかなり乱雑な施され方である。表面は比較的太い条痕が施されている。色調は表裏面とも黒褐色を呈し，焼成はあまり良くない。4，5は表面のみにそれぞれ横方向，縦方向に条痕が施されており，5については裏面にも浅い条痕が見受けられる。両者とも色調は赤褐色，焼成は比較的良い。2，3は表面に浅い縄文の施されたものである。両者とも縄文は二条ずつ一組となって横位に見受けられるが，どのように施文したかよくわからない。色調，2は赤褐色，3は黒褐色，焼成はあまり良くなくもろい。6も，2，3と同様である。

1，4～5は早期末の条痕文系の土器であろうが，2～3，6については良くわからない。　（細谷正策）

2　II区の発掘調査

(1) 調査状況（図ー3）

2区の発掘面積は約500㎡でローム層上面まで削除した地点で遺構確認をした。検出遺構の数は他の地区より少なく，特に土壙群の確認は少なかった。主な遺構としては，鬼高期住居址1基，縄文期の土壙1基，袋状土壙1基，埋甕1基である。これらについては，後で1つづつ詳細する。

上記以外に柱穴様のピットが検出されている。埋積土を見ると黒色土がほとんどでその

中にローム塊が混入しているものが多い。いずれも平面形は方形であり，埋積土から見る限り後世のものと考えられるが，それらの並び方には規則性はなく，性格はつかめなかった。他にいくつかの方形，円形の土壙を検出したが，埋積土は全て黒色土であり，出土遺物も全くない。後世のものと考えた。

(2) 検出された主な遺構

1号土壙（図ー16）

プランは，不整形な楕円で，長径約4.2m 短径約2.3m，深さはローム面より20cm～50cm掘りこんで，底面は凹凸がはげしい。また4つのピットが検出されたが，柱穴と考えるのは早計である。遺物は縄文土器片が出土しており，中央より北側付近より，底面直上から前期関山期のものと思われる土器片が出土している。埋積土中より堀の内式土器片も出土しているが，いづれも小片であるので図示しない。前期土器片が底面より出土していることにより土壙の構築時期が推定できる。しかしこの土壙が何を意味するものであるかは不明である。

2号土壙（図－17，図版－4）

円形，深さ80cm前後の袋状土壙である。ローム上面より60cm下がった部分がもっとも広くなっている。また，北東側は底面からななめに円形状に一段と深く掘りこんである。遺物は縄文土器片が投げすてられたようにしてを埋積土中位よりかたまって出土していた。そのほとんどが掘之内Ⅰ式期のものと思われる。炭化物等の出土は見られなかった。石皿の破片も出土していた。

本土壙の構築時期は不明であるが，土壙内より検出された土器については，今回調査した中で，縄文時代のものとしては最も新しい時代のものである。

3号土壙（図ー18）

全体的には，径約158cmの円形であるが，検出した時点では，ローム層まで削平した段階のものであったため，東側のプランをつかむことはできなかった。残存する壁高は最深部でも20m 前後しかない。土壙内の北西部には，土壙底面から約30cm程掘り込んで，径約70cmの円形のピットが検出された。

出土遺物はほとんどなく，土壙南側において深鉢の口縁部が伏せられたような状態で検出された。しかしこれは，胴部以下は道路工事のための削平の段階で破損されなくなっている。伏甕の下はやはり，深さ30cm，径約50cmの円形ピットが掘られており，黒褐色にローム粒混りの土が充填されていた。

深鉢は加曽利E III式の初頭のものである。

2号土壙西側の埋甕（図ー19）

道路工事の削平のためかなりの部分が破壊されたものである。埋甕使用土器にその破片から称名寺式土器の底部と考えられるが，文様等観察することはできなかった。よって土器の復元，また破片の拓本など，底部近辺のみの破片であったため図示しなかった。

古墳時代住居跡（図ー20，図版4，5）

住居跡は，その中央を南北に暗きょ設置のため切られていて，一部不明な点があるため，全体のプランは確認できなかった。検出できたのは，約5.64mの東壁全体と中央が一部欠損している約5.56mの北壁である。西壁と南壁は，コーナー部が欠損しているため，正確な長さはつかめなかった。全体としては隅丸方形であると思われる。主軸の方向はN85°Eである。床面はローム層を約40cmほど掘り込んで，壁はやや外反している。柱穴は3個検出され径は32cm～48cm，深さは96cm～108cmあり，柱心間は東側が2.88m，北側が2.68mあり，覆土には多量のローム塊が混入していた。また西壁にはむなもち柱の柱穴と思われるピットが検出された。径は約70cmで深さは床面より約30cm掘られていた。床面のようすはあまりはっきりつかめなかったが，北東部はからカマド付近にかけては，かなり固い面がつかめた。カマドは，東壁のやや南寄りにつくられ，天井部はつかめなかった。焼土もあまり確認できなかった。貯蔵穴は南東隅にあり方形ですりばち状になっていた。また周溝がまわっていた。

遺物は全体から出土していたが，貯蔵穴付近より坏・高坏が多く出土していた。

(3) 出土土器について

1号土壙（図ー48）

全て繊維を多量に含み，縄文が表面に施文され，焼成の甘いもろい土器片である。本土壙の底面より出土したもので，土壙の廃棄時期を考える際有力な手掛かりとなるものである。土壙の上層の方からは，土壙がある程度埋まった段階で流入したと考えられる波状の浅い沈線が全面的に施された堀之内式期の破片と考えられる土器片が出土した。

1～6いずれの破片も縄文の施文は浅く，明瞭ではないが，3の破片には一部羽状を呈する様相が見受けられる。1は横位の半截竹管文，斜位の2条1組の縄文が見られる。

総じて関山式期のものと考えられる。

2号土壙（図－49，図版－23）

1は，口径26.9cm，胴部最大径25.5cm，残存器高38.0cmで，底部は欠損している。器厚平均約0.8cmである。胎土は砂粒混入で焼成は普通である。文様をみると縄文と縄文の間が所々あいていて，また方向も一定していない。頚部のすぐ下は右から左へ斜行している。しかし胴部は水平方向や左から右へ斜行しているのもある。頚部と胴部を分けるのに二本の沈線が走っている。また沈線は胴部の縄文とそうでない部分との区分けにも使われている。これら施文順としては，器面をある程度割り付けし，縄文が必要な所だけ施文し，沈線をつけて，ドーナツ状の粘土をつけたものと思う。

2は，口径23.0cm，胴部最大径20.3cmで器高は胴部から底部が欠損しているため不明である。器厚は0.8cmを数える。文様は縄文の原体が小さく，頚部に隆帯を貼って口縁部と胴部にわけ，その後縄文を施文している。底部近くは施文していない。また縄文と縄文の間があいているがすりけしでなく，またほとんど縄文は重複していない。器面内側頚部に段がつく様な所もある。

3は，口縁部から頚部にかけての破片であり，やゝ小型ではあるが，1，2と同巧のものである。

3個体とも堀の内Ⅰ式期のものであろう。

3号土壙（図－50，図版－23）

頚部のくびれが少なく，口縁部は内彎する，キャリパー形のくずれた器形である。口辺部は無文に仕上げられ，直下に沈線が横走する。沈線下の文様は二列の刺突，沈線による縦長の区画と区画内の縄文施文，各区画間の磨消と上端の折れ曲る沈線文である。

焼成，比較的良好である，色調は褐色～黒褐色を呈する。

加曽利EⅢ式期初頭のものであろう。

古墳時代住居跡出土土器（図－51，図版－24）

出土遺物は土師器のみであり，主としてカマド周辺，貯蔵穴，北東隅など住居跡の東半より多く出土している。

甕形土器（1，2）は長胴化傾向にあるもので，胴中位に最大径をもつ。口縁部はゆるやかに外反する。

鉢形土器（3）は，口縁が短く外反し，胴部以下半球状のものである。底部は平底に近い丸底。

高坏形土器（4，5）は，半球状の埋部と，短いふくらみの小さい脚部をもつものである。坏部内面に放射状の暗文が目立つ。

坏形土器（6～10）は，口縁部と体部との境界に明瞭な段を持ち，口縁の直立するもの

である。いずれも，薄手で均整がとれた形態であり，調整の仕方は全く同じであった。

埦形土器（11）は粗雑な作りである。

それぞれの土器の特徴及び計測値は後に別表（44～45頁）にまとめた。　（尾花源司）

3　Ⅲ区の発掘調査

(1)　調査状況（図－3）

第Ⅲ区は，五つの調査区の中で最も狭い調査区である。南北は国道の側溝によって，東西は暗渠排水路によって区切られており，調査面積は約120m²であった。国道のNo53中心杭が本区のほゞ中心にある。

検出された遺構は称名寺式期の深鉢を利用した屋外埋甕施設が3基，加曽利E II式期の深鉢を利用しての伏甕が1基，土壙2基，柱穴様のピット11基である。

このうち注意すべきものは1号・2号埋甕施設とその周辺の柱穴様ピット及び遺物の出土状況である（図－3参照）。その第一点は同様な文様の称名寺式土器（埋甕施設として利用されたものも含む。）が密接して検出されたこと。第二点は，上記の土器の出土レベルとほゞ同じくして，打製石斧，石槍，土製の垂飾の検出があったこと。第三点は，これらと接して平面形円形の柱穴様ピットが4基検出されたことである。これら三点をもって考えられることは，この周辺の遺構・遺物（周辺とか密接ということを客観的にとらえるのは難しいことであるが。）は互いに何らかの関係を持つことを意味するのではなかろうか。例えば，埋甕施設を中心にした埋葬にかかわる祭祀のひとつのまとまりとしてとらえられはしないだろうか。しかし，この周辺といってもどの程度の範囲なのかははっきり限定することはできないし，埋甕施設とその他の遺構・遺物を結びつけることは今はできない。

上記の4基の柱穴様ピットの他，Ⅲ区よりは同様のピットが7基検出されているが，配列の仕に別に規則性はなく，大きさ深さ等もバラバラである。その上に遺物の出土は皆無であった。時期的に埋積土が栗色を示すことから縄文期の所産と考えられたのみである。

東側の暗渠排水路にかかって，歴史時代の住居跡が確認されたが，これについては第Ⅳ区にて状況説明する。

(2)　検出された主な遺構について

屋外埋甕施設

1号埋甕（図－21，図版－6）

ほゞ完形（胴部一部欠損）の称名寺式深鉢を正位に埋設したものである。埋設のための

掘り方はあまり明瞭ではないが，深鉢の外形に沿った形でローム層まで掘り下げている。深鉢の底部つまり掘り方の下底は鹿沼パミス層にまで達している。深鉢の胴部一部欠損は，周囲に欠損部に見合う破片が検出されなかったことから，意図的な破損とも考えられる。更に，本埋甕施設の検出面，口縁部に接して石灰岩製の板石が検出された。この板石は西方約1.4mの地点，2号埋甕施設の近くに検出され板石と接合する。或いは埋甕の蓋としての使用が考えられる。

2号埋甕施設　（図－3，図版－6）

称名寺式深鉢の口縁部から頚部にかけての破片が上から押しつぶされたような状態で横位に検出された。本遺構は埋甕施設というより，土器片の単独の出土といった表現が適切かもしれない。またこれに付属して土壙・掘り方等は検出されなかった。本遺構を埋甕施設としたわけは，近接して同巧の深鉢を利用した埋甕施設があること，前述のようにこの近辺にかなり深いかかわりをもった遺構・遺物が検出されたことなどから，本遺構も埋甕施設と同じ意図をもって設置されたのではないかと考えたからであった。

3号埋甕（図－3，図版－7）

称名寺式深鉢の胴部中央以下が，正位に埋設されたものである。底部の穿孔はない。埋設のための掘り方は明瞭ではないが，下底はローム層上面にまで達している。掘り方が明瞭でないのは，掘ったあとすぐに土器を埋設し埋めたからであろう。

4号埋甕施設（図－3，図版－7）

加曽利E II式深鉢の口縁部から頚部が，口縁部下の逆位の状態で検出されたものである。更にこの土器は65cm×53cm，深さ約20cm（残存する深さである。）の不整円形の土壙中に埋設されていた。時期的にも，埋設の仕方も他の埋甕施設と異なっているが，埋甕の一つの形として取り上げたものである。この埋甕施設の性格などは分からないが，他のものと同様単独に屋外に埋設されていた。用途の面では他の埋甕施設と同じものと考えられる。

(3) 土 壙 に つ い て

1号土壙（図－3）

調査区の北壁に接して検出されたものである。平面形は大略長方形を呈し，長さ約290cm幅約130cmをはかる。埋積土中より縄文土器片，土師器片が数片出土しているが，いずれの土器片も小さく，磨滅が激しいため図示しなかった。またこの土壙の埋積土は黒色土であり，他の縄文期の土壙のそれが，ローム層漸移層と見分けのつかないものであったの

に比べて，本土壙はごく新しい時期のものであると考えられる。

(4) 出土土器について

Ⅲ区屋外埋甕使用土器（図－52，図版－25）

1号埋甕使用土器，最も残存状況の良好のものであった。胴部に一部欠損があるが，ほぼ完形の称名寺式土器である。ほゞ完形の称名寺式土器は本遺跡に他にはない。口縁は平縁で，頚部のくびれはかなり緩やかである。口縁部は頚部のくびれ部から少々外反気味に開いている。胴部はその上半に最大径を持ち，心持ち肩の張った形態を持つ。全体的にみれば，器高に比べて，かなりスマートなプロポーションを持っているといえる。口縁部下から胴部上半にかけて，浅いヘラ描沈線による区画と区画内にはヘラ先による刺突文が施される。文様の構成は，口縁部に三角形，頚部に菱形，胴部には逆「V」字形の区画が表面に4個ずつ交互に割付けられるものである。それぞれの区画内には，「V」字形，長楕円形，首長竜の首のような形の無文部が沈線によって作られる。焼成はあまり良くない。色調は表面は黒褐色，淡褐色，赤褐色の部分が混在し，裏面はほゞ褐色である。

2号埋甕使用土器，頚部から口縁部にかけて残存していたものである。前述のようにこれは埋設された形で検出したものではない。しかし，1号埋甕と近接して出土したものであること，文様図形は異なるが，1号埋甕使用土器と同様沈線による区画内に刺突が施されるものであること。また本遺跡においては，称名寺式土器は埋甕として埋設される例が多かったことなどから埋甕使用土器とは断言できないまでも，埋甕施設とかなり深い関係にあると考えた。土器の特徴は次の通りである。口縁は平縁，口辺部は無文，文様図形はヘラ描沈線による直線的な区画と縦位の曲線的な区画を一単位とする4回の繰り返し。区画内にはヘラ先による長い刺突が施される。焼成は良好，色調は赤褐色を呈する。

1号埋甕使用土器，2号埋甕使用土器ともに，表面全体をまずヘラで丁寧に磨いてから沈線そして刺突を行っている。

3号埋甕使用土器（図－52の3）口縁，平縁。図示したものは復元実測であるが，頚部のくびれ，胴部のふくらみともに弱く，かなりスマートなプロポーションである。文様の図形とその構成は欠損部が多いため不明であるが，残存部分で見る限り，浅いヘラ描沈線による区画文のみであり，縄文の充填，刺突文はない類いであろう。第4区の2号埋甕使用土器も同じものである。焼成は良好。色調は黒褐色を呈している。

4号埋甕使用土器（図－53，図版－25）

頚部以上を復元実測したものである。口縁部には隆起線と沈線による楕円形の縄文区画帯，逆「J」字の貼付けを施している。胴部には幅広の磨消帯と縄文帯を交互に配列し，

縄文帯には波状の沈線を垂下させる。口縁部は一部欠損するが，波状を呈し，把手を4個持っていたと思われる。把手間の隆線上，口唇直下の隆線上に小さな突起が見られる。器形はキャリパー状の少々崩れたようなプロポーションである。焼成は良好，色調褐色。典型的な加曽利E II式土器である。

4　Ⅳ区の発掘調査

(1)　調査状況 (図－3)

Ⅳ区は，東より2番の調査区である。南北は国道の側溝によって，東西は暗渠排水路によって区切られており，調査面積は400m²であった。

検出された遺構は称名寺式の深鉢を利用した屋外埋甕施設が6基，不整形な土壙（縄文期のもの）9基，柱穴様のピット（平面形円形）4基，同（平面形方形）7基，歴史時代住居跡1基，同土壙1基，溝状遺構1基であった。このうち埋甕と，歴史時代住居跡及び土壙については後で個別に記載するので，ここでは本区の全体的な状況と注意すべき点を記すこととする。

埋甕施設は，Ⅳ区の東半に集中している様相が見受けられ，Ⅲ区検出のものとは間隔があるので，一線を画するような有様である。しかし，これは道路敷以外の調査はなされていないので断定できない。使用された土器にはⅢ区のものと大きな時期差はない。

縄文時代の土壙の分布は，本区においては，埋甕施設の西側に多く集中している。密度からいえば，Ⅰ区ほどではないにしても，Ⅱ，Ⅲ区よりはかなり高密度である。線的に見れば土壙はⅠ区に集中し，Ⅱ，Ⅲ区に疎となりⅣ区に至って再び集中する様である。また更にⅤ区に至って少なくなるようである。しかし，Ⅳ区の土壙は配列の仕方に規則性を読み取ることはできない。更に形態においても不整な円形，楕円形を呈するものとまとまった形ではないものと多岐にわたり，規模の点でも統一性に欠ける。遺物はどの土壙からも土器小破片が何片かその埋積土の上層より検出されるだけで目立ったものはない。（時期的には称名寺式期のものが多い。）また発掘調査中，これらの土壙の調査は次の点でかなり困難であった。ほとんどの土壙は深くても30cm前後と浅く，ローム層上面まで掘り込まれているが，ローム層上面の色調及び硬さは土壙の埋積土のそれらと大差なく，余程注意しなければ判別のつかないものであった。これは土壙の埋没が長時間に亘ったものではないことを示すものではなかろうか。つまり，土壙が構築された後，短時間のうちに再び埋められたのであろう。何のためにかは勿論不明である。従って，土壙埋積土中より出土するもの及びその出土状況は土壙の構築時期，土壙の用途を知る上で重要なものとなるであろうが，前述のように出土するものは土器破片のみであり，しかも少ないため何も言うべきものを持たない。

但し，出土した土器破片の多くが，称名寺式期のものであったことは，埋甕施設と何等かの関連を考えることができはしまいか。

柱穴様のピットで，注意しなければならないのは調査区の北東隅に７基検出された平面形方形のものである。７基のうち２基は，いくつかのピットが重なり合っているものである。各ピットとも埋積土は黒色土１層である。深さは浅いものは18cm，深いもので80cmであった。平面形は，いずれも40cm×40cmの方形である。これはその埋積土からみて歴史時代以降のものとみられるが，その配列の仕方に規則性を読み取ることはできなかった。或いは、すぐ東にある溝状遺構と関連するかもしれない。なお歴史時代土壙内に同様のピットを２基検出したが，この土壙より後に構築されたものと思う。

溝状遺構は，本区東端とＩ区の西端より二本検出されている。Ｉ区のものについては幅約１ｍ，深さ約90cm，断面形逆台形を呈する。出土遺物はない。本区のものについても巾約１ｍ～1.2ｍ，深約94cm，断面形逆台形と同様のものであった。遺物は縄文土器の破片をかなり含んでいるが，溝内の埋積土は黒色土（ローム粒を多少混える）であることから流れ込みであると考えられる。溝状遺構について注意すべきことは，現在のものではあるが，田畑の地区割の方向とほゞ一致していることである。田，畑の耕作に関連のあったものであろう。

以上，Ⅳ区の調査状況である。以下主な遺構について個別記載する。

(2) Ⅳ区の主な遺構について

屋外埋甕施設

１号埋甕（図－22，図版－８，９）

胴部下半から底部にかけての深鉢が正位に埋設されていた。道路工事中砂利敷の終了した段階での発掘調査であったので，深鉢はどのような状態で埋設されたのか知ることはできなかった。以下に記載するⅣ区の埋甕施設は同様の状況であった。

埋設のための掘り方は，深鉢の外形に沿った形で地山（ローム層）上面まで掘り下げてあった。確認された段階はローム層と表土との漸移的な層中であったが，掘り方内部の土層との分別が困難であったので，掘り方の平面形をつかむことはできなかった。

深鉢は底部の穿孔はない。外面の文様は胴部下半のみしか遺存していないので見ることはできなかったが，色調，胎土等から称名寺式と考えられる。更に鉢内に大きな土器破片が内部を覆うかのような状態で検出されたが，意図的にそうなったのかは判別できなかった。

2号埋甕（図—24，図版—8）

1号埋甕の南東にあり，3号埋甕と接するような状況で検出された。深鉢の胴部が正位に埋設され，底部は欠損する。或いは底部の穿孔という意味を含ませているのかもしれない。土器の時期は称名寺式期である。埋設のための掘り方は明確ではないが，他の例と同様深鉢の外形に合わせて掘り下げたものであろう。掘り方の下底はローム層の上面に達している。表土からローム層への漸移的な層の上面で検出したが，道路工事によってこの面まで削平されていたことを考えれば，この深鉢が口縁部から頚部を欠いて埋設されたとはいえない。

前述のように2号埋甕は3号埋甕と接してはいるが，断面図（図—24）で観察できるようそれ程時間差がなくそれぞれに埋設されたものであろう。埋設の先後関係は断面からは分別できないが，掘り方の下底の凹凸は同時埋設では現われないことの証左と思われるのである。更に第III層にそれぞれの掘り方の重複が現われないのは，それぞれの埋設にそれ程の時間差はないと解釈したのである。いずれにしても，この2つの埋甕施設は互いに深い関係にあるのではあるまいか。3号埋甕使用土器も称名寺式と考えられる。

3号埋甕（図—24，図版—8）

胴部下半から底部にかけての深鉢が正位に埋設されていた。底部の穿孔の事実はない。前述のように道路工事による破壊を考えれば埋甕施設の遺存状況は疑わしい。掘り方は明瞭ではないが，下底はローム層上面に達している。深鉢内の土壌の中にわずかに炭化物の混入を観察できたが，その性格については不明である。

2号埋甕と接しているが，その状況については前に記載したとおりである。

埋設用の深鉢については，表面の文様を見ることはできないが，次の点において称名寺式のものと考えられる。土器表面は丁寧に磨いてあること，胎土に砂粒を多量に混入し，あまり焼しまりが良くないことなど他の称名寺式土器と同様であることからである。

4号埋甕（図—23）

縄文時代2号土壙の南側で検出された。胴部下半から底部かけての称名寺式の深鉢が埋設されていた。底部の穿孔はない。埋設のための掘り方は他の例と同様あまり明瞭ではないが，鉢の外形に沿った形で掘り下げられ，その下底はローム層上面にまで達している。

5号埋甕（図—25，図版—9）

歴史後代土壙に接して検出された。称名寺式深鉢の胴部下半から底部にかけて埋設されていた。底部は穿孔されていた。埋設のための掘り方は比較的明瞭に残っていたが，歴史時代土壙によって破壊されている。他の例と同様，深鉢の外形に沿って掘り下げられ，そ

の下底はローム層に達している。

6号埋甕（図ー26）

歴史時代1号土壙の南側にて検出された。称名寺式と考えられる土器の底部が埋設されていた。底部の穿孔はない。土器埋設のための掘り方は，他の例と同様土器の外形に沿った形で掘り下げられたものと思うが，断面図で見られるように明瞭なものではない。

歴史時代住居跡（図ー27）

本主居跡は，中央南北に幅50cmの暗渠排水路によって断ち切られている。西半は第Ⅲ区に，東半は第Ⅳ区に含まれる。調査の不手際から，第Ⅲ区所在部分と第Ⅳ区所在部分を別別に掘り下げていったため，ゆがんだ四辺形プランとなってしまった。住居跡四辺の長さは東辺約3.4cm，西辺約3.7m，北辺約4.3m，南辺約5.1mを測る。但し西壁は不明瞭であった。平面形は南辺を下底にした台形状を呈する。床面積は約24.9m²である。残存壁高は東壁で約30cm程である。壁周溝・柱穴は明確にできなかったが，西壁中央に床面よりの深さ約24cm，南東隅の先に深さ約104cmのピットを検出した。その他住居跡内に大小4個のピットを検出したが，いずれも柱穴とは断じ難い。最も大きなピットはその埋積土が栗色を呈していたことから縄文期のものと考える。カマドは，東壁に2基検出したが，北側のものはかなり損傷があったので，南側のものよりも古いものと判断した。南側のカマドは，両袖内と奥に縦長の石灰岩を埋め込んでいる。遺物は，羽釜・甕形土器などの破片が南側カマド周辺に出土し，坏形土器は北東隅のピットの周辺と西半に多く出土している。遺物について後述するように，本住居跡はそれ程規模が大きくないのにかかわらず，遺物の出土（主として坏形土器）が多いのが特徴的である。また住居跡の掘り方は，調査の不手際があったとはいえ，全体的に粗雑な感じを受けた。（四辺の長さがバラバラであること。壁線が直線的にきちんと掘られていないことなど）更に坏形土器の出土がかなりあるのに対し甕形土器や羽釜など煮炊きに使用する土器の少ないことが注目される。

歴史時代土壙（図ー28）

第Ⅳ調査区の東側，溝状遺構近くで検出された。長さ約2.79m，幅約 .96mの不整長方形を呈す。最深部の深さは約50cmである。東西断面形は，中央やゝ東寄りが最も深く，全体的になだらかな曲線を描くが，南北は大略鍋底状，呈している。最深部には焼土層が一層をなし，その上層に炭化物を混入する層がある。これはこの土壙の中で何らかのものが焼かれたことを示している，更に底部焼土層に接して坏形土器の出土が確認されたし，覆土中より多量の土師器が出土した。このことは本土壙が土師器の窯として使用されていたことを示唆しているのではないだろうか。

(3) 出土土器について

埋甕施設使用土器について（図ー54，図版ー25，26）

第Ⅳ区より検出された埋甕施設使用土器は総数６個を数える。これらは遺構で記載した通り，道路工事によるローム層上面までの削平の後の検出であるので，器形・胴部文様の構成等が観察できたのは２号埋甕使用土器（図ー54の１）のみであった。他の５個については，胴部下半の無文部のみの残存でしなない。よって，各土器については，特別なものを除いてとり立てて記載することはしなかった。なお，土器の時期については，確実な根拠をもって比定することはできないが，胎土にかなりの砂粒（長石粒・かんらん石粒）を混入すること，焼きしまりはあまり良くないことなどから称名寺式期のものであると考える。

２号埋甕使用土器（図ー54の１）は，底部及び口縁部を欠損する称名寺式の深鉢である。頚部のくびれは弱く，胴部のやゝふくらむスマートなプロポーションであったと思う。口縁部の欠損は発掘調査実施前の道路工事の状況より不明であるが，底部の欠損は意図的なものである。底部の一部を意図的に穿孔した例は５号埋甕使用土器（図ー54の６）にもある。胴部の文様は，浅いヘラ描沈線による区画文である。区画は頚部から胴部上半で抜く，曲線的に施されるものと，下部および上部の丸まるものの二種ある。なお，６号埋甕使用土器（図ー54の３）に，ヘラ描沈線の最終部分を三本みることができる。沈線による区画内は無文のままである。器面は表裏面ともヘラによってよく磨かれており，沈線は磨きの後施されている。胎土に砂粒を多く含み，焼成はあまりよくない。色調は表面灰褐色，裏面褐色，表面の一部に黒色部分ある。

歴史時代住居跡出土土器（図ー56，57，図版ー27，28）

羽釜，甕形土器，坏形土器の一部はカマド周辺より出土したが，坏形土器の多くは西壁前，住居跡の西半より出土した。

本住居跡出土遺物数は総計23個体と住居跡の規模に比して多く，全てのものを本住居に居住した者が使用したとは考えられない。これについては後述する。

羽釜（１）は内湾する口縁部をもち，小さなツバが一周する。ツバはかなり小さく，この使用法について少々考えねばならないところである。

甕形土器（２～６）については，４を除き全て明るい褐色系統の色調をもつ。４のみ黒褐色である。また口唇の形態も４以外のものは全て角ばるのに対し，４の先端は丸まっている。これは作り方の違いに由来するものであろうか。

坏形土器（７～19）はいくつかのタイプに分けられるが，詳しくは後述する。いずれも焼成がななり良く，高温で焼かれたものと思う。18は灯明皿として使用されたものである。

高台付坏（20～23）はいずれも比較的高い高台を有するが，23のように裾の広がるものは特徴的である。

内面黒色処理を受けたものは21と22のみであった。

それぞれの土器の計測値及び特徴は別表（46～47頁）にまとめた。

歴史時代土壙出土土器（図－58，図版－29）

1のみ土壙の底面に接して出土した。これ以外は全て土壙の埋積土中に一括廃棄の状態で出土したものである。

坏形土器（1～7）もいくつかのタイプに分けられるが，歴史時代住居跡出土のものとあわせて後述する。いずれも，二次的な焼成を受けており，ひびの入ったものもいくつかある。

高台付皿（10～12）は三個検出されたが，いずれも小型のものである。11，12はヘラ磨きが目立つが，10には施されない。10の皿部外面にはヘラ先による文様がある。

高台付坏（13，14）は二個検出された。14のものには10と同様ヘラ先による文様がある。14は内面に黒色処理されている。

15は甕形土器の口縁部である。

それぞれの土器の計測値及び特徴は別表（48頁）にまとめた。

Ⅳ区遺構に伴わない土器（図－55，図版－30）

1～3は歴史時代住居跡の南側より廃棄されたような状態で出土したものである。

1は，キャリパーの形の深鉢である。口縁部は欠損が多く確実性を欠くが，断面「⌓」形の隆起線による楕円形の区画が窺える。区画内には縄文　　が横位に施される。胴部は地文縄文　　内に平行沈線を垂下させ，沈線間を磨消している。焼成良好，暗褐色を呈する。加曽利E II式。

2は，キャリパー形の残存する小形の深鉢である。口縁部は無文で，内彎し，直下に二から三条の沈線を横走させる。胴部以下は地文の縄文　　内に平行沈線を垂下させている。平行沈線は直線とカーブするものの二種ある。砂粒を多く含むが，焼成は比較的良い。表裏面ともに褐色を呈する。加曽利E II式。

3は，胴部の破片である。広い無文部と，断面三角形の微隆起による区画が特徴的である。区画内には縄文が不定方向に充填される。焼成良好，黄褐色を呈する。加曽利E III式。

（岩上照朗）

5　V区の発掘調査

(1)　調査状況（図－3）

第V区は台地の縁辺から東へ約125mから160m間に位置する。南北を国道側溝によって，

西側を暗渠排水路によって区切られている。No54国道中心杭が本調査区のほゞ中心にある。

検出遺構は縄文中期後半の住居跡５基，縄文中期末の土壙３基（５号住居の東壁の土壙を含めれば５基)，同中期末の深鉢を利用した屋外炉施設２基，歴史時代に含まれると考えられる土壙５基（長方形土壙）であった。住居跡内のものも含めれば歴史時代の土壙は長方形２基，円形２基である。更に，７基の柱穴様の小ピットを検出したが，時代，性格は不明である。

このうち，歴史時代の土壙（埋積土が黒色であったのでそう考えたわけである）からの遺物は縄文土器細片の他，石鏃１点の出土しかなかったので，以下に取り挙げて説明しなかった。

５基の住居跡は，１～３号，４と５号，５と３号というように相互に重複している。その新旧関係は次の通りである。（矢印の方向はより新しい住居跡を示す。）

１号 → ２号 → ３号

４号 → ５号

５号 → ２号

それぞれの住居跡の時期は遺物の検討をまたなければならないが，大略次のとおりである。１号，加曽利ＥⅠ式期の古い段階，２号及び４号，加曽利ＥⅠ式期，５号，加曽利ＥⅠ式期から同Ⅱ式期？，３号，加曽利ＥⅢ式期となる。

住居跡の全貌が明らかになったのは４号・５号２基のみで，１～３号は図の通り北半は調査区外になるので精査することはできなかった。

本区の調査は，道路部分をローム上面近くまで削平して敷砂利の工事終了後に行なわれたため，いずれの遺構についてもその落込みを黒色土中より確認することはできなかった。

(2) 第Ⅴ区主な遺構について

縄文時代の住居跡

１号住居跡（図－29，図版－10）

本住居跡は，北半が調査区域外であるため南半のみの調査である。西側は２号住居跡によって切断されている。従って全体的な平面プランをつかむことはできなかったが，観察される範囲内では壁はほゞ円弧状に回っているのがわかる。壁に沿って幅30～40cm，床面よりの深さ20～30cmの溝が回っている。ローム上面から床面までの深さは約30cmであった。

床面は，非常に堅くしまった状態であり，かなり平らな面である。

ピットは，周溝内より６個，床面より６個の計12個検出されている。このうち東側周溝にかかる最も大きなピットは，平面形87cm×90cmとほゞ円形を呈し，床面よりの深さ約76

cmをはかる。これは柱穴というより，貯蔵穴様のピットと考えた方が良いと思うが遺物の出土は皆無であった。その他のピットは径，深さともに統一性がなく，またその配例からみてもどれを主柱穴としてとりあげたら良いのか分別できない。但し，住居跡の南東の周溝内より検出されたピットは，P_3は長径60cm短径約34cm，P_4は同様に50cm，32cmとともに楕円形を呈し，深さは床面より各々65cm，62cmと二つともほゞ同様の形態を持っている。これら二つのピットは何等かの意図をもって掘られたものと考えられる。或いは出入口と考えられないだろうか。

炉址は確認できなかった。

遺物の出土は非常に少なく加曽利ＥⅠ式期の土器片が数片検出されただけである。

また住居跡の西東に本住居跡によって切断されている二つの土壙があるが，遺物の出土は皆無でありどのような性格のものであるか不明である。

２号住居跡（図―29，図版―11）

１号住居跡と同様，北半の調査は行えなかった。従って平面プランをつかむことはできないが，調査範囲内ではほゞ楕円状に壁がまわっている。残存壁高はローム層上面より40～46cmで，ほゞ垂直に立ち上がる。調査範囲内では壁溝は確認されなかった。

本住居跡は東側で１号住居跡を切断し，西側において３号住居跡に切断されている。

床面は西側，３号住居跡と重複する面を除いて，かなり堅くしまった状態であり，保存が良い。

ピットは総数11本検出できたが，P_{10}，P_9はその位置からみて１号住居跡に伴うものであったかもしれない。またどのピットが主柱穴として使用されたのか分別することは困難であるが，深さ，大きさ，位置からみてP_5・P_8が使用されたと考える。しかし北半について調査することができなかったため甚だ疑わしい。

炉（図―32）は，住居跡のほゞ中央に構築されていた。細長い河原石９個を利用した長方形の石囲い炉（長80cm，幅58cm）である。炉下は摺鉢状の浅い楕円形の(長径75cm，短径53cm）のピットが設けられ，そのほゞ中央に図―60の２の深鉢が埋設されていた。

遺物は，炉址の西側より底部の欠損した加曽利ＥⅠ式深鉢（図―60の１），P_6の東より浅鉢（図―60の５）の口縁部，P_8の東側より深鉢の口縁部（図―60の４）と同把手（図―60の３）が，床面直上の状態で出土している。また炉址に使用された石の上から，深鉢口縁部破片と，胴部破片が出土した。その他覆土中より多数の土器片が出土している。

石器はP_1内より多孔石の破片が出土し、覆土中より石鏃２点が出土しているのみである。

３号住居跡（図ー29）

図示のとおり，南半の一部分の調査がでしかない。従って住居跡の平面プラン，規模等については全くわからない。

東側で２号住居跡を切断し，南側において４号住居跡を切断しているが，その重複部分はあまり明瞭ではない。壁は南側のみ一部残されているが，残存高は約20cm程度であり，これもあまり明瞭ではなかった。

床面は比較的平担であるが，あまり堅くしまってはいない。壁溝・炉址は，調査範囲内では確認できなかった。

ピットは，東西に２個検出されたが，その形態・大きさからみて柱穴とは考えられない。調査範囲内では柱穴の検出はなかった。

遺物は，東西ピットの周辺から比較的まとまって出土しているがいずれも破片である。加曽利ＥⅢ式の土器片であると考える。

石器は，あまり多く出土していないが，スクレイパー１点，ミニチュア石器（図ー77の８）１点の出土があるのみである。

但し本遺構を住居跡様遺構としたのは，次の諸点による。ひとつに出土遺物はすべて，「ウキ」の状態であり，加曽利ＥⅢ式期のものが大半を占めるが，加曽利ＥⅠ式期のもの称名寺式期のもの，堀之内式期と考えられるものが混在していること。ひとつに，本遺構の大半は調査区域外にあるため，炉址，柱穴の検出がなかったことによるものである。或いは住居跡とはないものであるかもしれない。

４号住居跡（図ー30，図版ー12）

南側と北側はそれぞれ，５号住居跡，３号住居跡によって少々切断されている。平面形は長径約5.8ｍ・短径約4.8ｍの不整楕円形を呈する。壁は他住居跡による切断のため，南東側と北側ははっきりしなかった。残存壁高は西側で約42cm，南側で約30cmをはかった。壁の立ち上がり方は斜である。壁溝はない。

床面は，かなり堅くひきしまった状態であり，凹凸は少ない。

小ピットは総数10本検出されているが，主柱穴は４本及至５本ではなかったろうか。（P_2 P_4・P_7・P_8・P_9？）なお，中央北寄りに方形の土壙が検出されたが，その埋積土が黒色土であったので後世のものと判断した。また，住居跡のほゞ中央東西に２個の大きな円形（平面形）の土壙を検出した。（東側52cm×50cm，深さ約145cm・西側47cm×48cm，深さ約212cm）これらは，埋積土が黒色土で，遺物も小破片が覆土中より出土しており，東側土壙が住居跡の石囲炉を破壊して構築されていることなどから，住居跡に伴うものではないと考えた。

なお，住居跡の西側に，深さを住居跡と同じくして舌状に張出した部分がある。この中

から図—65の３の土器が出土している。これが何のためであるかは不明である。この近辺は，住居跡の覆土とローム層との区別がつきにくかった箇所であったので，掘り足らない可能性もある。

炉（図—33，図版—12）は，住居のほゞ中央に構築されている。プランは長方形（長約80cm，幅約40cm）の石囲い炉であるが，東側は前述のように円形土壙により破壊され，北側は石を置いた痕跡はない。石囲い炉内には東寄寄った箇所に庭部の欠損した加曽利ＥＩ式（図—65の１）の深鉢が埋設されていた。

遺物は，炉址内に埋設された土器，前述の西側の舌状の張出し部より口縁部破片，P_8の内部より出土している他，石器の出土はなかった。

５号住居跡（図—31，図版—13）

平面形は，東西南北四辺の長さそれぞれ5.0m，4.8m，3.8m，3.5mと不整隅丸長方形を呈する。北西隅にて３号住居跡の壁の一部を切断している。壁の立ち上がりは明瞭であり，壁に沿って溝が一周する。壁溝の幅は34cmから46cm，床面よりの深さ20cmから26cmである。ローム層上面（確認面）より床面までの深さは約35cmをはかった。床面は，長方形の土壙により攪乱されているが，大略平担で，比較的堅くしまっている。

ピットは，壁溝内より３本，壁溝にかかって３本，床面より９本の総数15本検出された。また住居跡南側よりと西壁を切る形で平面形長方形を呈する土壙が検出されているが後世の構築と考える。また東壁を切る形で不整形の土壙が検出されているが，これも東壁を切って構築されていた。これは，後世の構築であるが，遺物を全く伴わずその時期は不明である。

炉は住居跡中央にあり，何等施設をもたない地床炉である。焼土の範囲は64cm×50cmの楕円形を呈している。

遺物の検出はほとんどなく，北壁よりに床面直上で深鉢の胴部下半（図—66の３）が検出された他，数片の土器破片があるのみである。

１号屋外炉（図—34，図版—14）

４号住居跡の北西方，３号住居跡の西方より検出したものである。口縁部と底部が欠損した加曽利ＥⅢ式の深鉢（図—67の１）が正位に埋設されていた。更に土器の周囲には，幅７～11cm，長さ12～17cm厚さ約５cmの偏平な河原石が一まわり埋め込まれていた。土器を埋設するために土器の外形に沿った形で掘り方が確認された。土器内部及びその掘り方内には焼土が充満されていた。なおこの周囲から加曽利ＥⅢ式と考えられる土器片（図—69）が何片か検出されている。このことは，この炉は単独に存在したのではなく，この周辺一帯住居跡だったことを示すのかもしれない。しかし周囲には住居跡と考えられるプラン

の検出はなかったし，柱穴と考えられるようなピットも確認できなかった。またこの周辺一帯，住居跡の床面と目されるような堅くひきしまった面もない。いずれにしても，住居内に使用された炉址であるとは判断しかねるのである。

後述するように，炉址の西方約3.7cmの地点に，環状の把手を持った甕（中に骨片が検出された）の出土をみた土壙（2号土壙）が検出された。この土壙から出土する土器は概ね加曽利E III式のものと思う。本炉址とその周辺はこの土壙と何等かのかかわりを持った場と考えるのは早計であろうか。勿論この根拠は，両遺構の時間的・距離的な近接でしかないが。

2号屋外炉（図－3）

1号住居跡の南側，5号住居跡の東側にて検出された。55cm×45cmの範囲に焼土が確認され，炉内東側に寄って深鉢の胴部が埋設されていた。その他石囲い等の施設はない。

この炉址は，道路工事のため敷砂利を排除する際見つけられたものである。従って，この炉址が単独のものか，住居跡に伴っていたものか判別し難い。しかし，1号屋外炉址と同様，周囲に柱穴様の小ピット，住居跡の掘り込み等は確認されなかったので屋外炉と考えた。この周辺には何等遺物の検出はない。

(3) 縄文時代の土壙について

1号土壙（図－35）

第V調査区の西側に位置する。口径202cm×185cmの不整楕円を呈し，底径は195cm×187cmであった。断面形は開口部位から深さ約35cmのところでいったんすぼまる形を見せ，そこを境にして底面まで袋状に広がる形である。底面はローム層内に構築され，鹿沼パミス層まで達していない。

遺物は，あまり多く出土せず，埋積土の中から加曽利E III式期の土器片，チャート製のスクレイパー1点の出土があったゞけである。

2号土壙（図－36，図版－13）

4号住居跡の北側に位置し，4号住居跡の一部を切断している。東側に3号住居跡様遺構があるが，その重複関係はつかめなかった。本土壙の北半は，国道の北側溝下にあり調査することはできなかった。また本土壙は，かなり深く，掘り下げるうちに国道側溝下の土が崩れる惧れのあったこと，また本土壙の検出が調査期間最終的な時期であったので平面実測のみで終了せざるを得なかった。甚だ悔やまれる次第である。

本土壙の平面形（調査した範囲内では）は南側に舌状に張り出した形を持つ。本土壙と

西側に接して同様な形の土壙（ローム層上面よりの深さ約35cm）が確認されたが，土壙内より遺物の検出はなく，その時期もわからないとともに，2号土壙との関係もわからなかった。

2号土壙より出土する遺物は，橋状の把手を2個持った壺形土器（図—71の1）と土壙東側から破片がバラバラになって深鉢形土器（図—71の2）が出土している。その他土器の底部2個と，土器破片であった。

3号土壙（図—3）

4号住居跡の西側に位置する。平面形は2.3m×2.15mの不整な楕円形を呈し，深さは約50cmをはかる。断面形は鍋底状である。（本土壙の南壁下に径約25cm，底面よりの深さ20cmの小ピットが穿たれていた。）西側の一部は，長方形土壙により切断されている。また北側に接して径約110cmの円形の土壙が検出されたが，これから遺物の出土はなく，本土壙との関係は良く分からない。

遺物は埋積土中より加曽利EIII式の土器破片（図—72）と石鏃2点（図—75の4，5）が出土している。

(3) 出土土器について

1号住居跡（図—59，図版—31）

1号住居跡より出土した土器片の量はかなり少ない。また床面に付着していたものは，4の胴部破片のみであった。

1は，口縁部の把手の部分である。口縁部の突出した部分から下に降りる隆起線と条痕を有する。砂粒を多く含み灰褐色を呈する。

2は，口縁に枠状文，以下に縄文を有する大木8a式的な土器である。裏面に一稜を持つ。黒褐色を呈する。

3は，口唇がやゝ外反し，全体的に丸味を持つ。口縁無文，隆起線による区画と縄文を窺える。焼成かなり良好。褐色を呈する。

4，5は胴部の破片であり，地文縄文，その上の沈線文が目立つ。なお，4は胎土に雲母を含む。

6は，連続刺突文を有する。

土器型式は1に曽利式的な要素，2に大木8a的式的な要素を窺える。更に本住居跡は2号住居跡に切断されていることから，2号住居跡（加曽利EI式後葉）よりは古いものと考えられる。

2号住居跡出土土器（図－60，61，図版－32，33）

図—60の2を除いて，他のものは床面直上より出土している。

図—61の1は，頚部に無文帯をもち，口縁部と胴部文様帯が明瞭に分割されるもので，整美なキャリパー形の器形をもつ。隆線による文様は口縁部にかぎり，沈線と二条の隆起線により区画と渦巻文を作出している。渦巻文は外側に突出している。頚部は無文で胴部以下との境に一筆描の沈線が施される。胴部は縄文（Lr）を施文したのみである。表面淡褐色，底面の一部黒褐色で焼成良好。胴部下半欠損。2は，石囲炉内に埋設されていたものである。口縁部が朝顔状に開く器形で，器壁は口唇内側へ突出している。口縁部は無文，頚部には突帯がつば状に横位に貼付され，四つの突起を見ることができる。胴部は地文縄文で頚部の突起に対応して二本一単位の沈線が垂下する。なお頚部の突帯の両側には一条の沈線がそれぞれ施される。焼成良好，色調赤褐色，胴部作面に一部黒色。器形より曽利II式的な特徴を看取することができる。胴部下半欠損。3・4は胎土・焼成等からみて同一土器と判断できる。口縁部から頚部にかけてのものでしかないが，口縁部の文様無文の頚部，沈線など1の深鉢に酷似する。ただ，大きな立体的な把手は特徴である。推定口縁径49cmを測る。焼成良好，色調黒褐色。5は，無文の浅鉢形土器の復元実測である。色調は内外面とも暗赤褐色，焼成はあまり良好でない。

図—61の1～3は，キャリパー形の深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部の文様は隆帯による区画と渦巻文であり，地文に縄文（Lr）を横位に施す。1などは，隆帯による渦巻文は立体的な感はないが，頚部の無文帯・胴部との境界の沈線など，図—60の1と3,4に類似する。色調は1は褐色，2・3は灰褐色，焼成はいずれも良好である。4は口縁部の朝顔形に開く器形の深鉢形土器の口縁部である。口縁部は無文，頚部に横走する二条の沈線が見られ，胴部は地文の縄文（Rℓ）の中に，背中の向き合った沈線による「J」字文，二条の沈線とその間の刺突文をみることができる。色調暗褐色，焼成良好。これも曽利II式の影響の下に製作されたような感を持つ。5は深鉢形土器の胴部破片。やゝふくらむ胴部破片であり，地文の縄文（Lr）の中に，二本一単位の沈線による渦巻文，直線的な文様がみられる。色調黒褐色，焼成あまり良くない。大木8b式の胴部によく見受けられる文様である。

3号住居跡様遺構出土土器（図－62，63，64，図版－33，34，35）

出土遺物は全て「ウキ」の状態で出土したものであり，次のようにいくつかに分類できる。加曽利EⅠ式期式或いは大木8b式期のもの，図—63の2～4。加曽利EⅢ式期のもの，図－62の1～3，図－64の1～13，称名寺式期のもの図－63の1。堀之内式期のもの図－64の14。加曽利EⅢ式のものは文様によって更に次のように分類することができる。沈線によるもの，図－62の1，3。図－64の1～3，7，15。隆起線によるもの，図－64

の5，8，10～13。沈線および隆起線によるもの，図—64の4，6，9。

これらのものは前述の通り全て「ウキ」の状態である。また出土した土器の多くは加曽利E Ⅲ式期のものであるが，その他の時期のものも多く混っており，出土した遺構を住居跡とするのは疑わざるを得ない。

4号住居跡出土土器（図—65，図版—36）

遺物の量は少ないが，図示したいずれのものも住居に伴うと考えられる。1つは炉内埋設土器，他は床面直上より出土したものである。

1は，住居跡のほゞ中央の石囲炉の埋設土器として使用されたものである。隆起線による文様は口縁部にかぎられ，二本の隆起線と一条の沈線による渦巻文，区画が見られる。口唇には一条の横走する沈線，渦巻文の上には円形の刺突文が施される。区画内には縄文（Lr）が横位に施文される。頚部は無文，胴部との境に，一筆描によって横走する沈線があり，胴部は地文の縄文（Lr）の上に垂下する三本の沈線，一本の波状沈線が一単位となって5回繰り返される。地文の縄文は浅く，所によっては消えた部分もある。焼成普通，色調赤褐色。2は，キャリパー形の鉢形土器の口縁部から頚部にかけてのものである。口唇部は内彎する口縁部からやゝ直立気味に立つ。文様は口縁部の浅い縄文（Lr）のみであるが，器面全体よく磨いてあるので不鮮明である。更に口縁部の下端に浅い沈線が横走する。焼成不良，色調黒褐色。3は口縁部破片，沈線と隆線による区画文と渦巻文が施されるが，沈線による文様の作出しが目立つ。区画内には粗い節の縄文（Lr）が施される。焼成良好，色調赤褐色，一部黒褐色。いずれも加曽利E Ⅰ式或いは大木8 b式期のものである。

5号住居跡出土土器（図—66，図版—36）

本住居跡より出土した土器は少なく，破片が多い。3の胴下半部のみ住居跡の床面上より出土した。

1は地文に縄文（Lr）口縁部に隆起線による区画をもつ。キャリパー形土器の口縁部破片である。色調黒褐色，焼成良好。2は口縁部が内彎し，胴部のやゝ張る器形の深鉢形土器の口縁部である。口縁部は無文の上に沈線によって文様が描かれ，下端に隆帯をもつ。隆帯の一部は舌状に突起し，その外側に沈線による渦巻状の文様がある。胴部は地文の複節の縄文の上に沈線を直線的に或いは波状に垂下させている。焼成良好，色調灰褐色。3は胴部分のみの残存。底部は無文，胴部は地文の縄文（Lr）の上に，垂下する三条の沈線と2本の波状沈線が一単位となり，五単位施文される。うち1本の波状沈線は一条である。焼成普通，色調黄褐色。4，5は口縁部破片であり，4には隆線による区画と渦巻，5には横走する隆起線が見受けられる。6は，頚部破片であるが，地文の縄文(Lr)の上に垂下する二条の沈線，一条の波状沈線をみることができる。

加曽利ＥＩ式期の新しい段階，加曽利ＥII式に近い段階のものであろう。これは４号住居跡（加曽利ＥＩ式に比定）を切断していることからも諾えるものである。

１号炉使用土器と周辺出土土器（図ー67，69，図版ー37）

図示したものは，炉址に埋設された土器と周辺よりかたまって出土した土器である。

１は炉内に埋設された，口縁部と底部を欠損する深鉢形土器。頚部のくびれは弱く，器壁は薄く仕上げている。地文は比較的節の細かい縄文（Lr）が施され，その上に二条の沈線によって「H」字状，「V」字状，逆「U」字状に区画された磨消文が全面にみられる。焼成かなり良好，色調赤褐色。２は両耳壺形土器の耳部分である。縄文の上の円形の刺突が特徴的である。

拓影図（図ー69）に図示した土器破片は次のように分類した。口唇部直下に沈線をもち，以下縄文が施されるもの。縄文の中に沈線による磨消区画が施されるものもある。（図ー69の１と２）口唇に沈線，沈線内には楕円形の刺突文が施され，以下縄文のもの（図ー69の３，４，６？）地文の縄文の中に二条の隆起線と磨消しによる区画のみられるもの（図（図ー69の８～９）この他，口縁部に隆帯，以下に縄文と沈線による区画のあるもの（図ー69の５）と，縄文の中に垂下する二条の沈線（沈線間は磨消し）のある胴部破片（図ー69の７）がある。

おおむね加曽利ＥIII式期のものであるが，一部加曽利ＥIV式に類似する。

２号屋外炉使用土器（図ー68，図版ー37）

胴部破片。地文の縄文（Lr）の中に３本の沈線を縦横に交叉するように組み合わせ，沈線間を磨消し，一本は交叉部分にて渦巻をつくる。器面は縦に６区画される。焼成良好，色調赤褐色。

１号土壙 出土土器（図ー70，図版ー37）

１，２は口縁部無文，直下に一条の沈線，以下縄文が施される。３は，中央に断面三角形の隆起線をもつ。４は，断面三角形の二本の隆起線と幅の広い磨消しによって器面を区画するものである。５は幅の広い縦位の磨消部を有する。

加曽利ＥIII式期のものである。

２号土壙（図ー71，72，図版ー38）

図ー71の１は，両耳壺形土器である。頚部以上口縁部はゆるく外反し，肩の張る器形である。口縁部は無文，頚部に一条の隆線，以下胴部下半までLrの縄文。「耳」は対称の位置にもうひとつあると思うが欠損している。「耳」部分にも一部に縄文を施文する。底部は穿孔される。内部より骨片が出土した。焼成不良，色調外面淡褐色，内面黒褐色。２は，口縁部が大きく内彎，頚部のくびれは弱く，胴部がやゝふくらみ，小さな底部に続くキャ

リパー形の退化した器形である。口縁部から頚部にかけて幅広に無文部をつくり，頚部から胴下半まで縄文（Lr）のみを施文する。胎土に多量の砂粒を含み，焼成あまり良くない，色調黒褐色。

図—72の拓影は，3を除いて，他は全て断面三角形は隆起線と隆起線両側の磨消しによる区画によって特徴づけられるものである。3は沈線によって区画されている。

加曽利EⅢ～EⅣ式期のものと見られる。（図—72の4は新しい要素をもつ。）

3号土壙出土土器（図—73，図版—39）

1～3は，口縁部無文帯，直下の断面三角形の隆起線に特徴づけられる。1は更に逆「U」字形の区画がなされる。4は多少先行的な要素を含む。5は，沈線と沈線による区画が窺える。1は南関東の加曽利EⅣ式の要素をもっている。

遺構に伴わない土器（図—74，図版—39）

1の口縁部は外反し，内側に一稜が有る。器壁はやゝふくらみをみせる。口縁部は良く磨かれ無文に仕上げられる。直下に粘土紐を波状に貼付け，両側に円形の刺突を施す。以下の文様は，隆帯と沈線を利用し，複雑に作っている。焼成普通，色調黒褐色。加曽利EⅠ式期の古い段階のものであると考える。2は一条の隆帯をもつ底部である。

（岩上照朗）

第Ⅰ区 2号住居跡出土遺物

実測図番号	出土位置	器形	計測値 口径 器高 底径	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	南壁近くの床面	甕	(17.2) — —	頸部以上，強く「く」の字状に外反する。胴部は球形である模様。	口縁部内外横なで，胴部上半，内面横方向のヘラなで。外面斜め方向の浅いはけ目。	砂粒多量に混入。焼成は良好，内外面とも褐色。一部頸部に煤付着。	口縁部から胴部にかけて残存。内面に2条の接合痕あり。土師器。
2	東の張出し部，床面直上。	坏	14.5 5.7	口縁部と体部の境に一稜有り。口縁部は外反し，体部は半球状に丸味を帯びて底部にいたる。均整のとれた器形である。底部は丸底。	口縁部内外面，横方向の入念なヘラ磨き。体部外面，横方向のまばらなヘラ磨き。体・底部内面，縦方向の入念なヘラ磨き。底部外面，ヘラ削りを残す。	白色の砂粒を混入するが，良質な粘土使用。焼成，良好。内外面とも赤褐色。	口縁部1／4欠損。内外面とも赤色顔料塗付（かなり明確）土師器。
3	南東のピット付近床面。	坏	13.8 5.3	体部は内湾しつつ立ち上がるが，口縁部で内側で屈曲する。底部は丸底である。	口縁部外面，器体内面全面横なで。体部外面指頭による器体の整形痕。底部外面，不定方向のヘラ削り。底部内面一部にヘラによる調整あり。	砂礫を多量に含む。焼成良好。色調外面赤褐色，内面淡褐色。	口縁部一部欠損。外面赤色顔料，うすく塗付。土師器。
4	南東隅付近床面より10cm程浮いた状態。	坏	11.5 5.0	体部は湾しつつ立上がり，口縁部にて内側に屈曲する。底部は凸凹があるが，ほゞ丸底である。	口縁部内外面，体部内面，横なで。体部外面および底部外面，不定方向のヘラ削りとヘラによるなでつけ。底部内面ヘラ先による押さえつけあり。	砂礫を多量に含む。焼成良好。色調内外面ともに赤褐色。	口縁一部欠損。内外面ともに赤色顔料うすく塗付。土師器

第Ⅱ区　古墳時代住居跡出土遺物

実測図番号	出土位置	器形	計測値 口径 器高 底径	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	北壁そば	甕	17.2 31.0 6.5	口縁部はゆるく外反し口唇にやゝふくらみをみせる。胴部は中位に最大径を持ち長胴化の傾向を示す。底部は小さく，やゝ上底である。	口縁部内外横なで。胴部上半外面ヘラによって縦になでた後，その上を横にかるくなでで仕上げる。下半不定方向のヘラ削りをそのまま残す。胴部内面横方向のヘラなで。底部外面のヘラ削り，内面ヘラなで。	砂礫の混入が多いが精選された粘土使用。焼成良好。色調表裏赤褐色。	口縁部１部欠損ほゞ完形。
2	南東隅	甕	(18.5) — —	口縁部はゆるく外反する。胴部はやゝふくらみを帯びた長胴であろう。全体に薄く仕上げられている。	口縁部内外は横なで。胴部上半外面は縦方向のヘラ削りの後，横方向になで。内面は丁寧ななで痕がみられる。	微砂粗多量に混入するが，きめ細かい粘土を使用。焼成良好。色調表面黒褐色（煤付着）裏面灰褐色。	口縁部から胴上半にかけての破片。
3	北東隅	鉢	23.5 14.0 —	口縁部は外側に短かく屈曲し，内面に一稜をつくる。胴部は中位にてかすかにふくらみをみせるがほゞ半球状である。底部は平底に近い丸底で安定している。	口縁部内外面横なで。胴部外面，横方向のヘラ削り。内面横方向のヘラによるなで。底部外面ヘラ削り。内面ヘラによるなでの後放射状の細いヘラ磨き。	砂粒を多量に含む。焼成良好。色調外面赤褐色（底部一部煤付着）内面灰褐色。	完形。外面は，赤色顔料を塗付した模様。底部外面は二次焼成をうけたようである。外面二本の接合痕。
4	北西隅	高坏	15.6 9.0 9.5 （脚部下端径）	坏部は外稜を有せず内湾しつつ開く形である。脚部は上半が「ハ」の字状にやゝふくらみを見せる形態であり，裾に至って急激に広がる。裾の末端は少々めくれあがる。脚部の上半と裾の境に一稜を有する。脚部の内側に絞り上げたような痕跡有り。	杯部外面横方向の密なヘラ磨き。内面横撫での後放射状に暗文。脚部外面上半横方向の密なヘラ磨き。下半及び内面横なで。	砂粒多量に混入。焼成普通（少々もろい）色調内外面赤褐色。	ほゞ完形 内外面ともに赤色顔料塗付。 全体的に厚ぼったい感じを持つ。
5	貯蔵穴内	高坏	15.0 — —	坏部上半は内湾しながら開き，口唇内側に一条の稜がある。下半は脚部との接合部へ直線的にすぼまる。	口縁部内面横なで。以下は丁寧になでた後放射状に暗文を付す。外面はヘラ削りの後，全面横方向のヘラ磨き。	礫少量，砂粒多量に含む。焼成普通。色調内外面褐色，外面に一部黒褐色。	脚台部欠損。外面に赤色顔料を塗付した可能性有り。
6	貯蔵穴内	坏	13.0 5.4 —	外稜が明瞭に残り，口縁部は直立気味に立ち上がる。体部以下は丸味を帯びる。底部丸底。	口縁部内外面，体部内面全面横なで。体部以下外面不定方向のヘラ削り。	赤色砂粒多量に混入。焼成かなり良好。色調内面赤褐色，外面淡赤褐色。	１／３欠損。均整のとれた器形である。
7		坏	11.9 5.3 —	外稜が明瞭に残り，口縁部は少々外反気味に立ち上がる。体部以下は丸味を帯び丸底。口唇部内面に一条の沈線あり。	口縁部外面，器体内面全面横なで。体底部外面不定方向のヘラ削り。	砂粒多量に混入。焼成良好。色調は内外面とも淡褐色。	口縁部１／３欠損。
8	北西柱穴そば	坏	12.5 5.6 —	外稜が明瞭に残り，口縁部は直線的に立ち上がる。体部以下は丸味を帯び，丸底。	口縁部外面，器体内面全面横なで。体底部外面不定方向のヘラ削り。	白・赤色砂粒多量に混入。焼成良好。色調内外面とも赤褐色。	１／２欠損。
9	北壁そば	坏	13.1 5.4	外稜は明瞭に残り，口縁部は直線的に立ち上がる。体部以下丸味を帯び，丸底。口唇部内面に一条の沈線あり。	口縁部外面，器体内面全面横なで。体底部外面不定方向のヘラ削り。口縁部内側に一部斜方向のなで痕あり。	砂粒の混入はあまりなく，緻密な粘土使用。焼成良好。色調内外面赤褐色。	１／２欠損。

実測図番号	出土位置	器形	計測値 口径 器高 底径	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
10	覆土中	坏	(13.4) (4.9) —	外稜が明瞭に残り，口縁部は少々内湾気味に立ち上がる。体部は丸味を帯びる。口唇部内側に一条の沈線。	口縁部外面，内面全面横なで。体部外面ヘラ削り。	赤色砂粒多量に混入焼成普通。色調内外面赤褐色。	1／3品。
11	貯蔵穴内	坏	13.0 7.0 7.5	粗雑な作りであるが全体的に丸味を帯びる。底部は平底につくる。	口縁部内外面横なで。体部外面指頭による器肉調整。内面ヘラによるなで。底部外面不定方向のヘラ削り。	砂粒を多量に混入する。焼成普通。色調内面淡褐色，外面煤付着，一部赤褐色。	ほゞ完形

第Ⅳ区　歴　史　時　代　住　居　跡

実測図番号	出土位置	器形	計測値 器径 器高 底径	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	カマド中	羽釜	(22.0) — —	口縁部は内湾する形態である。口辺部から約2cmで先端部に丸味をもつツバが貼付けてある。体部はふくらむようである。	口縁内外面とツバ部部分横なで。体位上位外面ヘラによるなで。内面は斜方向のヘラなで。	白色・赤色砂粒を多量に混入。焼成堅緻。色調，内外面とも赤褐色。	口縁部2/3品。
2	カマド横	甕	(25.0) — —	口縁部は短く強く外反し，口唇に至って低い立ち上がりを見せる。口唇の外稜明瞭。口唇は角ばる。	口縁部内外面横なで。胴部上半外面は縦方向のヘラ削り，内面は横方向のヘラなで。	赤色砂粒・白色微砂粒多量に混入。焼成堅緻，色調内外面ともに赤褐色。	口縁部半欠品。
3	カマド前	甕	(25.9) — —	口縁部は短く外反し，口唇の外稜は明瞭であるが，内側には立ち上がりなし。胴部はやゝ肩の張る形態かと思われる。頸部の屈曲部内側に一条の浅い沈線がある。口唇は角ばる。	口縁部内外面横なで。胴部上位内面は斜方向の丁寧なヘラなで。胴部上位外面は縦方向のヘラ削り。	砂粒を多量に混入。焼成堅緻。色調内外面ともに淡褐色。(一部赤褐色)	口縁から胴部の破片。
4		甕	(24.0) — —	口縁部はゆるく外反し，口唇端部は丸味を帯びる。口唇端内外に一条の浅い沈線あり。	口縁部上位内外面横なで。胴部上位内面はヘラなで。外面は口縁部横なで後斜方向のヘラ削り。	砂粒を相当量含みあまり良好な胎土ではない。焼成堅緻。色調外面黒褐色，内面赤褐色。	口縁から胴部の破片。
5		甕	(21.6) — —	口縁部は短く外反し，口唇端部は丸味を帯びる。口縁部中位外面に一段の稜がある。	口縁部内外面横なで。胴部上位内面斜位方向のヘラなで，外面縦方向のヘラ削り。	黒色砂粒(雲母)を多量混入。焼成堅緻。色調内外面灰褐色。	口縁から胴部の破片。
6	カマド横	甕	(19.4) — —	小型の甕である。口縁部は短く強く外反し，口唇に至って内部に立ち上がり，外部に一稜を見せる。	口縁部内外面横なで。胴部上位内面横方向のなで，外面横方向のヘラ削り。	黒色の微砂粒(雲母・かんらん石)を多量混入。焼成堅緻。内外面褐色。	口縁部1/2品。口縁部外側一部に煤付着。
7		坏	16.0 5.1 5.8	小さな底部から，内湾しながら立ちあがる。体部内外面にロクロ痕明瞭。	左回転ロクロ成形後回転糸切り。	白色（長石）砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面赤褐色。	ほゞ完形。
8	西壁前	坏	12.0 3.5 6.0	体部中位でくびれ，口縁部まで内湾しながら開く。左右対称でなくやゝゆがんでいる。薄手につくられており口唇でやゝ肥厚する。	右回転ロクロ成形後回転糸切り。	白色砂粒多量混入。焼成堅緻。内外面褐色。	口縁1/3欠損。粗雑なつくり。
9	〃	坏	(14.0) 3.5 7.5	粗雑なつくりの底部から体部は内湾しつつ立ち上がり，口縁部に至って外反する。口唇は肥厚している。底部内面に凸凹あり。底部がやゝ外側にせり出している。	右回転ロクロ成形後回転糸切り。	白色砂粒（長石・石英等）多量痕入。焼成堅緻。内外面黒褐色入り混る。	1／3品
10	〃	坏	15.0 4.5 7.5	粗雑なつくりの底部から体部はやゝふくらみを見せながら立ち上がり，口縁部に至って大きく外反する。口唇は少々肥厚する。	右回転ロクロ成形。底部は不定方向の手持，ヘラ削りがなされており切り離し痕は不明。	白色砂粒（長石，石英等）多量に混入する。焼成堅緻。内外面黒褐色と褐色入り混る。	口縁一部欠損。

実測図番号	出土位置	器種	計測値 口径 器高 底径	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
11	西壁前	坏	13.5 4.5 6.0	体部はやゝふくらみを見せながら立ち上がり，口縁部に至って大きく外反する。底部粘土板を貼ったようでやゝ高くなる。	右回転ロクロ成形，回転糸切り。	白色・赤色砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面黒褐色と褐色入り混る。	口縁一部欠損。
12	カマド横	坏	12.5 3.0 6.1	器高低い形態。体部はやゝふくらみを見せながら立ち上がり，口縁部に至って外反する。全体にゆがみあり。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。	砂礫，砂粒（長石，石英）多量混入。焼成堅緻。色調赤褐色。	口縁部一部欠損。
13	西壁前	坏	(15.0) 3.5 6.5	体部から口縁まで短く内湾しながら立ち上がる。薄く仕上げられているが，全体のゆがみが目立つ。	回転糸切り離し。	砂礫，砂粒（長石，石英）多量に混入。焼成堅緻。色調黒褐色と褐色入り混る。	口縁部２／３欠損。
14	〃	坏	(14.8) 3.2 9.5	体部はふくらみ，口縁部外反。底部は大きく作る。	底部不定方向ヘラ削り。底部内面ヘラによる調整。	砂礫（長石）砂粒多量混入。焼成堅緻。色調黒褐色と赤褐色入り混る。	口縁部２／３欠損。
15	〃	坏	(14.0) 3.5 7.6	体部内湾しつつ開く。口縁部外反。全体にゆがみを持つ。	回転糸切り離し後底部周縁ヘラ削り。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。色調外面黒褐色，内面褐色。	口縁部２／３欠損。
16	〃	坏	(14.0) 4.2 7.5	体部直線的に開く。口唇部やゝ肥厚。全体にゆがみ持つ。体部に焼成前の穴あり。	回転糸切り離し。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。色調黒色・黒褐色，褐色入り混る。	口縁部，底部破片。
17	〃	坏	(16.0) (4.0) (9.0)	体部やゝふくらみ口縁部外反。	回転糸切り離し。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。色調黒色。	口縁部破片。
18	〃	坏	10.0 2.5 6.0	体部から口縁部外反しながら立ち上がる。小形。	回転糸切り離し。	砂礫，砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面灰褐色。	ほゞ完形。口唇に一部煤付着（灯明皿として使用）
19	カマドそで	坏	(10.0) 2.7 5.0	体部内湾しながら立ち上がる。口縁部かすかに外反。外面ロクロ痕明瞭。小形。	回転糸切り離し。	砂粒多量に混入。焼成堅緻，淡褐色。	口縁部１／２欠損。
20	カマド上	高台付坏	15.0 5.6 7.0	体部やゝ内湾気味に立ち上がる。口縁部かすかに外反。高台部は短かい。	回転糸切り離し後，高台貼付。	赤色・白色砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面赤褐色，内面一部黒褐色。	口縁部・高台部一部欠損。
21		高台付坏	(15.0) 5.5 6.5	全体に丸味を帯び，体部以上内湾しつつ立上がる。	回転糸切り離し，後高台貼付。	砂粒多量混入（長石，石英粒窺える）焼成堅緻。内面黒色，外面灰褐色	口縁部２／３欠損。内面黒色処理。
22		高台付坏	— — 6.3	全体に丸味を帯びる。	回転糸切り離し後，高台貼付。高台貼付部真上に回転ヘラ削りあり。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。内面黒色，外面褐色。	底部片。内面黒色処理。
23	カマド前	高台付坏	— — 8.2	高台部は外に強く張り出す。		砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面赤褐色。	底部片。

第Ⅳ区　歴史時代1号土壙

実測図番号	出土位置	器種	計測値 口径 器高 底径	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	底面	坏	10.5 2.4 6.0	小形の坏。内面底部にロクロ痕明瞭。	回転糸切り離し。外面底部近くに一条の溝あり。	黒色砂粒多量混入。焼成堅緻。外面赤褐色，内面灰褐色。	口縁部一部欠損。二次的な焼成をうける。(ひび割れ多い)
2	覆土中	坏	(10.6) 2.6 (6.3)	小形の坏。口唇部外反。外面ロクロ痕明瞭。	回転糸切り離し。内面なで。	砂粒(長石粒目立つ)多量混入。焼成堅緻。内外面淡褐色。	1／3品。二次的な焼成をうける。(ひび割れ)
3	覆土中	坏	(10.4) 2.5 6.5	小形の坏。外面ロクロ痕明瞭。底部やゝせり出す。	回転糸切り離し。内面なで。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面淡褐色。	1／4品。二次的な焼成をうける。(ひび割れ)
4	覆土中	坏	(14.0) 4.3 6.5	外面，底部内面ロクロ痕明瞭。口唇やゝ外反。	回転糸切り離し。内面なで。	砂粒多量（長石粒目立つ）に混入。焼成堅緻。内外面淡赤褐色。外面一部灰色。	1／2品。二次的な焼成をうける。(ひび割れ，一部に須恵質の色)
5	覆土中	坏	(16.0) 4.5 6.3	体部から口縁部直線的に開く。外面ロクロ痕明瞭。	回転糸切り離し。内面なで。	砂粒多量混入。焼成堅緻。内外面淡褐色。	口縁部のみ3／4破損。二次的な焼成をうける。
6	覆土中	坏？	(18.0) — —	全体に丸味を帯びた器形。内外面にロクロ痕かすかに残る。	内外面横方向のヘラ磨き。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面淡赤褐色。	口縁部破片。ヘラ磨きは黒色処理。二次的焼成をうける。
7	覆土中	坏？	(14.6) — —	口唇部外反。外面にロクロ痕かすかに残る。	内面横方向の丁寧なヘラ磨き。（光沢あり）	砂粒の混入少量。焼成普通。内外面灰褐色。	口縁部破片。外面剝落激しい。
8	覆土中	坏？	(14.8) — —	口縁部は内湾する。外面ロクロ痕明瞭。	内面なで。	砂粒(長石粒目立つ)多量混入。焼成堅緻。内外面淡赤褐色。	口縁部破片。
9	覆土中	坏	— — 6.2	外面ロクロ痕明瞭。底部やゝせり出す。	回転糸切り離し。内面なで。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。外面淡褐色，内面淡赤褐色。	底部破片。
10	覆土中	高台付皿	(11.4) 2.0 (6.2)	小形，皿部は直線的に開くが，浅い。	回転糸切り離し後，高台貼付。	白色砂粒多量に混入。焼成堅緻。外面灰褐色。内面淡赤褐色。内面淡赤褐色。	半欠品。皿部外面にヘラ先による刻線あり。
11	覆土中	高台付皿	(9.4) 2.2 (4.6)	小形，皿部は直線的に開くが，浅い。	回転糸切り離し後，高台貼付。皿部外面なで，内面ヘラ磨き。高台内面横なで。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面赤褐色。	半欠品。
12	覆土中	高台付皿	(8.0) 2.0 (4.5)	小形，皿部は小さく浅い。	回転糸切り離し後，高台貼付。皿部内外面ヘラ磨き。	砂粒多量に混入。焼成堅緻。内外面赤褐色。	口縁部一部破損。皿部一部に釉付着。
13	覆土中	高台付皿	(16.0) (6.5) 7.2	体部から口縁部内湾しながら開く。高台部は低い。	器体全面に微細なヘラ磨き。高台部内部にヘラ磨き。	砂粒（長石粒他）多量に混入。焼成堅緻。内外面淡赤褐色。	口縁部と底部破片。
14	覆土中	高台付皿	— — 8.0	比較的大きい高台。	回転糸切り離し後，高台貼付。内面ヘラ磨き。	砂粒多量混入。焼成堅緻。内面黒色，外面灰褐色。	底部破片。内面黒色処理。
15	覆土中	甕	(19.9) — —	口唇部の断面方形で内面やゝ立ち上がる。	口唇部内外面横なで。口縁部外面縦方向のヘラ磨き，内面横方向のヘラ磨き。	砂粒多量混入（白色，黒色）。焼成堅緻。内外面淡赤褐色。	口縁部破片。

6　出土石器について

石　鏃（図―75の１～４，図―77の９～11，図版－40）

図―75の１はＶ区２号住居跡の覆土内よりの出土である。比較的大きなものであるが，刃部の片側下半が欠損している。基部には自然面を残す。表裏とも丁寧に剝離される。とくに尖頭部は細かく打ち欠いている。最大長3.5cm，最大幅推定2.1cm，厚さ７mm。石質はチャートである。

図―75の３はＶ区３号土壙内より出土したものである。あまり均整のとれた形ではない。尖頭部の一部が欠損しているが，基部にはかすかにえぐりをみせる。表裏面とも粗雑な剝離によって仕上げられ細部の調整は見受けられない。長さ約2.1cm，最大幅2.7cm，厚さ４mm。石質は質のよいチャートである。

図―75の２はＶ区３号土壙の上土の中より出土したものである。大型のものである。尖端部と刃部の一部が欠損している。表裏面とも剝離は粗雑であり，階段状の剝離を多く残す。剝離は大きく，細かい調整はない。基部にはややえぐりを見せるが，えぐりを作るための調整はない。最大長4.4cm，最大幅3.2cm，最大厚６mm。石質はチャート。

図―75の４はＶ区３号土壙より出土したものである。細く作られておりスマートな形である。基部の一部が欠損している。表裏面とも細かい剝離によって仕上げられている。基部と基部近くに一部自然面を残している。最大長３cm，最大幅1.5cm，最大厚４mm。

図―75の５はＶ区３号土壙より出土した。基部のえぐりは顕著であるが，一方が欠損している。表裏面とも丁寧な剝離によって仕上げられる。とくに基部のえぐりの部分は細かい剝離が目立つ。最大長3.3cm，残存最大幅1.7cm，厚さ４mm。石質はチャートの一種であろう。

図―77の９はＩ区での表採品である。かなり小さいものであるが，表裏面とも丁寧な剝離によって仕上げられている。ほゞ完形品である。最大長1.8cm，最大幅1.3cm，最大厚4.5mm。石質はチャート。

図―77の10は図―75の３と同様大形のもので，Ｉ区の２号住居跡内土壙の埋積土上位より出土した。刃部から基部にかけてのかなりの部分が欠損する。表裏面とも剝離は粗雑である。最大長4.3cm，厚さ６mm。石質はチャート。

図―77の11はＶ区２号住居跡出土。石鏃というより石錐に近い。比較的厚手の剝片が使用されており，表裏面とも粗雑であるが全面的に剝離が施されている。とくに劣端部には細かい剝離が施され，細く錐状に作られている。最大長3.4cm，最大幅1.5cm，厚さ７mm。石質はチャート。

スクレイパー，剝片（図―75の７，図版－40）

図―75の６はＶ区より出土したものである。完形品であるが，四辺形であるなど特異な形である。表離面とも比較的大きな剝離を施したのち，縁辺に沿って細かく調整してある。縁辺は四辺とも鋭いものとなっている。最大長3.7cm，最大幅3.6cm，厚さ５mm。石質は頁岩と考えられる。

図―75の７はＶ区５号住居跡覆土中より出土したフレークである。背面は大きく二条の剝離が認められ，打面近くには粗雑な細かい剝離がある。末端には一部自然面を残す。打角は約120°，最大長5.1cm，幅3.2cm。石質はチャート。

石　錘（図―75の９，図版－40）

図―75の９はＩ区の８はＶ区の表採品，８は上端と下端に１つずつのえぐりが見られるが，９は周辺をひとまわり細かく剝離している。９は石錘として使用されたものではないかもしれない。長さ，８は約4.1cm，９は約5.7cm，幅，８は約４cm，９は約5.1cm,厚さ，８は約５mm，９は約８mm。石質，８は石灰岩製，９は頁岩製。

石　斧（図―76の１～５，７，　図―77の12，図版－41）

ここで石斧としたのは，実際に使用したと考えられるもの（用途については種々論があると思うが）であり，図―76の６，図―77の８のように，その大きさからみて石器として使用するのに不適当であると考えられるものは除いた。

図―76の１～３の分銅型打製石斧はいずれも，Ｉ区８号土壙底面より，この順に上から重なって出土したものである。本土壙は小形のものであり，前述（Ｉ区遺構の項参照）のとおり形態的にも何等特徴的なものではない。しかし同一土壙に三個の石斧が，しかも底面より互いに重なりあって出土したことに特別な意味を感じる。しかし土壙より出土したものはこれ以外になく，土壙をいつの時期に何のために構築したのか説明できるものは何もない。よってこれ以上のことは今は何も言うことはできない。

１と２はひとつの偏平な原石の表裏を大きく剝離し着柄部を表裏交互に作り上げ，二つに縦割にされた結果出来上がったものである。従って実測図の右側は互いに接合する。原石に施された最初の大きな剝離は１では実測図左側の自然面の下側に見受けられ，２では同じく左側の上方にある。この剝離はおそらく一回で行なわれたものであろう。更に細かく見ると，２の実測図左側の下端に直接打撃を受けてできたと思われる段差が窺われるが，これに加えられた打撃によって原石は薄く二枚に剝がれたものと思う。両者の実測図右側の着柄部に施された調整剝離は二枚に剝いだのちに行なわれたものである。刃部は二枚に剝いた段階で相当に鋭利なものであったろう。刃部に施される調整剝離は細かいもののみである。２の左側実測図着柄部より下の周縁に行なわれた剝離は上述の階段状の部分

より前に施されたものであるから，二枚に剝ぐ以前のものである。石質はチャートの一種。3は1，2に較べてやゝ小型の分銅型打製石斧である。大体の形をつくるための，粗雑なステップを残す大きな剝離のあと，刃部及び着柄部に形を整えるための細かい剝離を施している。一部に自然面を残す。硬質な砂岩製である。

図―76の4は，Ⅰ区より出土したが，遺構より検出したものではなく，表土剝ぎの最中出土したものである。比較的大きな分銅型の打製石斧であるが，やゝ偏平な形である。大きな自然面を残し，周縁には粗雑な剝離と刃部を鋭利にするための調整剝離を見る。あまり質の良くないチャート製。

図―76の5は，Ⅴ区2号住居跡覆土より出土したものである。上方に比し下端の幅の広いバチ型の打製石斧である。ステップを多く残す粗雑な剝離によってのみ作り上げられたものである。着柄部は使用のためかかなり磨耗している。自然面を一部に残す。石質は石灰岩製である。

図―76の7はⅠ区の表採品。かなり薄く仕上げられた磨製石斧である。表面は表裏面とも良く磨かれているが，基部と刃部に少々の打ち欠きが見られる。このうち刃部のものは使用の痕跡と考えられる。石質は硬質砂岩。

図―77の12はⅤ区5号住居跡覆土中より検出されたもの。表裏面とも粗雑な剝離と細かい調整剝離が施されている。また表面（左側実測図）下半から刃部にかけて部分的に磨かれている。石質は紡錘虫石灰岩。

石　槍（図―76の8～9，図版－42）

8はⅠ区の調査年，敷砂利の排除の後に検出されたものである。9はⅢ区より出土。両者ともに一方を尖らせ，一方を鈍角的に作る。9は磨滅しており剝離の仕方は明瞭ではないが，両者とも粗雑な剝離のみにて作り上げられている。また両者とも，裏面に自然面を多く残す厚手の剝片が使用されている。石質は8は砂岩製，9は頁岩製。

敲　石（図―77の1～6，図版－43）

本遺跡では敲石は図示したもののほか，3個体分出土しているが，いずれも小破片であるため掲載しなかった。以下個別的に説明する。

1は，Ⅰ区4号土壙の埋積土中より出土したものである。平面形は径約6cmとほゞ円形であるが，厚さ約4.8cmと部厚い砂岩礫が利用されている。周縁には一周幅約1.3cmのタタキ痕が巡っている。中央の凹みは，表面に1個しか認められない。この点他の敲石とは趣を異にする。凹みの形状は，1.5×1.5cmの方形であり，中央の深さは表面より1mmと浅い。何らかの回転によってできた磨滅とは見られず，連続的に敲いた結果できた凹みではないかと考える。（平面形が円形ではないこと，凹みは磨られたように滑らかではなく，

ァバタ状にがたがたしていること二点がこの証左となろう。)

2はⅠ区の表面採集品であり，遺構に伴出したものか否かは不明である。全体的な形は楕円形（長径約9.3cm，短径約5.9cm）であり，最大の厚さは4.3cmをはかる。全体的に良く磨られており，周縁にはタタキ痕などは認められないが，両側に二個ずつ凹みがあるのは特徴的である。この意味は良く分からないが，実測図右側の凹みのひとつはあまり彫りが深くないことから，右側の凹みに親指の根元をあて，左側の二つの凹みに中指と薬指の先をあてると握り易いものとある。更にこう握った場合下になる敲石の先端には磨り潰しのための磨滅が顕著である。しかしこの場合は，敲石中央の表裏にある凹みは意味をなさなくなってしまう。中央の凹みは何のために使用されたかわからないが，これはこの敲石が単一の方法で使用されたのではないことを意味していると思う。中央の凹みは表裏に一つずつあり，図示のとおり両者ともかなり深い。更にこれらは，楕円形であり，凹み内は滑らかではないので，1と同様，回転磨滅によって出来たものとはいえない。石質は砂岩である。

3はⅤ区3号土壙埋積土中より出土したものである。楕円形（長径10.3cm，短径7.6cm）で偏平な（厚さ約4.3cm）の河原石が利用されているが，形はゆがんでいる。表裏面中央には，それぞれ二個ずつの凹みが認められるが，凹みは両面ともアバタ状のタタキ痕であり，形も不整形である。勿論，回転磨滅によって出来たものでないことは明瞭である。敲石の両先端と両側には，タタキ痕が残されている。とくに両側のタタキ痕は，2の敲石と同様，それぞれ2個ずつの凹みを見ることができる。石質は砂岩製である。

4はⅠ区2号住居跡の覆土より出土したものである。楕円形（長径13cm，短径7.9cm）で，比較的厚い（厚さ6.2cm）河原石が利用されている。表裏面中央にはそれぞれ二個ずつ凹みが認められる。詳細にみてみるとこの凹みは四個とも円形ではなく，深さも0.3cm～0.1cmと浅い。また凹みの内側は磨滅したように滑らかではなく，敲きによって作り上げたように凸凹が激しい。敲石の両先端と両側にはかなり明瞭な敲痕がある。これは表面から観察すれば，凸凹のかなり激しいことが認められ，何回も敲き上げられた結果できたものであると思われる。石質は砂岩である。

5はⅤ区5号住居跡の覆土中より出土したものである。全体形は長径約11.9cm，短径約7.5cmの楕円形で，比較的薄い河原石が利用されている。表面は中央の凹みと周縁部分を除いて良く磨かれているようである。中央の凹みは表裏面に2個ずつ認められ，そのいずれも深さ0.4cm～0.6cmと比較的深い。凹みは円形に近い形状であるが，微細に見ると，表面の凹凸が激しいことがわかる。これは凹みが回転磨滅の結果できたものではないことを示していよう。石器の周縁には幅1.5cm～1.8cmのアバタ状の敲き痕が一周する。とくに石器の両側にそれが目立つ。石質は砂岩である。

6はⅤ区2号住居跡床面直上より検出されたものである。全体形は長径約14.0cm，短径

約8.1 cmの楕円形であり，厚さは最大で約4.5 cmである。表裏面中央にはそれぞれ2個と1個の凹みが認められるが，深さはいずれも0.2 cm前後と浅く，形状も不整形に近く，この石器がここを中心に使用されたとは思えない。また凹みの表面には凹凸が激しいことから回転による磨滅の結果出来たものとは思えない。石器の両側には，幅約2.5 cmの磨られた痕石が帯状に認められ，この部分を何物かの磨り潰しのために使用したかのような感を持たせる。また石器下端には楕円形の敲き痕が残されており，この石器が文字通り敲石として使用されたことが窺われる。つまりこの石器は物を磨り潰すこと，敲くことの二種の方法で使用されたのである。石質は砂岩製。

ミニチュア石器（図—76の6，図—77の8，図版—41）

図—76の6は分銅形打製石斧に，図—77の8は磨製石斧に形状は似るが，前者は長さが約4.2 cm，後者は約2.3 cmと短く，両者とも石器として使用されたとは考えられない。出土遺構はそれぞれ，I区2号住居跡内土壙とV区3号住居跡覆土中である。石質は前者は粒子の細かい砂岩，後者は頁岩の一種であろう。両者の用途については，石器としての実用品ではないと言えるのみで，（これも形が小さいということからでしかないが），何も言うべきものを持たない。

その他の石器（図—77の7，図版—42）

片面は自然面のまま残し，刃部を粗雑な剝離によって急角度に作り上げたものである。自然面は加工面にも一部残る。出土遺構はI区2号住居跡内土壙である。石質はチャート。本石器に類似するものは本県においては田沼町随岸坊遺跡（大和久震平・竹沢謙，「田沼町随岸坊遺跡発掘調査報告書」1968年8月の10頁）と矢板市雲入遺跡（塙静夫・田代寛「雲入遺跡」作新学院考古学資料室調査報告3，1966の10頁）などより出土している。それぞれ石斧，篦状石器と報告されている。報告書の実測図からでは刃部が急角度をなすか否か良く分からないが，裏面に自然面或いは平担面を残し，一方が幅せまく刃部が広くなる形状は本品と非常に類似性が高い。（雲入遺跡出土のものは両面加工で断面がレンズ状のものがあるが，全体的な形状は本品と似る。）これら二遺跡では，この石器はそれぞれ茅山式期，早期後半に伴うものとされている。二遺跡の他本県で類似のものは，鹿沼市坂田遺跡，烏山町妙光寺上遺跡より出土しているといわれるが，これらについては資料がない。いずれにしても早期後半～前期にかけての土器と出土するものである。本品の出土した土壙内からも前期関山式期の土器の出土（2片のみであるが）をみる。この石器は縄文時代早期後半より前期にかけて盛んに使用されたものであろうと予想できる。

7　出土土製品

（図－78，図版－44）

1は，遺跡周辺より採集されたものである。　器の把手であったものかもしれないが，土器本体は検出されなかったこと，何等かの動物を形どったものであるので土製品として紹介する次第である。側面より見ると蛇が鎌首をもたげたような形態であり，先端には目と口が彫られている。表面はかなり磨滅しているが背面には縄文が施文されている。

2はII区2号土壙より検出されたものである。土器の底部と考えられるが，底面周縁に円形の刺突が施されているなど特異なものである。土器表面には沈線による文様がある。胎土に砂粒を多く含み，色調は表面褐色，内面黒褐色である。

3はIII区2号埋甕のそばより検出されたものである。細い粘土紐で丸く輪をつくり，上の突出部分に小孔を貫通させている。この小孔に紐を通して垂飾りとして使用したものであろう。

4～7は土製円盤であり，四個とも土器片を再利用している。出土遺構は，4はI区5号土壙内，5はV区2号住居跡覆土中，7はV区4号住居跡覆土よりそれぞれ出土したものである。6は出土遺構は不明である。

Ⅳ　北の内遺跡出土土器

1　縄文時代中期後半について

北の内遺跡より出土した土器群は，主として縄文時代中期加曽利ＥⅠ式から堀之内Ⅰ式である。このうち数量的に多くを占めるのは，加曽利ＥⅢ式から称名寺式の土器であった。

加曽利ＥⅠ式に比定される土器はⅤ区の４軒の住居跡より検出された。このうち1 号住居跡出土土器を除けば、他の３軒の住居跡出土土器の多くは加曽利ＥⅠ式後半期のものである。この他２号住居跡よりは，曽利式的な内容を持つもの，大木式的な内容を含むものの出土がある。

加曽利ＥⅡ式から加曽利ＥⅢ式前半にかけての土器は，今回の調査では極めて少量であった。該期に属する遺構の検出も少ない。

加曽利ＥⅢ式後半から称名寺式にかけてのものは，加曽利ＥⅢ式の一部を除いて住居跡より出土したものではない。ほとんどが土壙出土或いは屋外埋甕に利用されたものである。

これらの他に今回の調査では，Ⅰ区炉穴・同区２号住居跡内土壙より，それぞれ早期末の条痕文系土器片，関山式土器片が少量出土している。これらについては，各遺構出土土器の事実記載の個所について説明してあるのでここでは省いた。

Ⅴ区２号・４号・５号住居跡出土土器について

この３軒の住居跡よりは，加曽利ＥⅠ式の後半段階に比定される土器群が出土している。とくに，２号・４号住居跡より出土した土器は全て床面直上の位置または炉内に埋設されたものである。従ってセットとして把えることのできるものと思う。３軒の住居跡のうち，４号・５号の２軒は相互に切合っており，住居跡構築に多少の時間差をみることができる。このことは後述するように出土土器にも反映している。しかし，その時間差は加曽利ＥⅠ後半の範囲内で説明できるものである。

３軒の住居跡出土土器は，２号出土の浅鉢形土器（図－60の５）を除けばすべて深鉢形土器とその破片である。これらを分類すると大きく次の三種に分けることができる。１類，南関東のいわゆる加曽利ＥⅠ式的なもの。２類，曽利式的なもの。３類，大木８ｂ式的なもの。これらを出土資料に合わせると次のようになる。

１類；

２号住居跡　図－60の１，３～４

　　図－61の１～３，５

４号住居跡　図－65の１，３

5号住居跡　図－66の1，3～6

2類；

2号住居跡　図－60の2，図－61の4

3類；　2号住居跡　図－61の6

1類の特徴は，整美されたスマートなキャリパー状の器形を持ち，渦巻文を中心とした区画文が口縁部上方に集約されることにある。頚部に無文帯のあるもの（図－61の1・3～4，図－61の1・5，図－65の1），胴部に垂下する平行沈線，波状沈線などが施されるもの（図－65の1・3，図－66の3・6）があることも特徴的である

2類とした2個体の土器に共通する特徴は，口縁部が外反する器形を持ち，そこが幅広い無文帯であることにある。胴部以下は両者とも地文縄文の上に沈線による文様を施している。

3類とされるものは図－61の6のみであり，少ない。

曽利式土器は中部地方南部（長野県諏訪湖周辺から八ケ岳南麓，山梨県を中心とする地域）に広く分布する縄文時代中期後半の土器群である。現在Ⅰ～Ⅴ式の5段階に細別されている。このうち南関東の加曽利ＥⅠ式後半の段階（大木8ｂ式期）に併行するのは曽利式土器第Ⅱ段階とされる[(1)]。曽利式土器の基本的な特徴は次のようである。かすかに内湾しながら大きく開く口縁部と，やゝ膨らみをみせてすぼまる胴部。口縁部に幅広い無文部を残し，胴部以下は懸垂文で文様区画されるものや隆線による多種多様な渦巻文が施されるものがある。地文には条線や沈線などを使用する。このような特徴を持つ曽利式土器と，2号住居跡出土の2個深鉢は形態的には類似するが，胴部以下の文様はかなりの差異があることがわかる。図－60の2の土器の頚部には隆線による貼付けがあるが，これも曽利式土器とは直接つながらない。しかし，少なくともこのような形態の土器は，加曽利ＥⅠ式或いは大木8ｂ式の中からは決して生まれるものではないだろう。このような差異は何に由来するのであろうか。

曽利式土器の分布の中心は中部地方南部にある。この曽利式土器が関東の加曽利ＥⅠ式の勢力圏を通るうち，ＥⅠ式の影響を受けて当地に到達したものがこの土器と理解できる。加曽利ＥⅠ式の後半期はＥⅠ式土器の影響力が強く，広域的な斉一化の進む時期であるといわれる。このような時期に遠方中部地方南部の土器が，ＥⅠ式に媒介されて当地に辿りついても，それはあり得ることである。このことは曽利式土器内部においても同様であるらしい。曽利式土器第Ⅱ段階では地文に縄文を利用するものが出現する[(2)]。これは加曽利Ｅ式或いは大木式の影響とされる。更に第Ⅱ段階は加曽利Ｅ式と大木式に祖型を有するタイプが曽利式土器の系統に組み入れられる段階であるとされる。このことは，北の内遺跡に

曽利式系の土器が持ち込まれたケースと同様，これもまた加曽利ＥＩ式の強い浸透力のなせる業であろう。加曽利ＥＩ式が媒体となって相互の地域が結びつけられたものである。

このような状況では，北の内遺跡以外にも曽利式的な土器の存在するはずである。存在してはじめて，加曽利ＥＩ式の強い浸透力が何によるのか説明できるであろう。これについては今後の問題としたい。

3軒の住居跡の先後関係について

前述のように4号・5号の2軒は互いに切り合っていた。それによって5号は4号よりも新しいことがわかる。このことは相互の出土土器にも反映しており，5号の深鉢形土器（図－66の1，3・6）などにより新出の要素を読取ることができるのである。図－66の1の土器は，口縁部の文様に円形・楕円形を持つようになる加曽利ＥII式により近い要素を持つ。図－66の3・6の土器は地文縄文の上に縦引された沈線間に縄文が施されないなどＥII式に通有の磨消縄文により近い感を持たせるのである。これに対し4号出土土器(図－65）は渦巻文が口縁部に飾られていること，胴部の縄文はまばらであるが沈線間にも見られるなどより古いものと思う。

これら4号・5号住居跡と2号住居跡の時間差はどうであろうか。3軒の住居跡は互いに近接して構築されている（図－3）。同時に使用されたとするには近すぎるものと思う。当然3軒とも時間差を持つものと考える。これはやはり土器にも反映している。これによれば2号の方が4・5号よりも古いとすることができる。次の通りである。

栃木県における加曽利ＥＩ式土器は，海老原氏によれば，4つの段階に細分される。[(3)] このうち第4の段階(安定期)とされたものの特徴は次のように記される。「加曽利ＥＩ式の後半期は大木8ｂ式に対比される土器で，器形と文様構成において一般化・斉一化の傾向が強く現われ関東タイプとしての展開がみられる。流れるようなキャリパー状深鉢形の器形曲線が完成し，渦巻文を中心としたスマートな横帯区画文が口頸部上半に飾られ，以下の器面は地文だけか時には地文すらも省略される。」これは北の内遺跡の3軒の出土土器の特徴とほゞ合致する。従ってこの3軒の出土土器はこの第4段階のものとみてよい。3軒のうち2軒は切合っており，5号の方が4号より新しいこと，それが土器にも反映していることは先に記した。これら2軒と2号住居跡出土土器群と比較すると2号の方にやゝ古い要素があるとしたのは，図－60の3～4の土器にある。この土器に付された立体的な把手，口縁部の渦巻文と渦巻文を結ぶ隆線の形などがそうである。前者は加曽利ＥＩ式第3段階の特徴[(4)]とされる箱状の把手に，後者はクランク文につながるものではないかと考える。図－60の1の口縁部にもクランク文につながるものがある。このような土器を持つ2号住居跡は，他の2軒よりもやゝ古いものと考えられよう。

2号，4号，5号の3軒の住居跡はこの順に新しくなり，それぞれの出土土器にもこの順に新しくなる要素をうかがうことができる。

2　称名寺式土器について

(1)　北の内遺跡の称名寺式土器の出土状況

北の内遺跡の称名寺式出土遺構は次の通りである。

Ⅰ区　1号～5号，7号土壙

Ⅲ区　1号～3号屋外埋甕

Ⅳ区　1号～6号屋外埋甕

Ⅴ区　3号住居跡（流れ込み）

この他出土遺構不明なものとしてⅠ区に1個ある。

Ⅰ区は今回調査した区域内で最も西寄りにあった（図－3）。Ⅰ区内で称名寺式土器を出土した遺構は全て土壙であった。Ⅲ区・Ⅳ区は屋外の埋甕である。Ⅰ区とⅢ・Ⅳ区の間Ⅱ区には称名寺式土器を出土する遺構はない。この間隔は何によるのか不明である。

Ⅰ区の6基の土壙より出土した称名寺式土器は全て埋積土中位から上位に含まれていたものである。つまり，土壙が人為的に埋められたものでない限り，土壙の埋没がある程度進んだ段階で，人為的に廃棄されたものか自然に流入したものかいずれかである。前者の場合出土土器は同一時期のものの可能性が高い。後者の場合，埋積土中の遺物の出土層が重要になってこよう。遺物全てが同一層より出土し，他の上下の層からは出土していないとすれば，出土土器はおそらく同一時期である。1号～5号・7号土壙よりの出土土器は，それぞれ埋積土中の一つの層出土のものであった。更に4号土壙を除き，上下の層よりは出土していない。また1号及び2号土壙より出土した称名寺式土器は自然の営力によっては流入し得ない程大きな土器がある。4号土壙は，最も上位の層より土器片が出土したのであるが，調査前の工事による削平を考えれば，より下位の層に含まれていたと考えられる。かくして，Ⅰ区の6基の土壙より出土した称名寺土器は，それぞれ同一時期のものと見て良いと考える。これを念頭に置いて以下記述する。

(2)　北の内遺跡出土の称名寺式土器と伴出土器の分類

北の内遺跡の称名寺式土器とそれに伴出した土器群は大略次のようにまとめられる。但し，称名寺式土器の分類にあたっては出土量が少ないため把手は使用しなかった。

Ⅰ類；全面的に縄文の施されているもの

Ⅱ類；胴部に沈線によって文様を構成したもの。沈線内には縄文・列点文の施されるものの二種ある。（所謂称名寺式土器）

Ⅲ類；Ⅰ・Ⅱ類は深鉢形と考えられるが，その他の器形のもの。
以上のうちⅡ類が数量的に多い。

Ⅰ類は，口唇部直下に無文帯を持ち，無文帯の区画には断面三角形の微隆起を廻らせるものである。図－38の１，２，８，９・図－40の７がこれにあたる。このうち図－38の１及び２の土器の文様は加曽利ＥⅥ式といわれる土器の文様である。Ⅲ類は，図－40の９のような浅鉢形土器，図－37の７の小形壺形土器である。このような文様を持つ浅鉢形土器は寡分にしてまだ知らない。小形・壺形土器は無文である。Ⅱ類とした称名寺式土器に更に次のように分類できる。

ⅡＡ類

沈線内に縄文の施される一群で，復原土器一個体を含む。Ⅰ区の土壙からのみの出土である。文様の構成の仕方から更に３つに分けられる。

ⅡＡ－１類（図－38の３～５・11，図－43の３）

いずれも平縁で口唇部直下を無文帯としている。沈線による区画は直線的に縦方向に構成されるもの。ⅡＡ－２類に比べて文様は単純なものである。

ⅡＡ－２類（図－37の１～３・５，図－40の１・３・５～６・８，図－42の５～６，図－43の２・４～６・８）

波状口縁を持つもの（図－40の６，図－43の２）と口唇に小突起のあるもの（図－40の５）と平縁のもの（図－37の１～２，図－40の８，図－42の５～６）の三種がある。文様は曲線的なもので，渦巻など作られるもの。ⅡＡ－１類に比べて文様は複雑になっている。図－45の５には刻みのある隆線が貼付けられている。

ⅡＢ類（図－38の６～７，図－39の２～３，図－43の１，図－52の１～２）

地文を無文とし，沈線による区画内に列点文を施したもの。Ⅰ区の２基の土壙（２号，７号）より破片が出土しているが，Ⅲ区の埋甕として使用された２個の深鉢形土器が目立つ。いずれも「Ｖ」字状或いは「Ｙ」字状の沈線による区画を持つものである。口縁部の形態は図－38の６を除きみな平縁である。

ⅡＣ類（図－52の３，図－54の１）

沈線のみによって文様区画され，縄文，列点文は施されないものである。Ⅳ区より検出された埋甕使用土器（図－54の２～６）もⅡＣ類に含められるだろう。

以上，北の内遺跡より出土した称名寺式土器とそれに伴出した土器についてⅠ～Ⅲ類に分類した。更にⅡ類称名寺式土器についてはＡ～Ｃの３種に細分したわけである。この他Ⅰ区の出土遺構不明の土器（図－45の３）はⅡＢ類に，Ⅴ区３号住居跡出土称名寺式土器

はⅡC類にそれぞれ含まれる。またⅠ区3号土壙出土土器（図－39の1）については後述するのでここでは省く。

分類作業中提起された二つの問題について箇条書的に記すと次の通りである。

1　Ⅰ区2号土壙出土土器について

図－38の1・2のような加曽利のEⅣ式といわれるものに近い文様をもつ土器と称名寺式土器の伴出をどのように考えるか。

2．Ⅰ区の土壙出土土器とⅢ・Ⅳ区埋甕に使用された土器の差異は何によるのか。

このうち1について，類似した資料を出土した例として埼玉県志久遺跡[5]を挙げることができる。志久遺跡8号住居跡からは，称名寺式の成形「法」によって成形され，加曽利EⅣ式の文様のみが施文されたとする深鉢形土器と称名寺式土器がともに出土している。8号住居跡の土器群は，加曽利EⅣ式の直後＝称名寺Ⅰ式期の土器群の構成を示すとされている。志久遺跡の8号住居跡出土の称名寺式土器の文様は，沈線による区画内に縄文が充填され区画は「J」字文またはカギ状のモチーフを持つものである。この点北の内遺跡Ⅰ区2号土壙出土の称名寺式土器の文様は異なっている。千葉県鉈切洞穴遺跡[6]出土土器中，第Ⅲ群縄文後期土器第Ⅰ類磨消縄文a系とされた文様が縦に構成される磨消縄文を持つ土器群の中に図－38の2のような文様の土器を見ることができる。しかし，図－38の4～6のような文様を持つ土器の類例は見つけることができなかった。いずれにしても，志久遺跡8号住居跡と同様，北の内遺跡Ⅰ区2号土壙出土称名寺式土器は，加曽利EⅣ式の文様を持つ深鉢形土器がともに出土していることにより，古いタイプのものであると考えられる。

2の問題については，沈線内に列点文，刺突文の施されるものや沈線内は無文のままのものは，沈線内に縄文が充填されるものよりは遅れて派生するものらしい。従ってⅢ・Ⅳ区の埋甕とⅠ区の土壙より出土した土器は，多少の時間差があるものと思う。これは，本地方における称名寺式土器の資料の増加を待って，細分のうえ判断しなければならない問題であり，今後の課題となるものである。

(3)　北の内遺跡の加曽利EⅣ式設定の可能性

加曽利EⅣ式は，加曽利EⅢ式から称名寺式への間にある文様上の断差故設定されたものである。しかしEⅣ式は，EⅢ式の中に包括されるものだという主張が提出[7]されるなど，まだ確定したものではない。栃木県においては加曽利式の末葉の土器について，海老原原氏[8]は次のように考えられている。

「大木96と大木10の一部とがEⅢにあたると考える。私はこれまで大木10＝称名寺と考えてきたが，福島方面の大木10を見るとEⅢに含められるべきものと称名寺に近似したものとがあるように感じられるので，便宜上，EⅢに含められる方を大木10古・称名寺に対比

される方を大木10新として考えてみた訳である。」そして,「大木10式の古い段階に該当する土器は当地方において文様や器形などその構成要素がまだ明らかになっていないといえる。」とされ，那須町脇沢遺跡・矢板市上長井遺跡の資料にその片鱗を見る程度とされている。一方大木10式の新しい段階については，「さらに把握が困難である。」とし，「この段階では称名寺式に移行するのが私の予想である。目下のところ稀薄な大木10式に対して称名寺式は堀の内式の先行形式として当地方にあっては明白に実在し，いくつかの様式をもつ土器群としてとらえられる。」とされる。そして最後に「大木10式の新しい段階の土器を摘出するために称名寺式の細分とセット関係の把握が必要になるであろう。」と述べられている。つまり，大木10式古をＥⅢ式に，同新を称名寺式に対比とされるのである。換言すれば，ＥⅢ式と称名寺式間のＥⅣ式の介在は考えてはいられないのである。最後に大木10式新の内容を明確にするため，称名寺式の細分の必要性を述べられている。

これに対し北の内遺跡の中で大木10式的な資料と考えられるのは，Ⅰ区出土遺構不明の土器（図－45の２）の１点のみである。調査として不手際ではあったが，この土器の出土遺構が不明であること，共伴資料がつかめなかったことは甚だ残念である。この土器は渦巻状の縄文区画帯を持つ点,福島県塩沢上原Ｂ遺跡[9]の４号住居跡の「29－７」の土器に類似する。本土器について調査者は大木10式の初頭とされている。海老原氏はこの土器を取り挙げて，文様，器形を併せて，「称名寺」的な印象を強く感じるとされている。[10]私にも大きく開く口縁の形（口唇は破損しているが),渦巻を主体とする文様に称名寺式に近い様相が感じられた。いずれにしても上記した通り北の内遺跡では大木10式的なものはこれ１点のみで，しかもこれと文様の類似する称名寺式土器はついに検出されなかった。

それよりもまず北の内遺跡では加曽利ＥⅣ式とされる土器に類似するものの出土例を挙げることが可能である。更に前記したように加曽利ＥⅣ式の文様を持った土器と称名寺式土器の伴出例があるのである。Ⅰ区２号土壙，が伴出例であり，Ⅴ区２号土壙出土土器（図－71，72),同区３号土壙出土土器などにその出土例を見ることができる。[11]しかしⅤ区２号土壙出土土器にはの中には，より古い要素を持つ土器も含まれている（図－72の２・３）。これらの土器について説明できなければならないとは思う。これは今後の問題として残しておきたいと思う。いずれにしても北の内遺跡において，加曽利ＥⅣ式とされる資料が指摘し得ることは，本地方におけるＥⅣ式の設定の可能性を示唆するものであろう。そして，Ⅰ区２号土壙，同６号土壙出土土器群は称名寺式直前にＥⅣ式のあったことを意味していよう。次に称名寺式の古い段階の文様とのつながりを考えてはじめてＥⅣ式存在の確実性が高まるのであるが，北の内遺跡ではそれについて説明し得る資料はない。またＥⅢ式からＥⅣ式を分けるに明確な根拠を持ってなければならない。これも今後の課題としていきたい。ここでは本県における加曽利ＥⅣ式存在の可能性を呈示するにとどめる。

(4) 称名寺式土器細分の可能性

北の内遺跡の称名寺式土器は、先述のように大きくA，B，Cの3類に分けることができる。更にA類は沈線による区画が直線的に縦方向に構成されるもの（IIA－1類）、区画は曲線的なもので渦巻など作られるもの（IIA－2類）に分けられる。文様は一見すると、前者は単純なもの、後者は複雑なものと感じられる。IIA－1類には，加曽利EⅣ式の文様をもつ土器が伴出することから，称名寺式の中でも古いタイプのものと考えた。IIA－2類にはそのような土器の伴出はない。よって後出的なものとはできないだろうか。

より複雑な文様を持つ称名寺式土器は，今村氏の称名寺式の細分[11]では称名寺I式C類とされ，称名寺I式B類から変化したものとされる。称名寺I式b類はEⅣ式の伝統を強く有しているとし，渦巻文などが多用されるものであるとする。北の内遺跡2号土壙出土称名寺式土器はいずれも破片であり文様の全部は知れないが，称名寺I式B類とはかなり異なった文様をもつものと思う。これは地域的な特性に由来するものだろうか。いずれにしても，北の内遺跡IIA類のうち1類は2類に先行し得るものであるだろう。

IIA類とIIB類及びIIC類の関係については，前述のように確実性に乏しいが，沈線による区画内に列点文を有するものは，縄文が充填されるものより遅れて出現するらしいことから，IIA類はIIB類及びIIC類より先行する可能性が指摘できる。I区3号土壙出土土器は「三十稲場式土器について」の項で述べるが，この可能性を高めるものとして有効である。

かくして，北の内遺跡の称名寺式土器はA，B，Cの三種に細分される可能性を指摘し得る。

次に本県既報告の称名寺式資料について簡単に見てみる。

IIA－1類に似るもの

矢板市上長井遺跡[12]の6，芳賀町弁天池遺跡の11[13]などに見られる。

IIA－2類に似るもの

氏家町ハットヤ遺跡出[14]土土器，今市市八日市遺跡出[15]土土器，弁天池遺跡の10，12，13などに見られる。

IIB類に似るもの

ハットヤ遺跡出土土器，藤岡町後藤遺跡[16]の41，42，弁天池遺跡の7～9などに見られる。

IIC類に似るもの

後藤遺跡の43，同遺跡小竪穴より出土した完形土器などに見られる。このうち後者には，器形的，文様的に堀之内式に近い様子を見て取ることができる。

以上，北の内遺跡の称名寺式土器を検討してきたわけであるが，未だ充分なものではない。今後とも資料の増加を待つとともに，より詳細な観点を用意した上，再検討したいと

思う。

註

(1)米田明訓，「曽利式土器編年の基礎的把握」1978，1長野県考古学会誌30　15頁
(2)註(1)　13～14頁
(3)海老原郁雄；「湯坂遺跡」1979，3　大田原市教育委員会　53～63頁
(4)註(3)
(5)城近憲一　笹森健一他；「志久遺跡」　1976　埼玉県遺跡調査会　84～93頁
(6)金子浩昌　和田哲　玉口時雄他；「鉈切洞穴遺跡」1958　千葉県教育委員会52～53頁
(7)堀越正行；「加曽利E III式土器研究史」　1971，信濃24－2，3，4
(8)海老原郁雄；「栃木県の加曽利E III式の大別と細分」1975，きざし第4号　11頁
(9)福島県教委・日本道路公団；「6.，上原B遺跡」1972，東北縦貫自動車道文化財調査報告書第47集
(10)註(8)　5頁
(11)今村啓爾；「称名寺式土器の研究（土）」1977・7　考古学雑誌　第63巻第1号
(12)屋代方子「上長井遺跡」1971矢板市教育委員会
(13)宇都宮大学考古学研究会；「芳賀町弁天池遺跡」1970
(14)栃木県史編さん委員会「栃木県史資料編考古二」1979　268～269頁
(15)註(14)の資料編考古　323～328頁
(16)竹沢　謙；「後藤遺跡」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』1972，栃木県教育委員会

3. 三十稲場式土器について

(1) 出土遺構と出土状態

Ⅰ区3号土壙は単純な形態の土壙であった。(図－7) 確認した面[(1)]での平面形は径約1mの円形である。深さは約40cmをはかる。土壙内埋積土は上下二層に分けられる。二層はそれ程明瞭に分別されたものではない。両層ともロームの粒子やブロックを多く含み，色調の相違はそれ程大きなものではない。ただⅠ層にはローム粒などの他，炭化物を含んでおり，Ⅱ層に比してやゝ黒ずんで見えた程度の区別ができた。また埋積土と近辺のローム層との色別も明瞭にはできなかった。このような埋積土の状況から土壙の埋没の仕方を判断すれば次の二点になる。ひとつにⅠ，Ⅱ層の区別が困難であることから，両層の埋没にはそれ程の時間差が無いといえよう。ひとつに近辺のローム層との色別が困難なことから，土壙が堀られ埋まるまでの時間が短いものであったことを示しているだろう。この二点から，土壙内埋積土が人為的に埋められたものとすることができるのではなかろうか。

土壙内より検出された遺物は土器片のみである。それらは全てⅠ層上位に含まれていた。Ⅰ層上位とは，土壙の開口部位に近い埋積土である。開口部位とはいえ，土壙の開口部は我々の確認し得た面でのものであった。確認した面はローム層中まで削平された段階のものであった。土壙本来の開口部は更に上にある。よって土器は，土壙本来の開口部位より下の埋積土中に包含されていたであろう。

出土土器は二種類ある。ひとつは三十稲場式類似のもの，ひとつは称名寺式土器である。いずれのものも破片で出土した。三十稲場類似の土器は破片で23片，称名寺式土器は2片である。このうち前者は土壙内にバラバラになって出土したが，全て接合できるものである。接合した結果に図の通り（図－39の1）である。底部は欠損しているが，全体の器形が推測できる程大きなものであった。いかにバラバラに出土したとしても，破片全てが接合出来たことは，単に流れ込んだことを示してはいないだろう。つまりこの土器は，どのような状況でかは不明だが，人為的に一括廃棄されたものと考える。称名寺式土器片も，出土した埋積土中の位置はほゞ同じである。これも三十稲場類似の土器と同時に廃棄されたものと思う。

以上三点より引出せることは次の通りである。土壙は堀られた後，短時間のうちに人為的埋め戻された。土器は，土壙埋戻しの最後的な段階，或いは土壙がある程度埋められた段階に土壙内に含められた。よって土壙が用をなした時期は土器の示す時期とほゞ同じと考えられる。更に出土する二種類の土器は出土位置を同じくすることから互いに共伴し得ると考える。しかし，土器がなぜわざわざ破片とちれて廃棄されたのか，破片で廃棄され

たとすれば何のためにか，これら二点は今後の課題である。

(2) 三十稲場式土器について。

三十稲場式土器は知っての通り，新潟県において縄文時代初頭に位置づけられている土器群である。その大きな特徴は甕形土器胴部に施された各種の刺突文とそれに見合う蓋形土器にある。多少の異論はあるが，新旧二段階の変遷が考えられている。古い段階には称名寺式的な文様を特つものを含み，新段階には堀之内Ⅰ式的な要素を持つとされる。新段階は南三十稲場式と呼称されている。[2] 北の内遺跡出土のものはこのうち古い段階のものにより類似性が高い。

三十稲場式と南三十稲場式は甕形土器の形態に関する限り大きな差異はないらしい。[3] 両者の違いは，刺突文の変化，口縁部文様の変化にある。後者の段階に入る刺突文はきわめて微少になり，前者に特徴的であった花弁状の大きな盛り上がりや突瘤のあるものは全くなくなるとされる。[4] 口縁部の文様は，前者に特徴的な単純な橋状の把手から，堀之内Ⅰ式によく使用される「8の字状」或いは円形の貼付けなどが目につくようになるらしい。[5]

新潟県見附市耳取遺跡[6]では，出土土器に旋された刺突文を刺突具・刺突方法などから4種のものに分類された。これらのうちB文様「花弁状刺突文」としたものが，北の内遺跡出土土器の刺突文にあたる。B文様について上記文献より引用すれば次の通りである。「半載またはそれ以上に分割された竹管を工具とし，約20～30度の角度で工具を突刺し，盛り上がった粘土を指で押圧している。」指で押圧した場合，器面に指文が残るのはあり得ることである。北の内遺跡出土資料の器面の粘土盛上がり部分に指文を確認することができた。B文様以外に確認された刺突文についてはここでは省略する。

以上，刺突を有する甕形土器について記してきたわけであるが，これのみで三十稲場式土器全体が説明できるのではない。この他に同巧の甕形土器でありながらも刺突文の変わりに縄文或いは撚糸文を持つもの，耳取遺跡B群第6類土器[7]とされるものがある。これらの土器と蓋形土器をもって三十稲場式を表わす基本的なセットと考えることができるのではないだろうか。

(3) 北の内遺跡出土資料について，

三十稲場式甕形土器[8]は形態的に二種把握されている。しかし，多くは口径に比べて器高の低い偏平な器形である。北の内遺跡出土資料（図－39）の器形は円筒形に近いものである。また三十稲場式甕形土器頸部には一条の隆帯がめぐらされ，ほとんどの場合隆帯上には連点文が施される。北の内遺跡のものは単純な隆帯のままである。胴部に旋された刺突文は前述の通り「花弁状刺突文」と考えられる。また口縁部と無文につくり，橋状の把手

をつけるなどは三十稲場式に共通する。つまり。北の内遺跡出土のものは，文様的には三十稲場式と同様であるが，器形的にはかなり変形しているものである。これは何に由来するものか不明である。そこで注目されるものは，先述の三十稲場式の粗製土器[9]である。本遺跡のものは円筒形に近く，器形はその粗製土器に似る。この器形に橋状の把手とつけ，胴部に刺突文を旋したものが本土器であったと考える。文様的には前述の通り古い段階に含まれる。

三十稲場式土器は地域性の強い土器群である。北陸地方一帯の後期初頭は独立巻を形成したといえる程である。このような地域性の強い三十稲場式土器がなぜ本県にまで波及してきたのか，またそれはどのような系路を辿ってきたのか説明することはまだできない。ただ三十稲場式土器が現われ，当地に来るまでは多少の時間を考えることが必要である。本土器は三十稲場式の古い要素を持つ。これが当地に至るまでの時間を考え，伴出した称名寺式土器（図－39の２，３）は該式のなかでもより新しい段階とすることができよう。今のところは，三十稲場式土器については，以上のことが記述できることである。以後資料の増加をまって，波及由来，系路などについて考えたい。

註

(1) 確認した面とは，本調査が以前の工事によりローム上面まで削平された段階のものであることにより，ローム上面のことである。

(2) 『根立遺跡』（長岡市科学博物館昭和50年）34～35頁

(3) 甕形土器の器形は，口径に比して器高の低いずんぐりしたもの，器高の高いものがある。

(4) 註(2)前掲書，34頁記載のＪ群土器

また刺突文の変化の他，文様の変化を次のように把えている。

「Ｊ群そしたものは，（略）特徴ある隆起線や縦回転の撚糸文，無節縄文の大木的要素，称名寺式的な要素，より中期的な要素に変わって，めがね文や縁帯的な口縁に集約した文様構成をなし，磨消縄文や沈線条線文，曲・直線的文様構成をなす土器すなわち，堀之内工式影響の強いものが伴ってくる。」

(5) 註(2)前掲書，図版第９図に良好な資料が載せられている。

(6)『耳取遺跡』（見附市教育委員会，昭和46年３月），10～12頁

(7) 註(6)前掲書ではＢ群第６類について次のとおり記載される。

「口縁が直立し円筒形を呈する土器で，口頸部に一条の隆起線を持ち，それを境に斜縄文，撚糸文を施した土器。」

(8) 註(3)

(9) 粗製と精製の区別は問題があるが，ここでは註(7)の土器を粗製土器としておく。

4. 歴史時代土器について

Ⅳ区歴史時代住居跡及び同土壙より出土した実測の可能な土器は38個体分であった。（図－56～58）　このうち住居跡出土のものは２３個体分，土壙出土のものは１５個体分である。器形は，羽釜・甕・高台付皿・坏[1]（高台付のものも含む。）の四種ある。これらのうち最も多いものは坏形土器であり，２８個体分を数える。坏形土器２８個体分のうち，住居跡より出土したものは１７個体分と住居跡の大きさからして多すぎる数である。対して甕形土器，羽釜など煮炊きに関係するものは少ない。このことは住居跡が，一種の作業小屋的な性格をもっていたことを意味しまいか。更に近接の土壙が一種の窯跡とみられることから，時期的に住居跡と同時期と考えられるとすれば，住居跡は土壙と大いに関係のあるものとみることができよう。

坏形土器は高台付のものとそうでないものの二種類ある。更にそれらは大きさ，器面の調整などからいくつかの種類に分けられる。以下はこれら坏形土器をはじめ各器形の特徴を記しを時期的な位置について考察するものである。なお住居跡出土土器はH，土壙出土土器はDとする。

坏形土器（図－５６～５８）

高台付のものとそうでないものの二種類る。どちらも，胎土中に多量の砂粒を含み，焼成の程度は非常に良いものである。

１類，（Ｈ８～１７，Ｄ４）

いずれも浅いもので，口辺部のやゝ外反する。ゆがみがひどく，雑な作りである。体部外面中位に一稜作るのが特徴的である。内外面は「ナデ」られており，光沢を持つ。底部には糸切り痕がそのまま残されていることが多い。色調は灰褐色または赤褐色。胎土中に長石などの白色の砂粒を多量に含んでいる。焼成はかなり良い。

２類，（Ｈ７，Ｄ５，８，９）

１類に比べてやゝ大形のものであり，底部よりの立上がりは直線的な外反をみせる。内外面には明瞭なロクロの痕を残し，凹凸が目立つ。器体のゆがみはない。「ナデ」「削り」などの器面の調整は全く施されない。底部には糸切り痕をそのまま残す。色調は赤褐色。胎土に長石などの白色の砂粒を多く含む。焼成はかなり良い。

３類，（H18，19，Ｄ１～３）

１，２類に比べて小形のものを３類とした。底部よりの立ち上がりは内湾気味である。いずれも内外面にロクロ痕を明瞭に残している。内外面ともに特別な調整は施されない。底部には糸切り痕をそのまま残す。色調は灰褐色又は淡褐色である。口径はいずれも１０ｃｍ

前後，高さは2.5ｃｍ前後と器形は定形化している。底径は５ｃｍから６ｃｍとひらきはあるが，Ｈ１９，Ｄ３のように底部の突出しているものは概して小さい。これら底部に突出のあるものは，中世の「カワラケ」につながっていく土器とみることができるのではないだろうか。

高台付坏形土器

１類，（Ｈ２０，２３）

坏形土君２類に高台を付されたもの。高台は比較的大きく，外へ強くふんばるものである。体部はやゝ内湾気味に立ち上がり，口唇部にいたってかすかに外反する。内外面にはロクロ痕が明瞭に残るのみで，調整は全く施されない。胎土には長石などの白色の砂粒を多量に含み，色調は赤褐色である。焼成はかなり良好である。

２類，（Ｈ２１，２２・Ｄ６，７，13，14）

体部が内湾気味に立ち上がり，小さな高台の付けられもの，ヘラ磨きなどの施されるものを２類とした。２類には内黒のものとそうではないものの二種ある。Ｈ２１，２２，Ｄ１４は前者にあたり，外面にロクロ痕が残る。Ｄ１３は後者にあたり，内外面（高台部にも）には微細なヘラ磨がまんべんなく施されている。Ｄ６，７はやゝ大形のものであるが後者に含まれるものと思う。Ｄ１４は高台のすぐ上，外面にヘラ先による文様が施されている。胎土に砂粒を多量に含み，色調は淡赤褐色から赤褐色を呈する。

高台付皿形土器（Ｄ１０～１２）

いずれも小形のもので，皿部は直線的に短く開き，高台は非常に小さいものである。三個とも胎土に砂粒を多量に含み，色調は赤褐色に近い。焼成は非常に良好であり，１２にはひび割れがある。調整の仕方は三個三様である。１０は調整は特別施されず，外面（皿部）のヘラ先による刺突文を特徴とする。ヘラ先による文様はＤ１４と同様である。１１は皿部内外面に微細なヘラ磨きが施される。１２は皿部内外面及び高台部内外面にヘラ磨きが施される。皿部の底部には糸切り痕が残され，高台は貼付高台である。

甕形土器（Ｈ２～６）

いずれも口縁部の破片である。２～５の大形のものと６の小形のものの二種ある。このうち６には，内面にロクロ痕のような凹凸を見ることができる。大形のものは，２，３のような口縁部が短く外反し，口唇部の角ばるもの，４，５のように口縁部はゆるく外反し口唇部は丸味を帯びるものの二つある。このうち２，３の口唇部の形態には，本県において８世紀後葉から９世紀前半に盛行する「下野型」の甕形土器と呼称される土器のそれに近い要素をみることができる。五個体とも胎土に多量の砂粒を含み，焼成はかなり良い。

色調はいずれも赤褐色に近い。

羽　　釜　（H１）

住居跡より１個体分のみ検出。口縁部の破片。内湾気味の口縁部をもつものである。口唇部から約２ｃｍに一巡りツバが貼付されている。赤褐色に近い色調で，胎土に多量の砂粒を含む。

以上，北の内遺跡出土の歴史時代土器について器形毎にそれぞれの特徴を列記したわけである。これらの諸特徴のうち，全体の時期を考える上で有効であると考えられるものを箇条書的に述べると次の通りである。

１，坏形土器・高台付坏形土器のほとんどのものが赤褐色に近い色調で焼きしまりが良いため，土師器・須恵器の区別がつき難い。

２，坏形土器１類は雑なつくりで，ゆがんだ形である。

３，坏形土器２類・高台付坏形土器１類は，内外面にロクロ痕が明瞭で，何等調整は加えられない。

４，坏形土器３類の存在。

５，羽釜の存在。

６，甕形土器の一部に，いわゆる下野型の甕形土器の名残りを見ることができる。

以下は，これら６点をもとにもとに時期的な位置づけをする。

第１・３点についてみる場合，まず脳裏をかすめるのは，「須恵系土器」或いは「土師質須恵」と呼称されるものの存在である。別にこれらを直接観察したわけでないので不明朗であるが，その諸特徴についてみるとき，類似性が高いのが北の内遺跡出土の土器なのである。「須恵系土器」とは多賀城周辺の調査結果[(２)]から指摘されたものである。須恵器の系統を引き，糸切りによりロクロから切り離され，再調整の全くないもの。酸化炎で焼成され，土師器よりも硬度の高いものとされる。先の1・３点の特徴を持つ本遺跡出土坏形土器と，この「須恵系土器」とはかなりの類似性があると考えられる。「須恵系土器」の年代は１１世紀から１２世紀末頃までとされる。

羽釜は，本遺跡では１個体分検出された。栃木県内では他に１個，矢板市後岡遺跡[(３)]で検出されている以外全く知見にない。後岡遺跡では住居跡が６軒発掘され，出土遺物からいずれも国分期という時期を与えられている。後岡遺跡の羽釜と北の内遺跡出土の羽釜とは「ツバ」の形態に相違がある。

埼玉県田中前遺跡[(４)]では，出土土器について，第Ⅰ～Ⅶ段階の変遷過程を想定され，そのうち第Ⅲ段階を羽釜伴出の下限期と考えられている。第Ⅲ段階は１０世紀前半に位置けられた。

第４点のような小形の坏形土器については，下野国府跡[(５)]ＳＸ－００６～００８，ＳＸ－

０１１の出土土器群に類例がある。そして，北の内遺跡出土土器群は次の諸点によりＳＸ－００６～００８の土器群とより共通性が高い。ひとつに小形坏形土器の存在。ふたつに，ＳＸ－００６，００８出土の高台付坏形土器１１～１３ように高い高台，外湾気味に開く高台をもつものの存在。（北の内遺跡ではＨ２０，２３）みっつに，ＳＸ－００６出土の坏形土器７のように底部から内湾気味に立ち上がり口縁部で外反するもの存在。(北の内遺跡では坏形土器１類)

下野国府跡[6]では検出遺構をＡ～Ｃの三期に大別されている。ＳＸ－００６～００８はＢ期又はそれ以降とされたＳＸ－０１１と土器群について一部共通性がみられるとしている。時期的には，大略的にＡ期の土器群を１０世紀段階に位置づけられた。従ってＳＸ－００６～００８の土器群は，Ｂ期又はそれ以降とされるのであるからそれより後出すると考えられるのである。これらについては今後の検討に待つべき内容が多いとされた。

第６点の甕形在器はＨ２，３をいう。勿論これは，厳密にいえば，いわゆる下野型と呼称される甕形土器とは，口縁部の形態も調整の方法もかなり異っている。ただ短く外反する口縁部をもつこと，Ｈ２の口唇部に短い立ち上がりを認めることができることなど,「下野型」の甕形土器の名残りを見ることはできないかと考えたのである。Ｈ４，６の甕形土器について比較し得る事例は寡聞にしてまだ知らない。Ｈ６のロクロ痕を列す小形の甕形土器は埼玉県田中前遺跡の第Ⅳ段階[7]から見ることができる。第Ⅳ段階は１０世紀中頃に位置づけられる。

以上から引き出される結論は，北の内遺跡の歴史時代土器群は１０世紀代に位置づけられるということである。更に本県における９世紀代の土器群[8]と比べて見た場合，次の諸点で土器の構成に懸隔を感じる。北の内遺跡の土器—とくに坏形土器は，胎土・焼きしまり具合など須恵器と土師器の区別がつき難いこと。小形坏形土器の存在。坏形土器の底部の糸切り痕などからである。但し，前述のように甕形土器の一部に「下野型」の名残りが認められるとすれば，土器群に懸隔があるとはいえ案外短い時間のうちに変遷したものかもしれない。これに対し，「須恵系土器」を比較資料として考えれば，11世紀代の可能性も出てくるのである。これらについては，今後検討すべき課題である。本項では一応10世紀代に位置づけたい。

これら北の内遺跡歴史時代土器と比較し得る栃木県内出土事例は未だ少ない。前述の下野国府跡の資料を除けば，壬生町銭渕遺跡[9]検出の５軒の住居跡出土土器が挙げられるくらいである。壬生銭渕遺跡出土土器群は，小形坏形土器，高い高台を持つ坏形土器，坏形土器は回転糸切り離しのままであることなどに北の内遺跡出土土器との類似性を見ることができる。壬生銭渕遺跡の５軒の住居跡はおそらく１０世紀段階に位置づけられるであろう。

（１）本項において坏形土器としたものの中には，埦形土器とした方が適当なものもある。しかし，坏と埦の区別は困難であると思う。ここでは羽釜以下三種類以外を全て坏形土器とし

て扱うこととする。

（2）　桑原滋郎「須恵系土器について」,『東北考古学の諸問題』，東北考古学会編昭和51年

（3）　山ノ井清人他「後岡遺跡」，『東北新幹線埋蔵文化財調査報告書―その２―』，栃木県教育委員会　昭和５０年　７４頁

（4）　市川　修他「田中前遺跡」，埼玉県遺跡調査会，昭和５２年　６０～６２頁

（5）　大金宣亮，田熊清彦他「下野国府跡Ⅰ」栃木県教育委員会，昭和５４年　５１～５３頁

（6）　註５　５９～６３頁

（7）　註４前掲書

（8）　橋本澄朗，川原田典，梁木　誠,「薬師寺南遺跡（本文）」栃木県教育委員会　昭和５４年　１８０～２０９頁

（9）　橋本澄朗，中山　晋,「壬生銭渕遺跡」栃木県教育委員会　昭和５３年

５７頁Ⅴ結語（２）において，５軒の住居跡は９世紀後半の所産とされているが北の内遺跡出土土器について御教示を願った際，銭渕遺跡出土土器は１０世紀代まで下る可能性のあることを示された。

V まとめ

北の内遺跡の調査結果は以上の通りである。最後に調査の成果をまとめるとともに，今後の課題を記しておきたい。

(1)加曽利E 1式後半期の住居跡はV区より4 軒検出された。出土土器の内容から1号，2号，4号，5号の順に新しくなる。2号住居跡より曽利式系統の土器が2個検出されたが，純粋な曽利式土器ではない。加曽利E 1式後半期は，南関東の加曽利E Iの文化が全関東までも席捲するような勢いを持つ時期という。曽利式系統の土器はこの勢いに乗り，関東的な変容を受けて当地に至ったものであろう。

(2)称名寺式土器は，大略3種類に分類できた。更に各類の伴出遺物から北の内遺跡出土称名寺式土器の紺分の可能性が呈示できる。今後は本県における該式土器の資料を蒐集し，文様の分類などから再検討してみたい。

(3)三十稲場式土器は，新潟県の後期初頭に位置づけられる土器型式である。新旧二段階の変遷が確認されているが，北の内遺跡のものは古い段階に類似する。伴出した称名寺式土器は三十稲場式が当地に至るまでの時間を考えて後出的なものとすることができる。

(4)古墳時代の住店跡は3軒検出されたが，出土遺物から判断して3軒とも時期差がある。I区1号住居跡は五領式期，同2号住居跡は和泉式期末，II区古墳時代住居跡は鬼高I式期の所産と考えている。

(5)歴史時代住居跡，同土壙は出土遺物より判断して10世紀以降のものと考えている。本県においては，この段階に位置づけられるものは未だ類例に乏しい。今後更に検討すべきものである。

(6)北の内遺跡では加曽利E III式期から堀之内式期にかけてのものと考えられる土壙を総数82基検出することができた。これら土壙は整った形を持つものが少なかったこと，出土土器に骨片を内蔵していたものがあったこと，打製石斧が埋葬に副えられたような状態で出土した土壙のあったことなどから墓壙的な性格の強いものであると考える。更に埋葬施設とされる称名寺式期の屋外埋甕が11基検出された。土壙も多くは称名寺式期のものと考えられる。これも土壙が墓壙的な性格が強いとする根拠になろう。

図　目　次

図—1　北の内遺跡周辺の遺跡 …… 78
図—2　北の内遺跡周辺図 …… 79
図—3　調査区域図 …… 80
図—4　I区1号土壙 …… 83
図—5　I区2号土壙 …… 83
図—6　I区4号，5号土壙 …… 83
図—7　I区3号土壙 …… 84
図—8　I区6号土壙 …… 84
図—9　I区7号土壙 …… 84
図—10　I区8号土壙 …… 84
図—11　I区9号土壙 …… 85
図—12　I区　炉穴 …… 85
図—13　I区1号住居跡 …… 86
図—14　I区2号住居跡 …… 86
図—15　I区2号住居跡内土壙 …… 87
図—16　II区1号土壙 …… 87
図—17　II区2号土壙 …… 88
図—18　II区3号土壙 …… 88
図—19　II区2号土壙そば埋甕 …… 88
図—20　II区古墳時代住居跡 …… 89
図—21　III区1号埋甕 …… 90
図—22　IV区1号埋甕 …… 90
図—23　IV区4号埋甕 …… 90
図—24　IV区2号，3号埋甕 …… 91
図—25　IV区5号埋甕 …… 91
図—26　IV区6号埋甕 …… 91
図—27　IV区歴史時代住居跡 …… 92
図—28　IV区歴史時代土壙，5号埋甕 …… 93
図—29　V区1号，2号，3号住居跡 …… 94
図—30　V区4号住居跡 …… 95
図—31　V区5号住居跡 …… 96

図—32　V区2号住居跡石囲炉 …… 97
図—33　V区4号住居跡石囲炉 …… 97
図—34　V区1号屋外炉 …… 98
図—35　V区1号土壙 …… 98
図—36　V区2号土壙 …… 99
図—37　I区1号土壙出土土器 …… 103
図—38　I区2号土壙出土土器 …… 104
図—39　I区3号土壙出土土器 …… 105
図—40　I区4号土壙出土土器 …… 105
図—41　I区6号土壙出土土器 …… 106
図—42　I区6号，5号土壙出土土器 …… 106
図—43　I区7号土壙出土土器 …… 107
図—44　I区9号土壙内埋甕使用土器 …… 107
図—45　I区出土遺構不明の土器 …… 108
図—46　I区1号住居跡出土土器 …… 108
図—47　I区2号住居跡出土土器 …… 109
図—48　II区1号土壙出土土器 …… 109
図—49　II区2号土壙出土土器 …… 110
図—50　II区3号土壙出土土器 …… 110
図—51　II区古墳時代住居跡出土土器 …… 111
図—52　III区埋甕使用土器 …… 112
図—53　III区4号埋甕使用土器 …… 113
図—54　IV区埋甕使用土器 …… 114
図—55　IV区遺構に伴わない土器 …… 115
図—56　IV区歴史時代住居跡出土土器(1) …… 116
図—57　IV区歴史時代住居跡出土土器(2) …… 117
図—58　IV区歴史時代土壙出土土器 …… 118
図—59　V区1号住居跡出土土器 …… 119
図—60　V区2号住居跡出土土器(1) …… 120
図—61　V区2号住居跡出土土器(2) …… 121
図—62　V区3号住居跡出土土器(1) …… 122
図—63　V区3号住居跡出土土器(2) …… 122
図—64　V区3号住居跡出土土器(3) …… 123
図—65　V区4号住居跡出土土器 …… 124

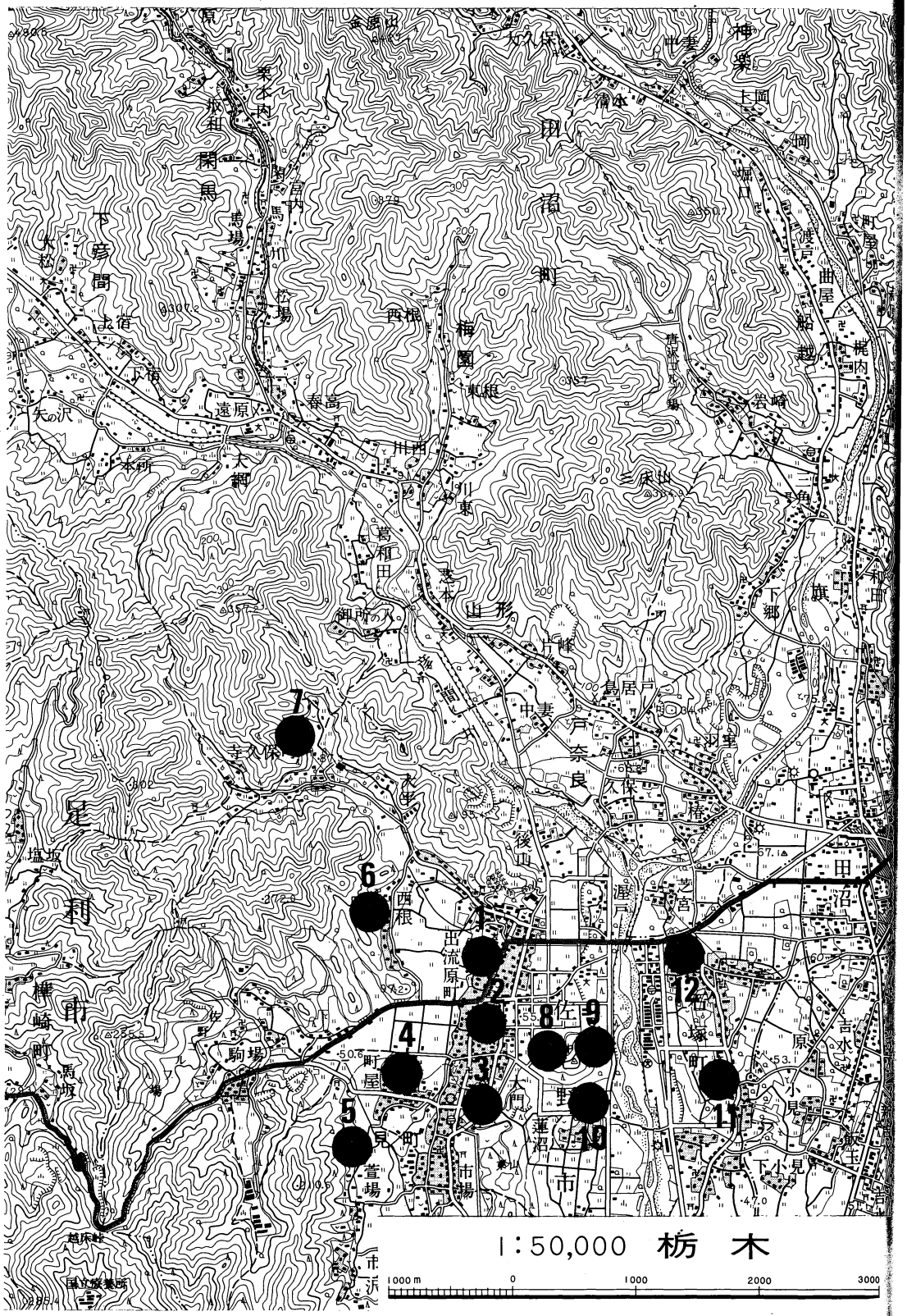
図—66　V区5号住居跡出土土器 …… 124
図—67　V区1号屋外炉使用土器・周辺出土土器(1) …… 125
図—68　V区2号屋外炉使用土器 …… 125
図—69　V区1号屋外炉周辺出土土器(2) …… 126
図—70　V区1号土壙出土土器 …… 127
図—71　V区2号土壙出土土器(1) …… 127
図—72　V区2号土壙出土土器(2) …… 128
図—73　V区3号土壙出土土器 …… 128
図—74　V区遺構に伴わない土器 …… 129
図—75　北の内遺跡出土石器(1) …… 129
図—76　北の内遺跡出土石器(2) …… 130
図—77　北の内遺跡出土石器(3) …… 131
図—78　北の内遺跡出土土製品 …… 132
図—79　I区炉穴，2号住居跡内土壙出土土器 …… 133

図 版 目 次

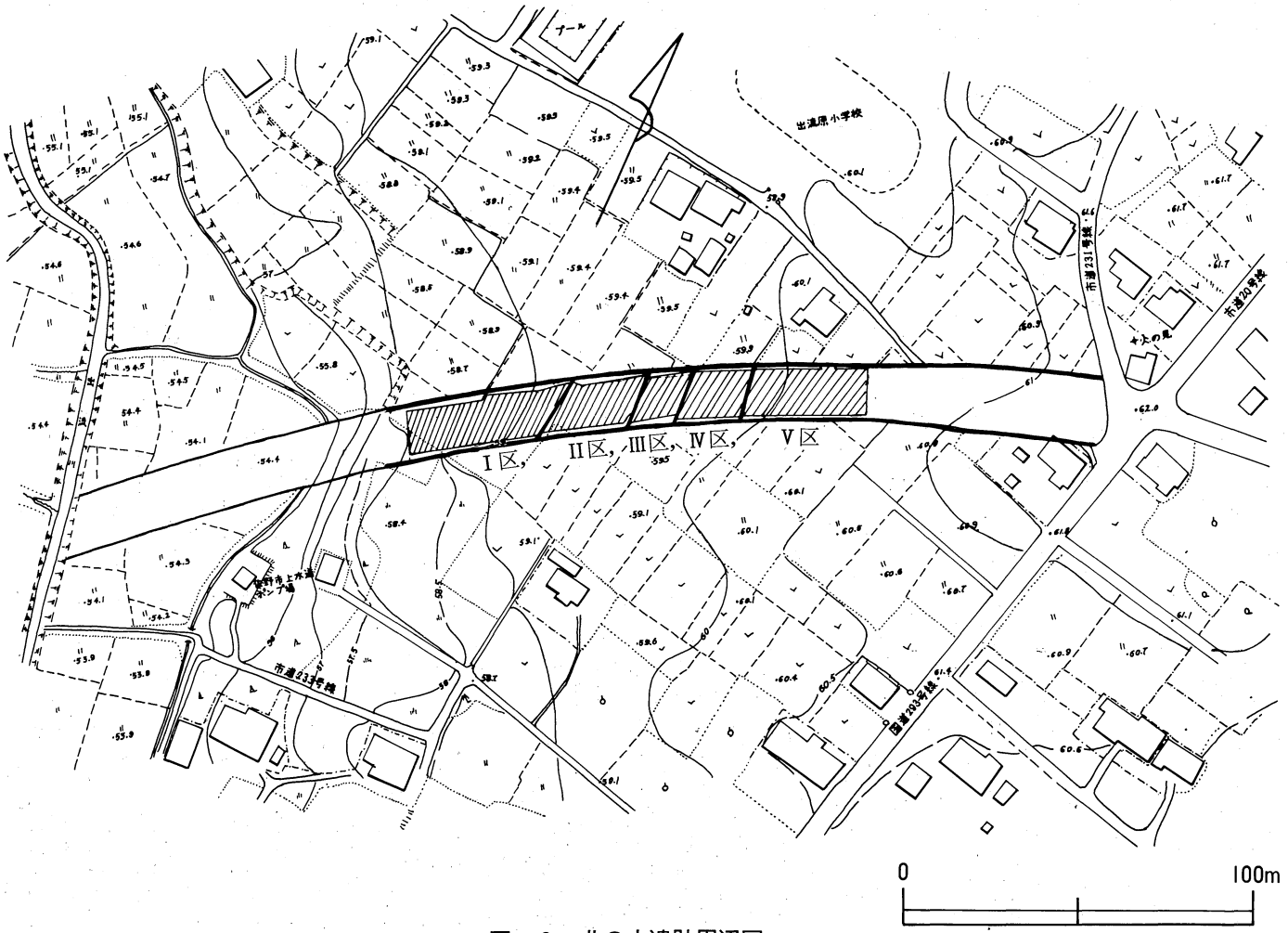
図版 1　(上) 遺跡遠景 …… 137
　　(下) Ⅰ区1号土壙遺物出土状態 …… 137
図版 2　(上) Ⅰ区2号土壙 …… 138
　　(下) Ⅰ区炉　穴 …… 138
図版 3　(上) Ⅰ区8号土壙 …… 139
　　(下) Ⅰ区2号住居跡 (南東より) …… 139
図版 4　(上) Ⅱ区1号土壙 …… 140
　　(下) Ⅱ区古墳時代住居跡 (調査中) …… 140
図版 5　(上) Ⅱ区古墳時代住居跡遺物出土状況 (鉢, 甕) …… 141
　　(下)　同　(坏) …… 141
図版 6　(上) Ⅲ区1号埋甕 …… 142
　　(下) Ⅲ区2号埋甕 …… 142
図版 7　(上) Ⅲ区3号埋甕 …… 143
　　(下) Ⅲ区4号埋甕 …… 143
図版 8　(上) Ⅳ区1号埋甕 …… 144
　　(下) Ⅳ区2号・3号埋甕 …… 144
図版 9　(上) Ⅳ区1号埋甕断面 …… 145
　　(下) Ⅳ区5号埋甕 …… 145
図版10　(上) Ⅴ区5号住居跡 (遠方は左より3号・2号・1号住居跡) …… 146
　　(下) Ⅴ区1号住居跡・2号屋外炉 …… 146
図版11　(上) Ⅴ区2号住居跡 (南より) …… 147
　　(下) Ⅴ区2号住居跡石囲炉 …… 147
図版12　(上) Ⅴ区4号住居跡 …… 148
　　(下) Ⅴ区4号住居跡石囲炉 …… 148
図版13　(上) Ⅴ区5号住居跡 …… 149
　　(下) Ⅴ区2号土壙遺物出土状況 …… 149
図版14　(上) Ⅴ区1号屋外炉とその周辺 …… 150
　　(下) Ⅴ区1号屋外炉 …… 150
図版15　(上) Ⅱ区2号土壙そば埋甕 …… 151
　　(下) Ⅲ区土製品 (垂飾) 出土状況 …… 151
図版16　Ⅰ区1号土壙出土土器 …… 152

図版17　Ⅰ区2号土壙出土土器 …… 153
図版18　(上) Ⅰ区3号土壙出土土器 …… 154
　　(下) Ⅰ区4号土壙出土土器 …… 154
図版19　(上) Ⅰ区4号土壙出土土器 …… 155
　　(中) Ⅰ区6号土壙出土土器 …… 155
　　(下) Ⅰ区5号土壙出土土器 …… 155
図版20　Ⅰ区7号土壙出土土器 …… 156
図版21　(上) Ⅰ区9号土壙出土土器 …… 157
　　(下) Ⅰ区出土遺構不明の土器 …… 157
図版22　(上) Ⅰ区1号住居跡出土土器 …… 158
　　(下) Ⅰ区2号住居跡出土土器 …… 158
図版23　(上) Ⅱ区2号土壙出土土器 …… 159
　　(下) Ⅱ区3号土壙出土土器 …… 159
図版24　Ⅱ区古墳時代住居跡出土土器 …… 160
図版25　(上) Ⅲ区1号・2号・4号埋甕使用土器 …… 161
　　(下) Ⅲ区3号埋甕使用土器 …… 161
図版26　Ⅳ区埋甕使用土器 …… 162
図版27　Ⅳ区歴史時代住居跡出土土器(1) …… 163
図版28　　同　　(2) …… 164
図版29　Ⅳ区歴史時代土壙出土土器 …… 165
図版30　Ⅳ区遺構に伴わない土器 …… 166
図版31　Ⅴ区1号住居跡出土土器 …… 167
図版32　Ⅴ区2号住居跡出土土器(1) …… 168
図版33　(上) Ⅴ区2号住居跡出土土器(2) …… 169
　　(下) Ⅴ区3号住居跡出土土器(1) …… 169
図版34　Ⅴ区3号住居跡出土土器(2) …… 170
図版35　Ⅴ区3号住居跡出土土器(3) …… 171
図版36　(上) Ⅴ区4号住居跡出土土器 …… 172
　　(下) Ⅴ区5号住居跡出土土器 …… 172
図版37　(上) Ⅴ区1号屋外炉使用土器，周辺出土土器 …… 173
　　(中) Ⅴ区2号屋外炉使用土器 …… 173
　　(下) Ⅴ区1号土壙出土土器 …… 173
図版38　Ⅴ区2号土壙出土土器 …… 174
図版39　(上) Ⅴ区3号土壙出土土器 …… 175

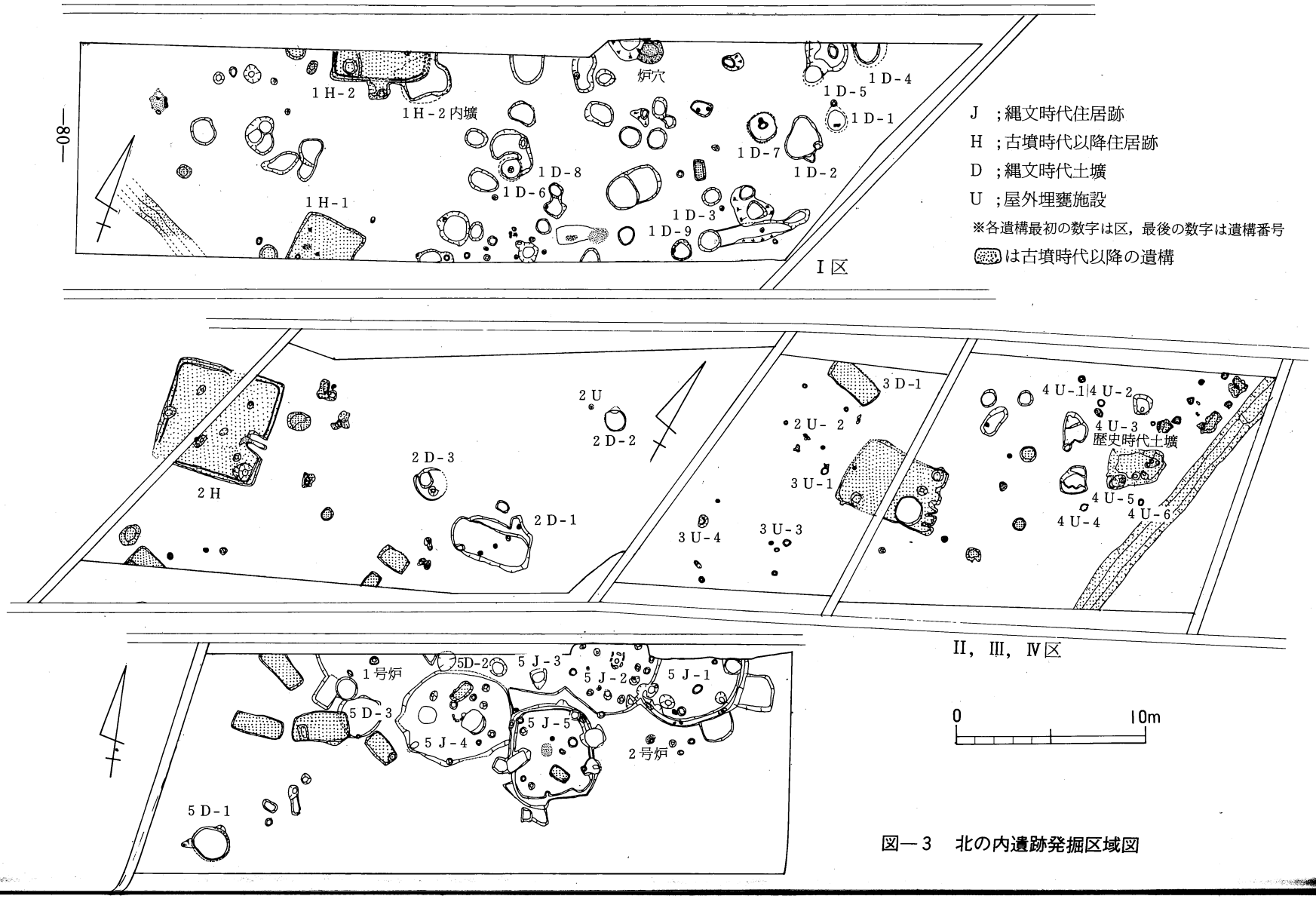
（下）Ⅴ区遺構に伴わない土器 …… 175
図版40　北の内遺跡出土石器(1) …… 176
図版41　　同　　(2) …… 177
図版42　　同　　(3) …… 178
図版43　　同　　(4) …… 179
図版44　北の内遺跡出土土製品 …… 180



図―1　周辺の遺跡



図—2　北の内遺跡周辺図

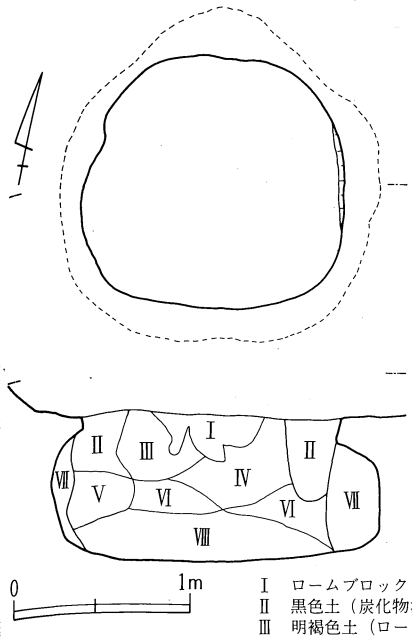


図—3　北の内遺跡発掘区域図

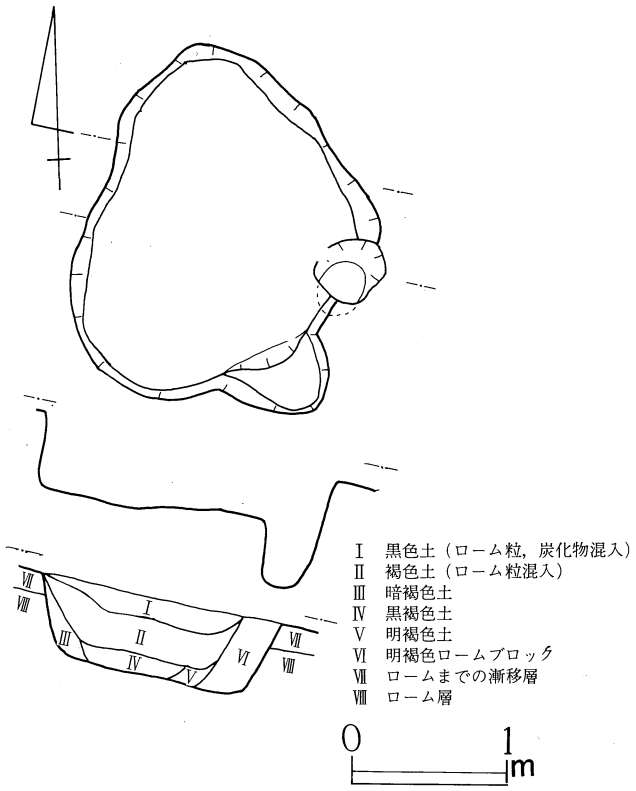
遺　構　実　測　図

各実測図の縮尺は次の通り

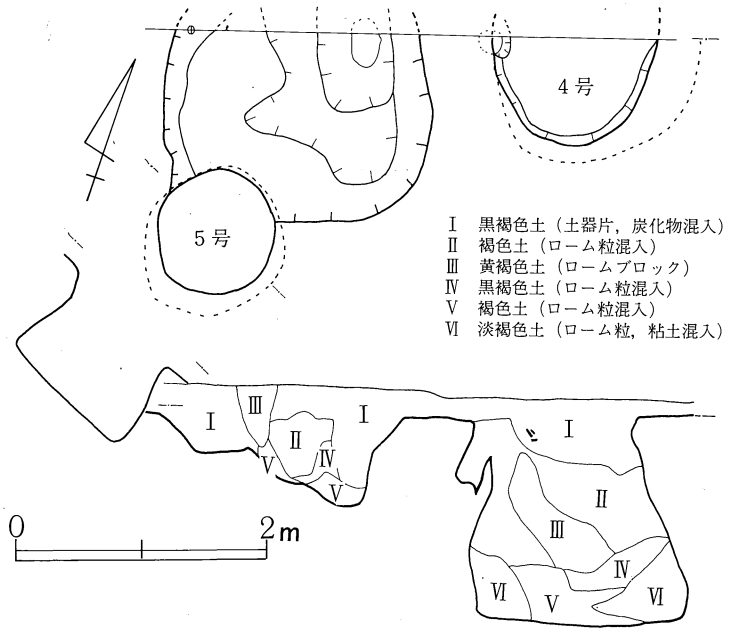
住居跡	60分の1
土　壙	40分の1
埋　甕	20分の1



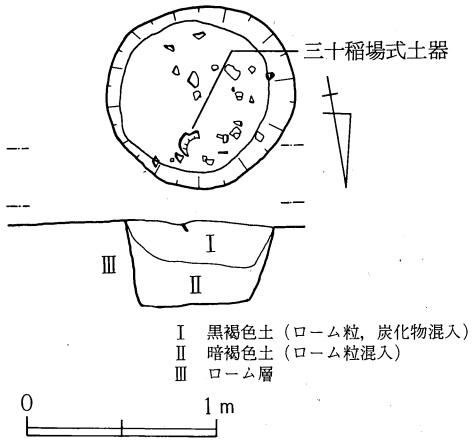
図―4　Ⅰ区1号土壙



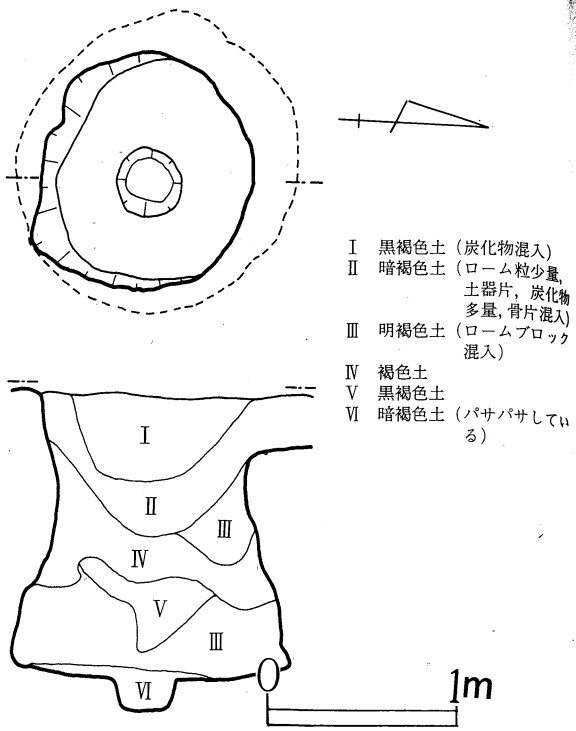
図―5　Ⅰ区2号土壙



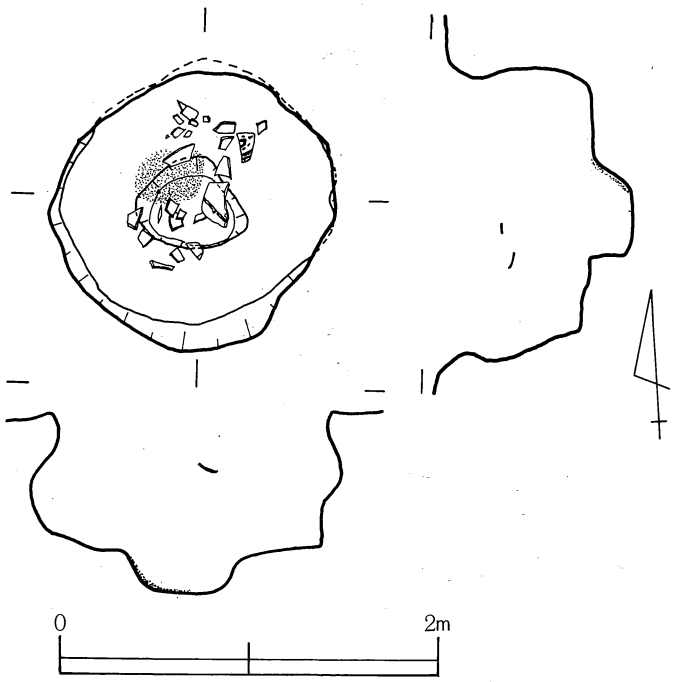
図―6　Ⅰ区4号，5号土壙



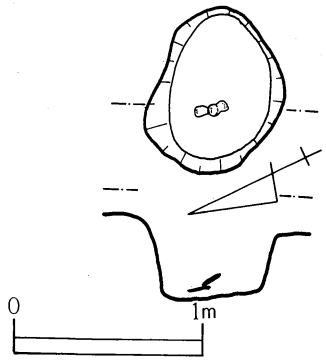
図―7　Ⅰ区3号土壙



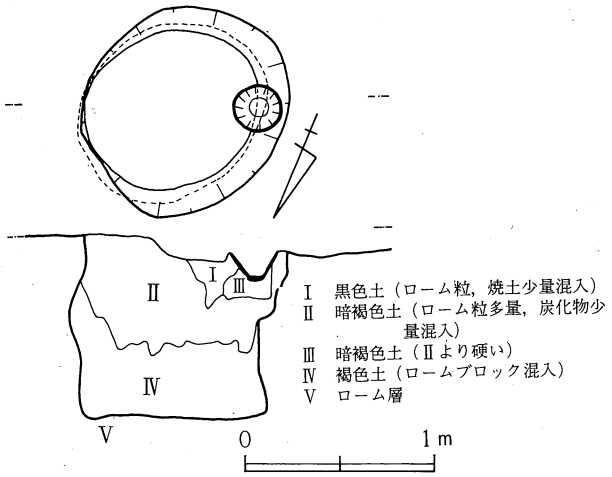
図―8　Ⅰ区6号土壙



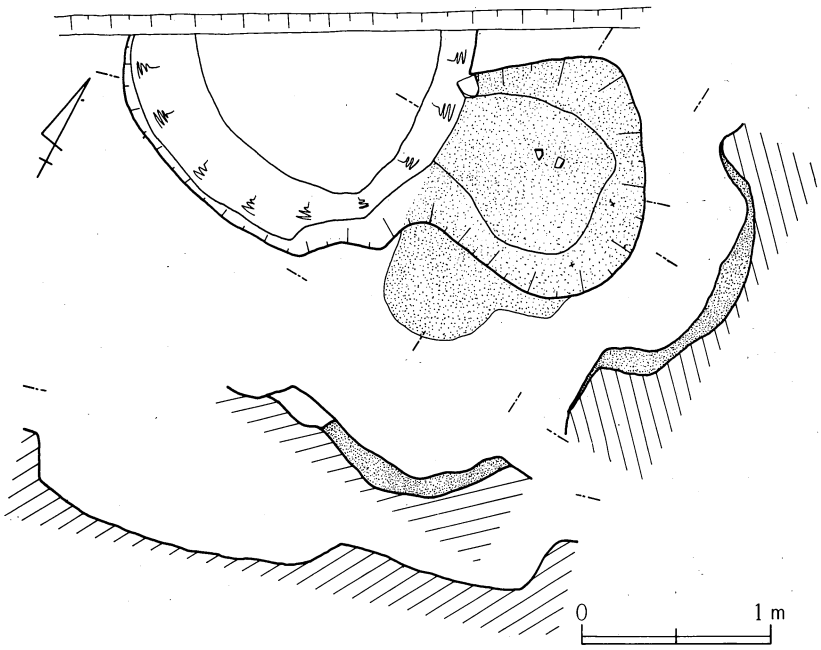
図―9　Ⅰ区7号土壙



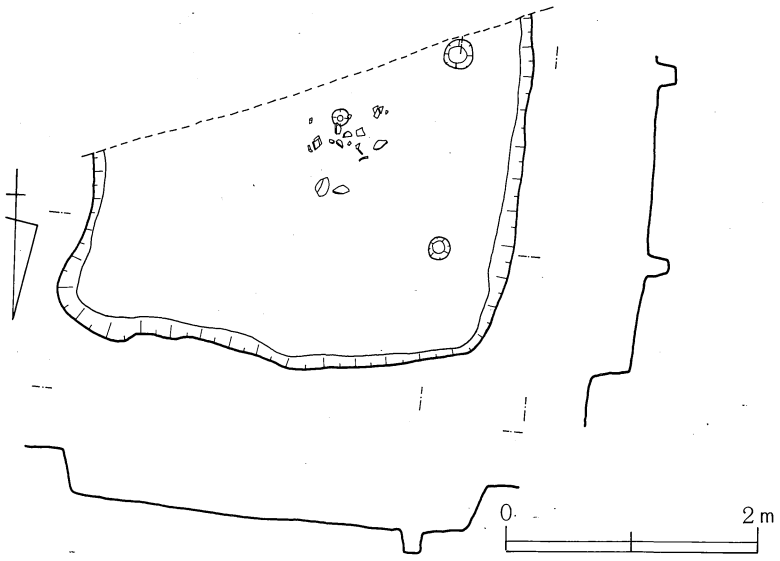
図―10　Ⅰ区8号土壙



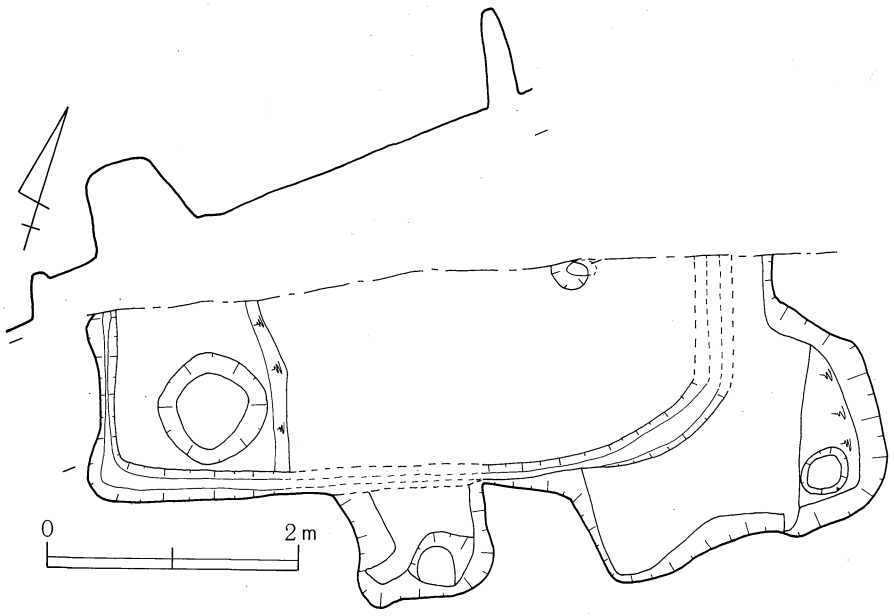
図—11　Ⅰ区9号土壙



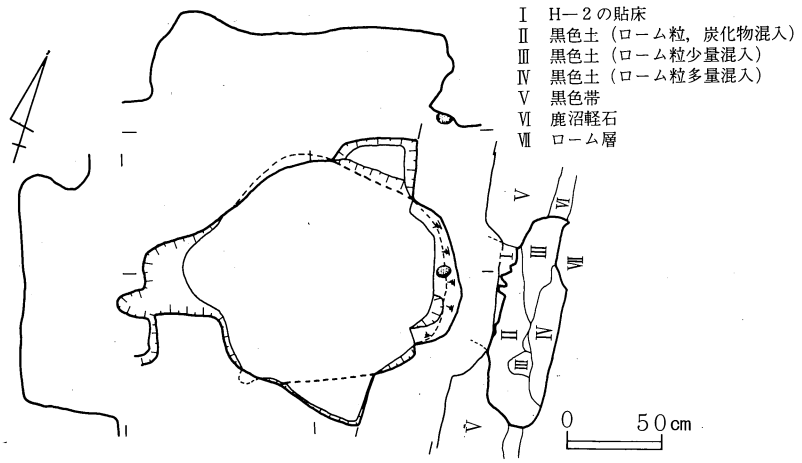
図—12　Ⅰ区炉穴



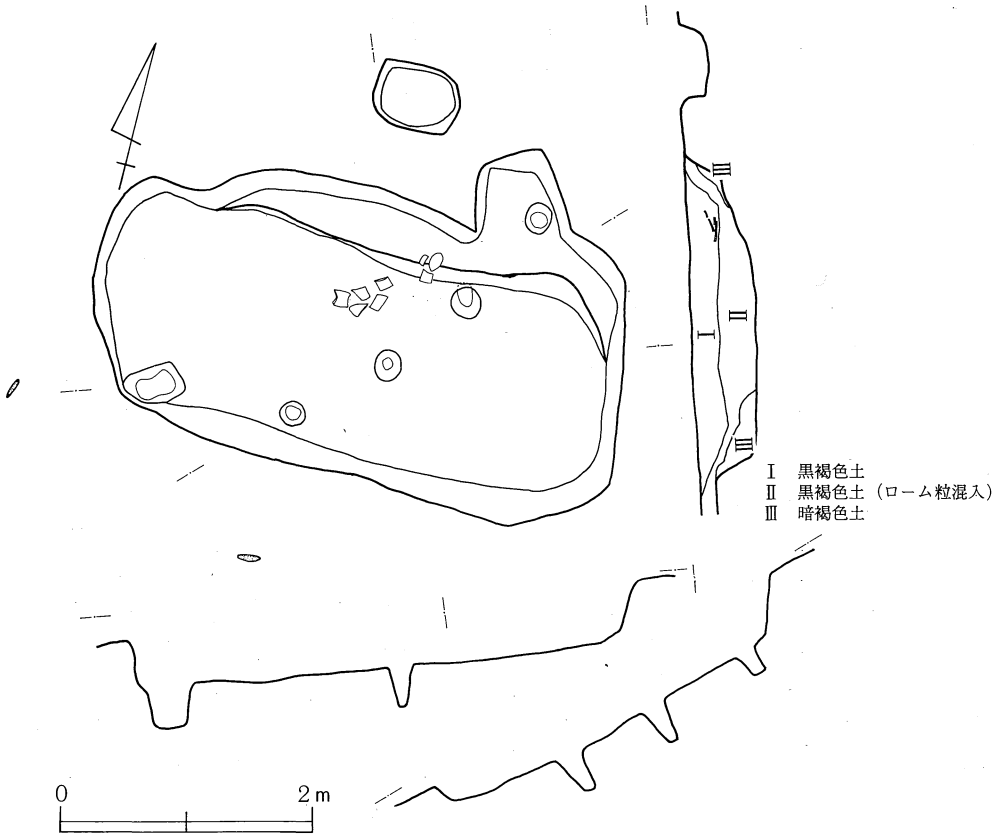
図—13　Ⅰ区1号住居跡



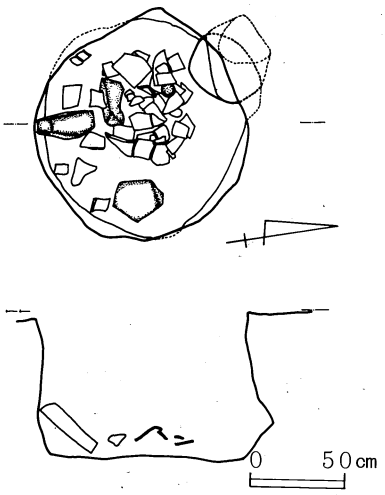
図—14　Ⅰ区2号住居跡



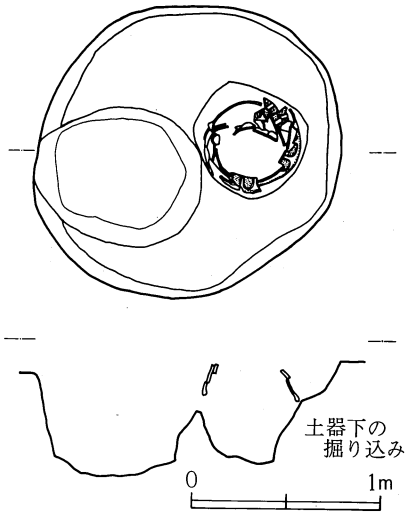
図—15　Ⅰ区2号住居跡内土壙



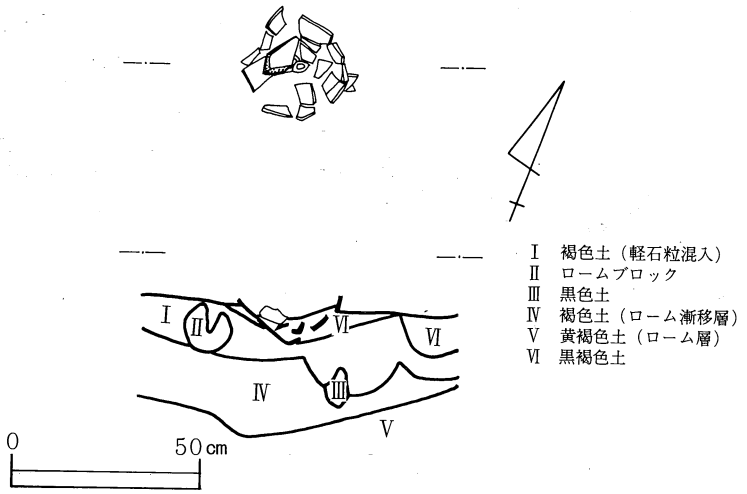
図—16　Ⅱ区1号土壙



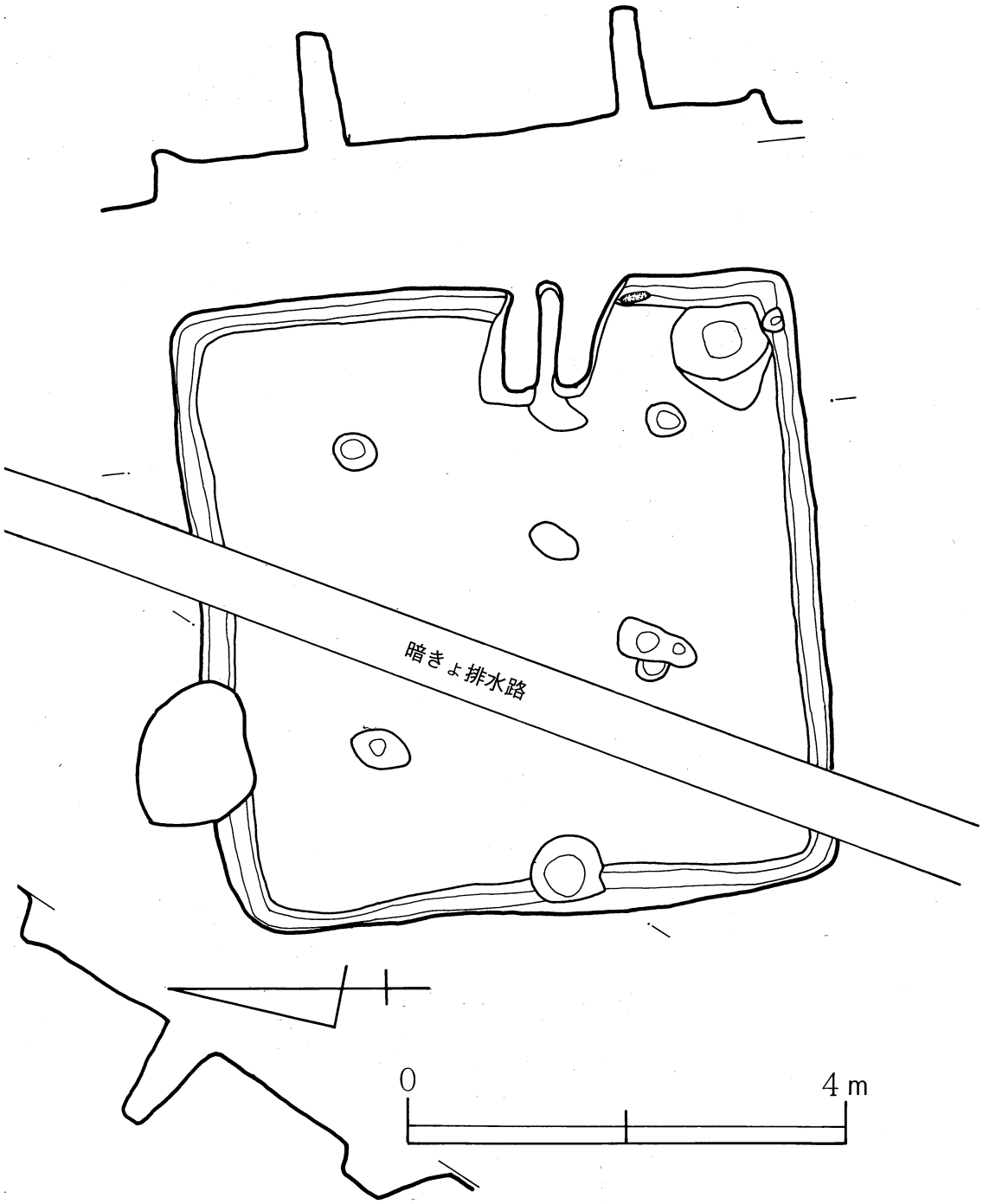
図—17　Ⅱ区2号土壙



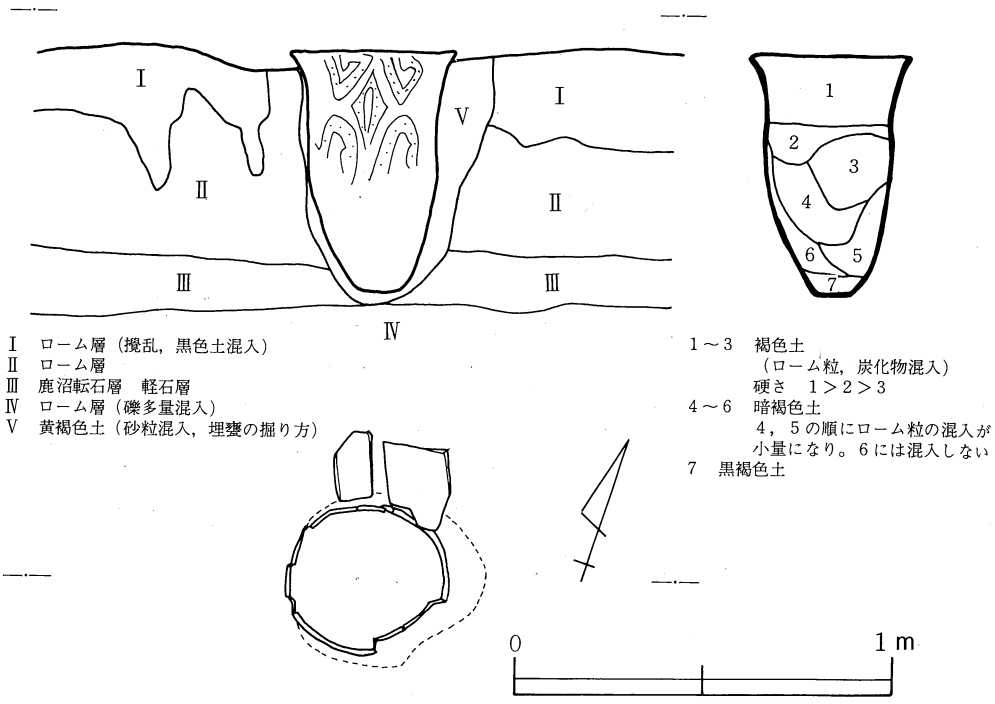
図—18　Ⅱ区3号土壙



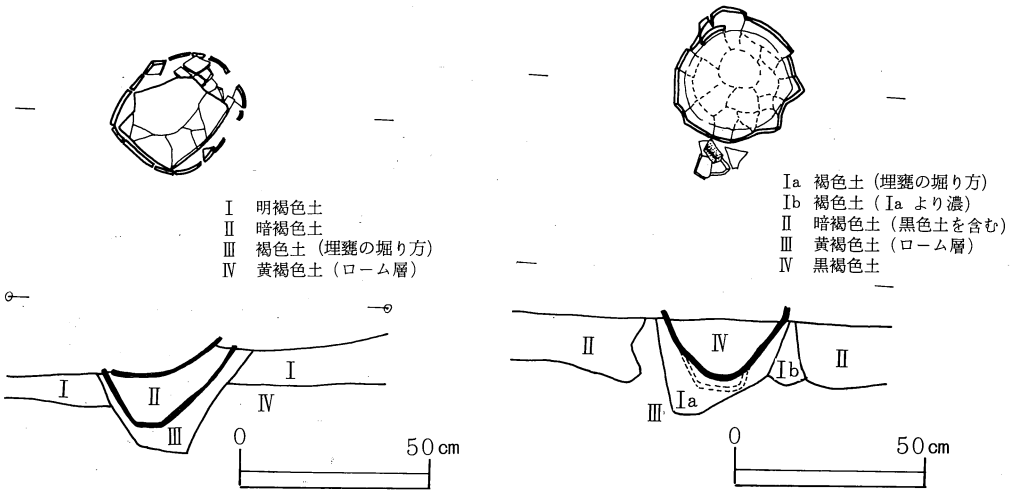
図—19　Ⅱ区2号土壙そば埋甕



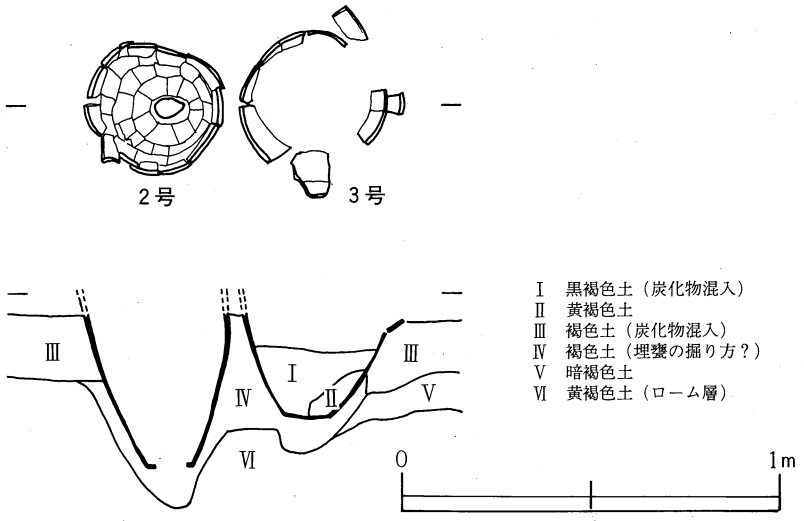
図—20　Ⅱ区古墳時代住居跡



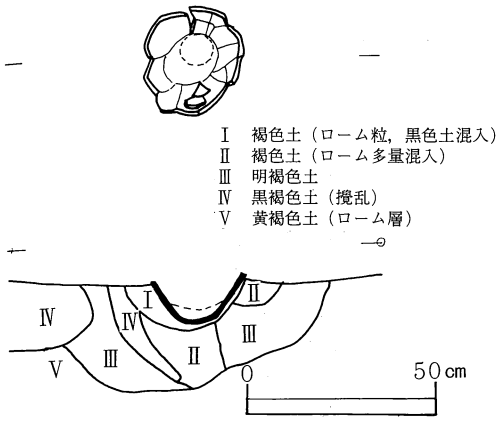
図—21　Ⅲ区1号埋甕



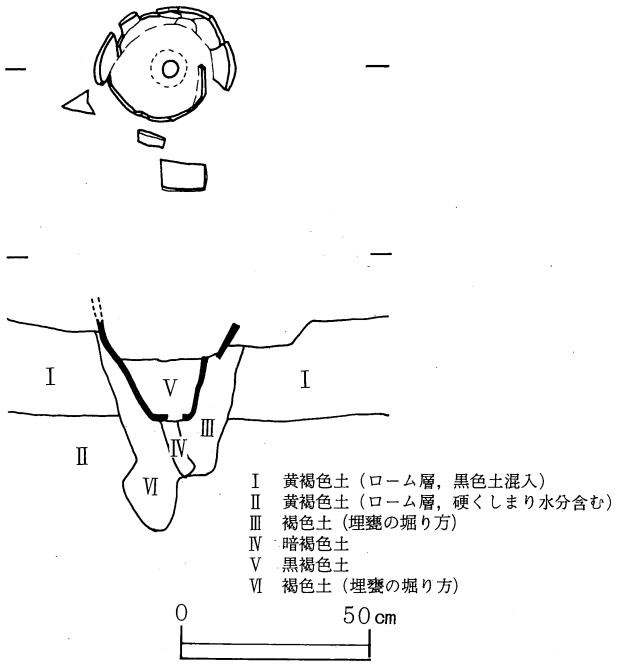
図—22　Ⅳ区1号埋甕　　図—23　Ⅳ区4号埋甕



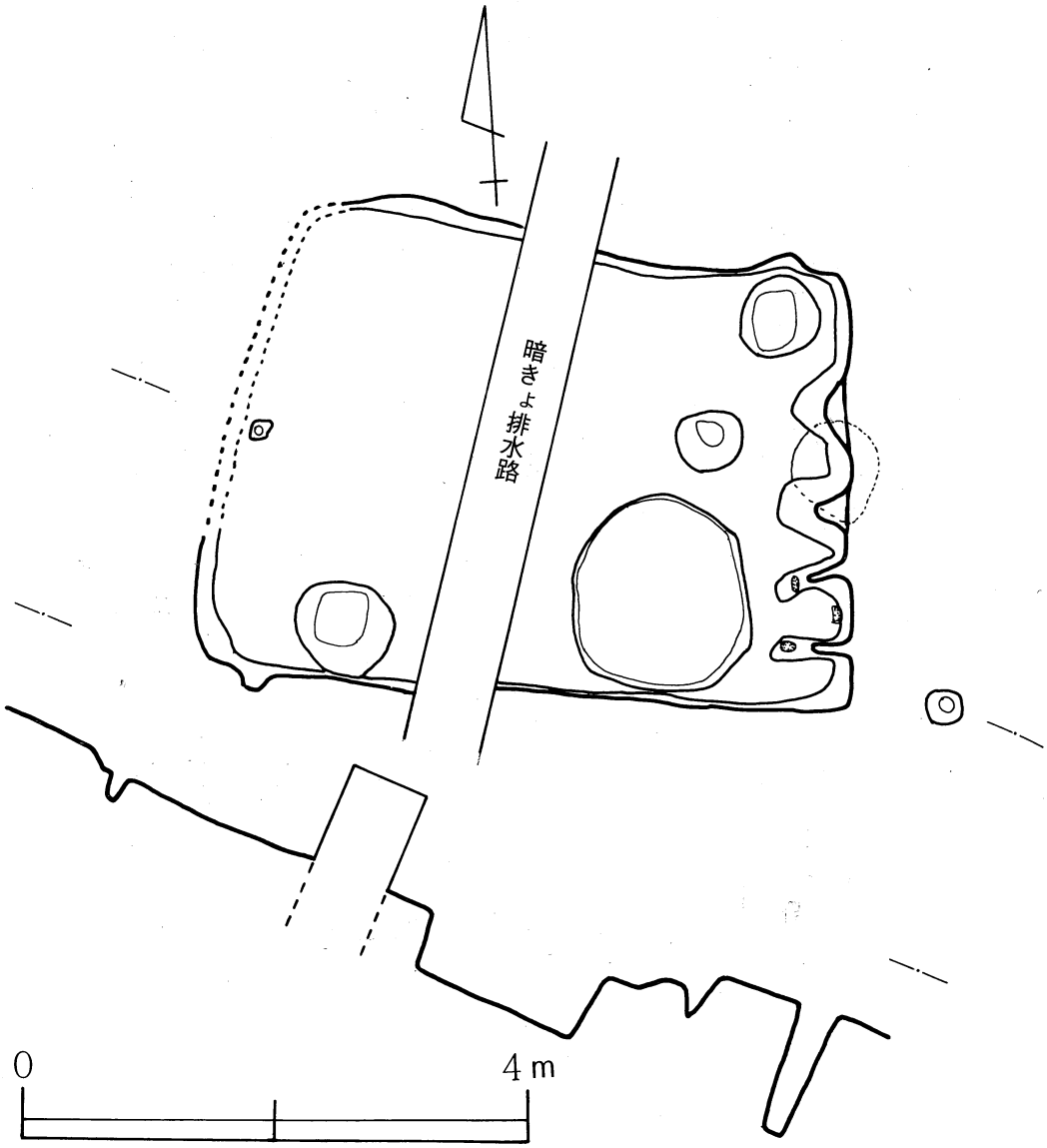
図—24　Ⅳ区2号，3号埋甕



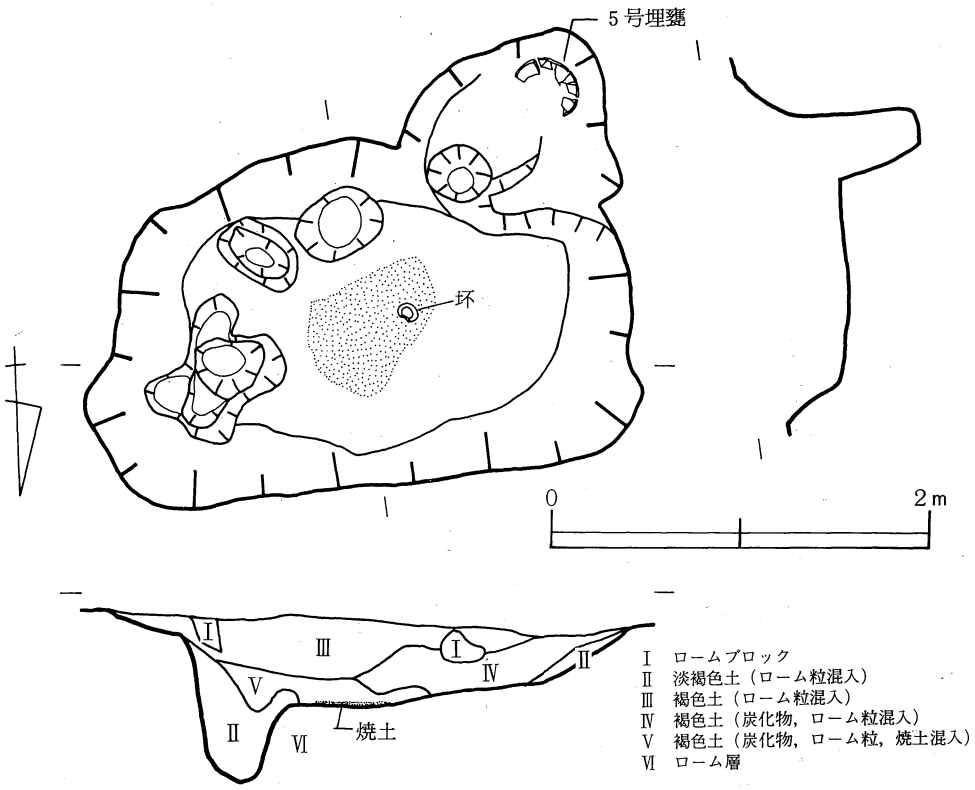
図—26　Ⅳ区6号埋甕



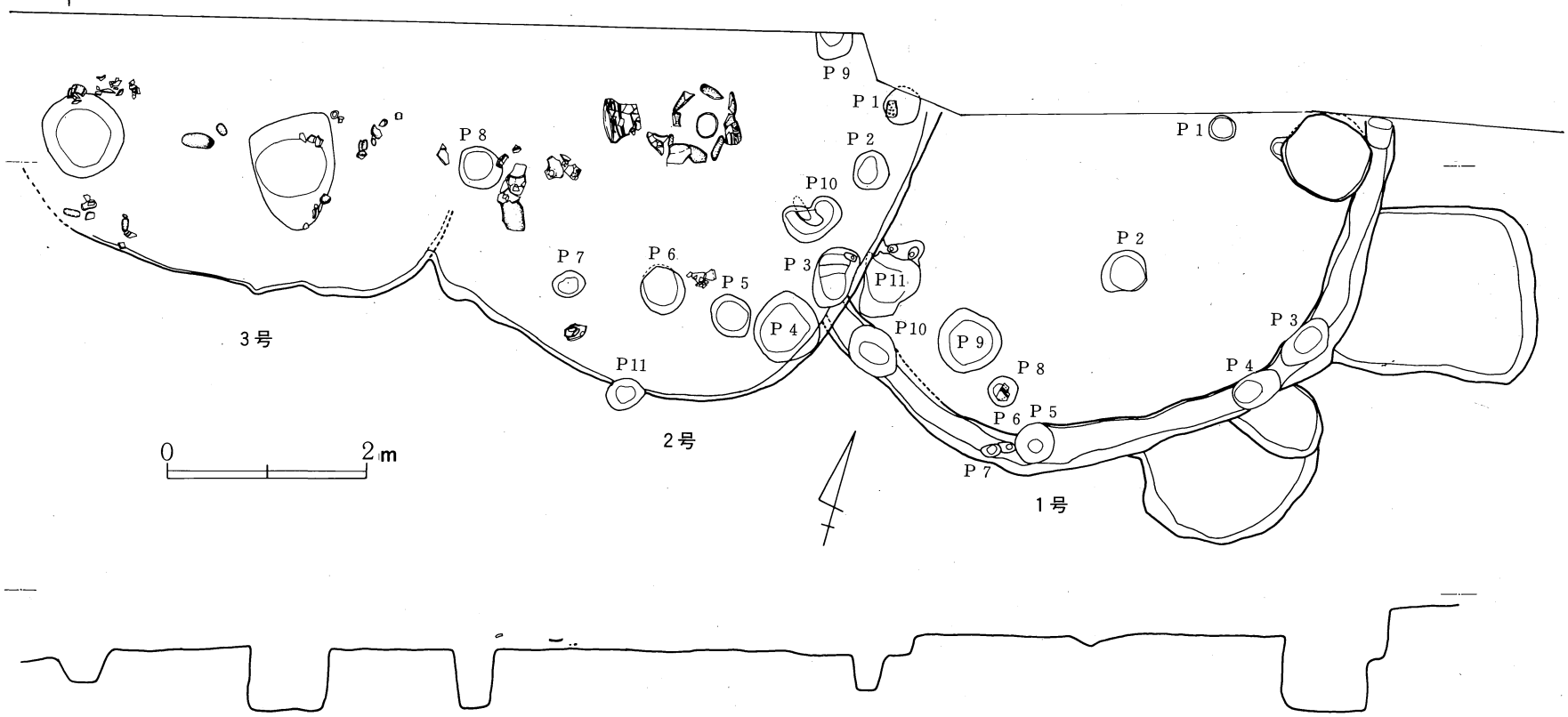
図—25　Ⅳ区5号埋甕



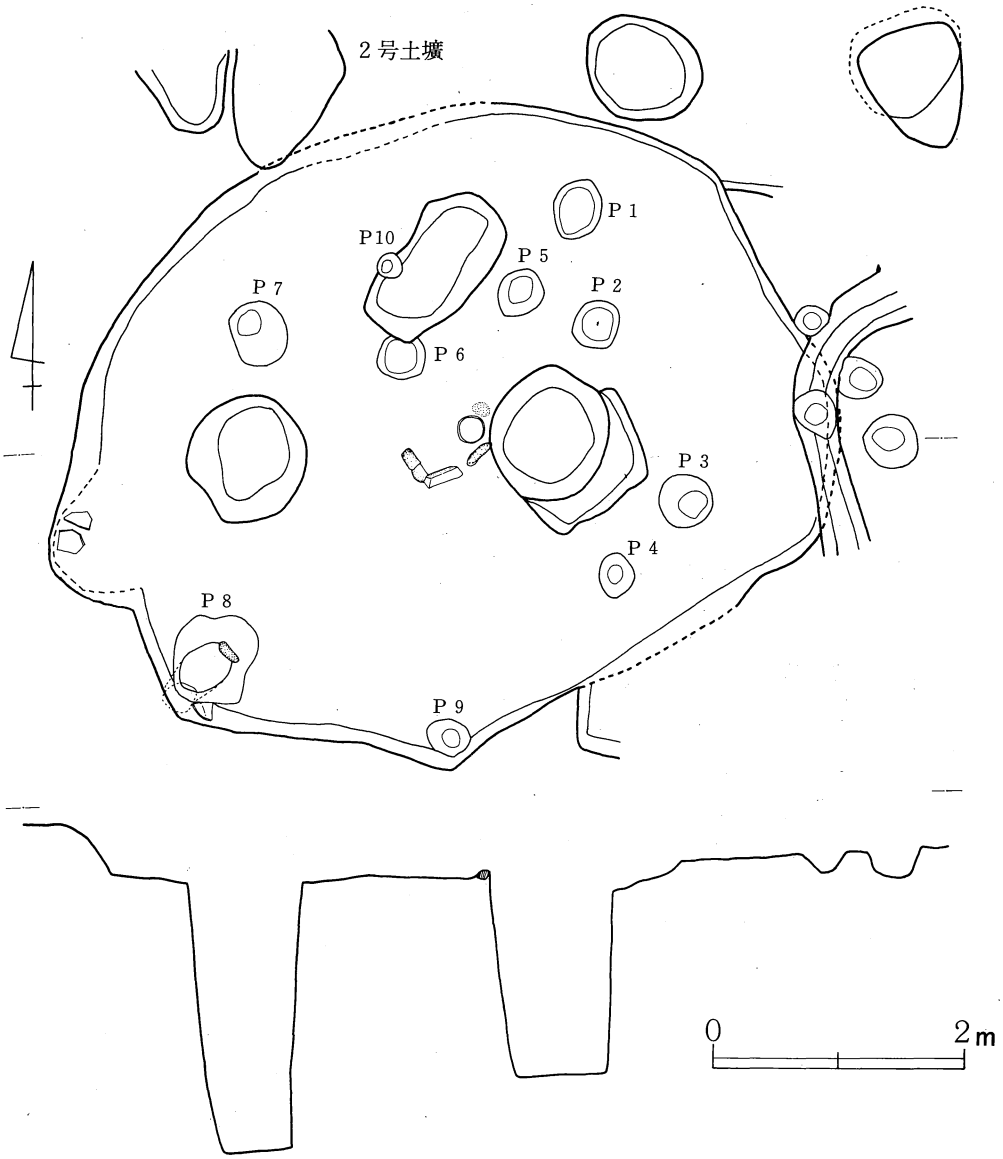
図—27　Ⅳ区歴史時代住居跡



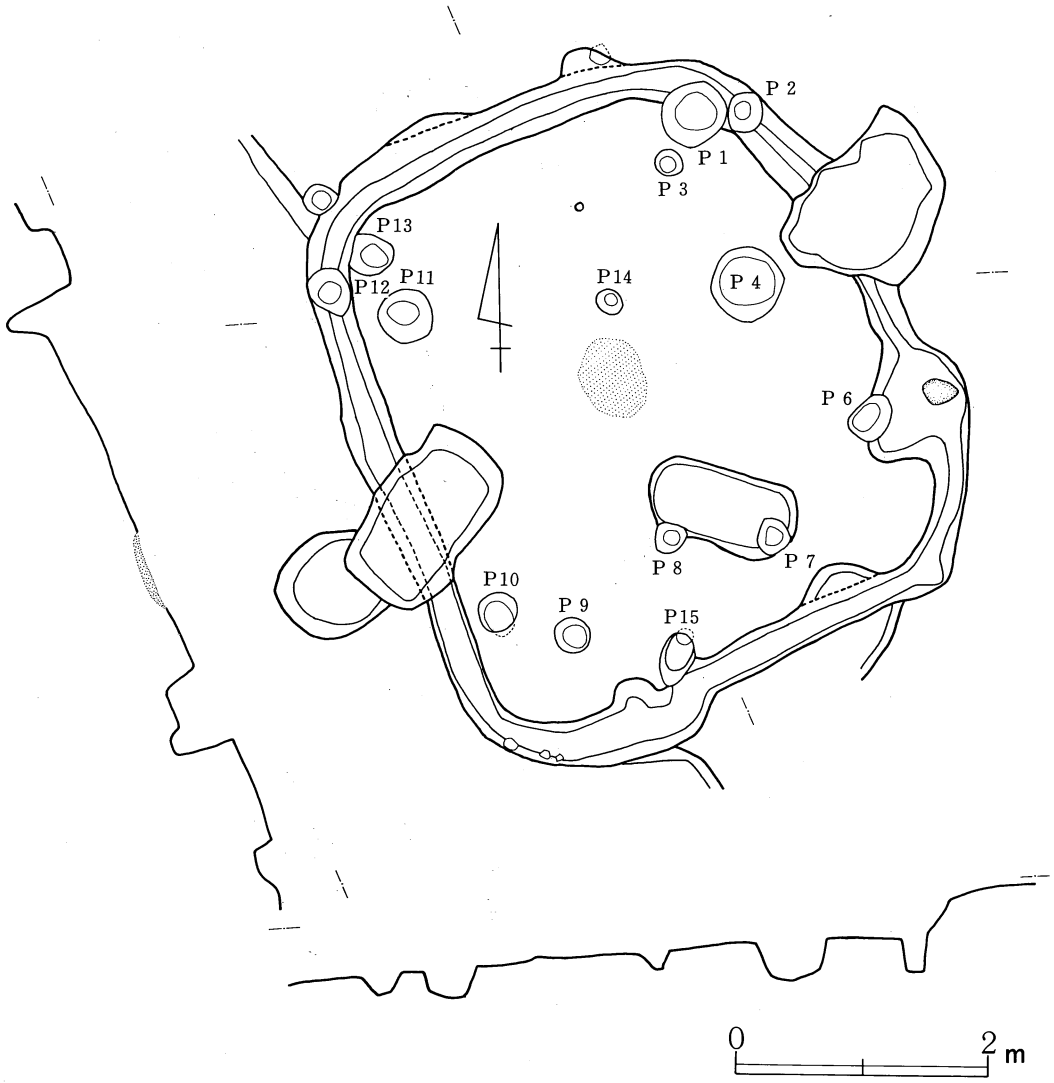
図—28　Ⅳ区歴史時代土壙，5号埋甕



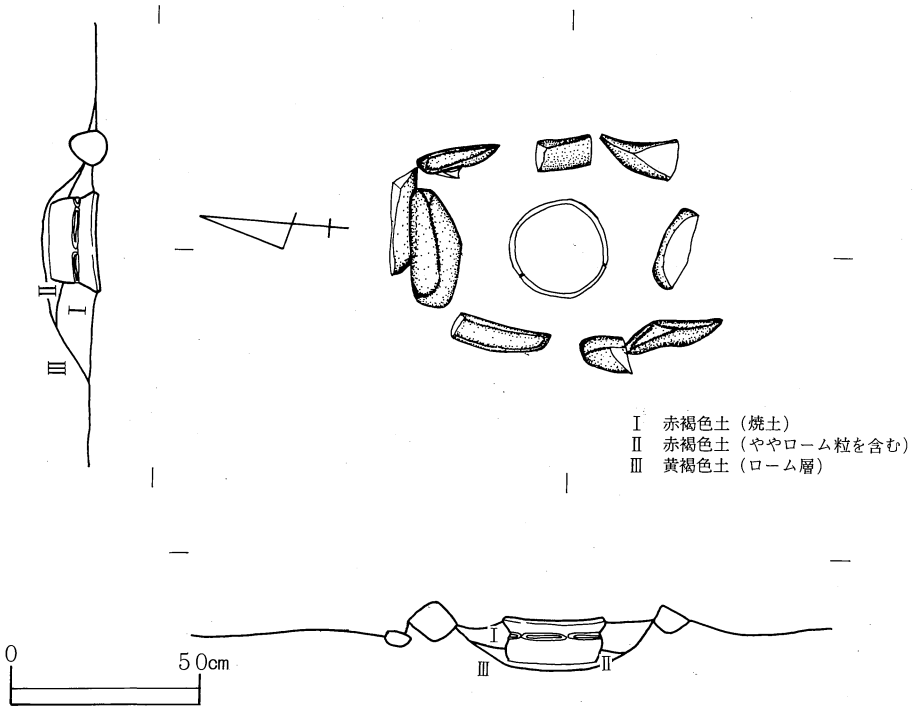
図—29　V区1号，2号，3号住居跡



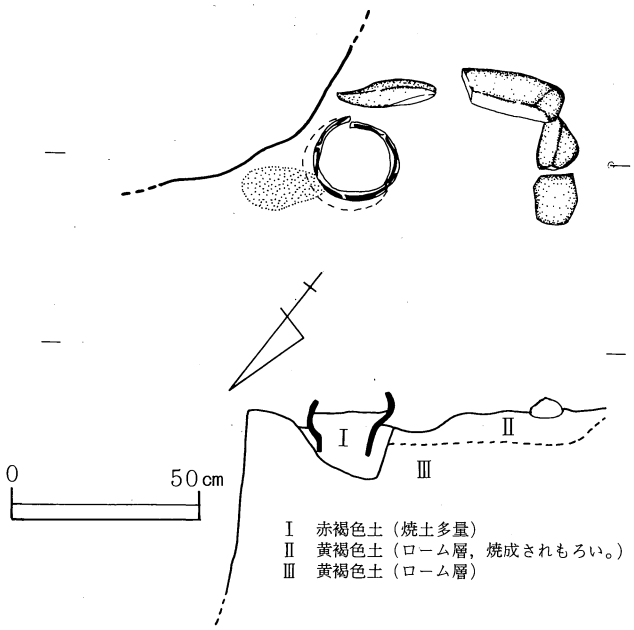
図—30　Ⅴ区4号住居跡



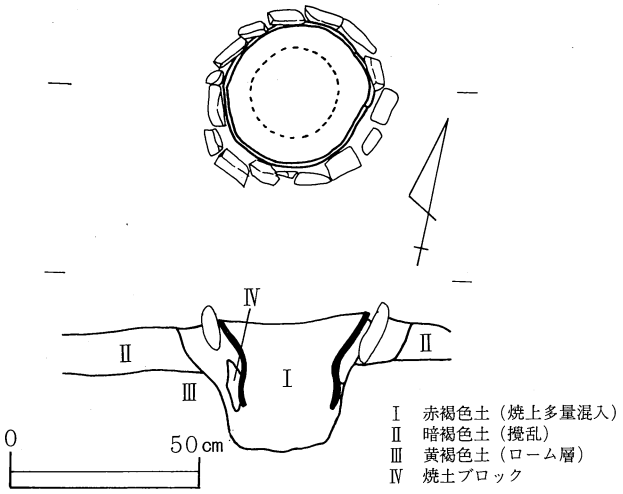
図—31　V区5号住居跡



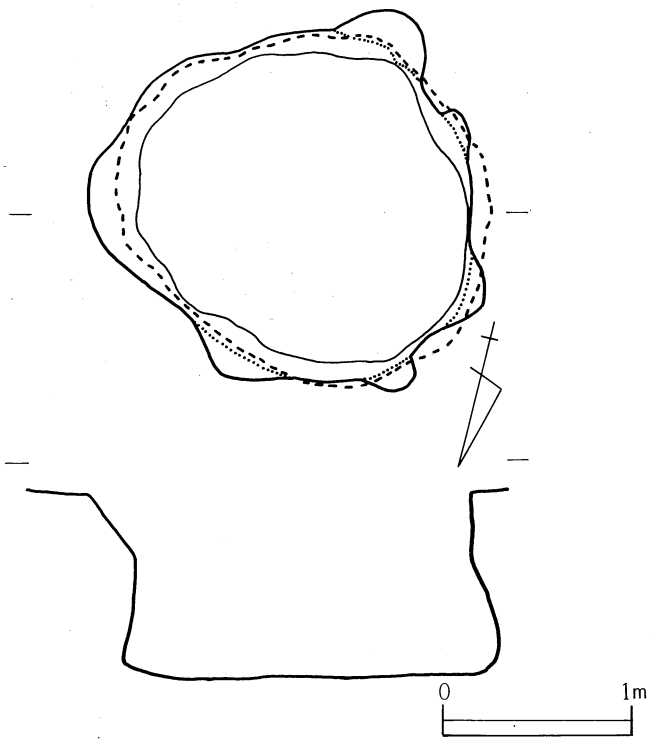
図—32　Ⅴ区２号住居跡石囲炉



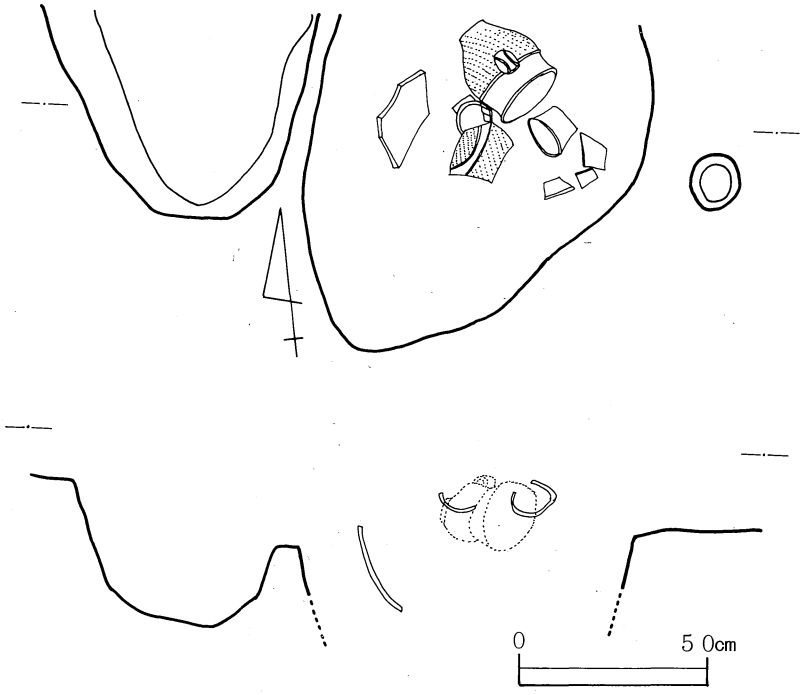
図—33　Ⅴ区４号住居跡内石囲炉



図―34　Ⅴ区１号屋外炉



図―35　Ⅴ区１号土壙

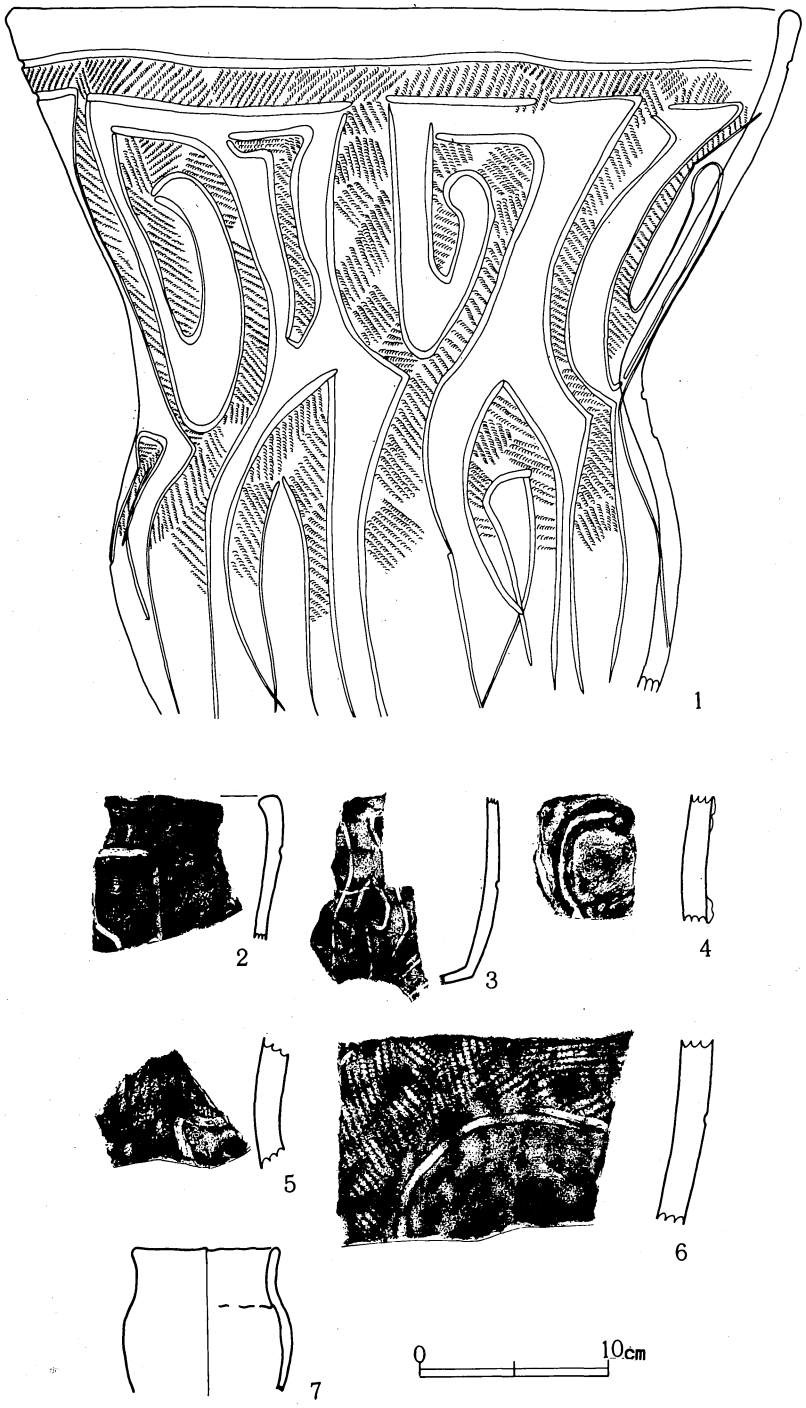


図—36　Ⅴ区２号土壙

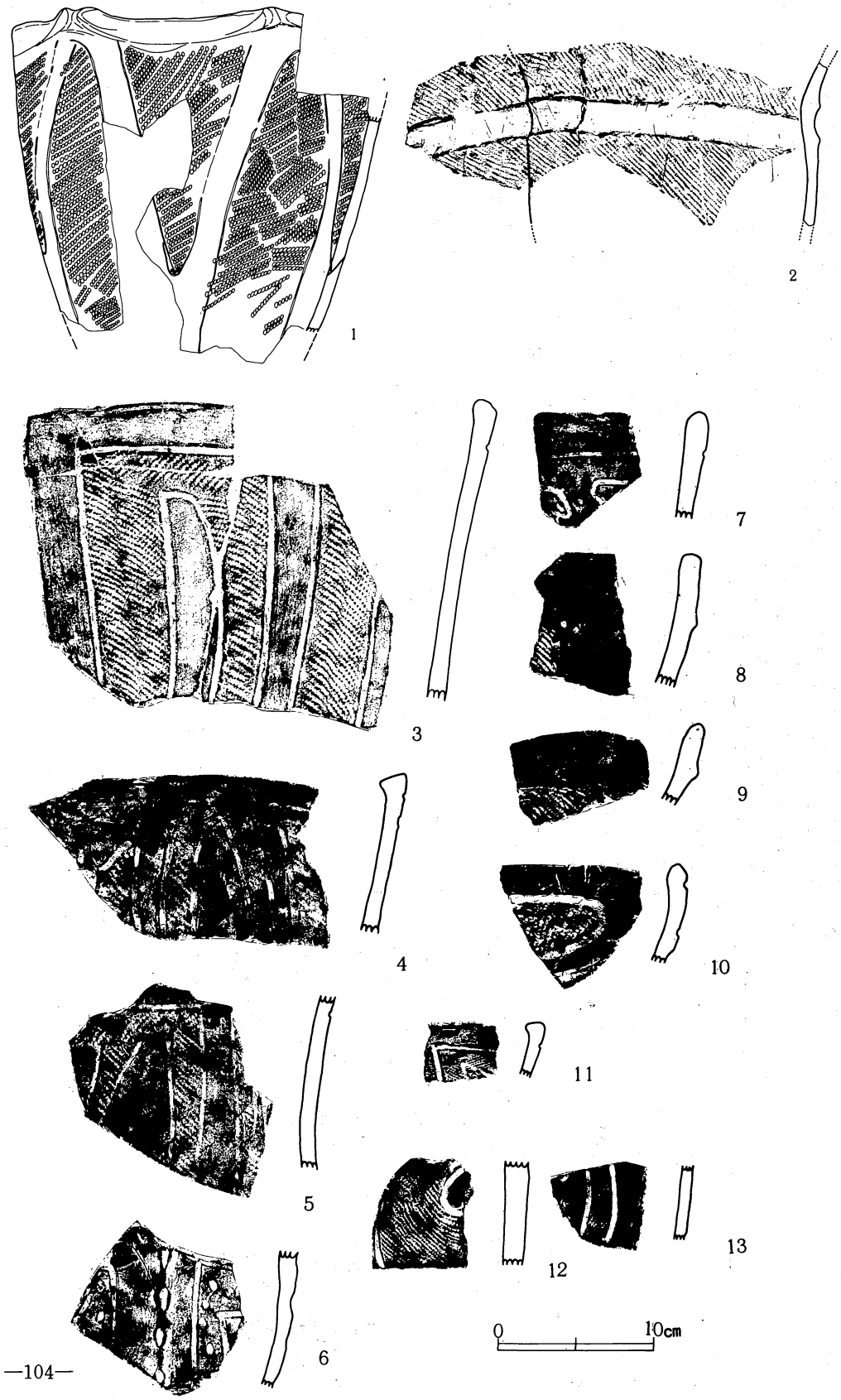
遺物実測図・拓影

各図の縮尺は次の通り

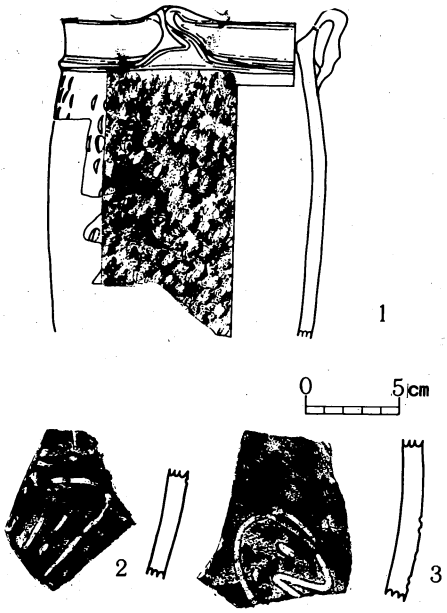
実測図	縄文	5分の1
	土師	4分の1
	石器	4分の1
拓　影	縄文	4分の1



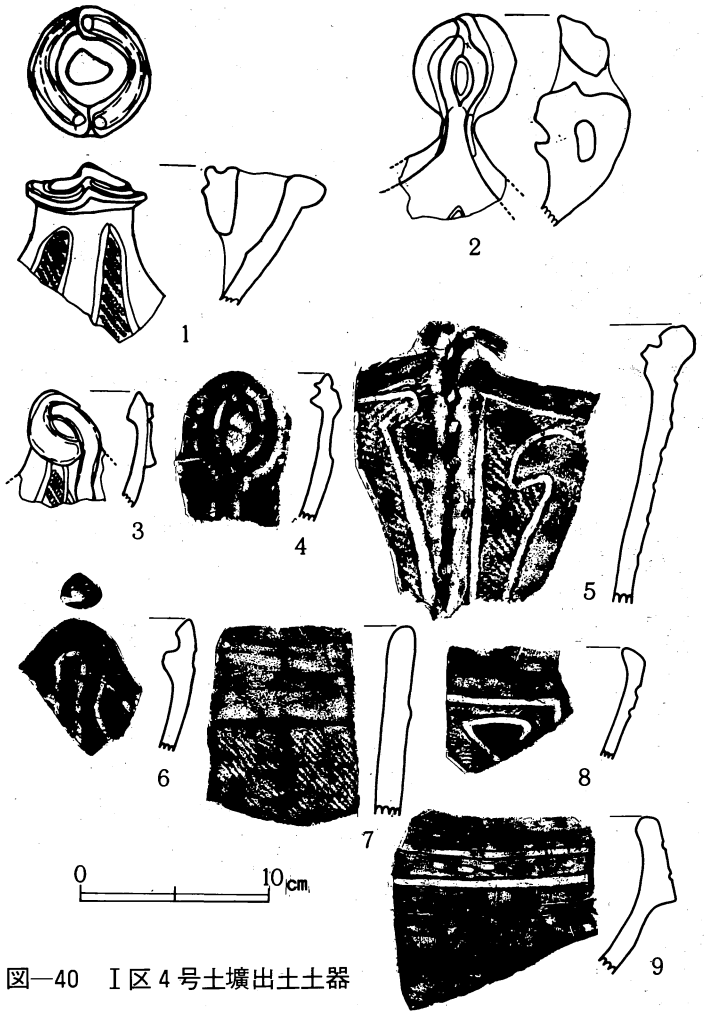
図—37　Ⅰ区Ⅰ号土壙出土土器



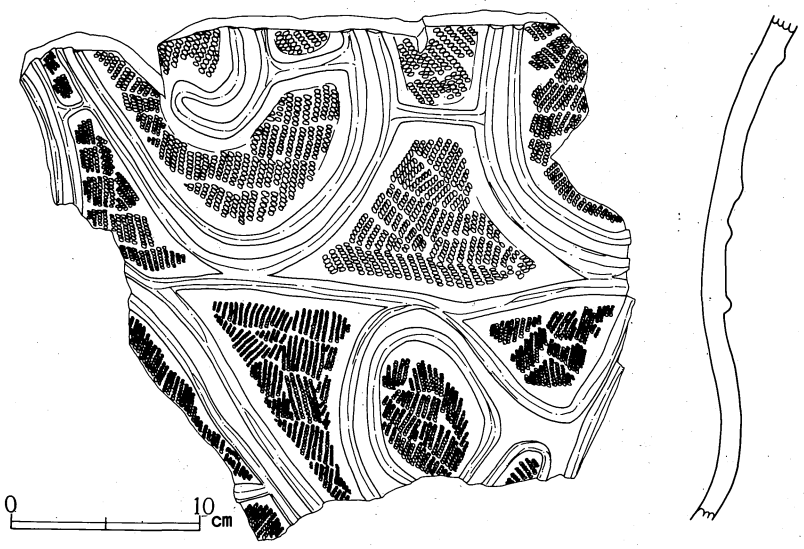
図—38　Ⅰ区２号土壙出土土器



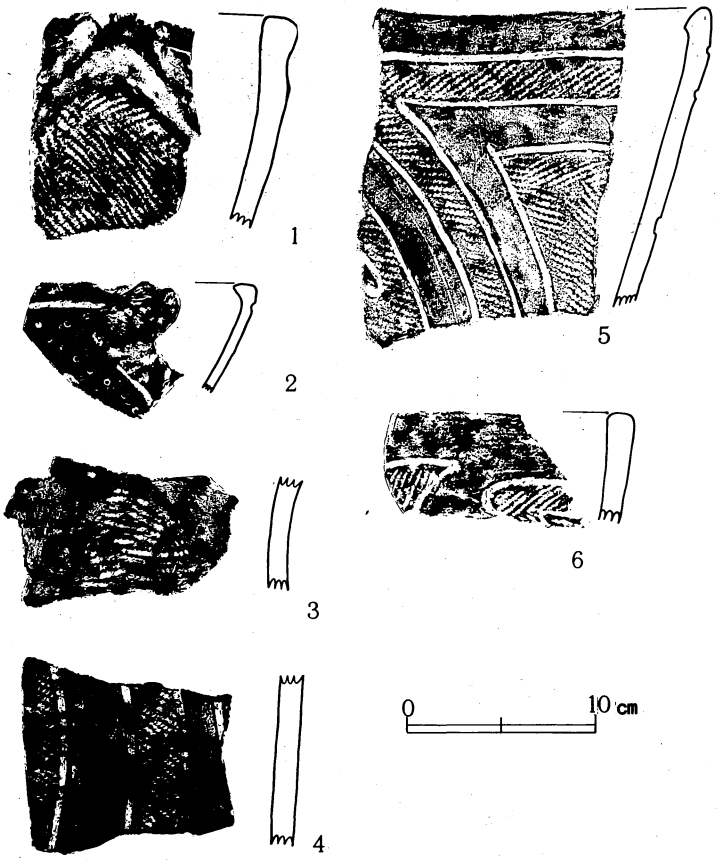
図—39　Ⅰ区3号土壙出土土器



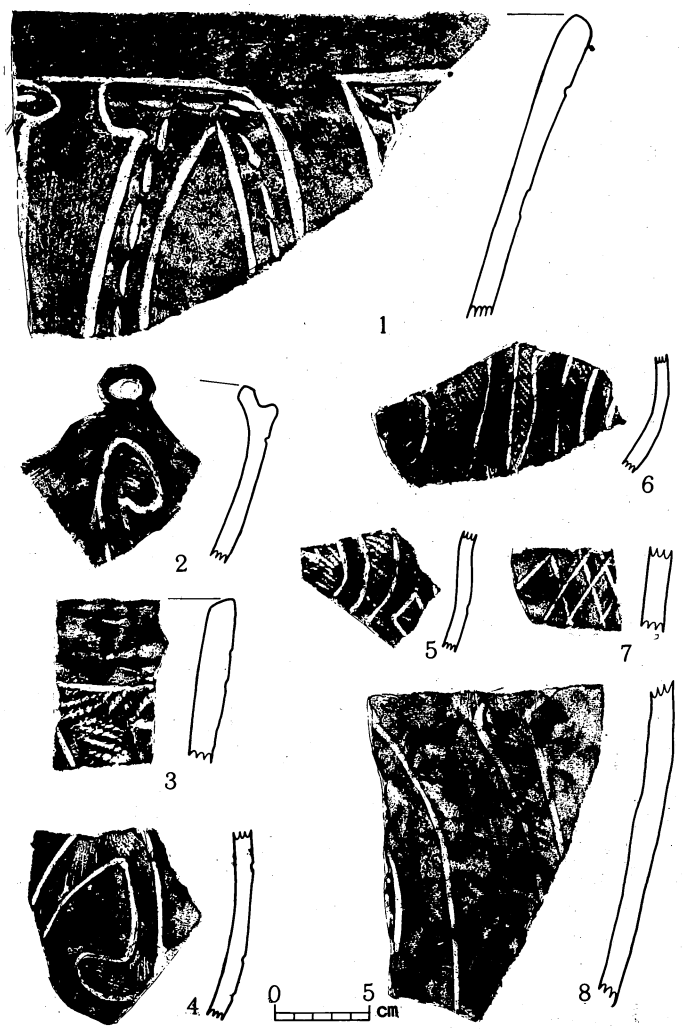
図—40　Ⅰ区4号土壙出土土器



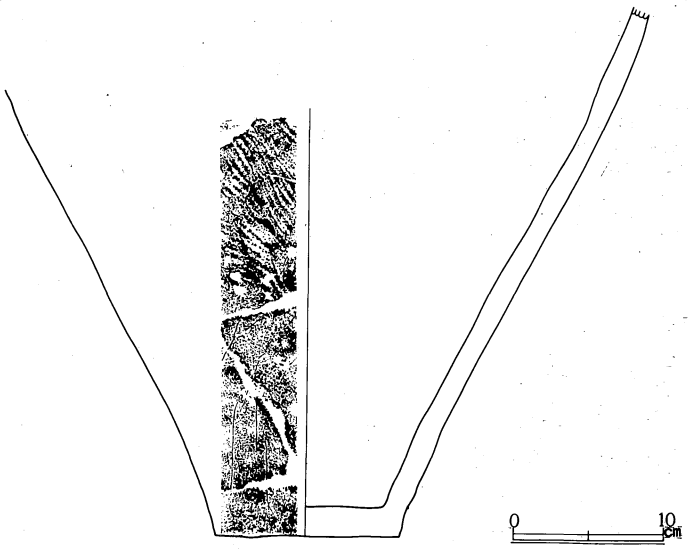
図—41　Ⅰ区6号土壙出土土器



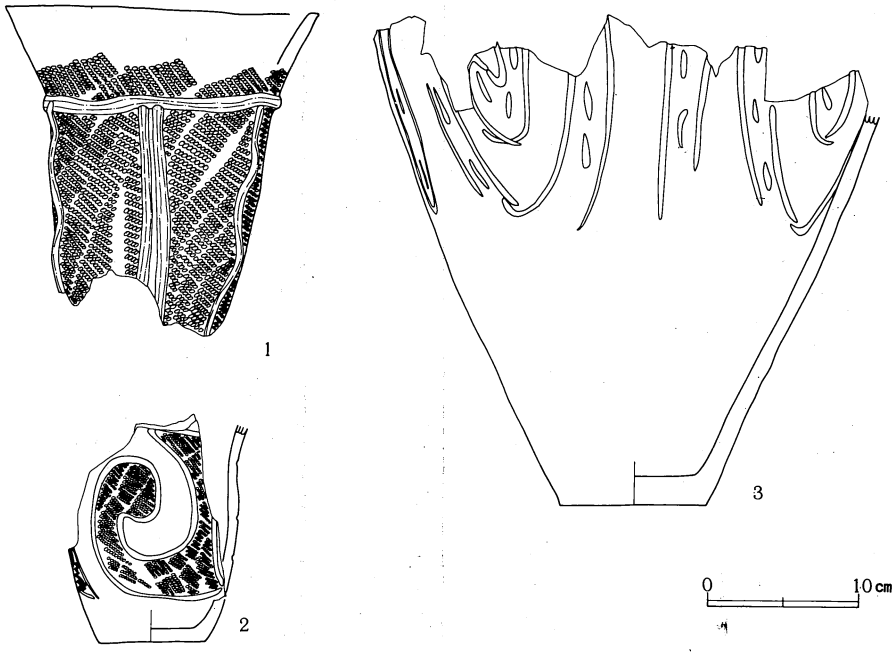
図—42　Ⅰ区6号，5号土壙出土土器



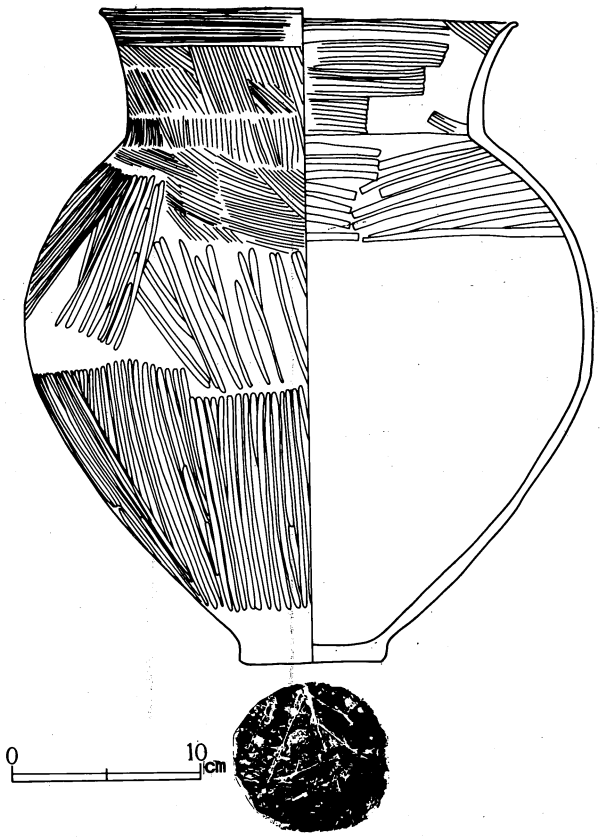
図—43　Ⅰ区7号土壙出土土器



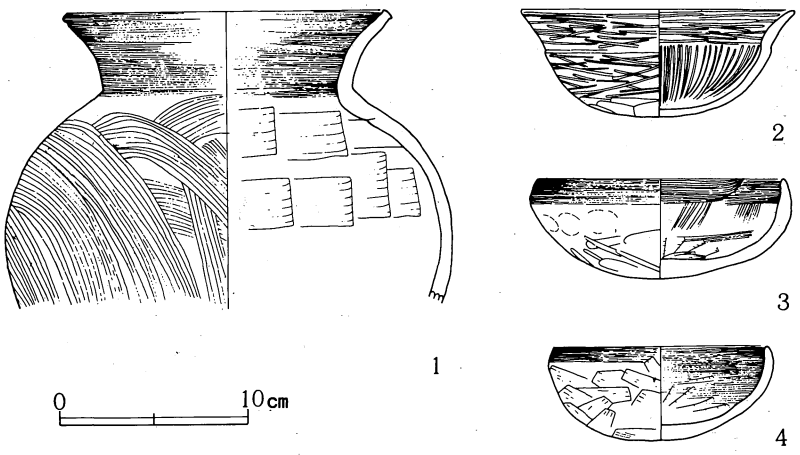
図—44　Ⅰ区9号土壙内埋甕使用土器



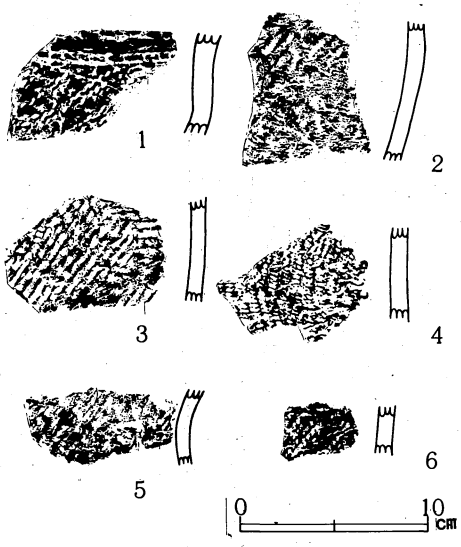
図—45　Ⅰ区出土遺構不明の土器



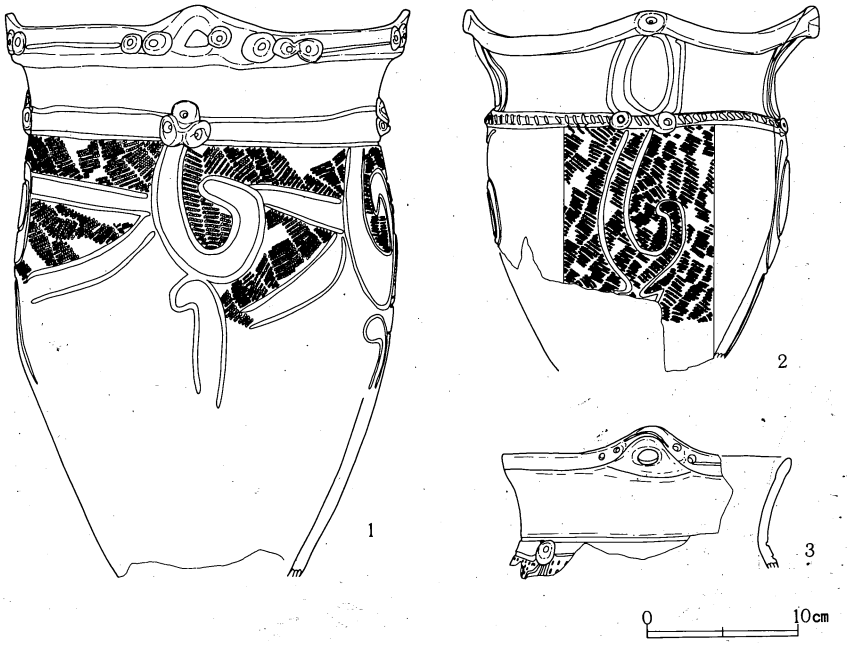
図—46　Ⅰ区1号住居跡出土土器



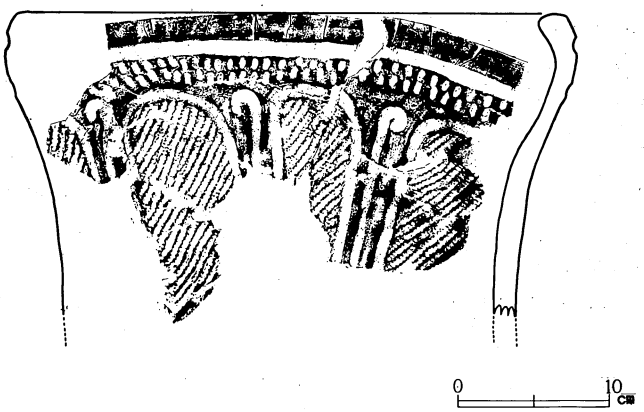
図—47　Ⅰ区2号住居跡出土土器



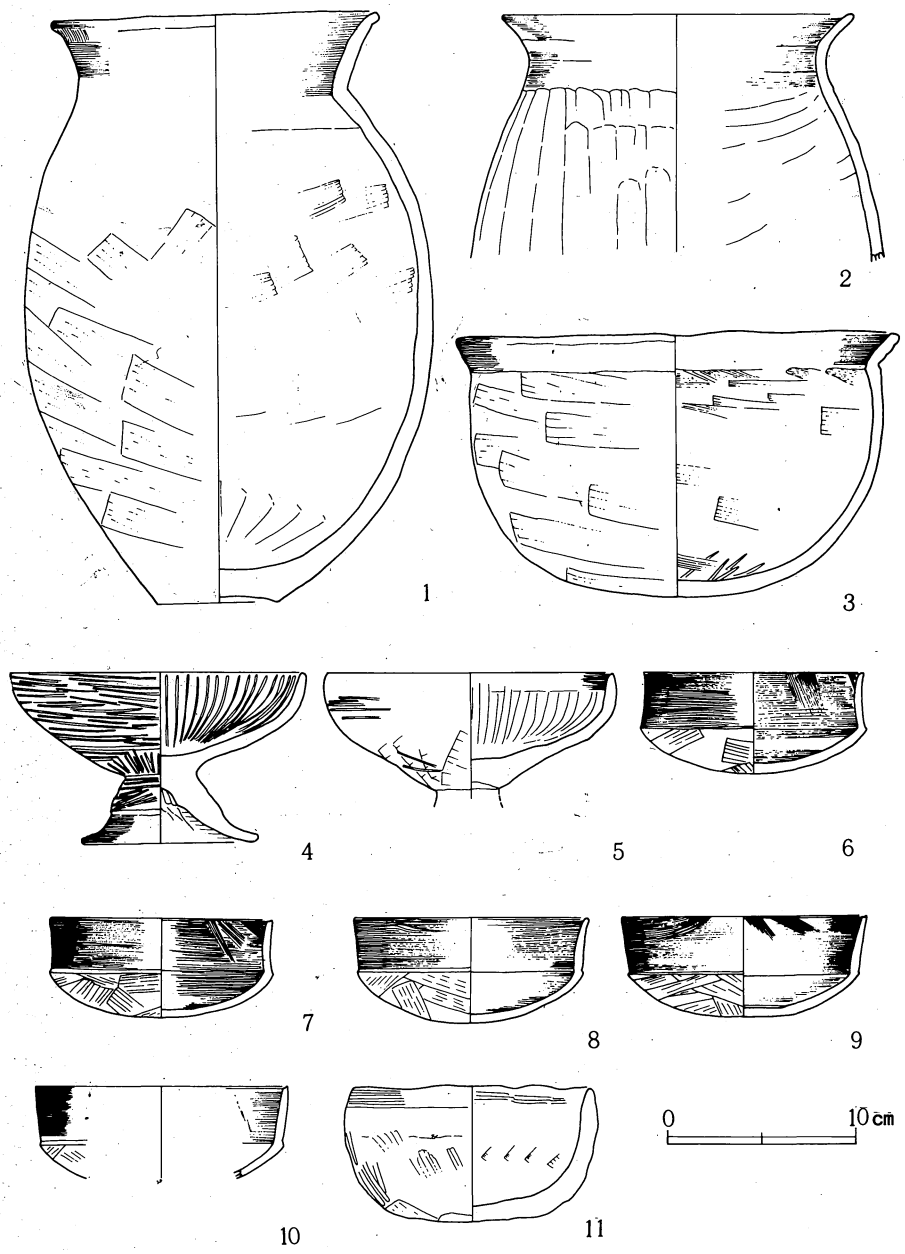
図—48　Ⅱ区1号土壙出土土器



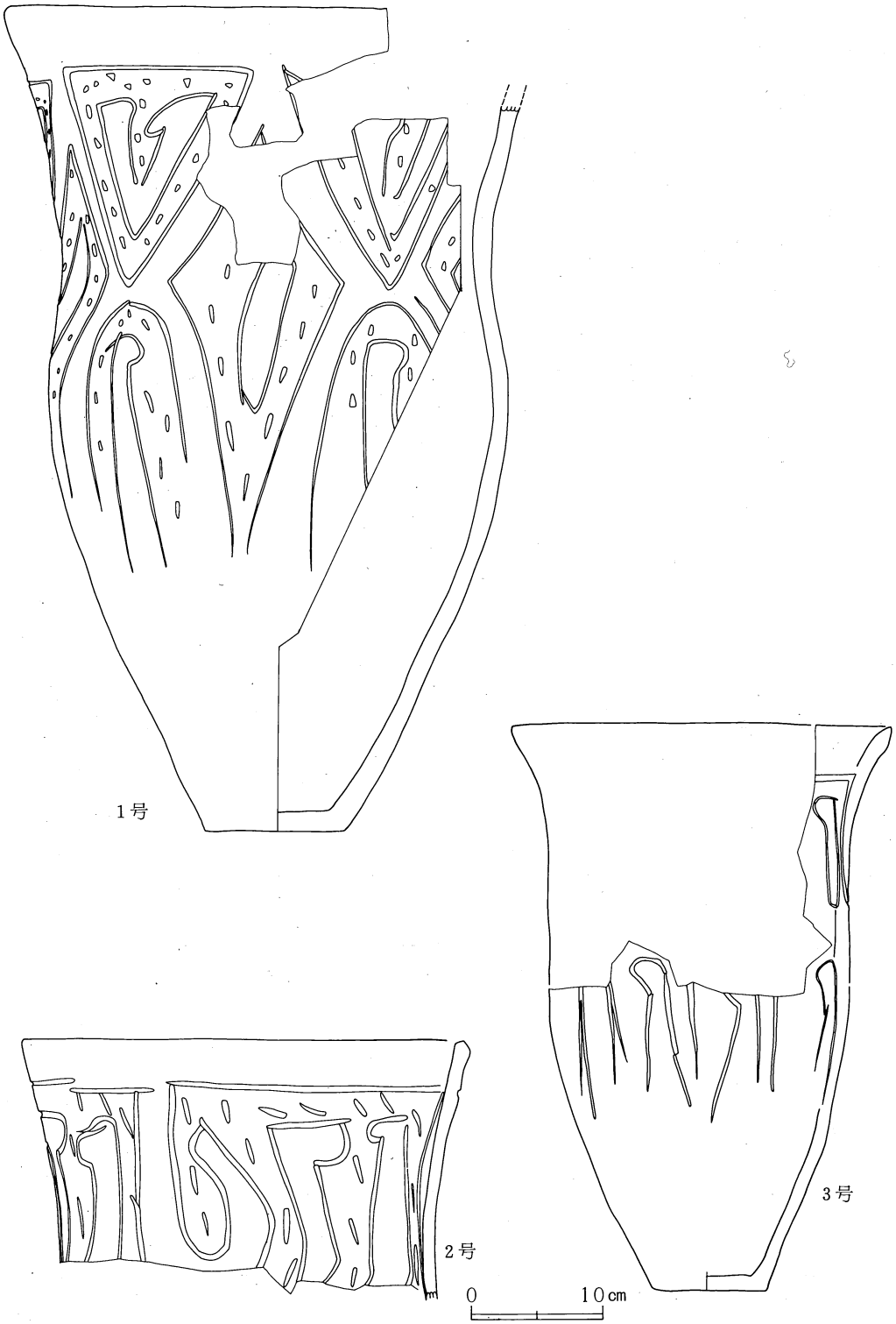
図—49　Ⅱ区２号土壙出土土器



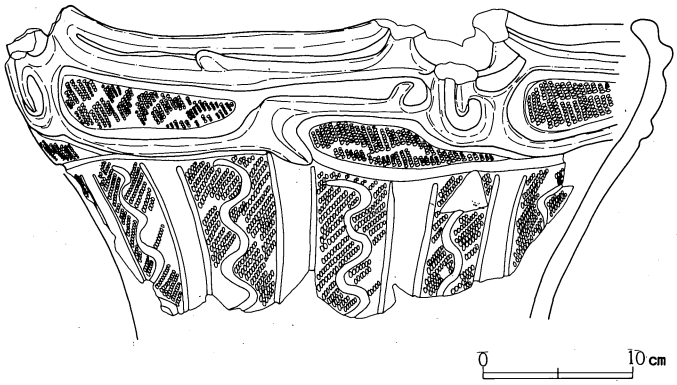
図—50　Ⅱ区３号土壙出土土器



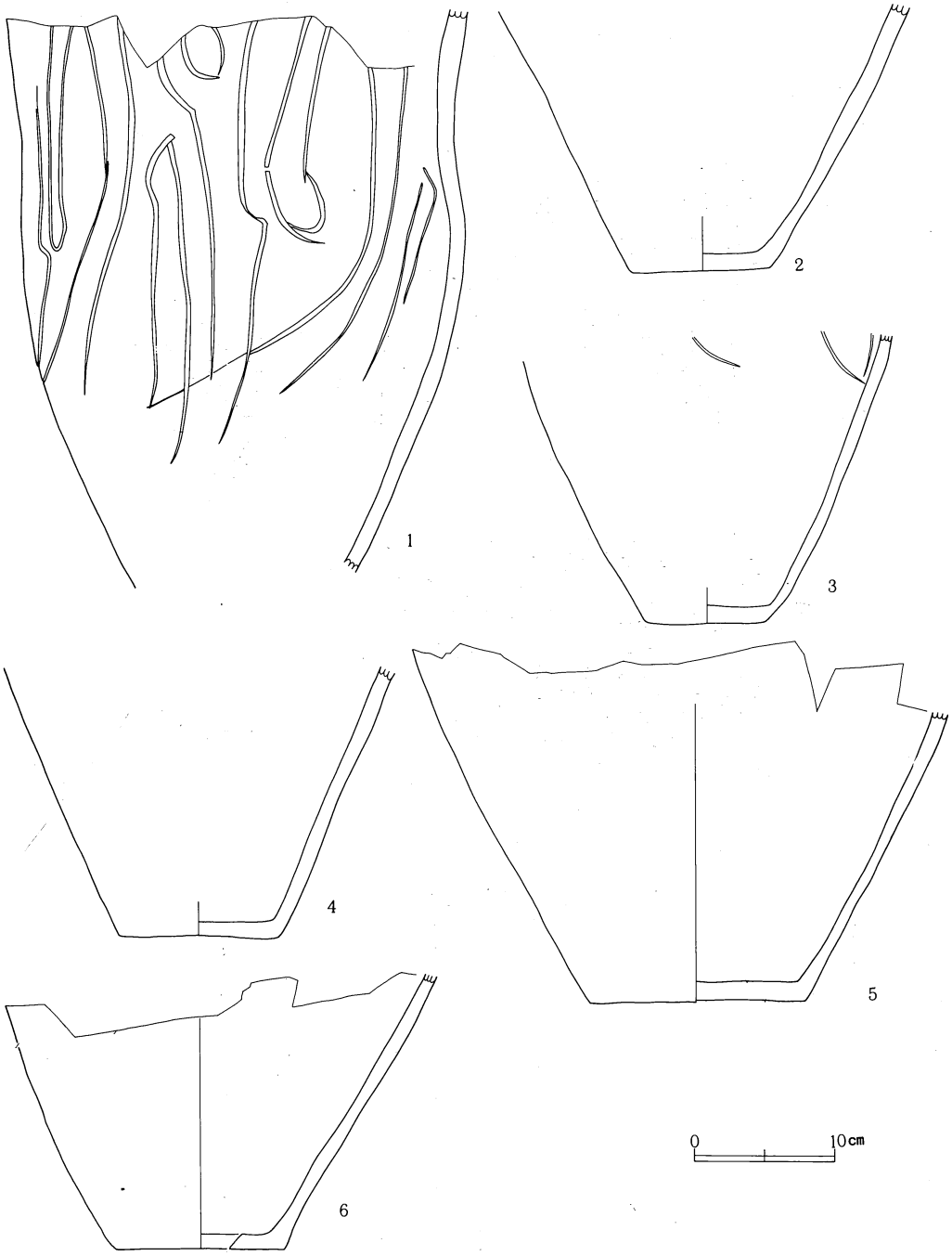
図—51　Ⅱ区古墳時代住居跡出土土器



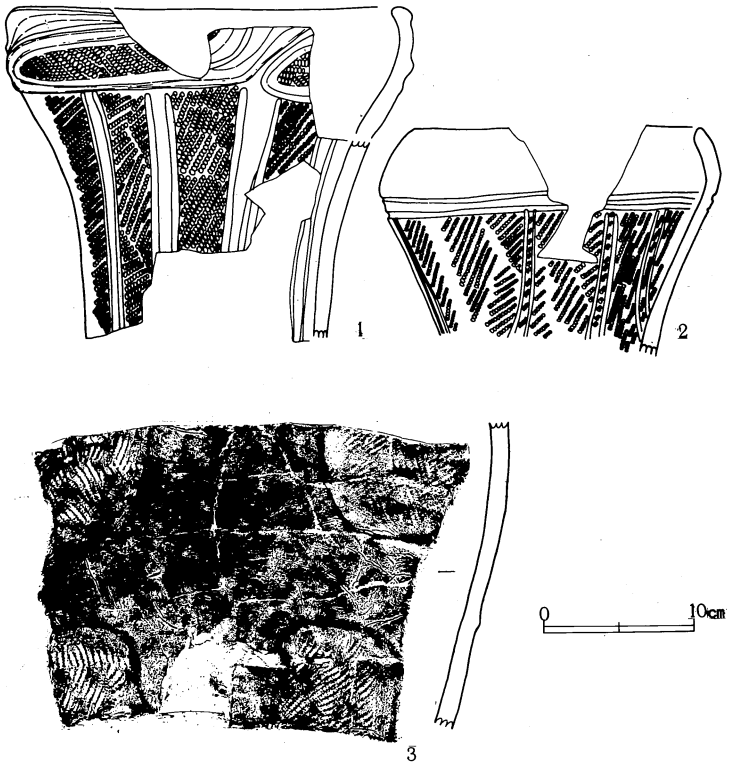
図—52　Ⅲ区埋甕使用土器



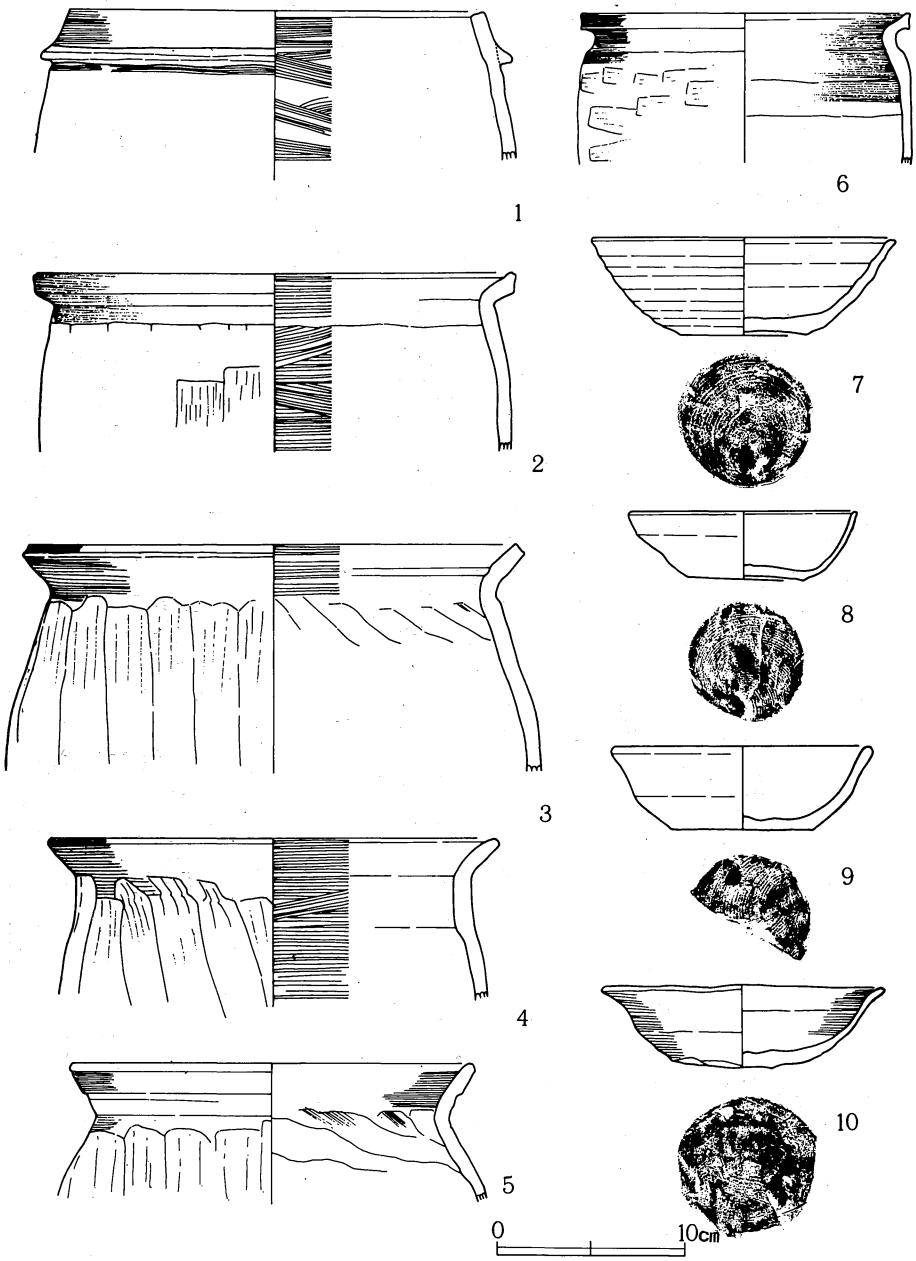
図—53　Ⅲ区4号甕使用土器



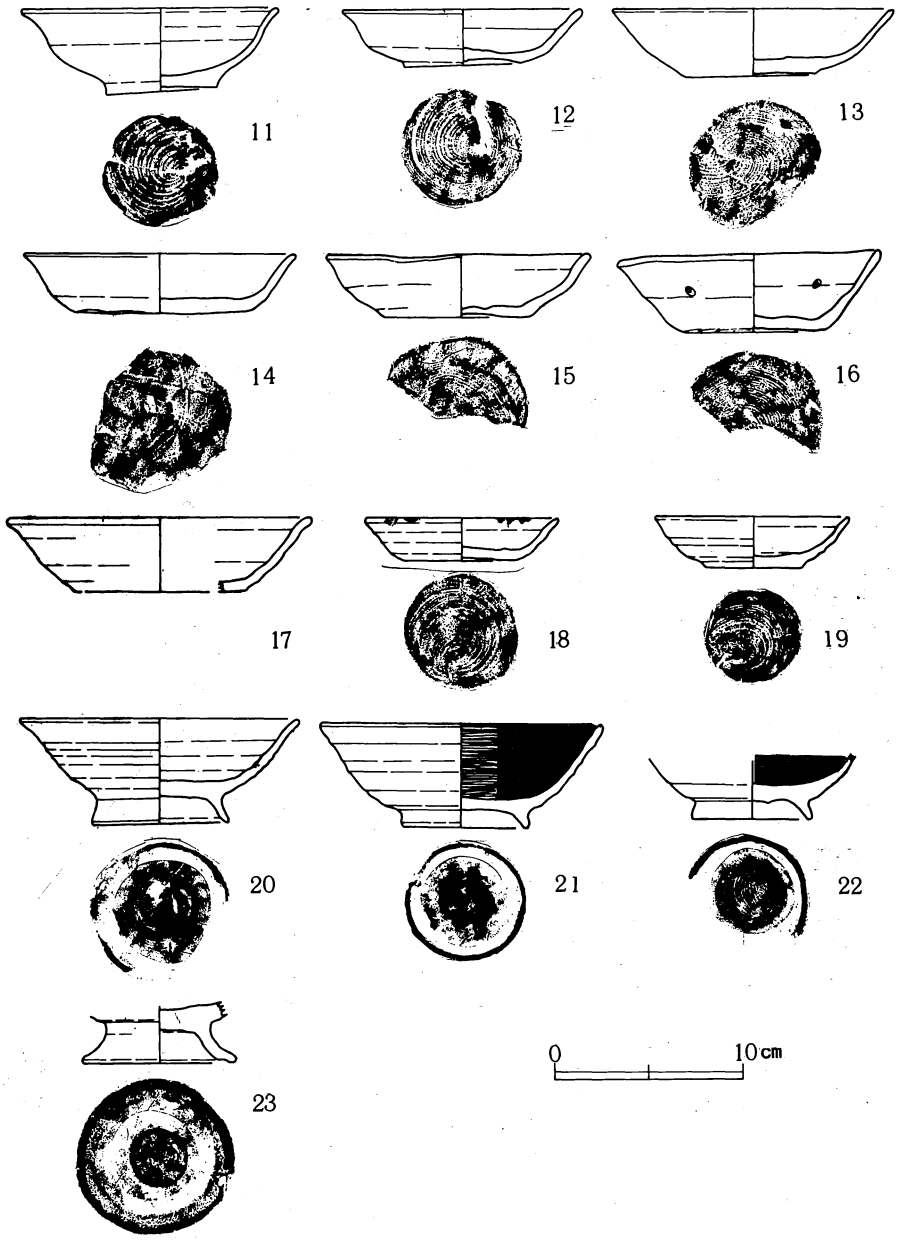
図—54　Ⅳ区埋甕使用土器



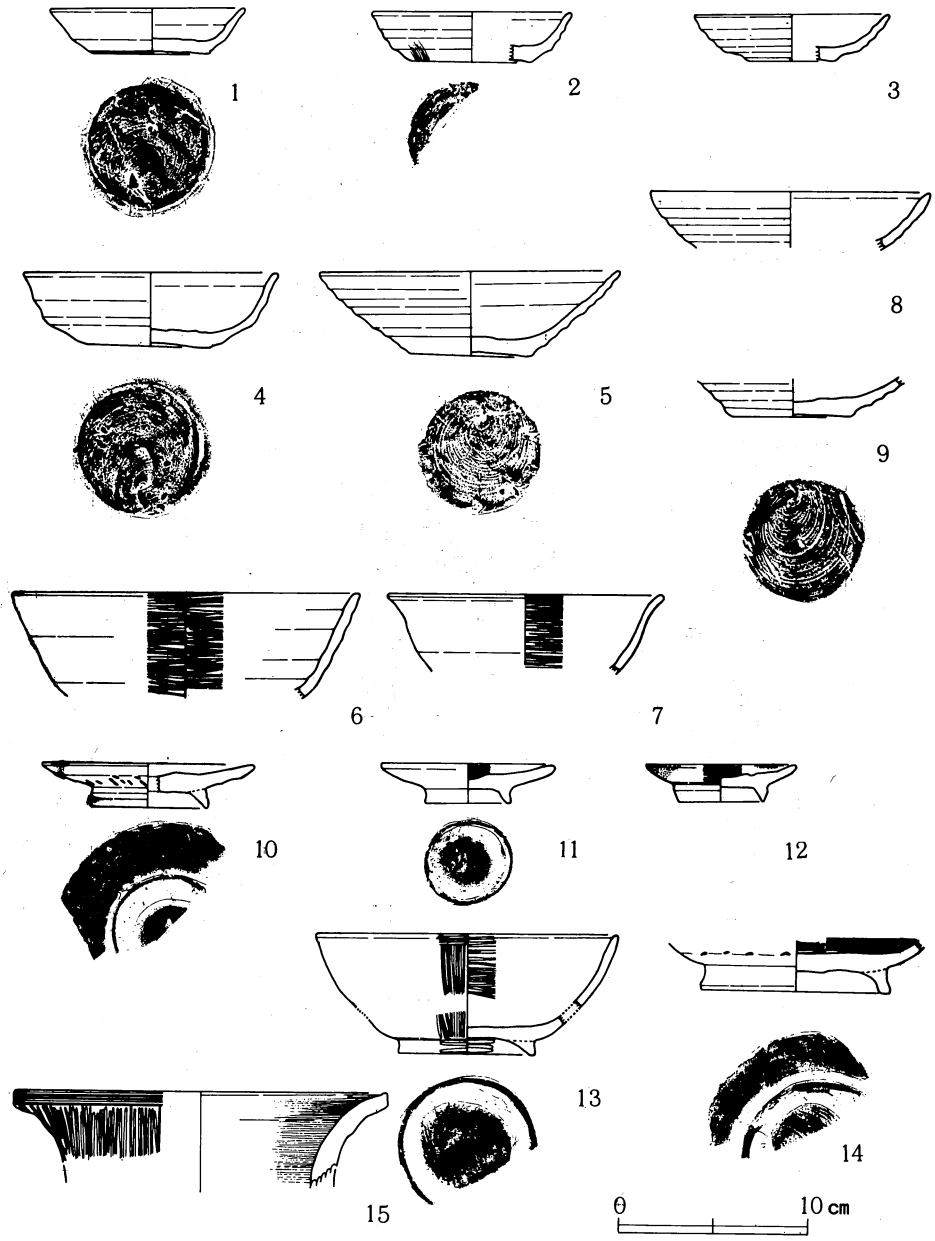
図—55　Ⅳ区遺構に伴わない土器



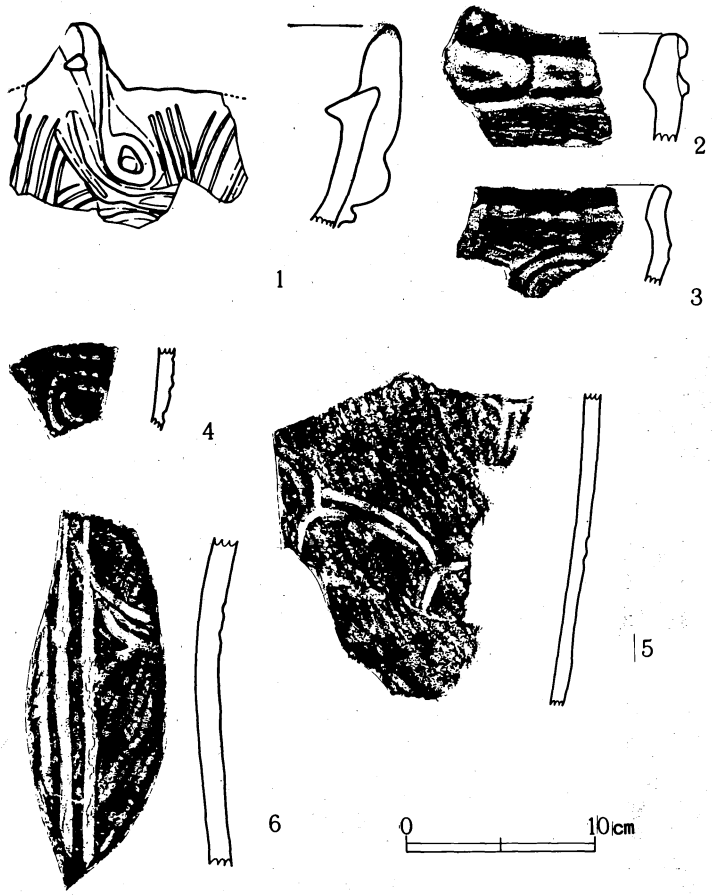
図—56　Ⅳ区歴史時代住居跡出土土器（Ⅰ）



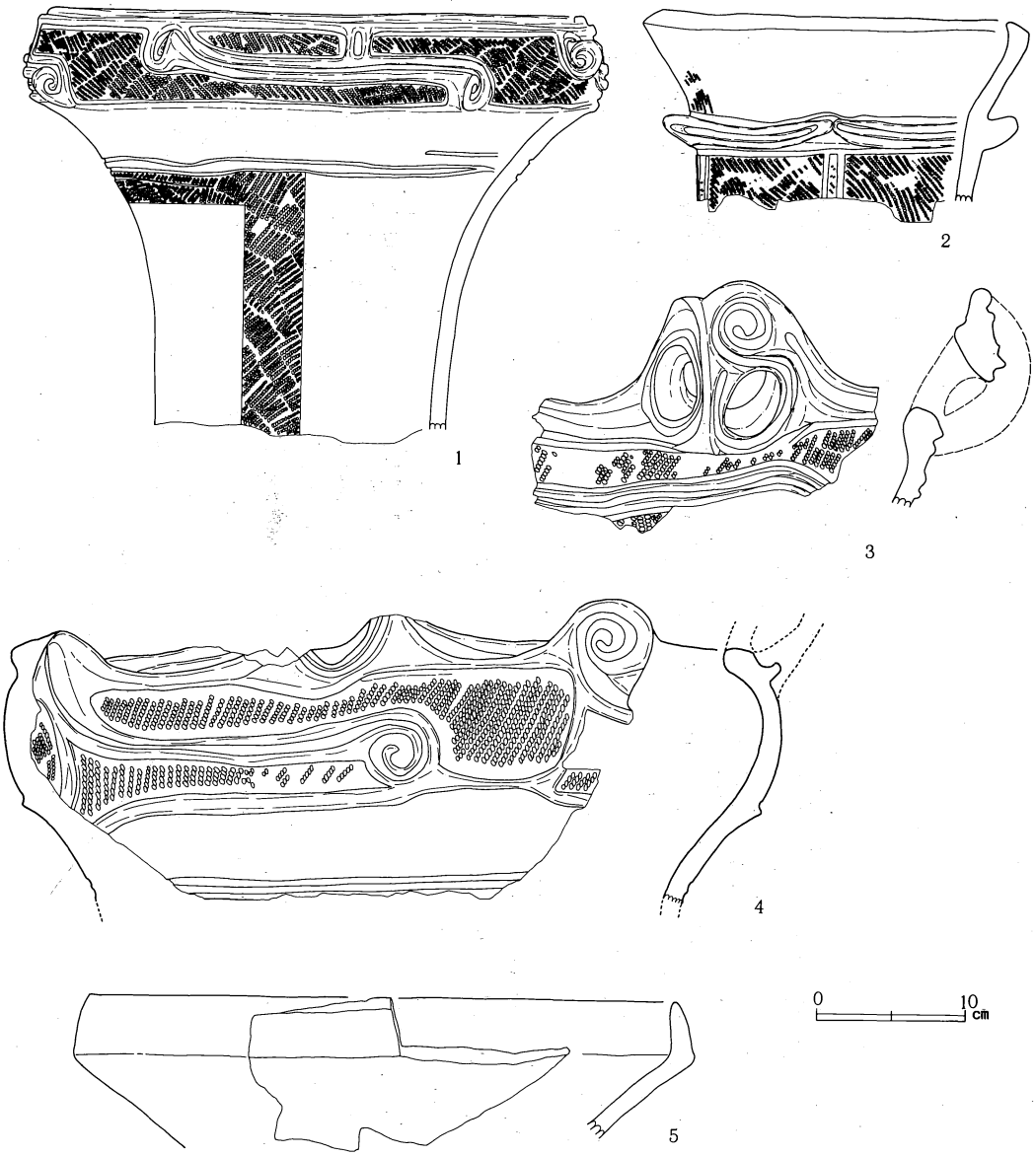
図—57　Ⅳ区歴史時代住居跡出土土器（2）



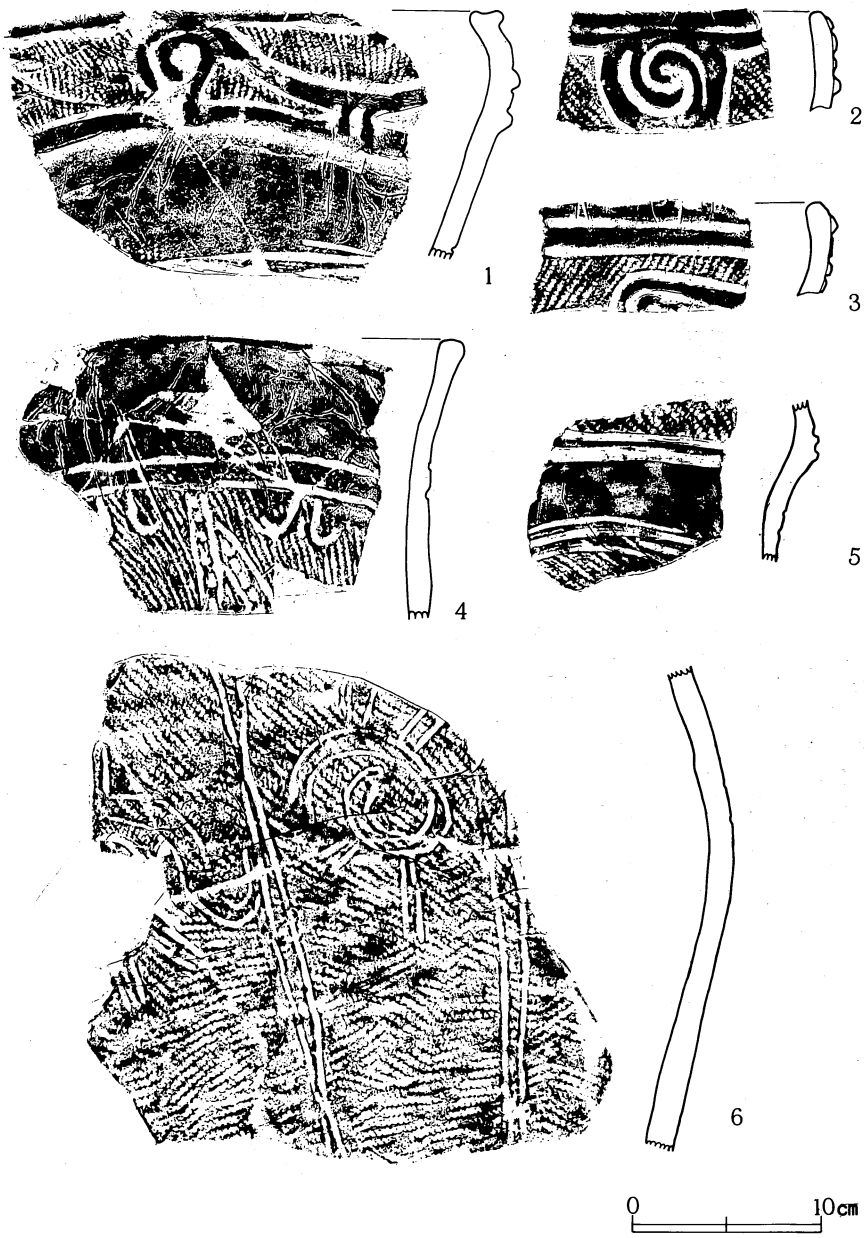
図—58　Ⅳ区歴史時代土壙出土土器



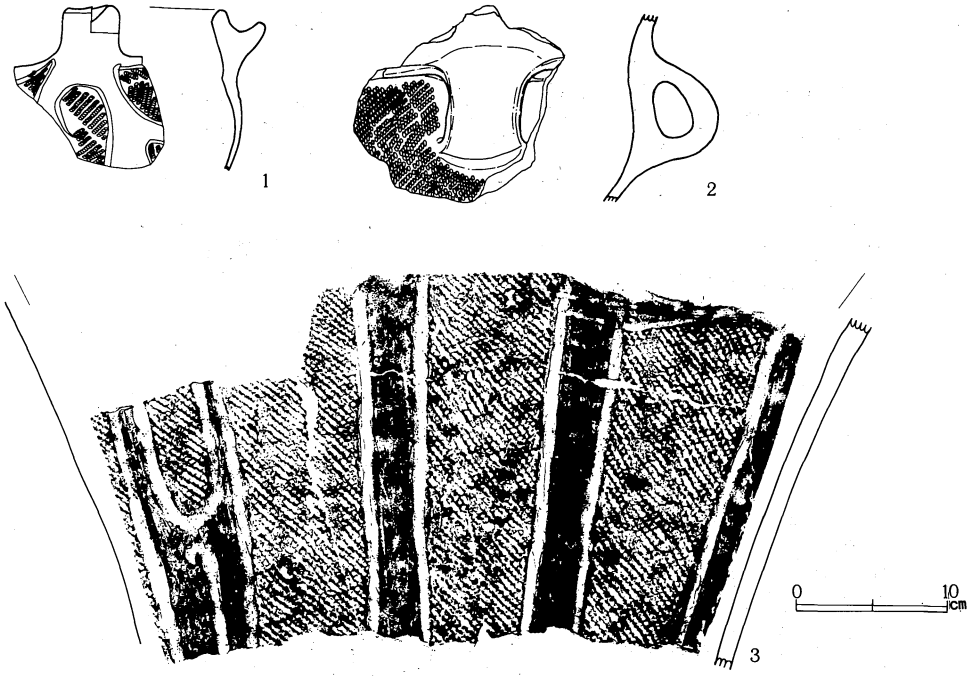
図—59　V区1号住居跡出土土器



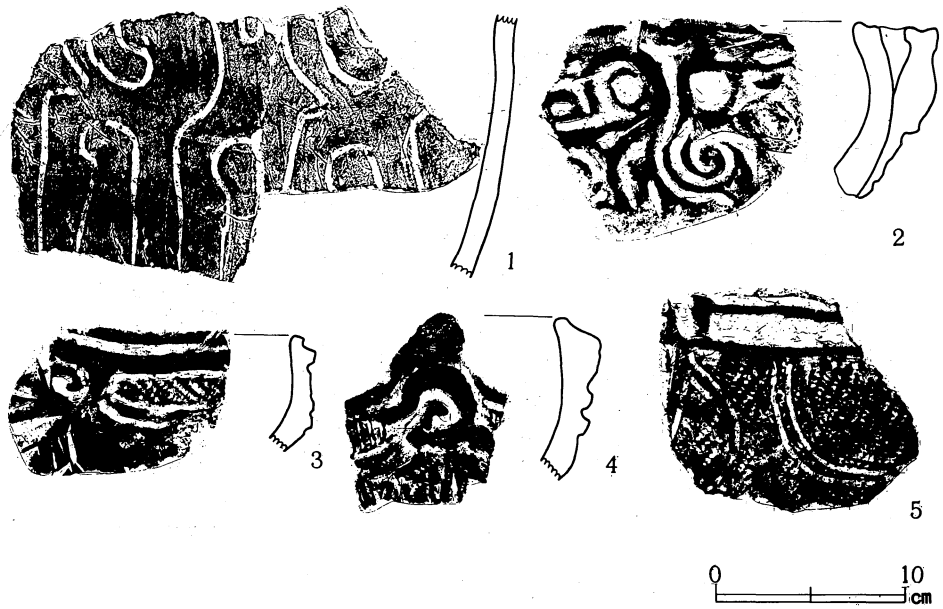
図—60　Ⅴ区２号住居跡出土土器（１）



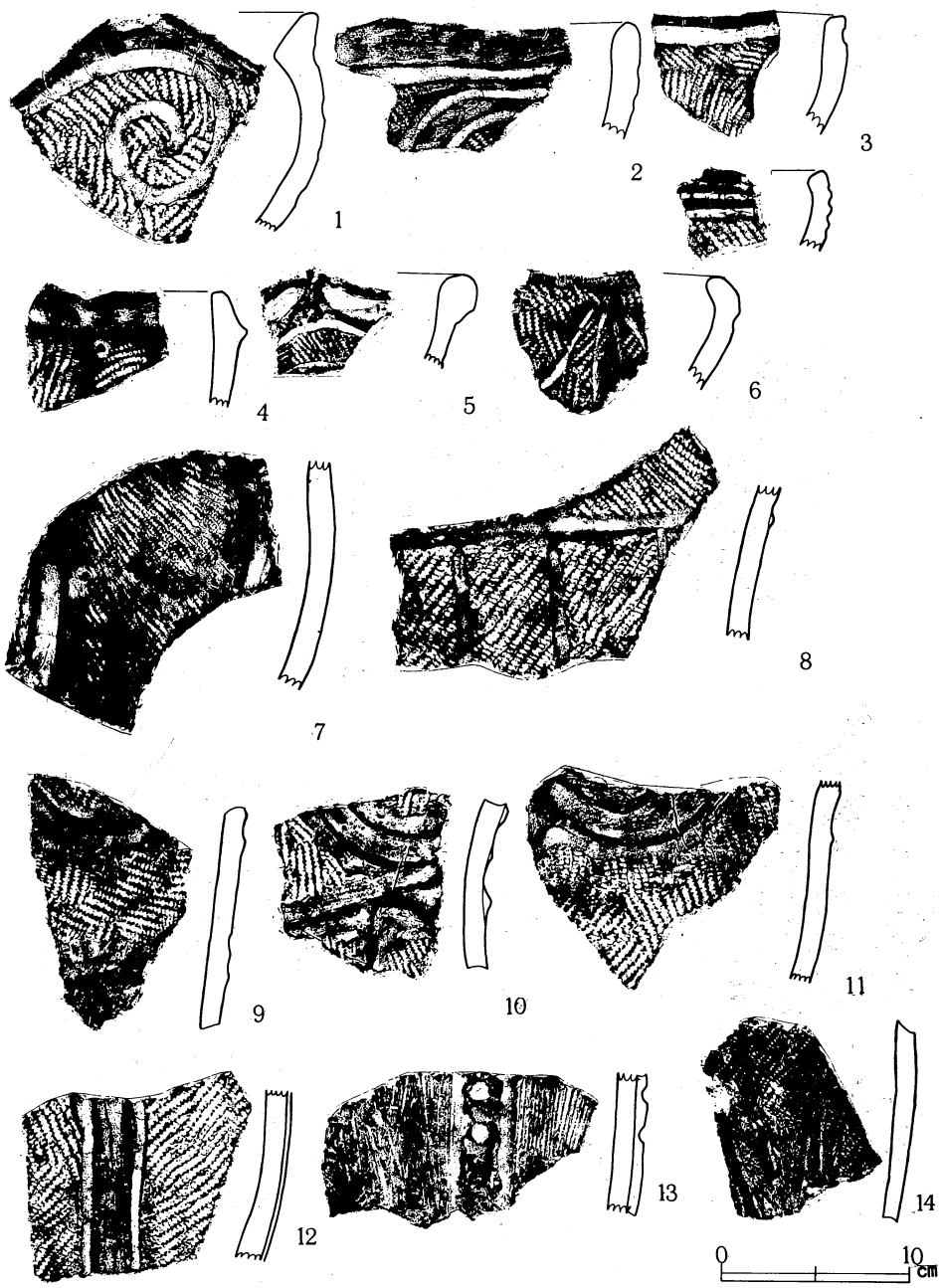
図—61　Ⅴ区２号住居跡出土土器（２）



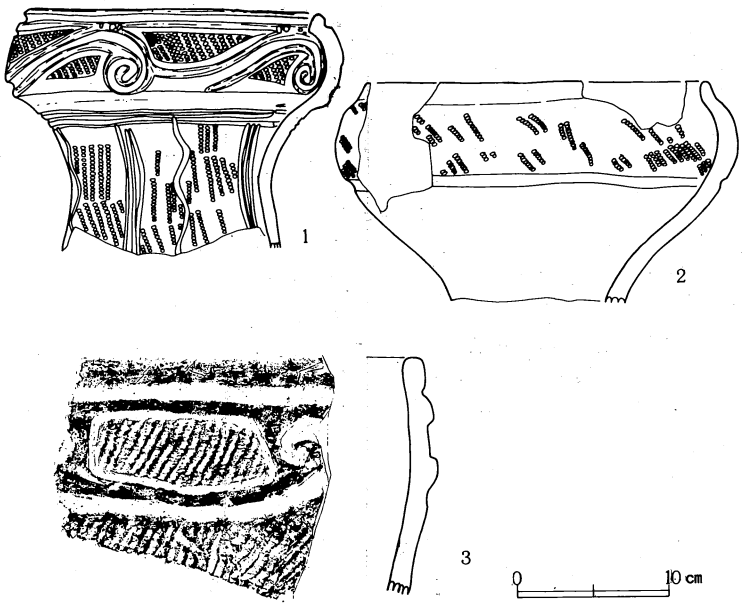
図—62　Ⅴ区３号住居跡出土土器（１）



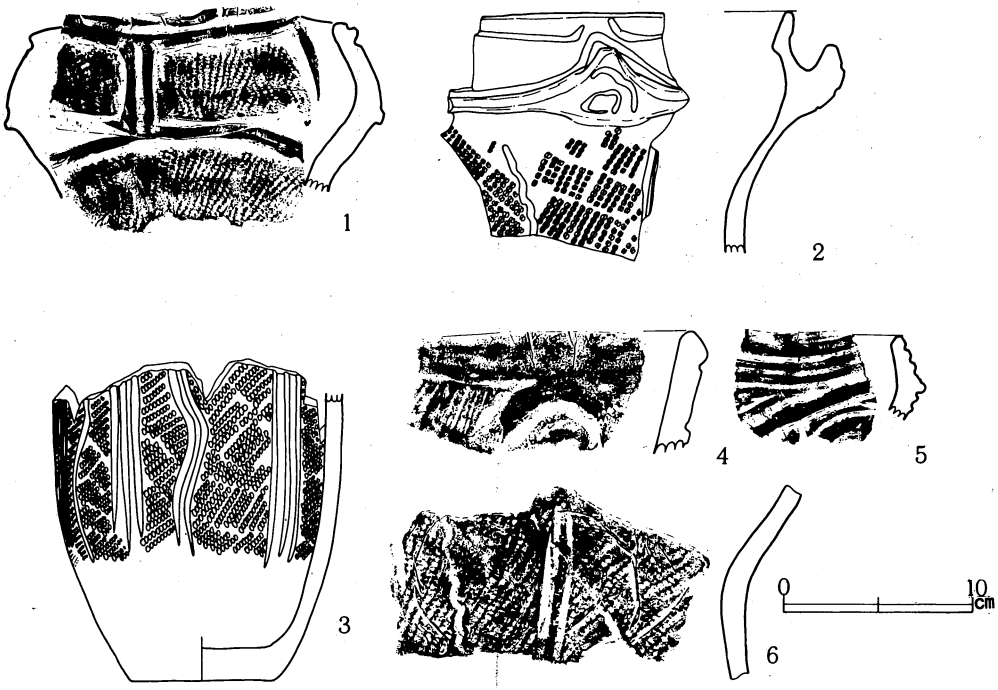
図—63　Ⅴ区３号住居跡出土土器（２）



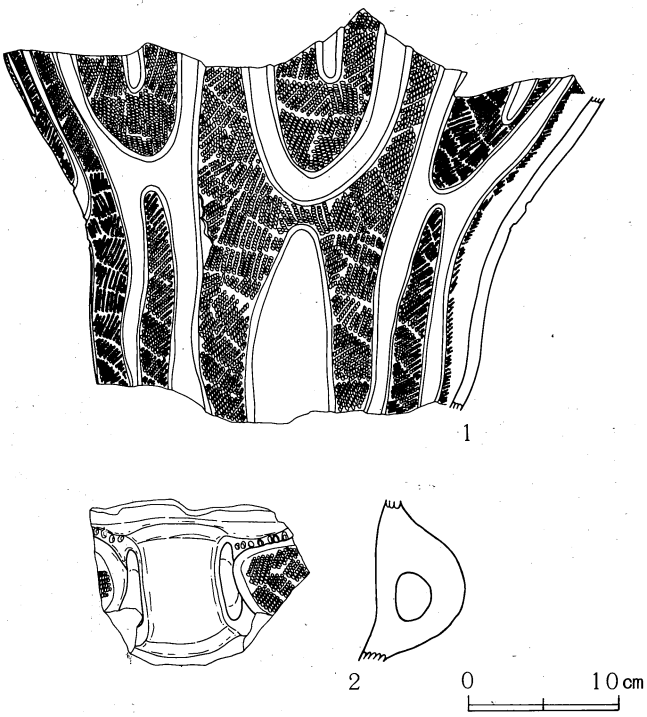
図—64　Ⅴ区３号住居跡出土土器（３）



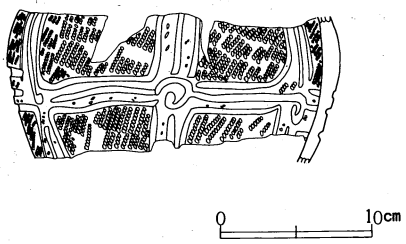
図—65　Ⅴ区４号住居跡出土土器



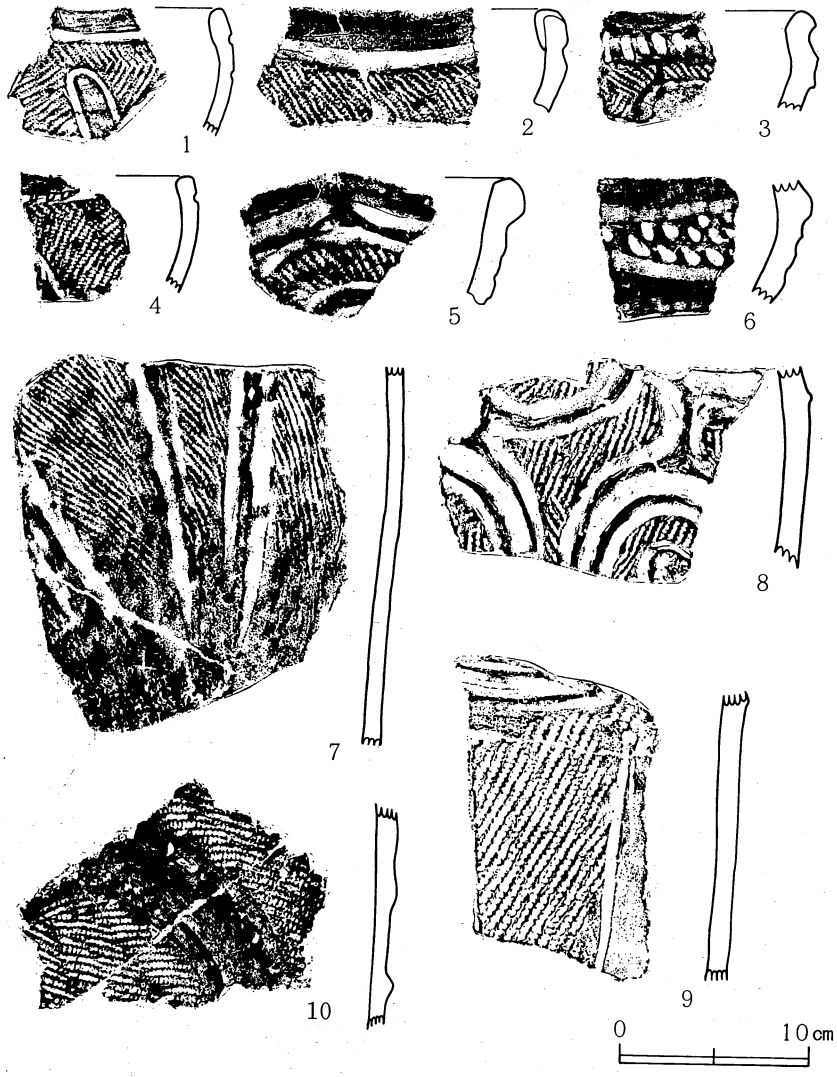
図—66　Ⅴ区５号住居跡出土土器



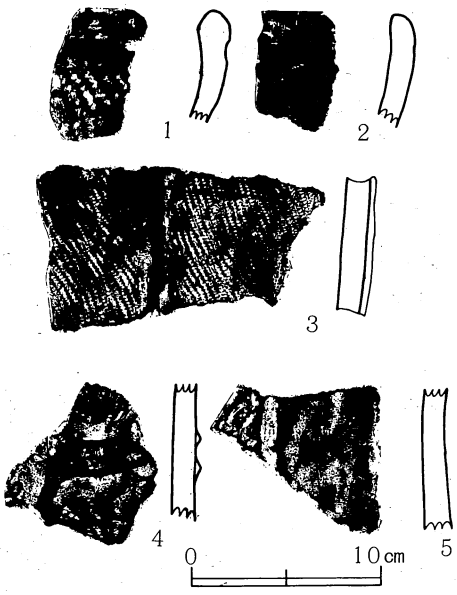
図—67　Ⅴ区1号屋外炉使用土器，周辺出土土器



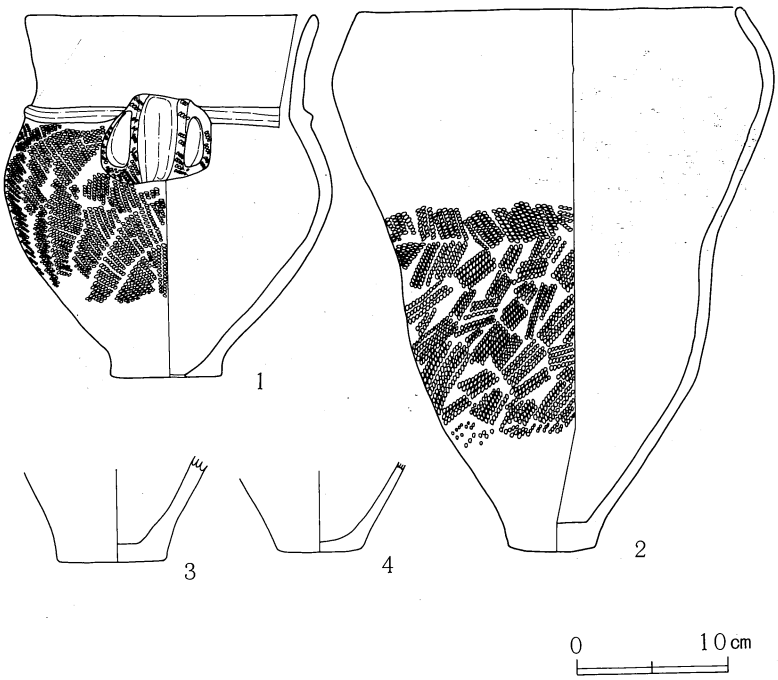
図—68　Ⅴ区2号屋外炉使用土器



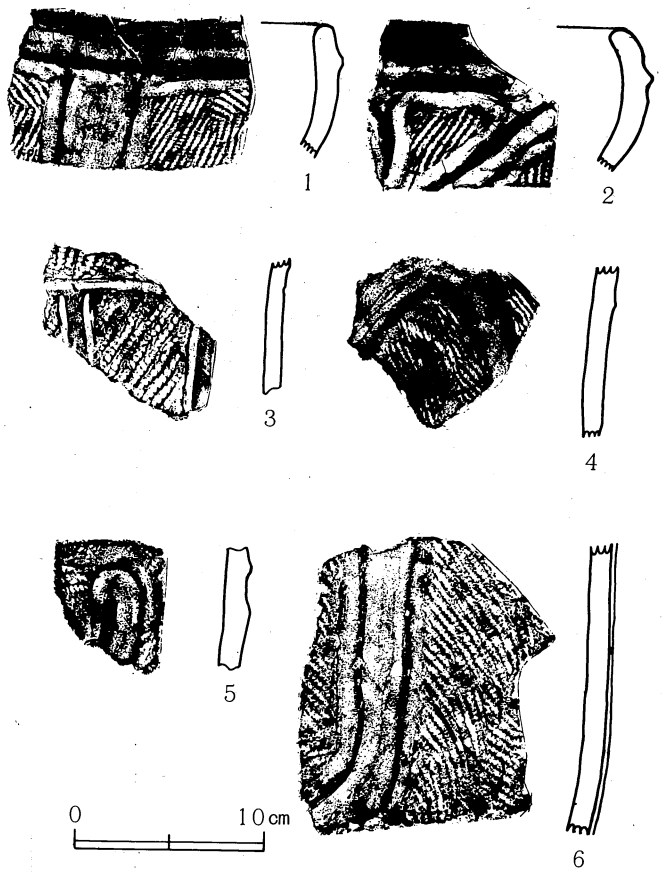
図—69　Ⅴ区Ⅰ号屋外炉周辺出土土器（2）



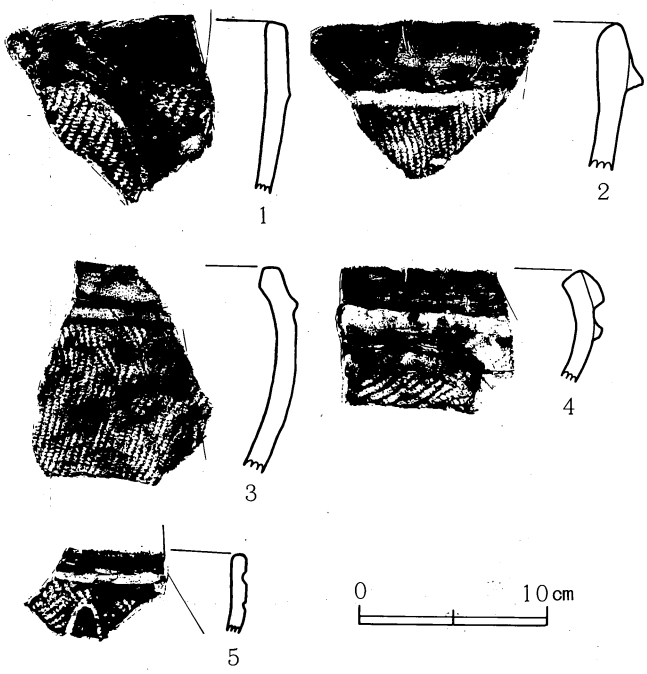
図—70　V区1号土壙出土土器



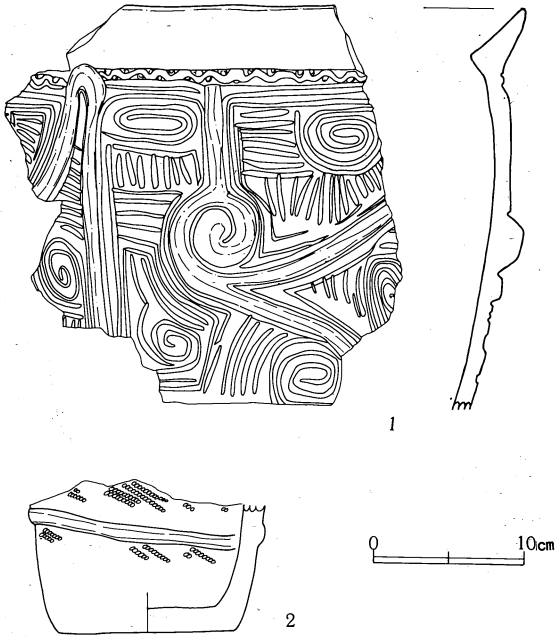
図—71　V区2号土壙出土土器（1）



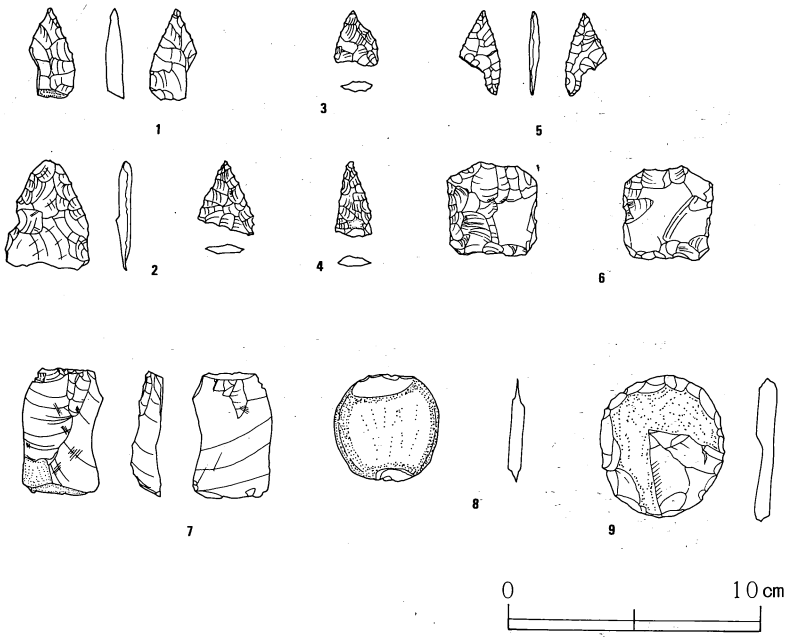
図—72　Ⅴ区２号土壙出土土器（２）



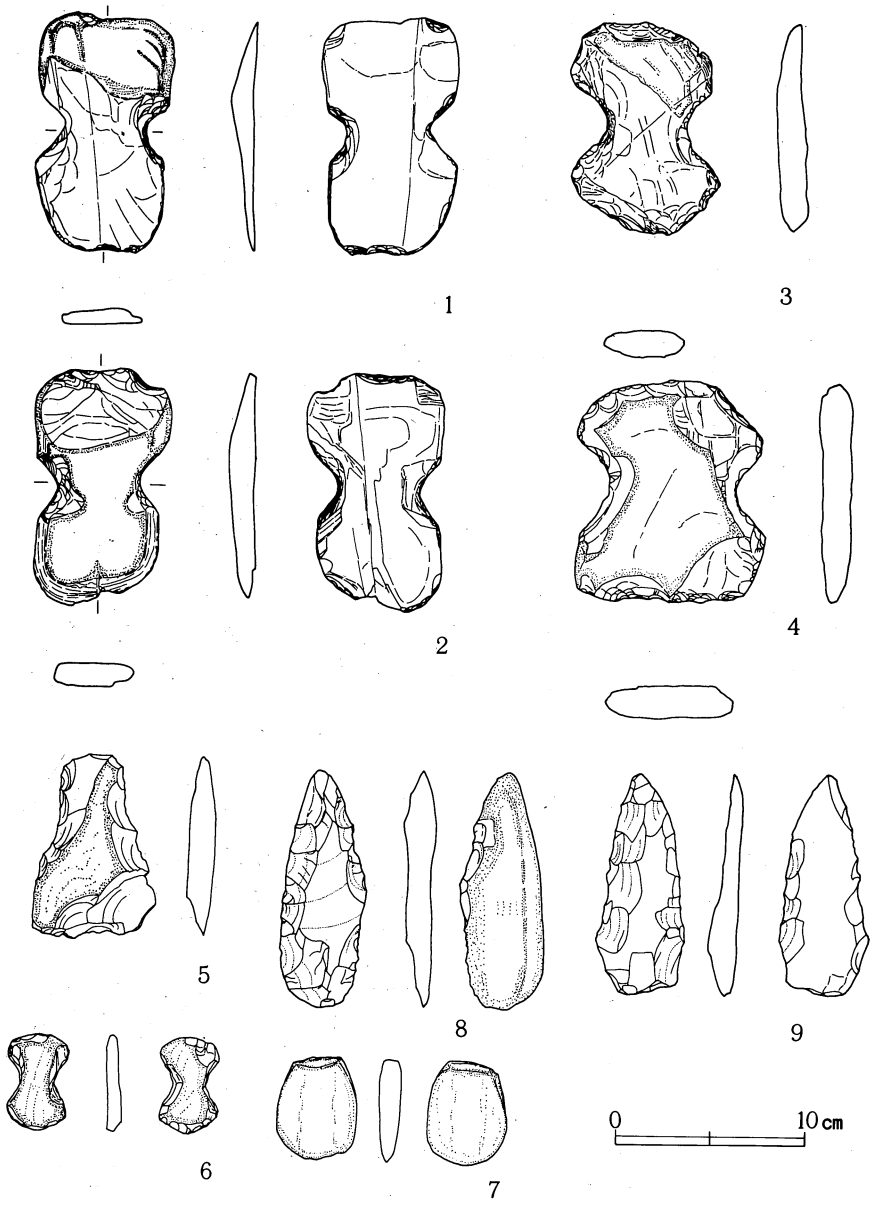
図—73　Ⅴ区３号土壙出土土器



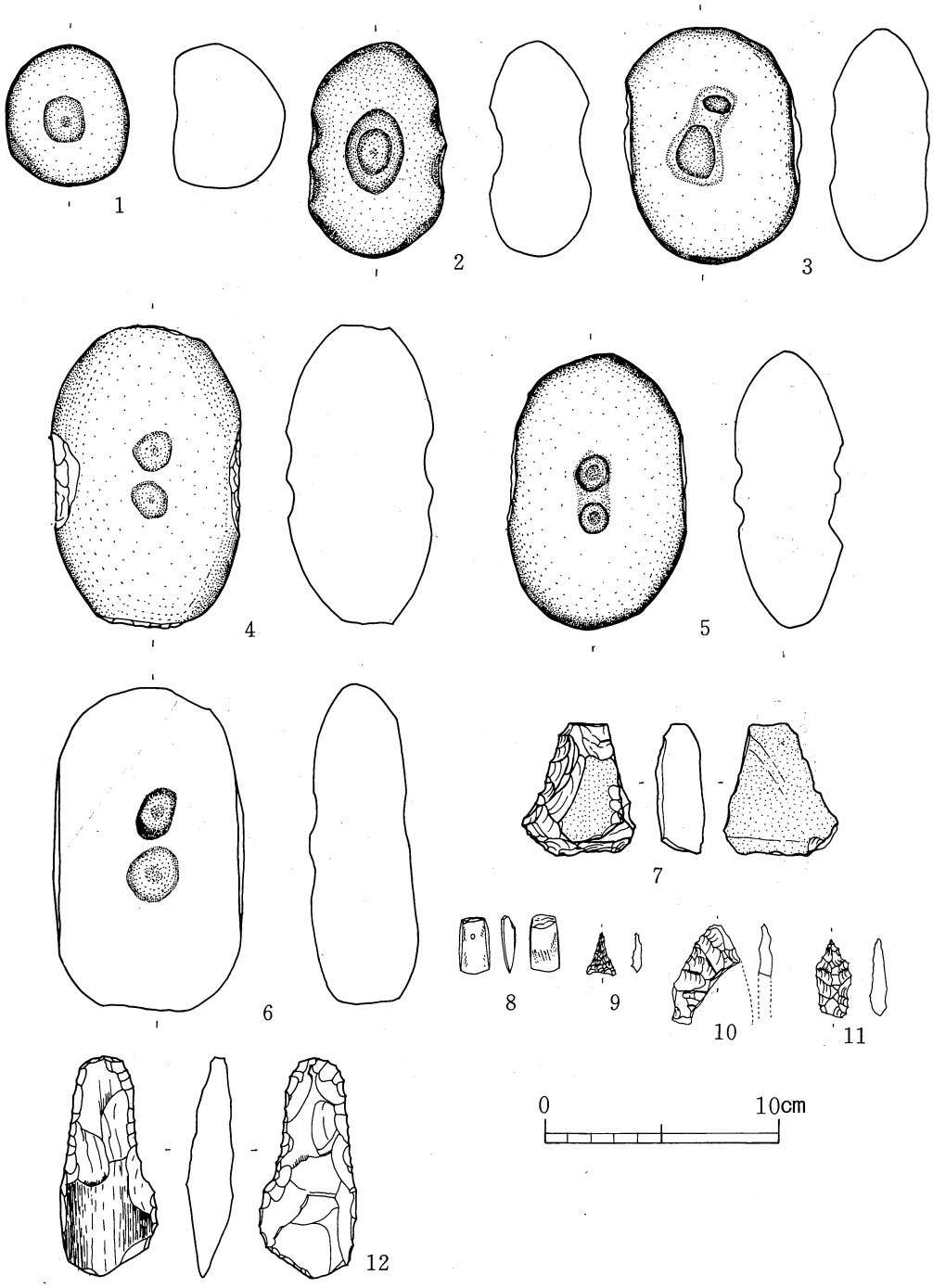
図—74　Ⅴ区遺構に伴わない土器



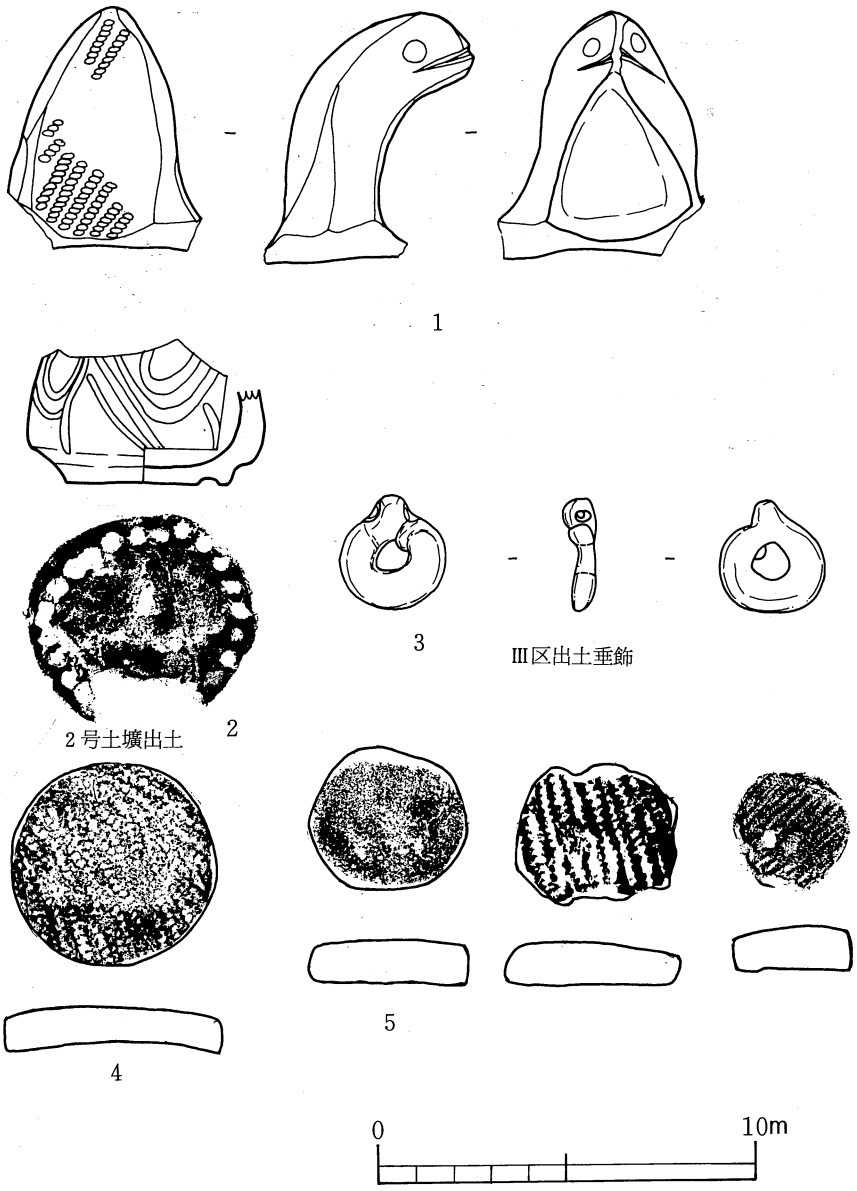
図—75　北の内遺跡出土石器（Ⅰ）



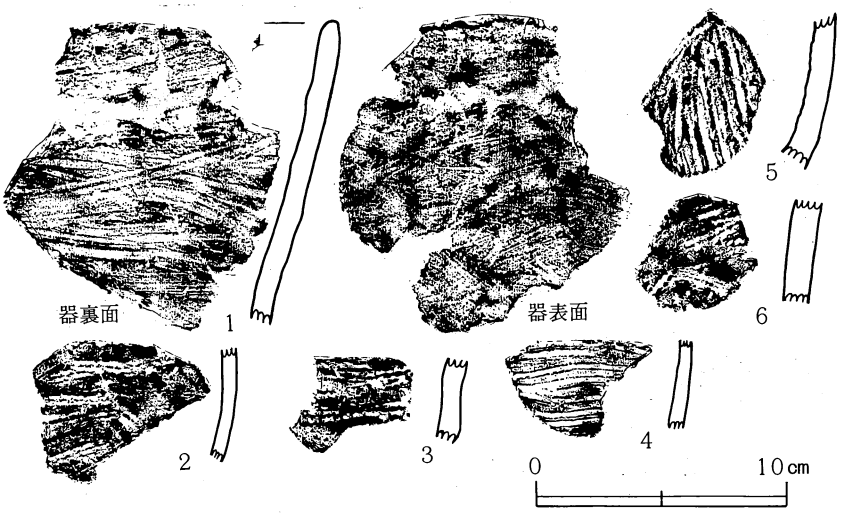
図—76　北の内遺跡出土石器（2）



図—77　北の内遺跡出土石器（3）



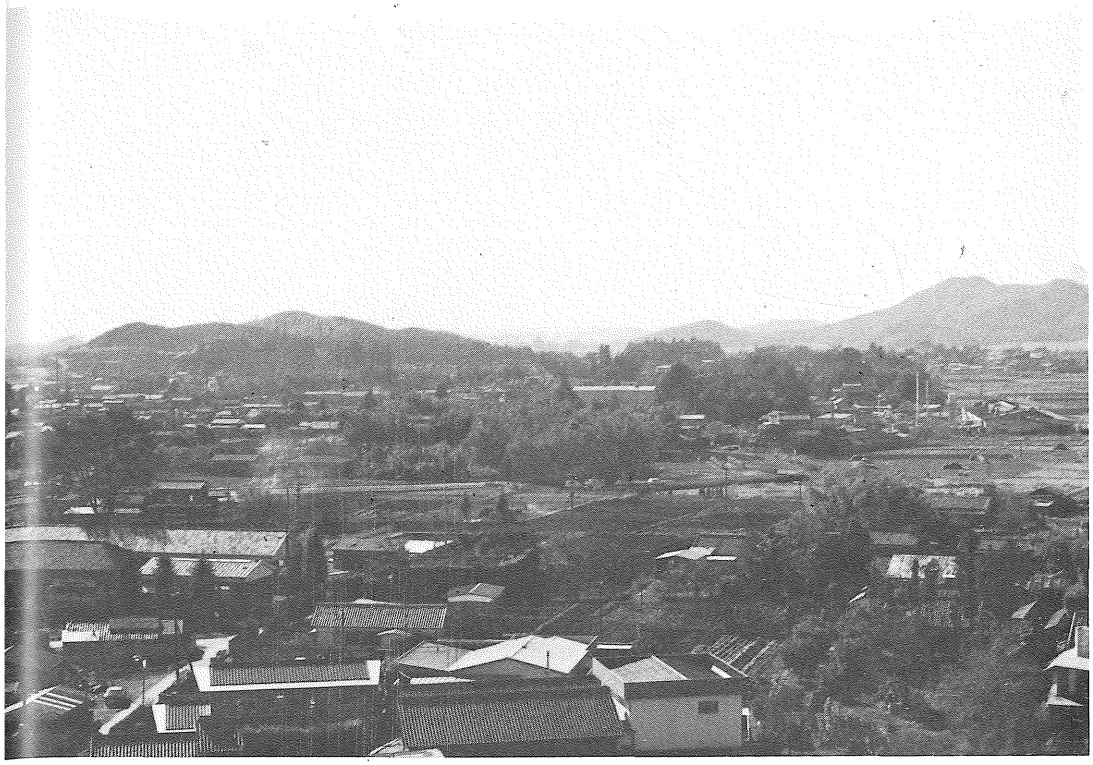
図—78　北の内遺跡出土土製品

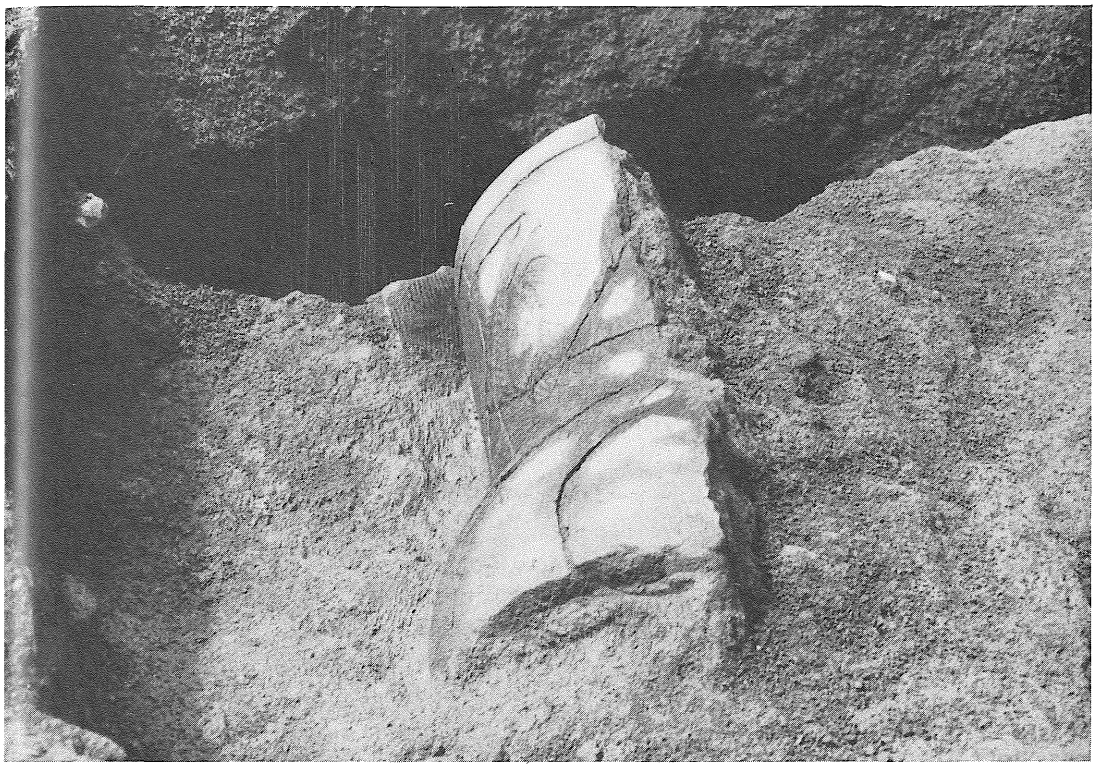


図—79　Ⅰ区炉穴（1～4），2号住居跡内土壙（5～6）出土土器

写　真　図　版

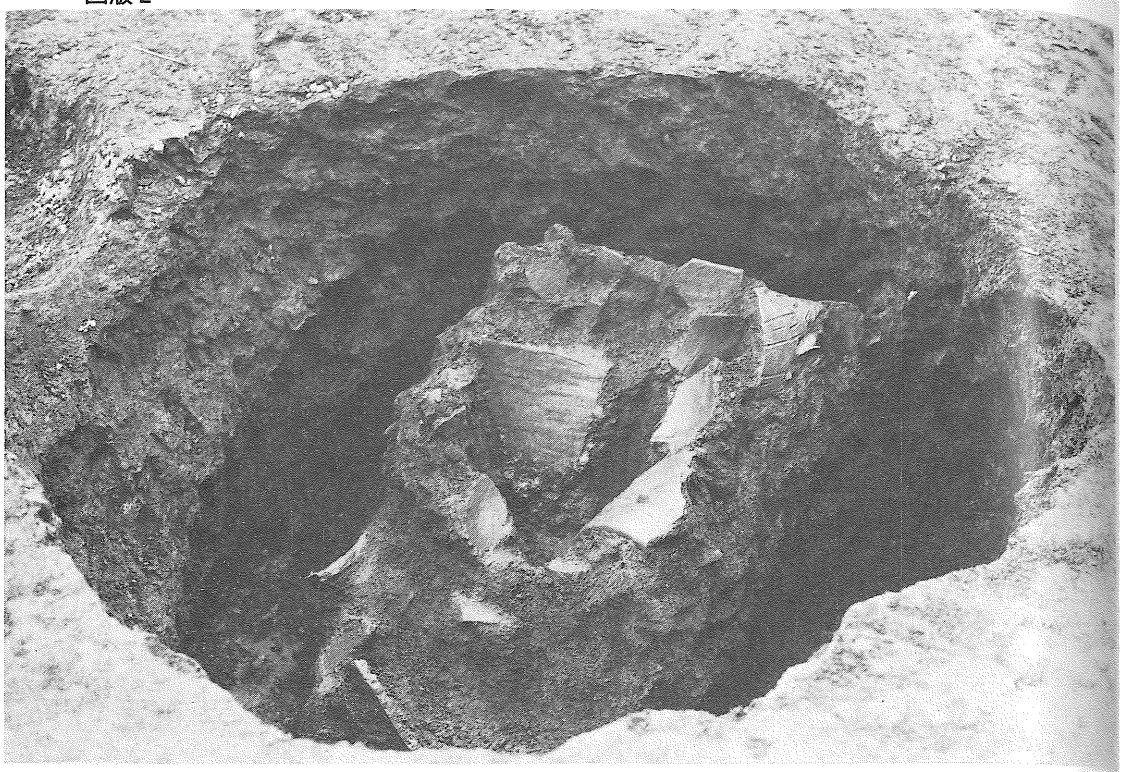
※　遺物写真各々の下につけられた番号は，遺物実測図・拓影各各の番号に符合する。照合する際不都合なものと考えられる遺物写真の下には図番号を付した。





上　遺跡遠景
下　Ⅰ区1号土壙遺物出土状況

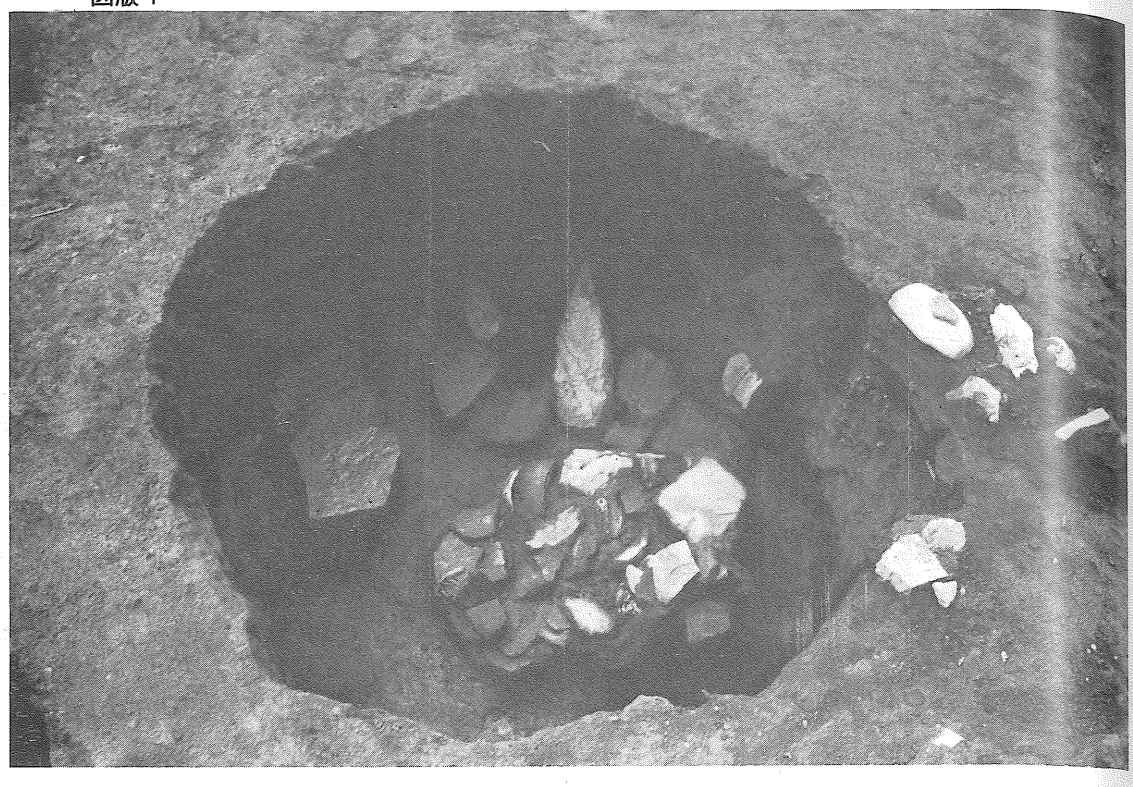
図版 2



上　Ⅰ区 2 号土壙
下　Ⅰ区炉穴

上　Ⅰ区8号土壙
下　Ⅰ区2号住居跡（南東より）

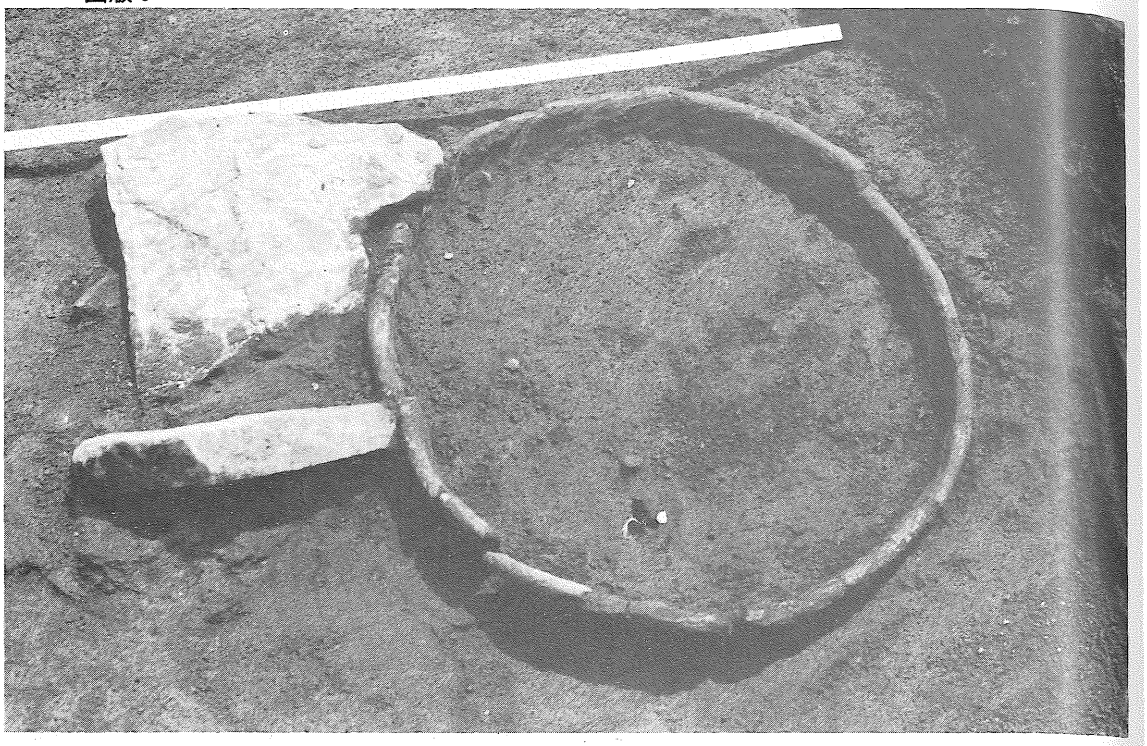
図版 4



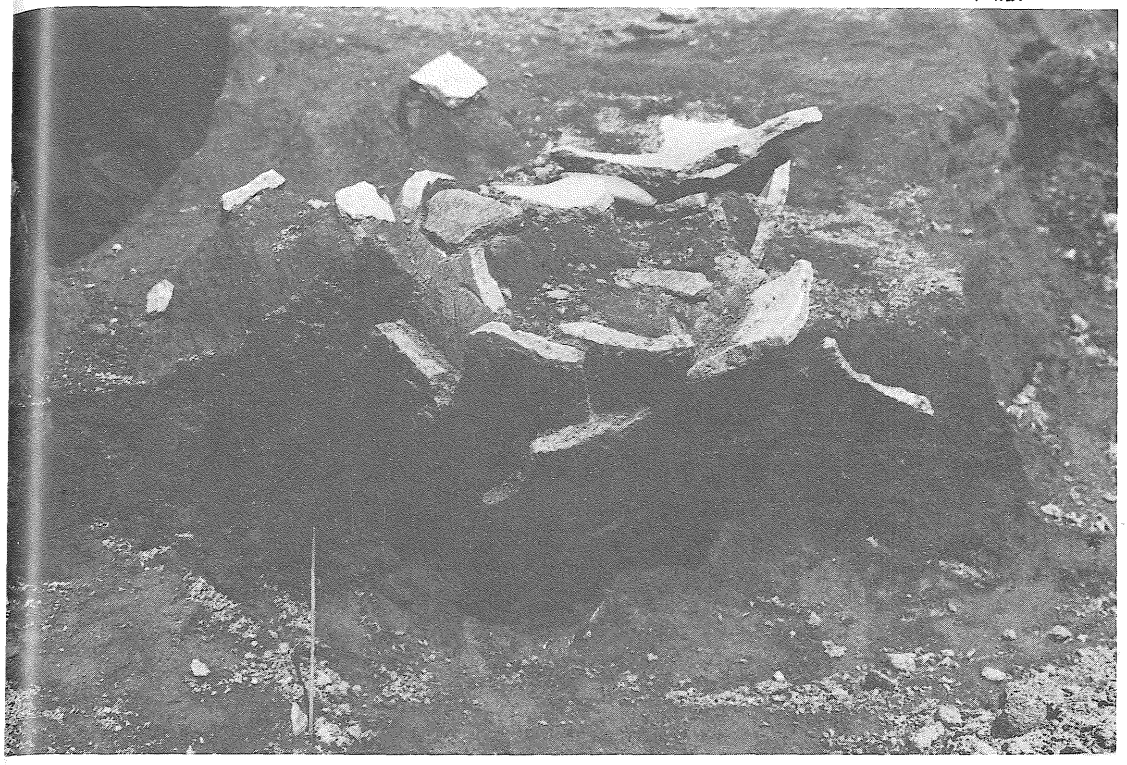
上　Ⅱ区２号土壙
下　Ⅱ区古墳時代住居跡（調査中）

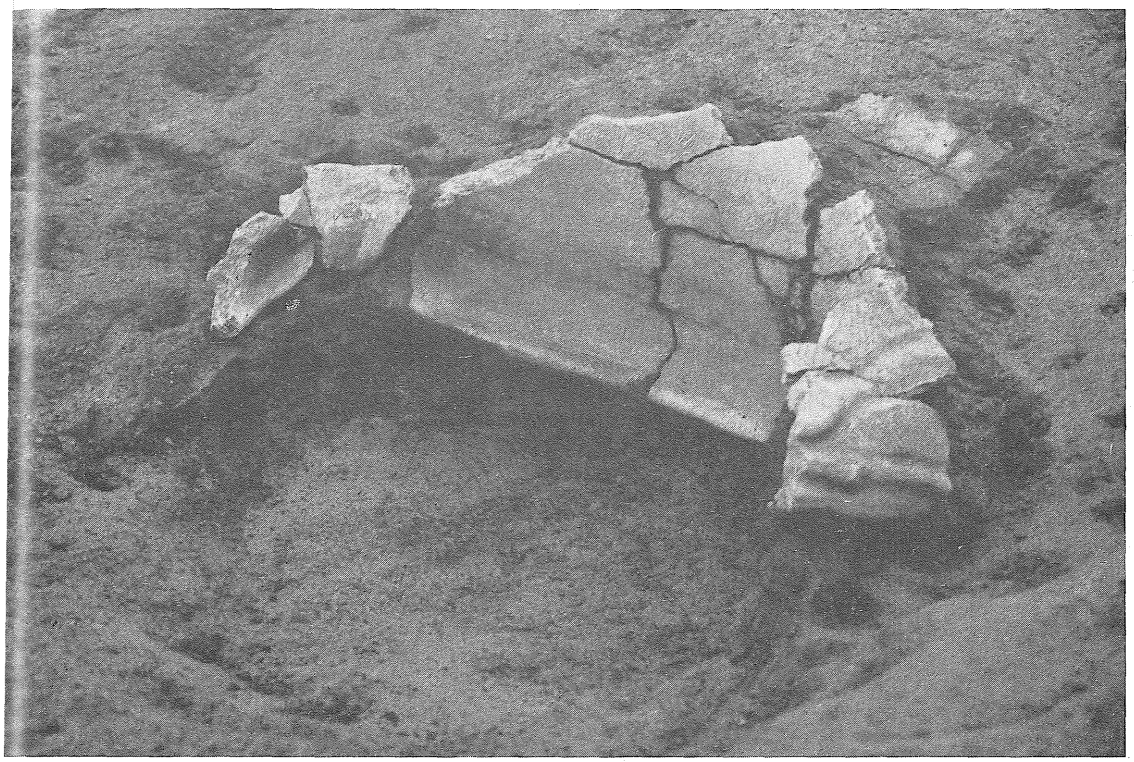
上　Ⅱ区古墳時代住居跡遺物出土状況（鉢，甕，住居跡南東隅）
下　Ⅱ区古墳時代住居跡遺物出土状況（坏，住居跡北西隅）

図版 6



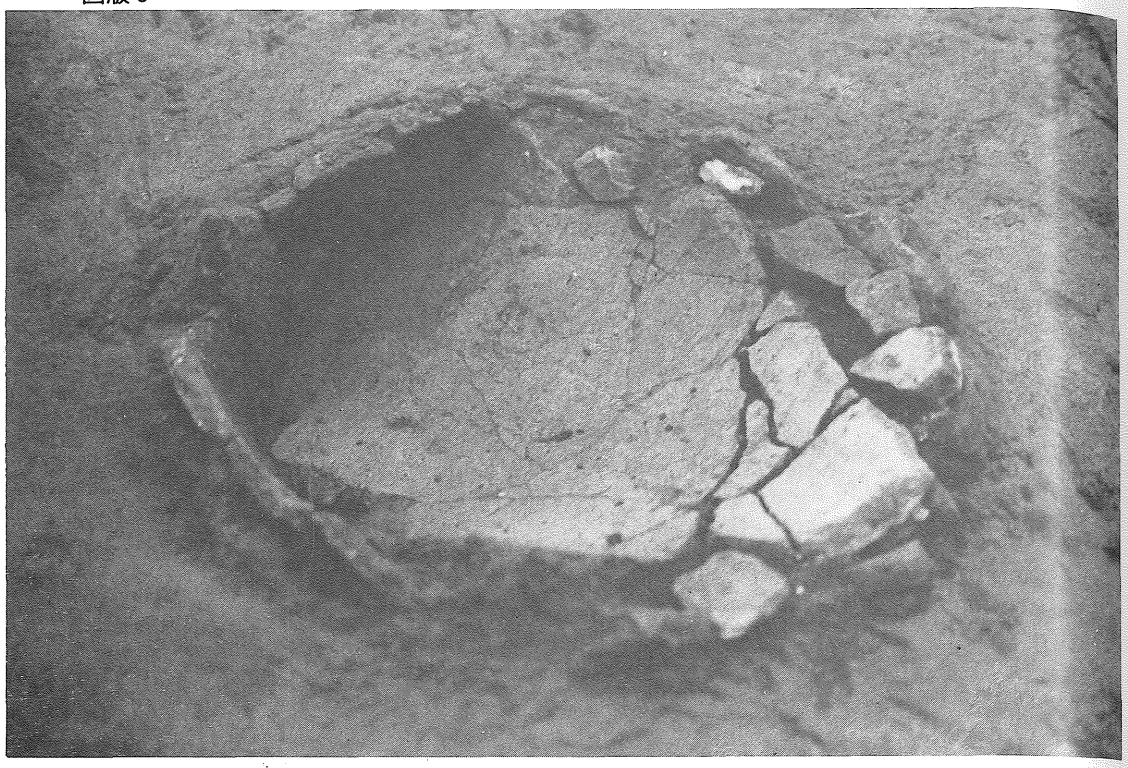
上　Ⅲ区 1 号埋甕
下　Ⅲ区 2 号埋甕

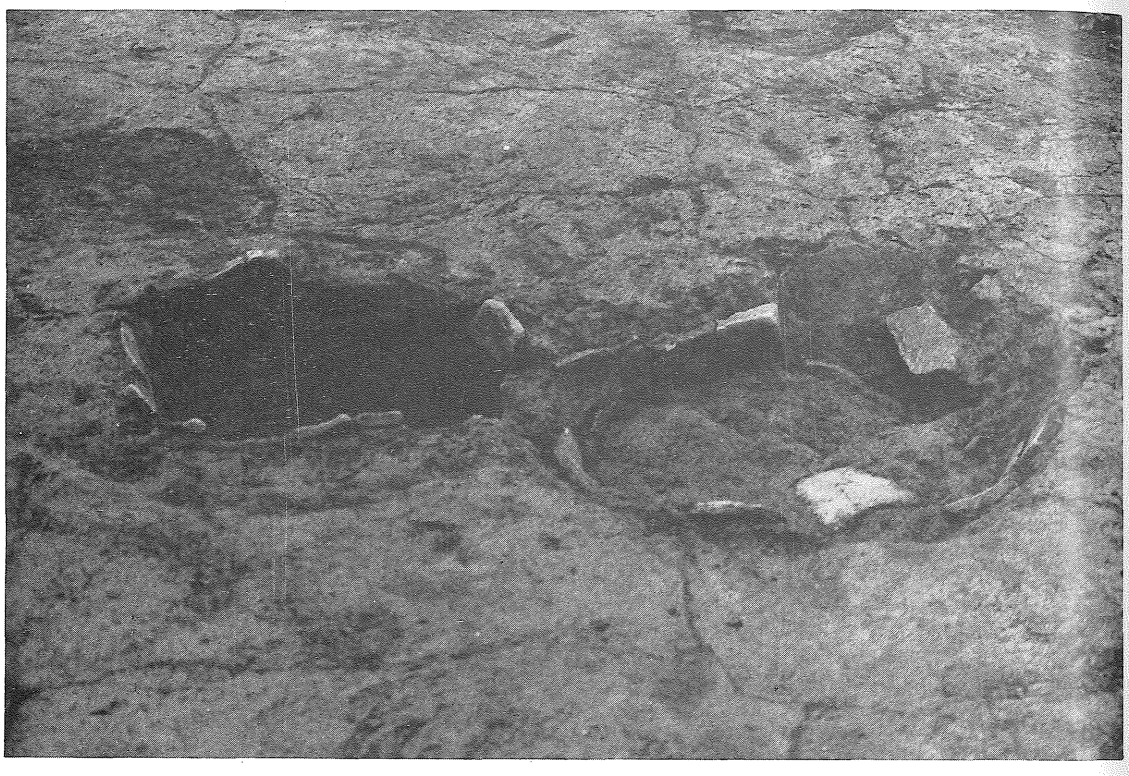




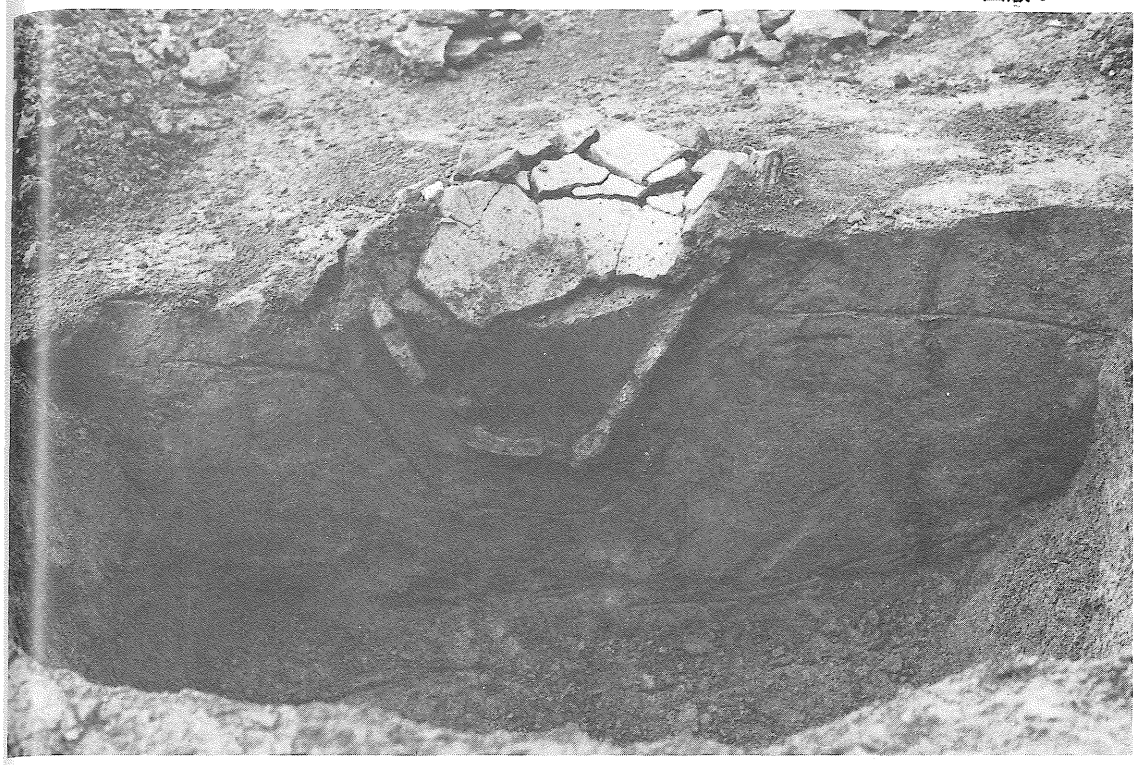
上　Ⅲ区 3 号埋甕
下　Ⅲ区 4 号埋甕

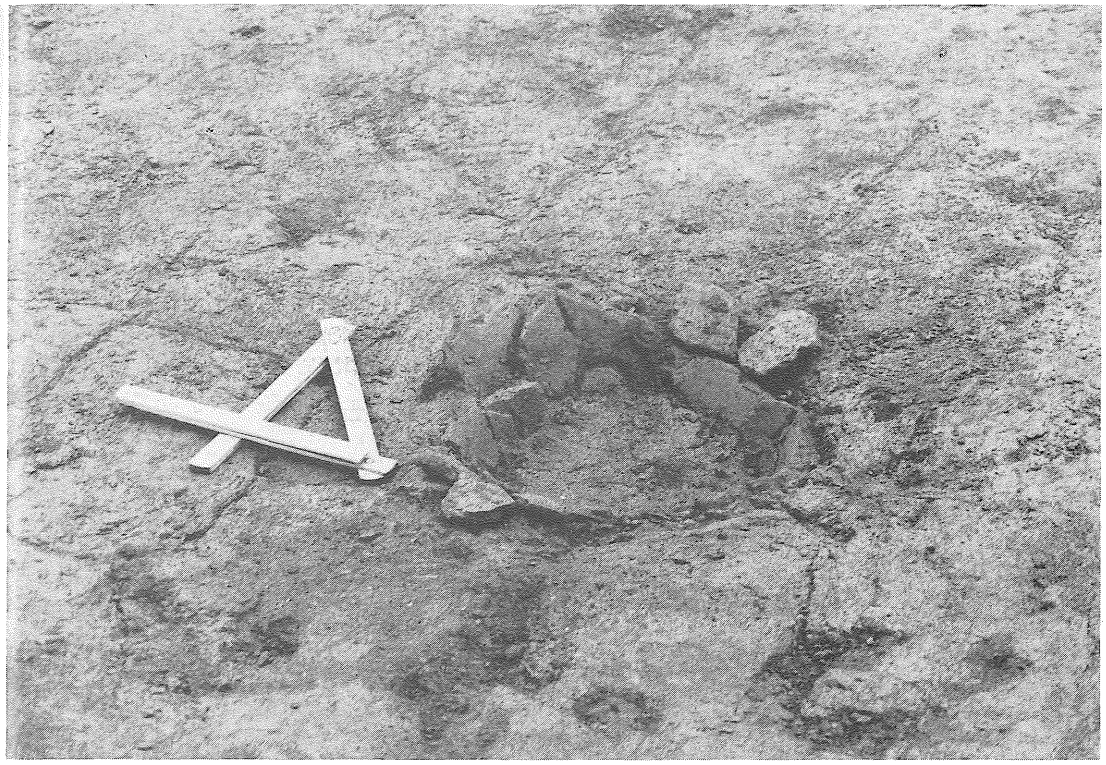
図版8





上　Ⅳ区1号埋甕
下　Ⅳ区2号，3号，埋甕

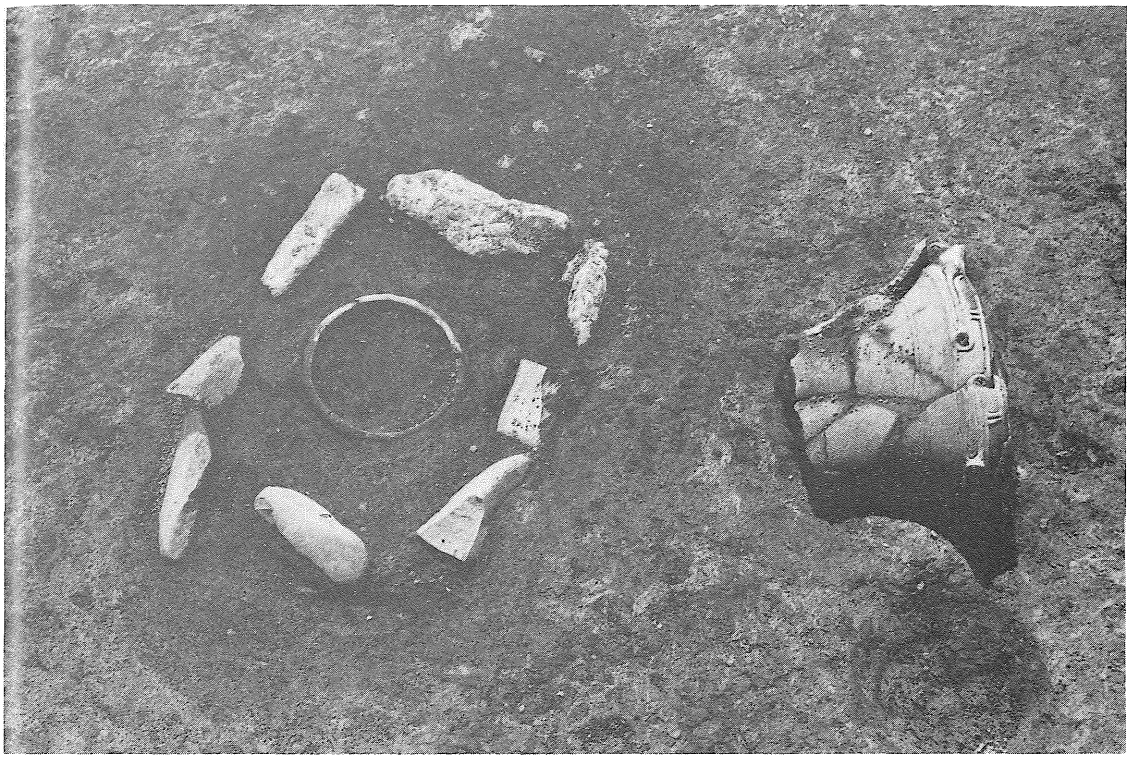




上　Ⅳ区 1 号埋甕断面
下　Ⅳ区 5 号埋甕

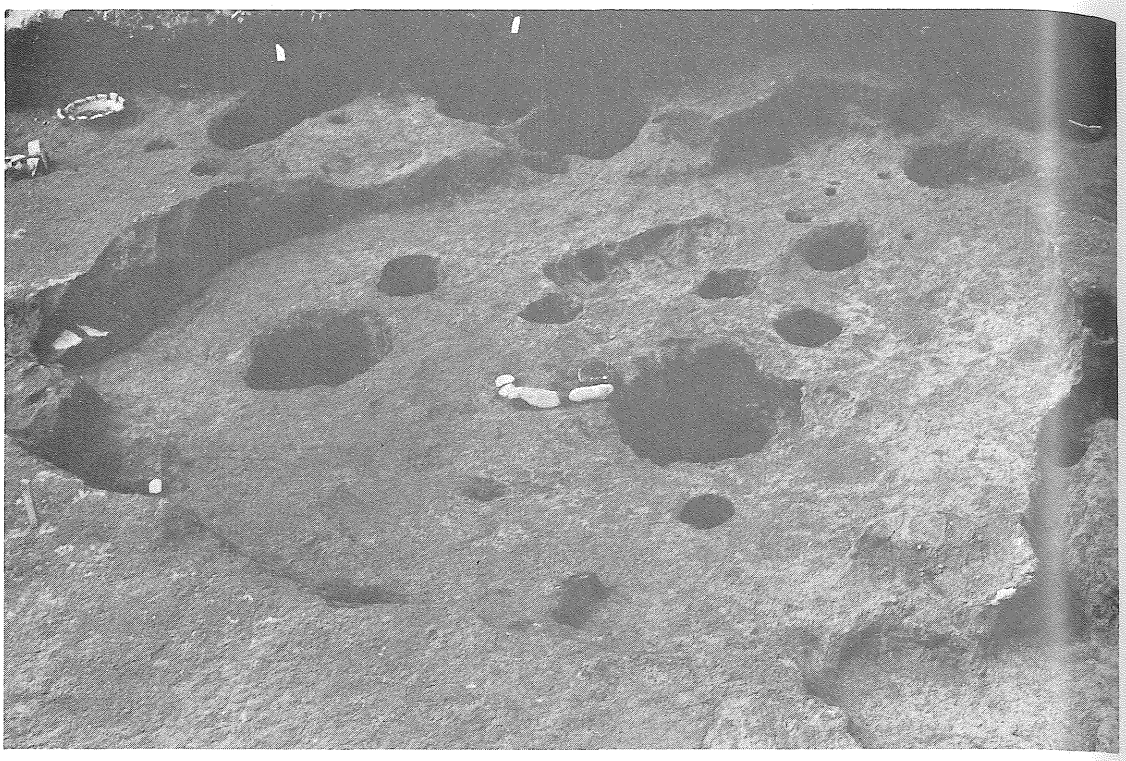
図版10

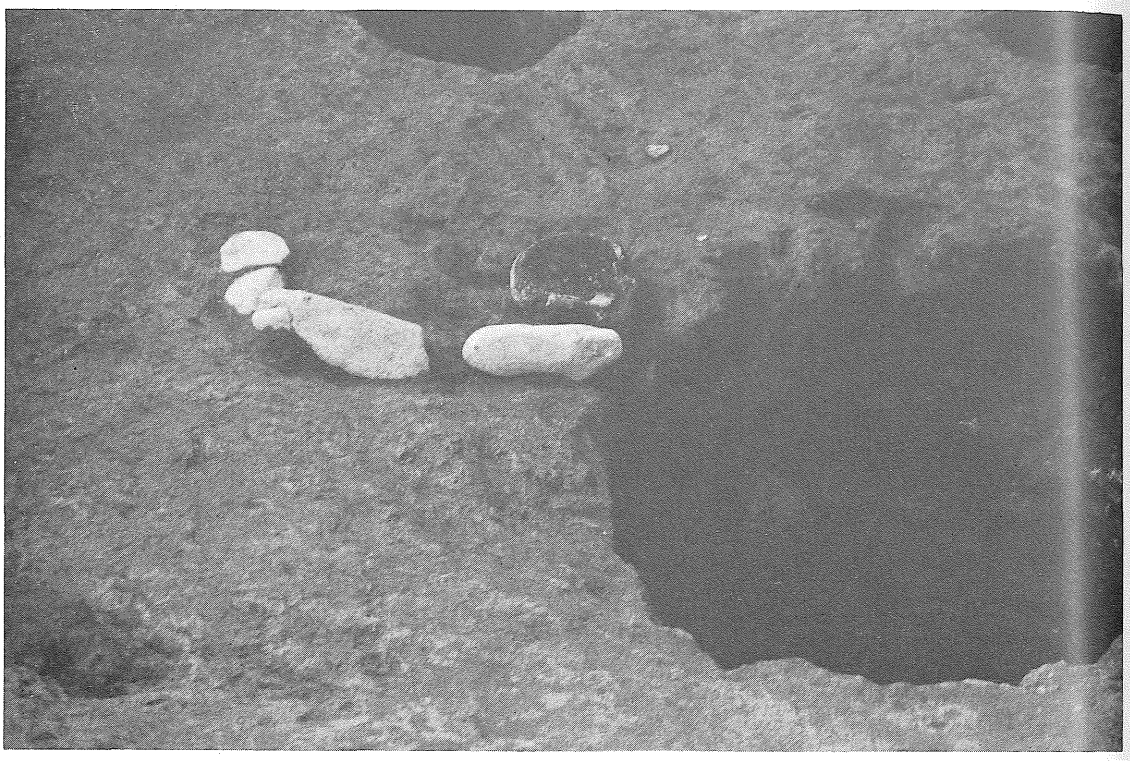
上　Ⅴ区５号住居跡（遠方は左より３号，２号，１号住居跡）
下　Ⅴ区１号住居跡，２号屋外炉



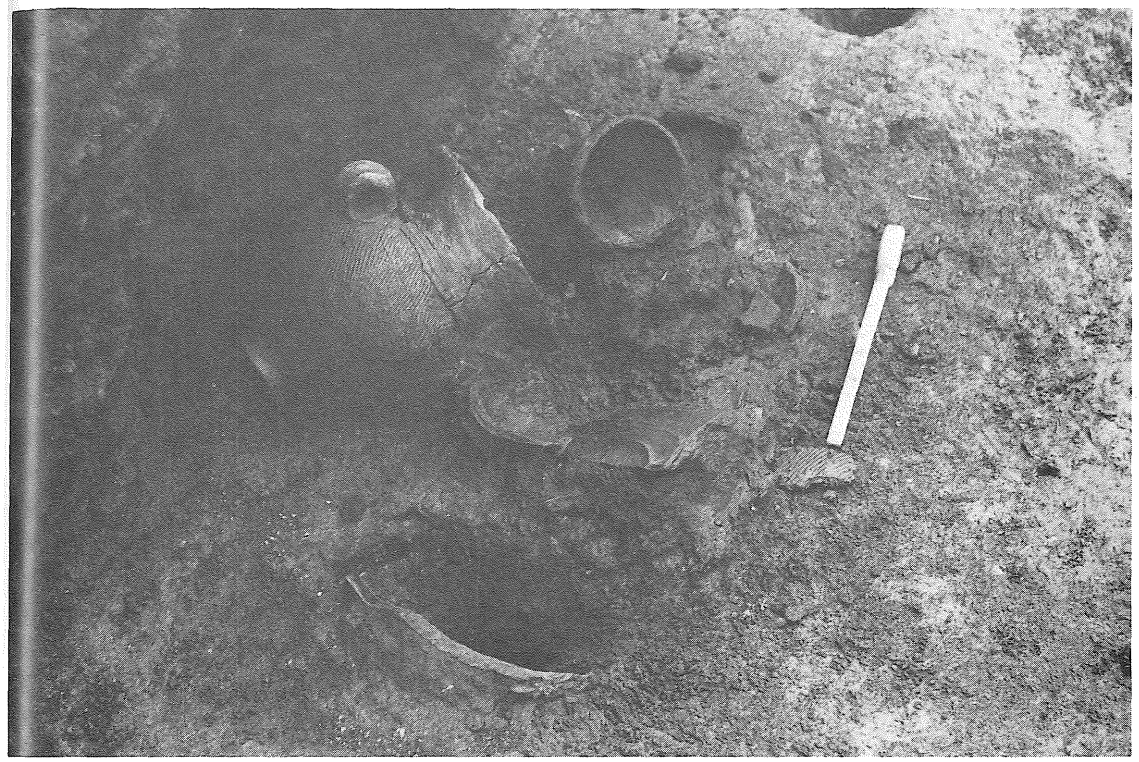
上　Ⅴ区２号住居跡（南より）
下　Ⅴ区２号住居跡，石囲炉

図版12





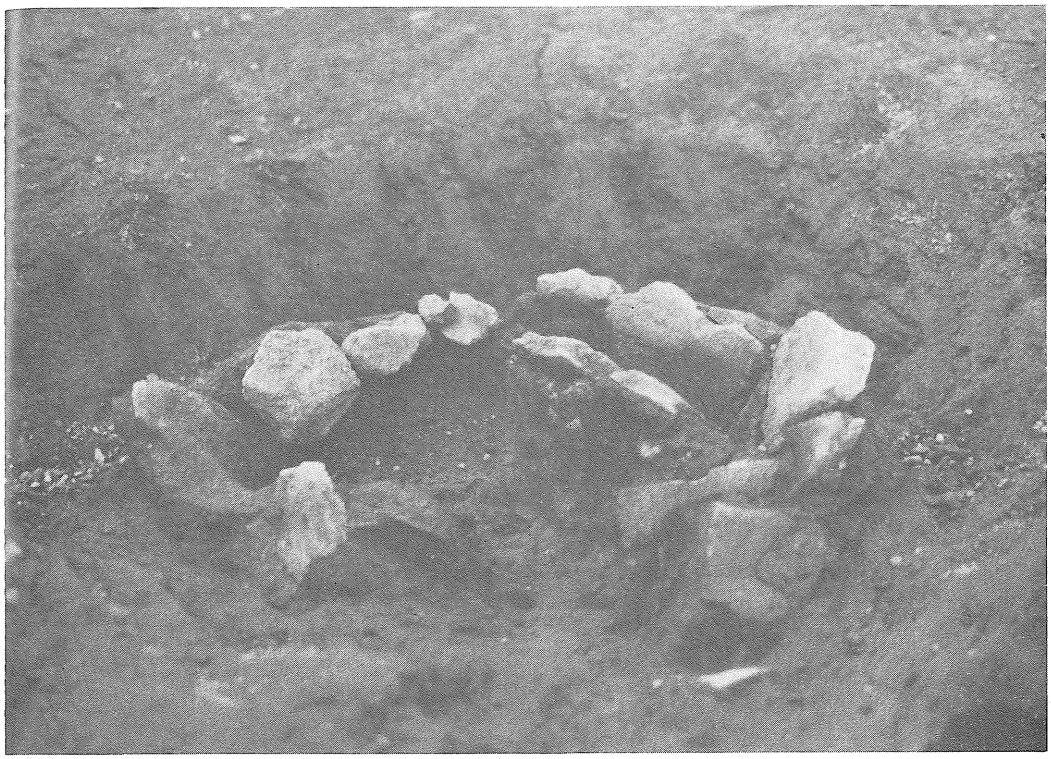
上　Ⅴ区４号住居跡
下　Ⅴ区４号住居跡石囲炉

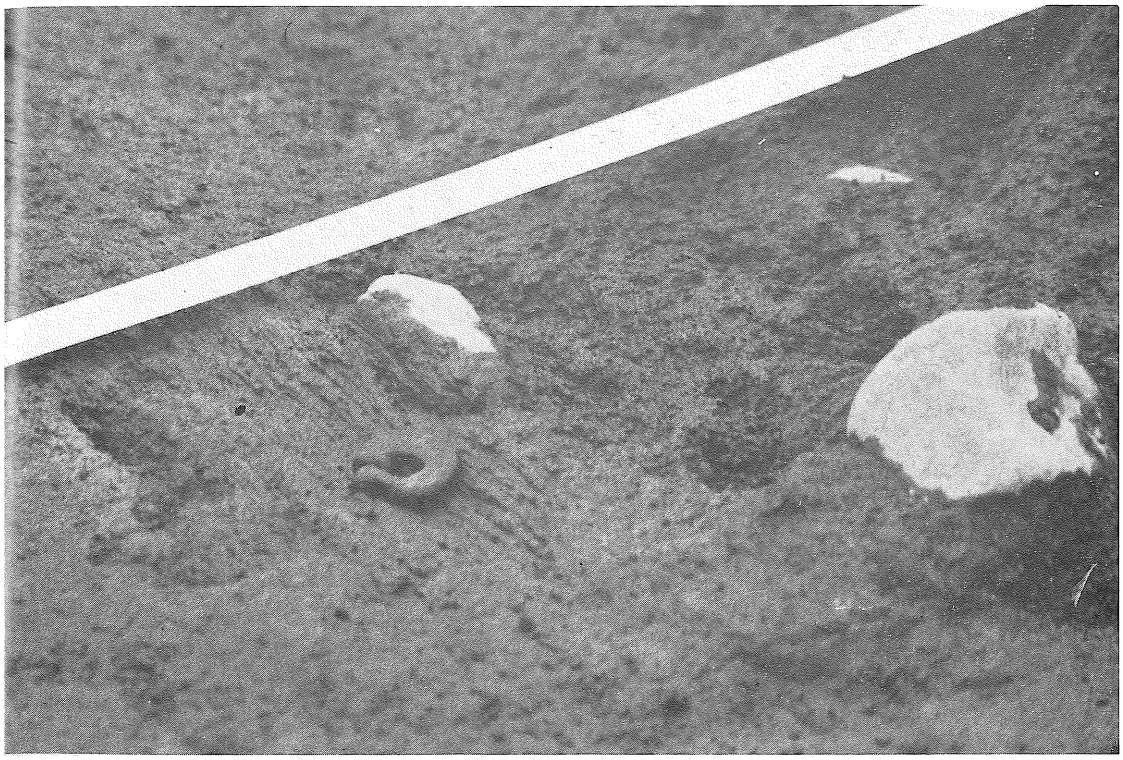


上　Ⅴ区５号住居跡
下　Ⅴ区２号土壙遺物出土状況

図版14

上　Ⅴ区１号屋外炉とその周辺
下　Ⅴ区１号屋外炉

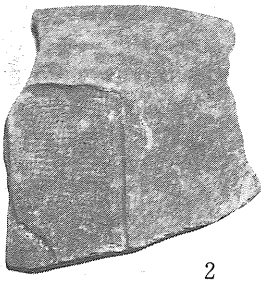




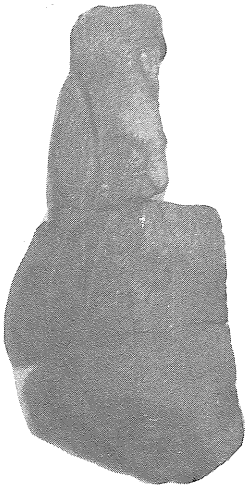
上　Ⅱ区２号土壙そば埋甕
下　Ⅲ区土製品（垂飾）出土状況

図版16

1

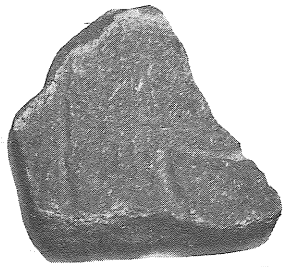


2



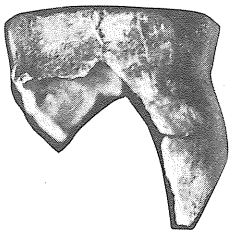
3

4



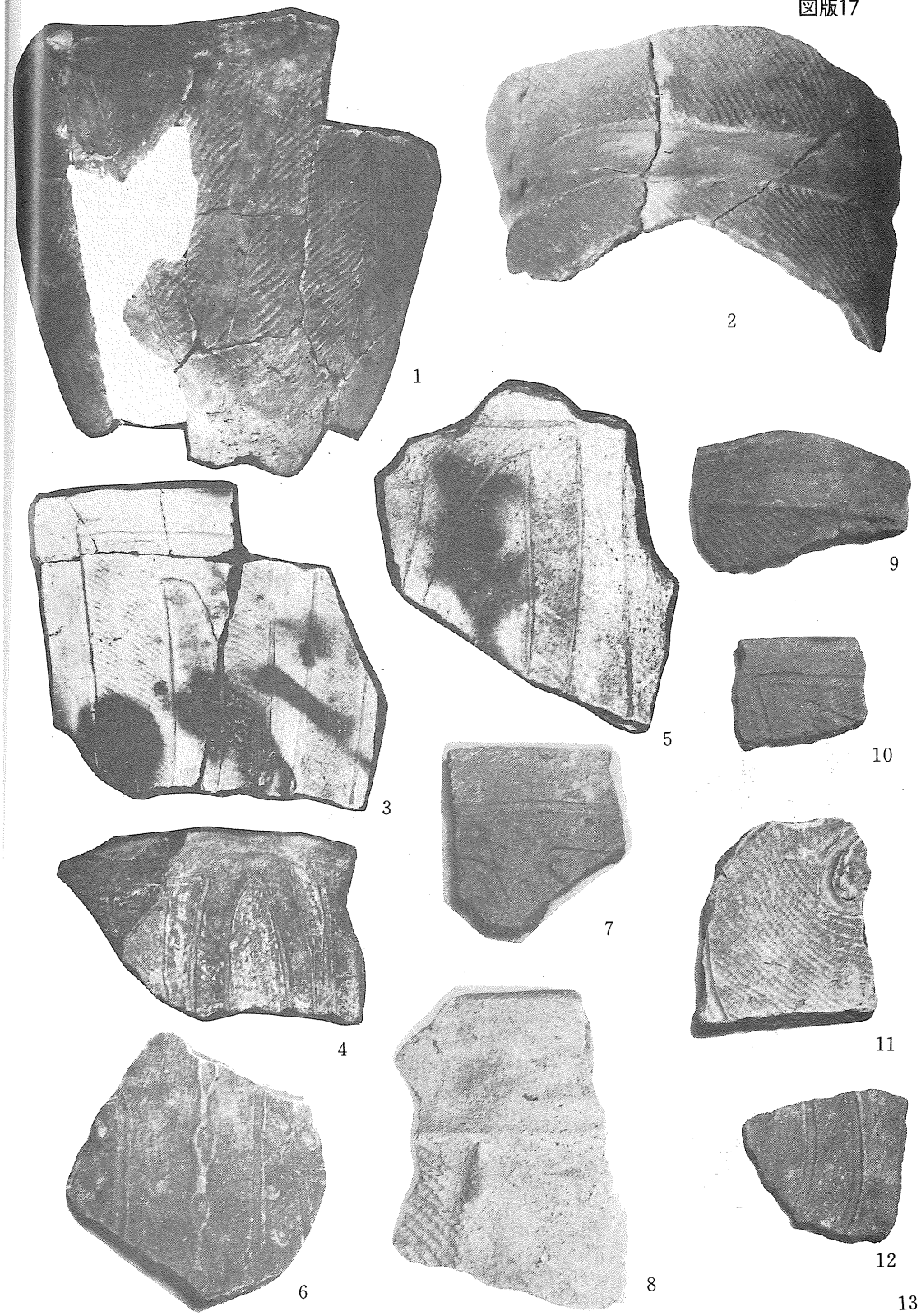
5

6



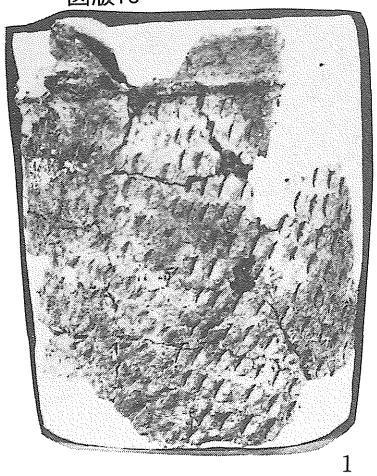
7

Ⅰ区１号土壙出土土器



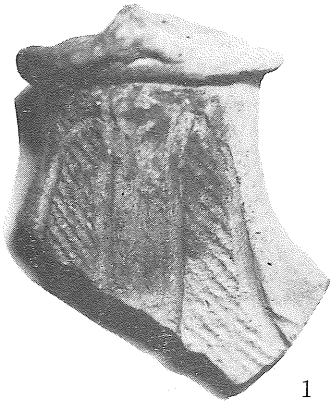
Ⅰ区２号土壙出土土器

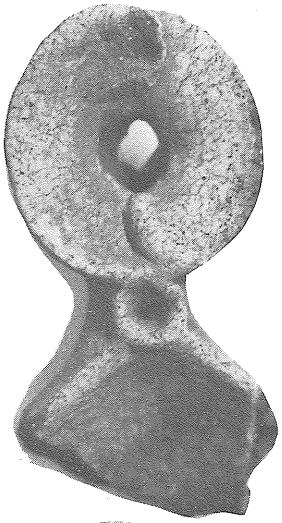
図版18


1

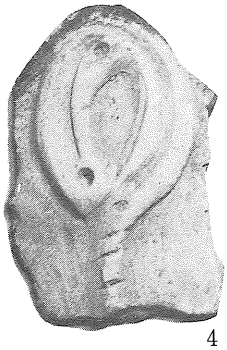
2

3


1


2

3

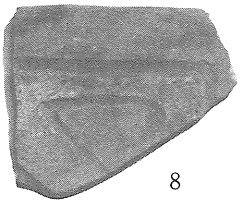

4

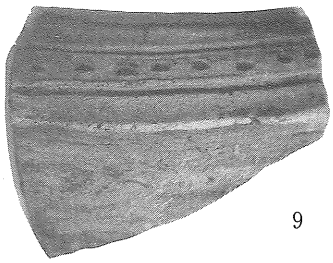
6

5

上　Ⅰ区３号土壙出土土器
下　Ⅰ区４号土壙出土土器

7


8


9

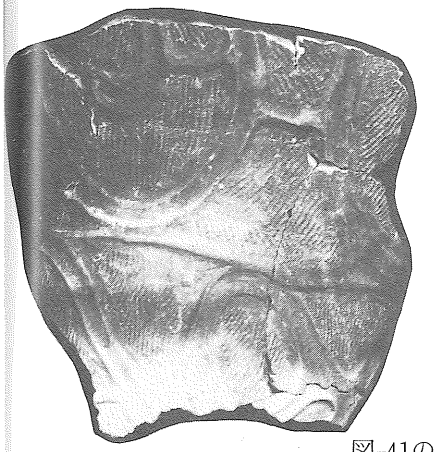
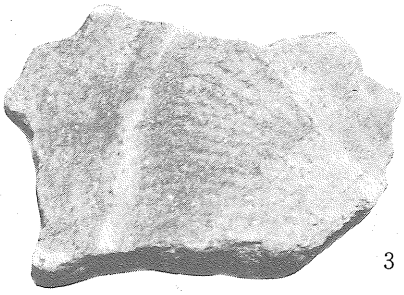
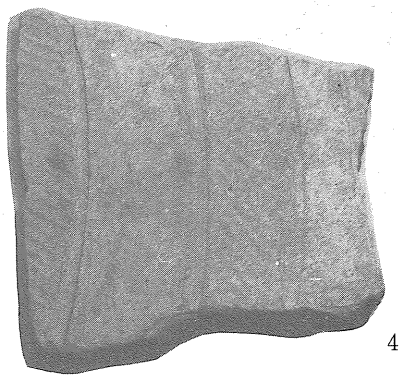
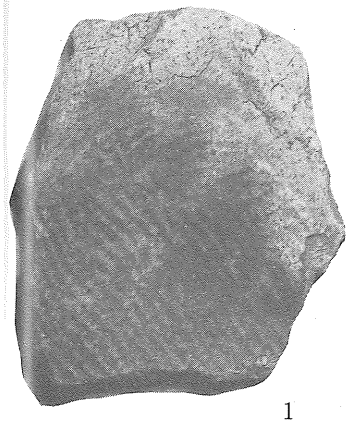
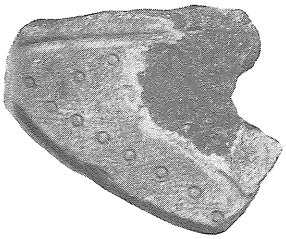


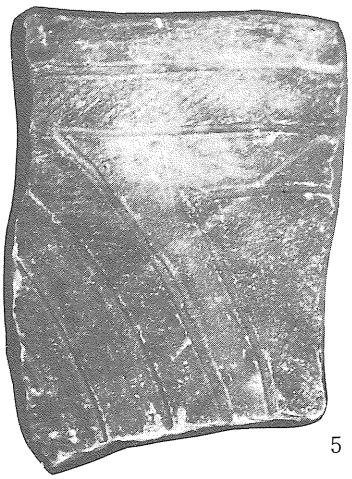
図-41の土器


3


4


1


2

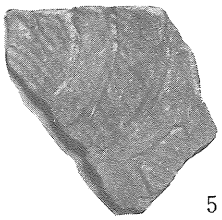

5

6

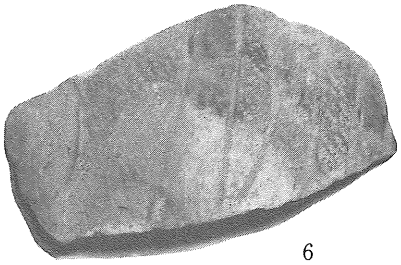
上　Ⅰ区４号土壙出土土器
中　Ⅰ区６号土壙出土土器
下　Ⅰ区５号土壙出土土器

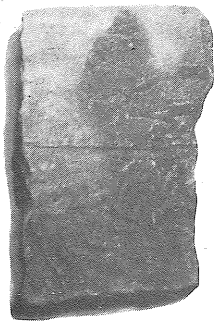
図版20

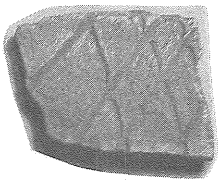
1


5

2


6

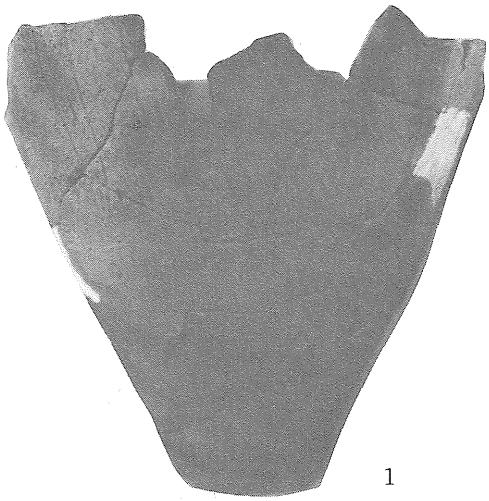

3


7

4

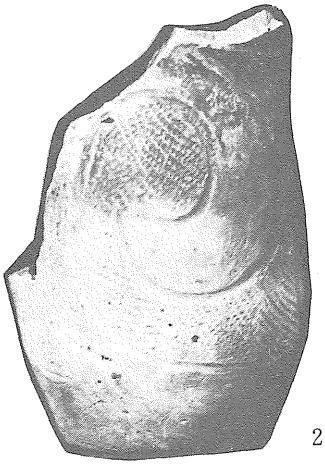
8

Ⅰ区７号土壙出土土器

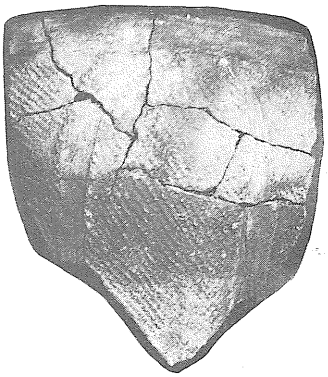


1

3

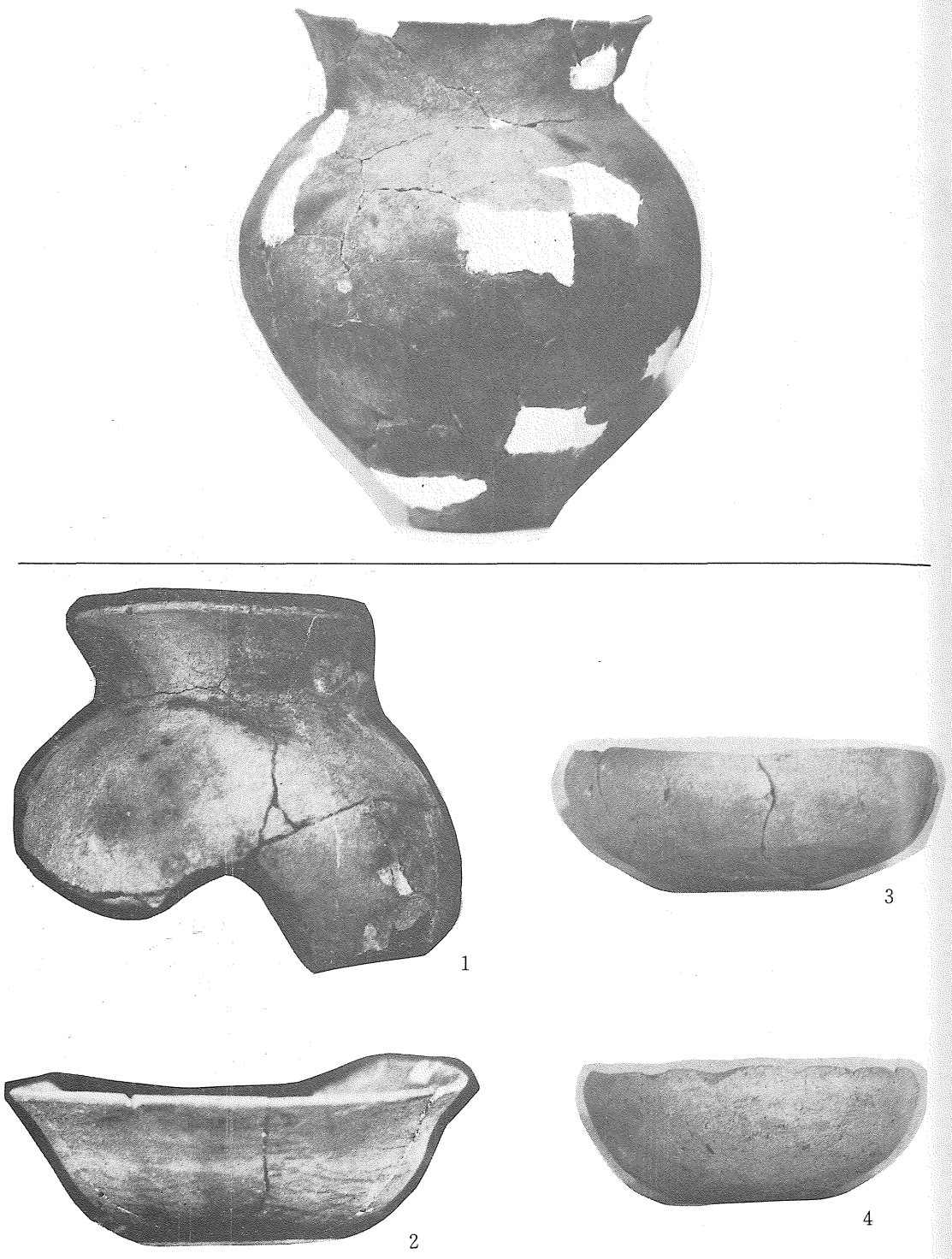


2



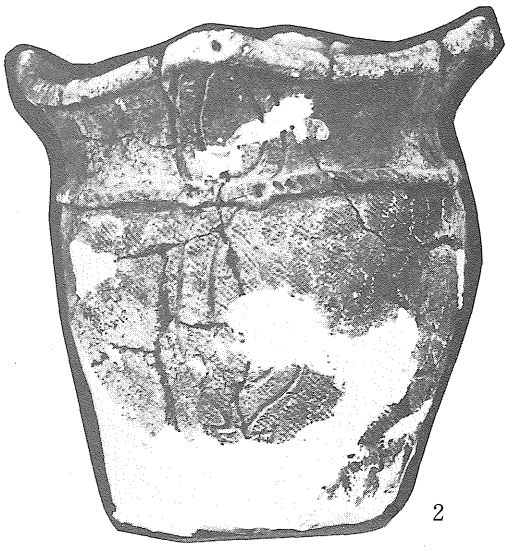
上　Ⅰ区９号土壙出土土器
下　Ⅰ区出土遺構不明の土器

図版22



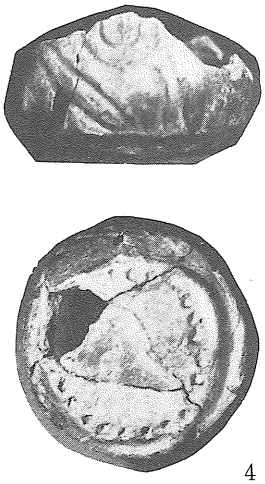
上　Ⅰ区1号住居跡出土土器
下　Ⅰ区2号住居跡出土土器

1

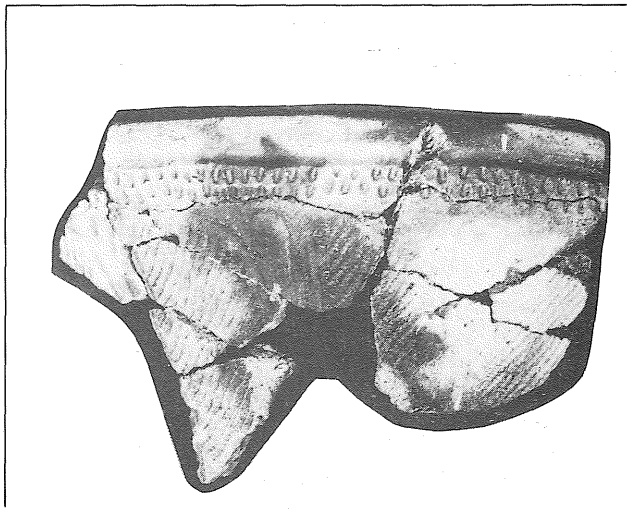


2

3



4



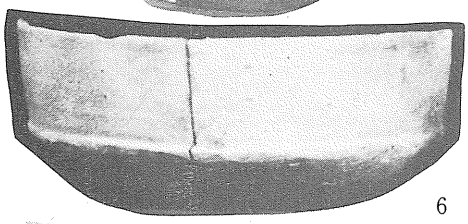
上　Ⅱ区２号土壙出土土器
下　Ⅱ区３号土壙出土土器

図版24

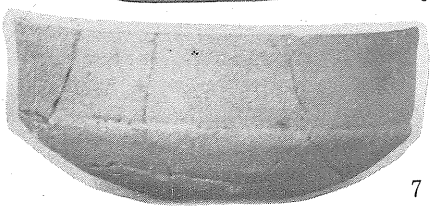
1

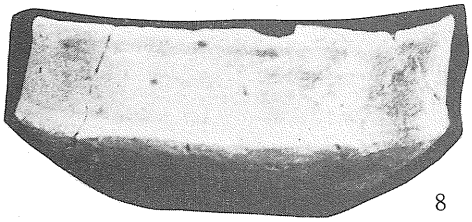
3

4


6

5

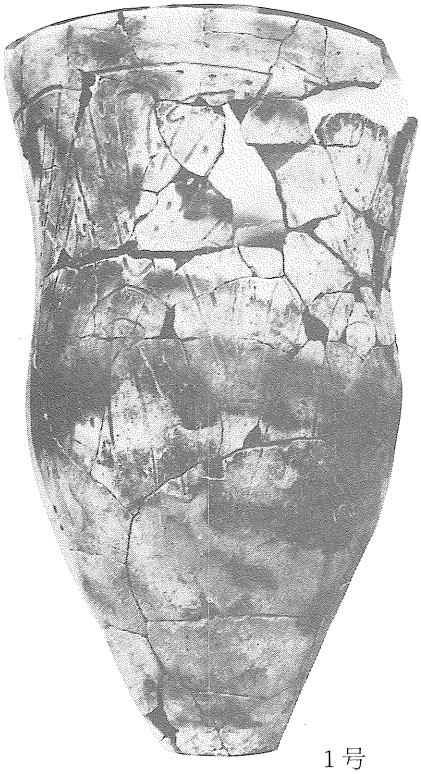

7


8

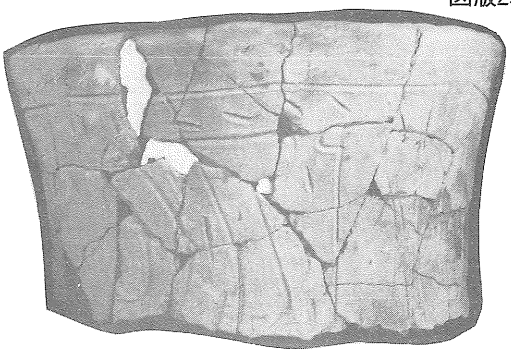
11

9

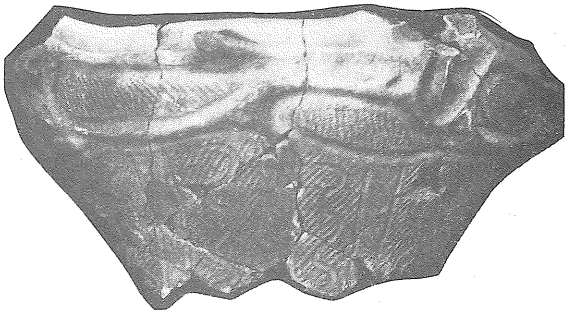
Ⅱ区古墳時代住居跡出土土器



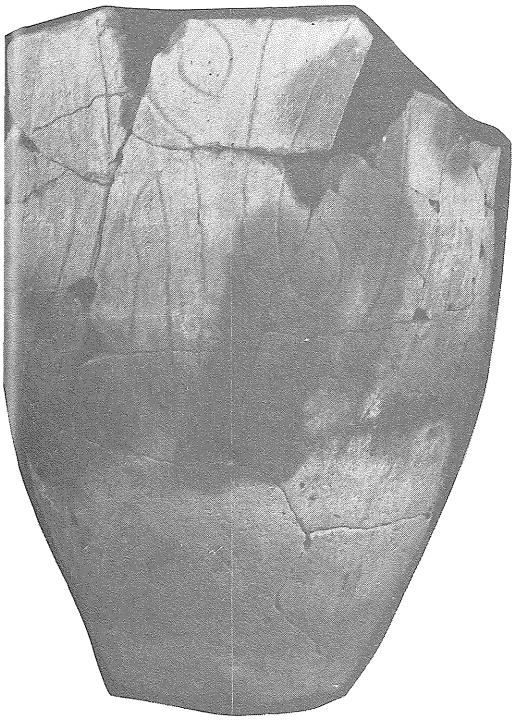
1号

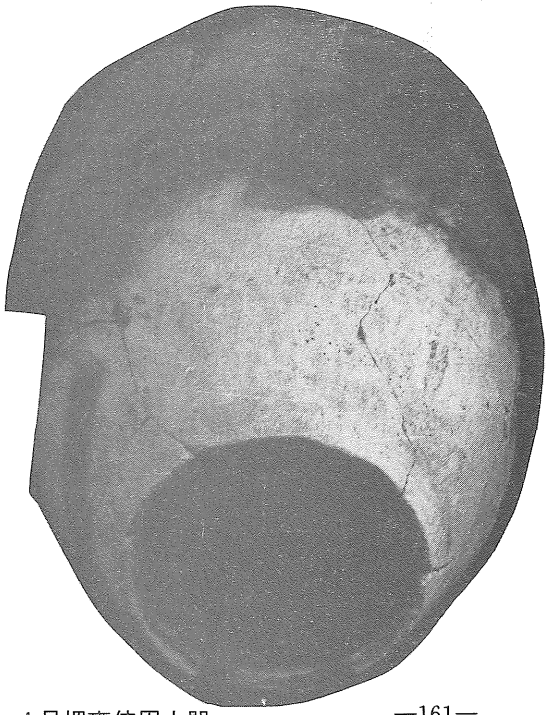


2号



4号

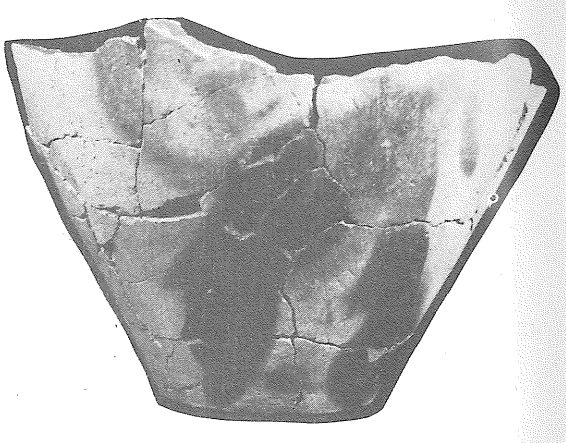




上　Ⅲ区1号，2号，4号埋甕使用土器
下　Ⅳ区2号埋甕使用土器

図版26

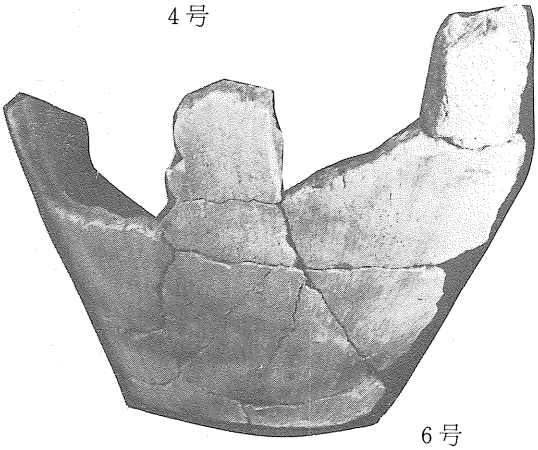
1号



3号

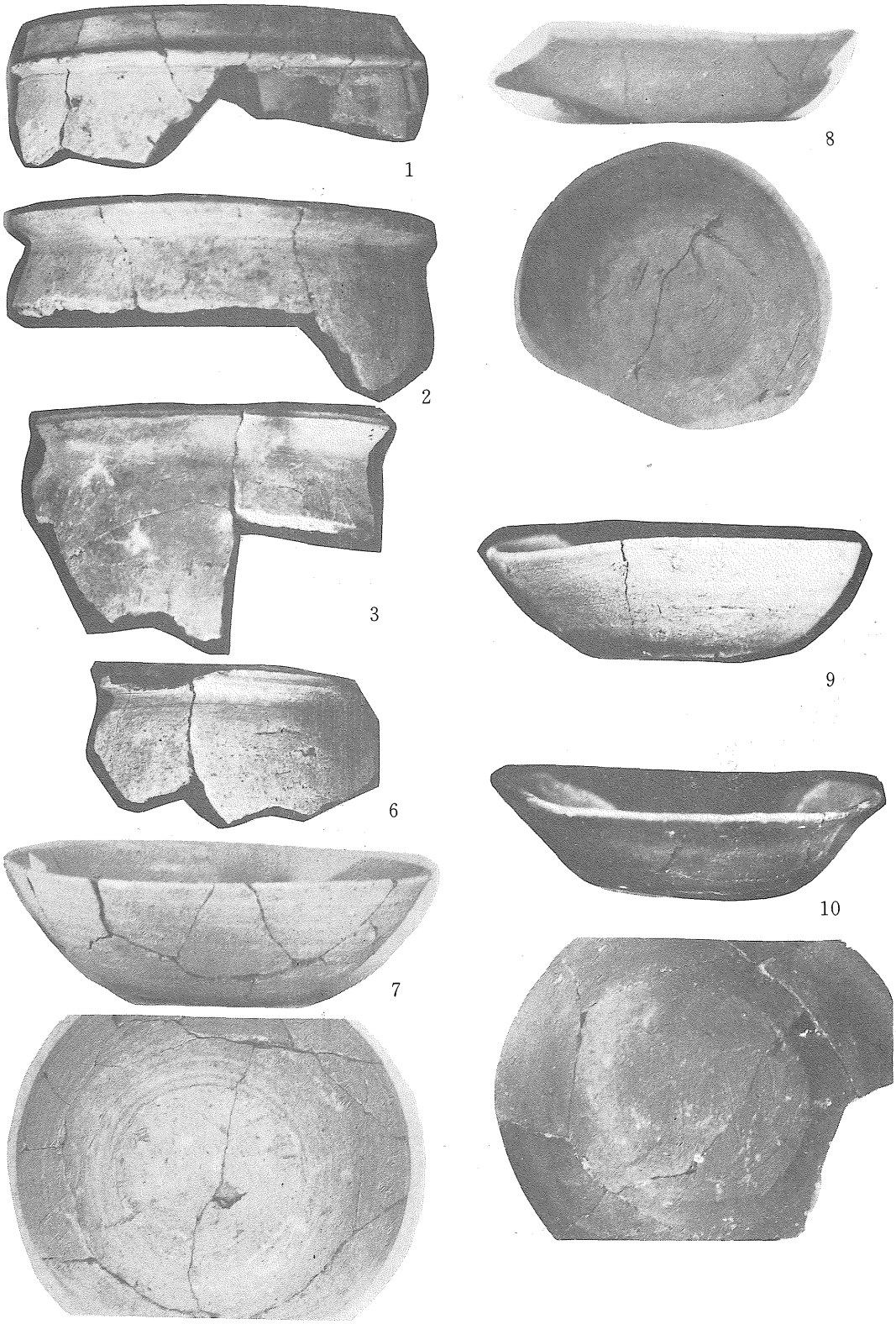
4号

5号



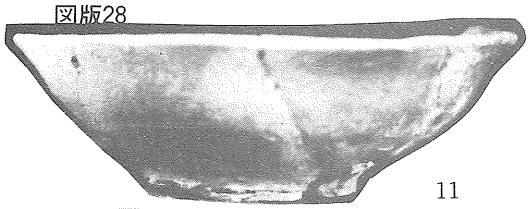
6号

Ⅳ区埋甕施設使用土器

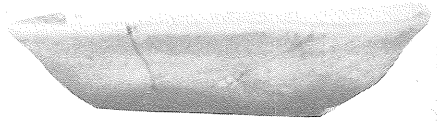


Ⅳ区歴史時代住居跡出土土器（1）

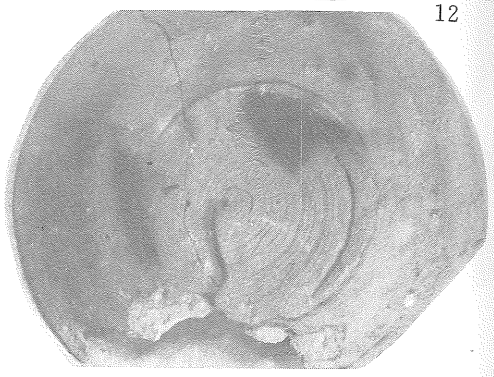
図版28

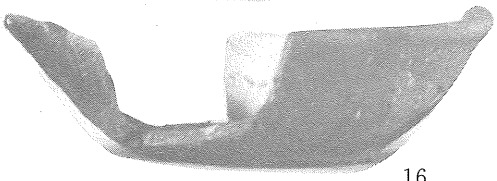


11

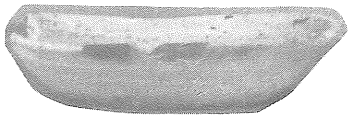


12

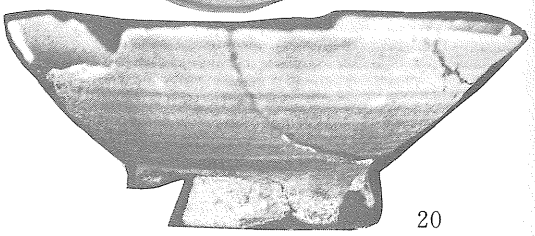




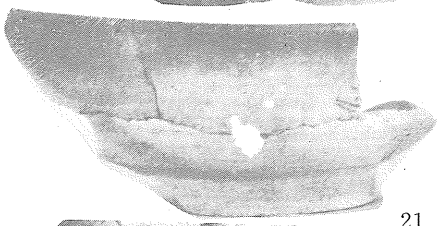
16



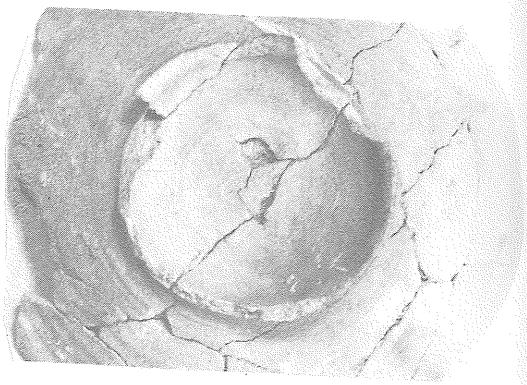
18



20

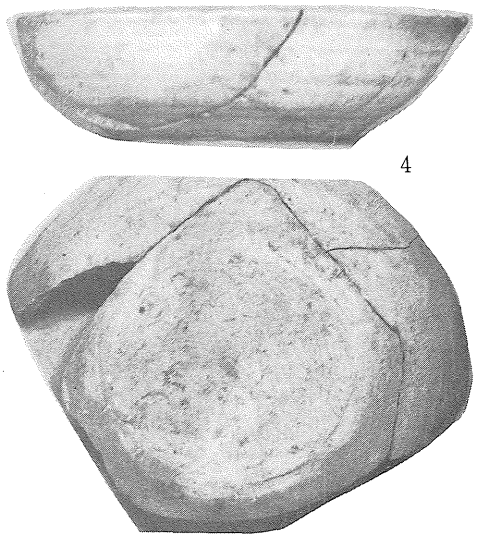


21

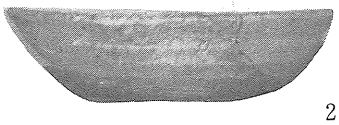


Ⅳ区歴史時代住居跡出土土器（2）

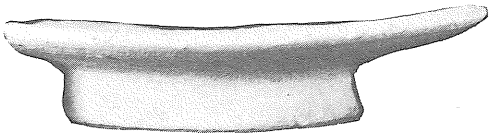
1



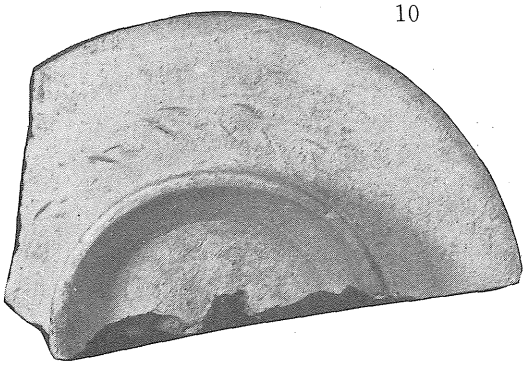
4

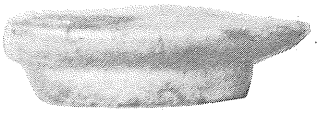


2

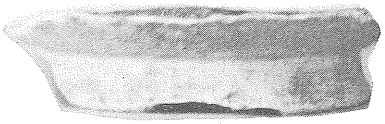


10





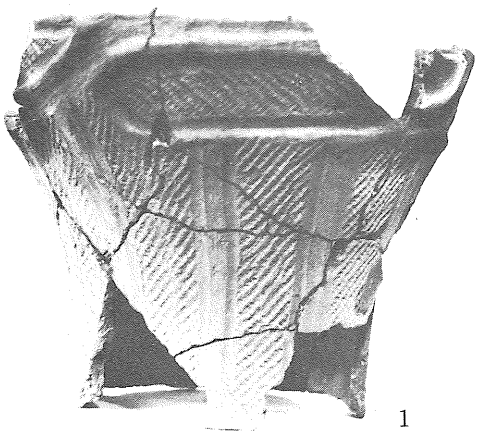
12



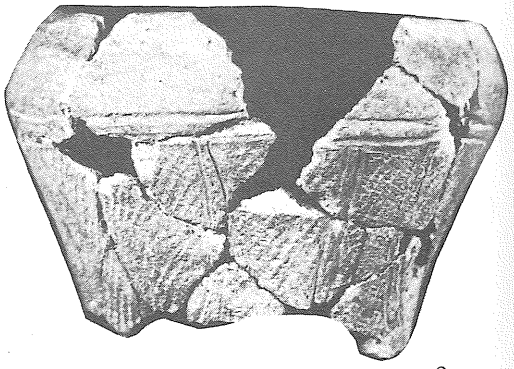
14

Ⅳ区歴史時代土壙出土土器

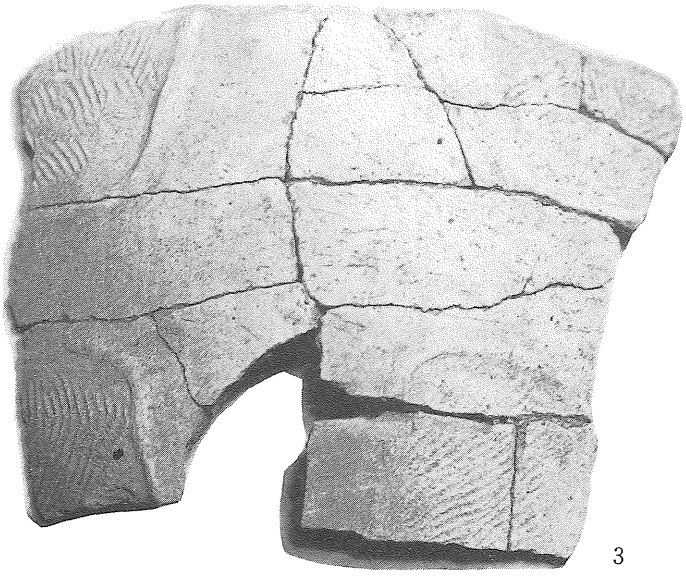
図版30



1

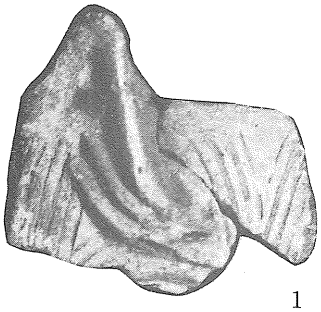


2

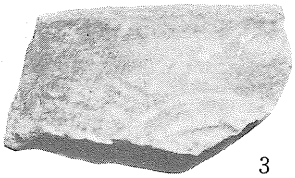


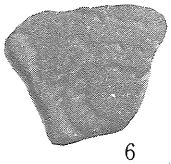
3

Ⅳ区遺構に伴わない土器


1

2


3


6

5

4

V区1号住居跡出土土器

図版32

図60の 1

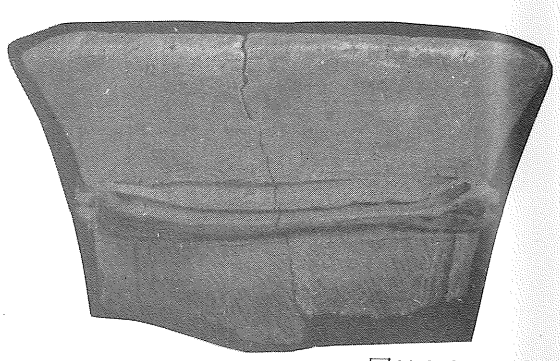


図60の 2

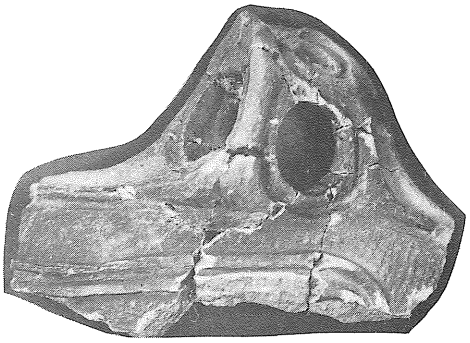


図60の 3

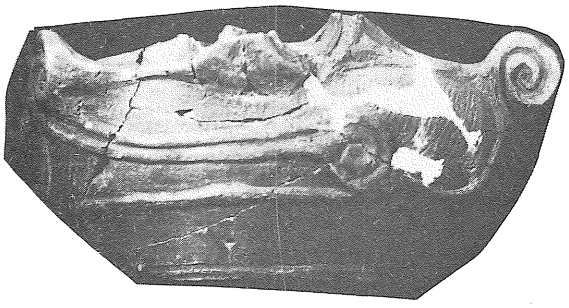


図60の 4

図61の 2

図61の 1

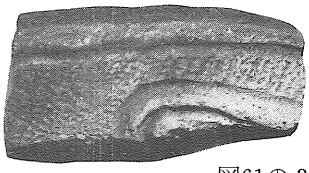


図61の 3

Ⅴ区２号住居跡出土土器（１）

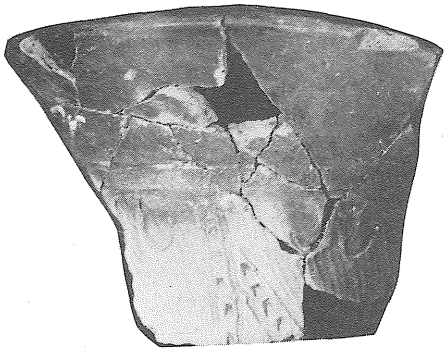


図61の 4

図61の 5

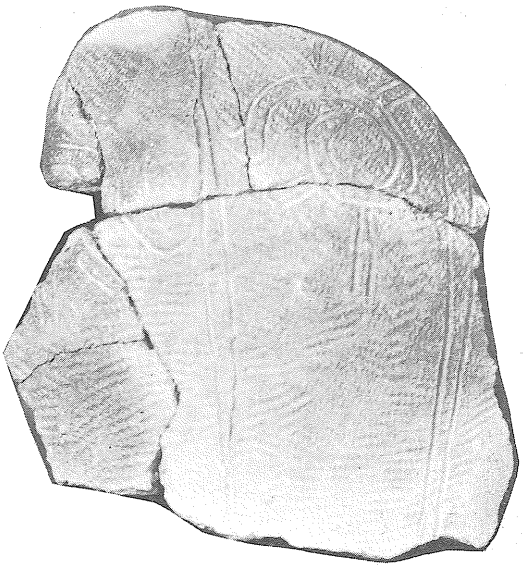


図61の 6

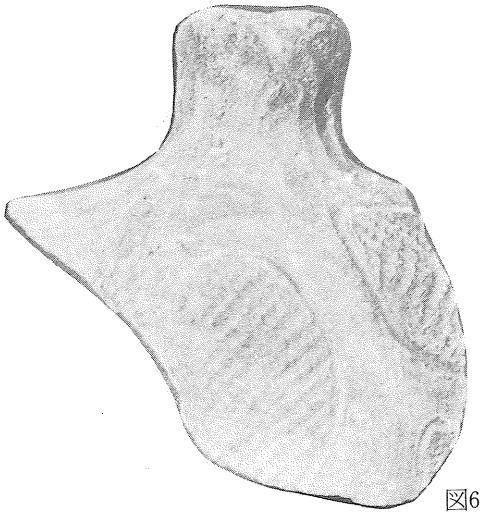


図62の 1

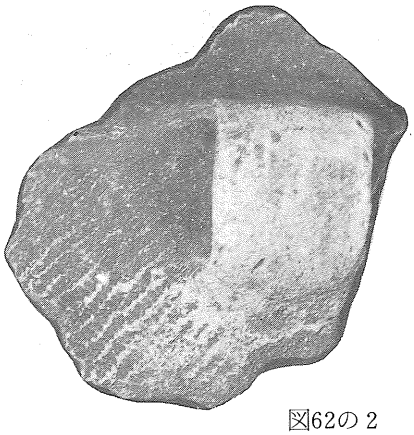
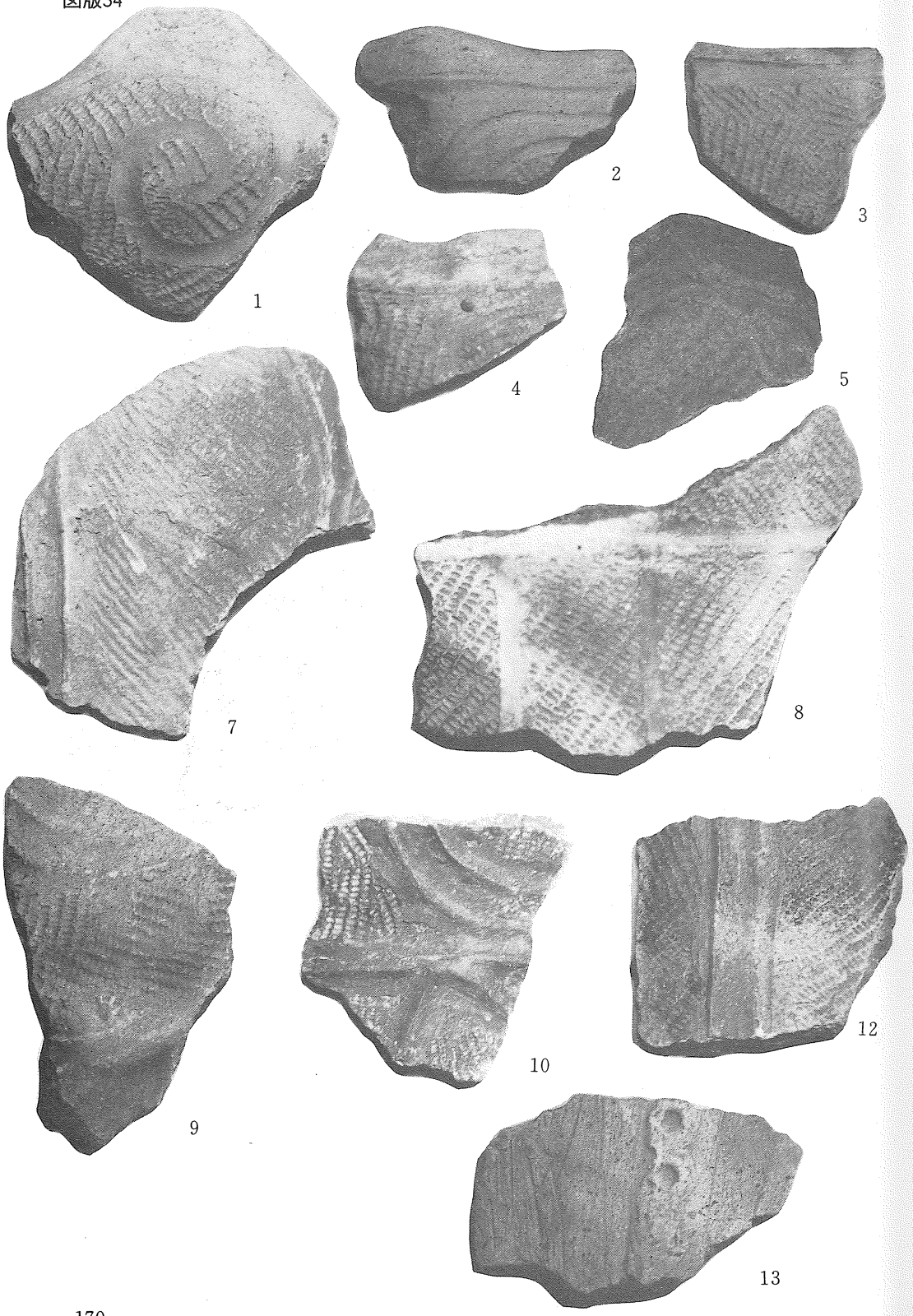


図62の 2

上　Ⅴ区２号住居跡出土土器（２）
下　Ⅴ区３号住居跡出土土器（１）

図版34



V区3号住居跡出土土器(3)

1

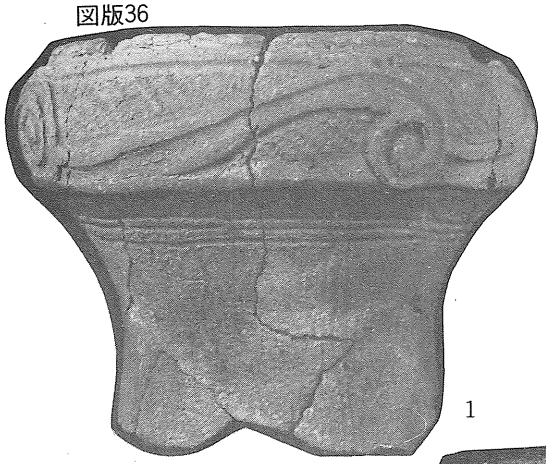
2

3

4

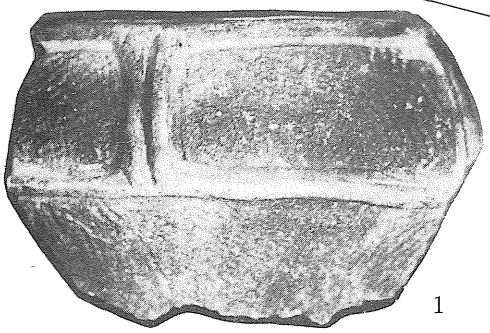
5

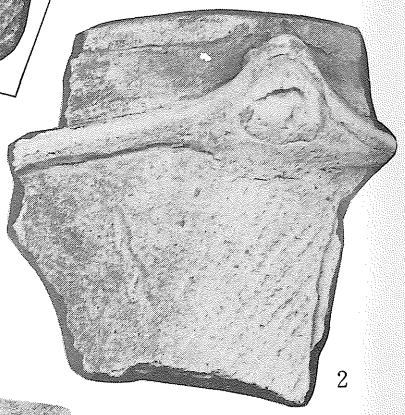
図版36

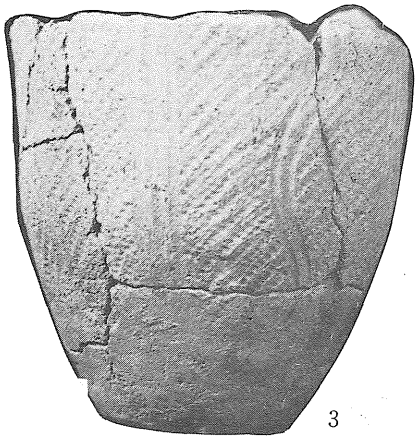

1

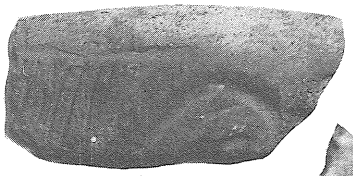
2

3


1


2


3


4

5

6

上　Ⅴ区４号住居跡出土土器
下　Ⅴ区５号住跡出土土器

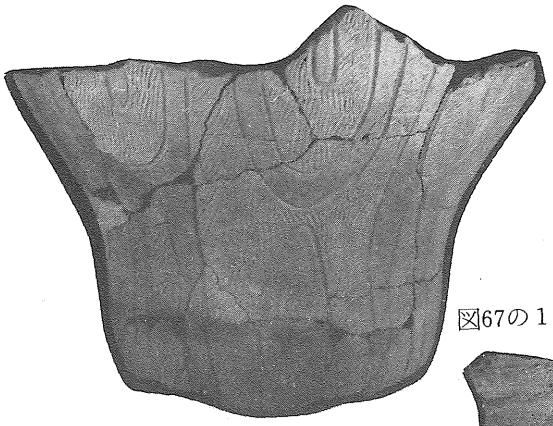


図67の1

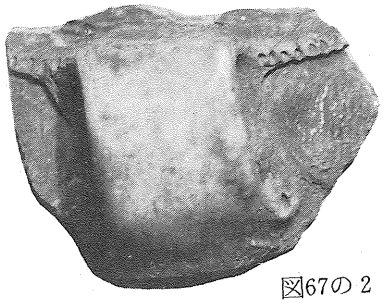


図67の2

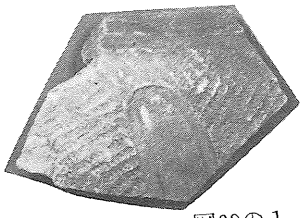
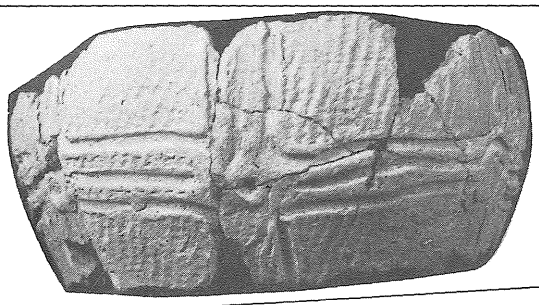


図69の1

図69の9

図69の8



1

2

3

4

5

上　Ⅴ区1号屋外炉使用土器，周辺出土土器
中　Ⅴ区2号屋外炉使用土器
下　Ⅴ区1号土壙出土土器

図版38

図71の 1

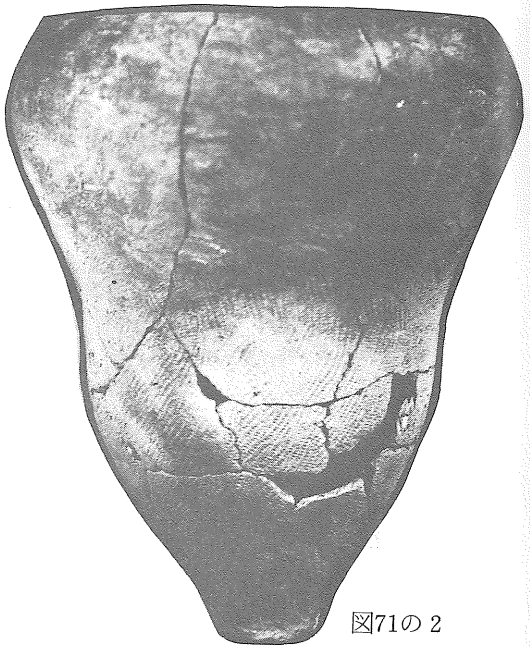


図71の 2

図72の 1

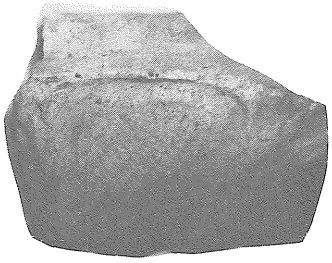


図72の 2

図72の 3

図72の 4

図72の 5

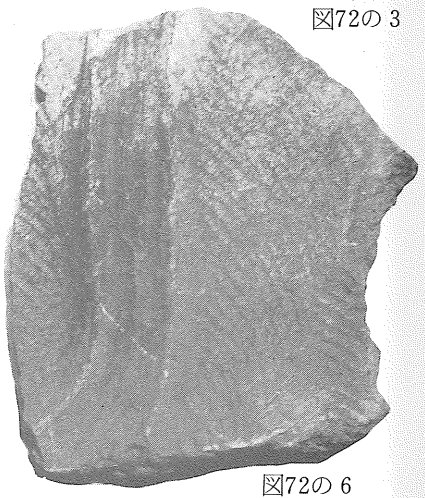
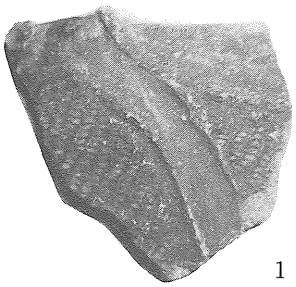
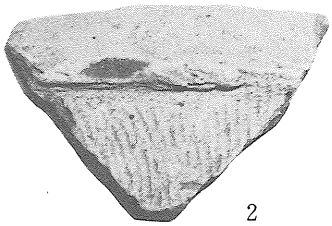


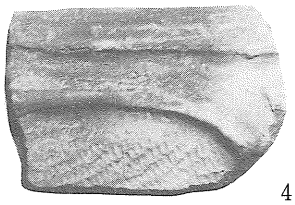
図72の 6

Ⅴ区２号土壙出土土器


1


2

3


4

5

1

2

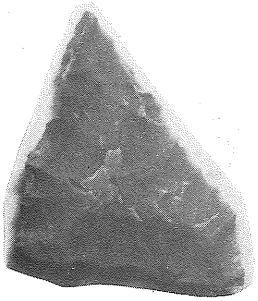
上　Ⅴ区３号土壙出土土器
下　Ⅴ区遺構に伴わない土器

図版40

1

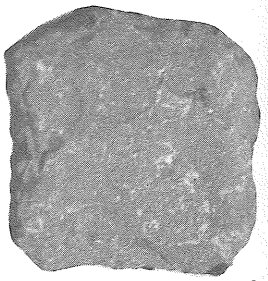
3

2



5

4


6

7

8

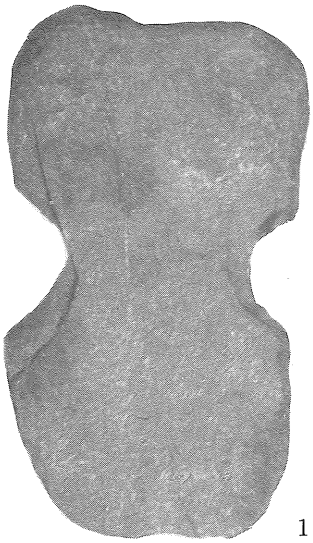
9

図77の11

図77の 9

図77の10

北の内遺跡出土石器（1）

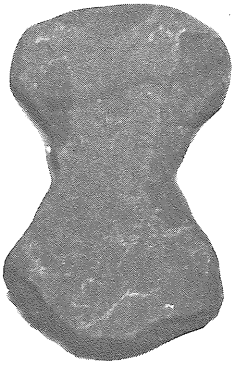

1

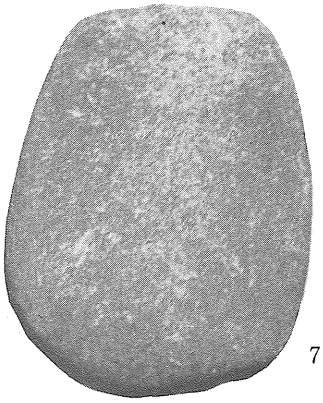
3

2

4

5


6


7

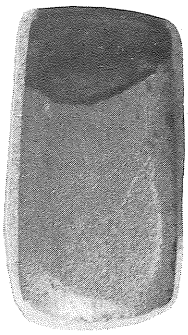


図77の 8

北の内遺跡出土石器（２）

図76の 8

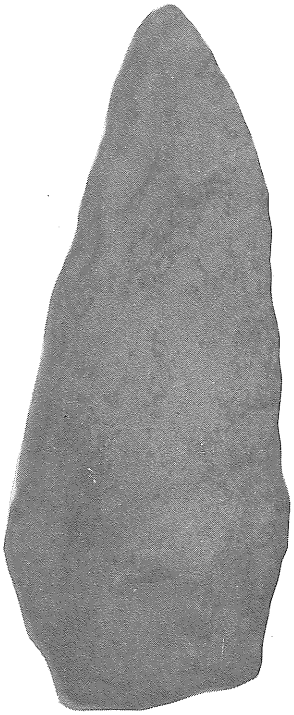


図76の 9

図77の12

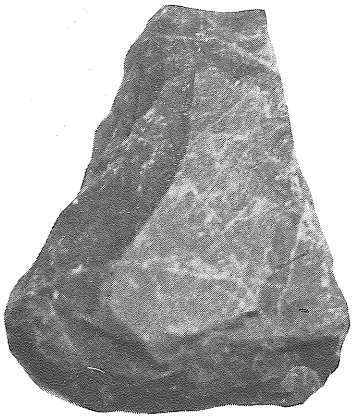
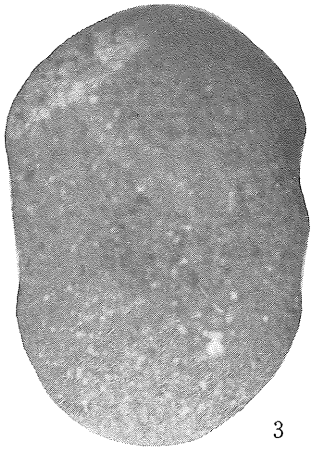


図77の 7

1

2



3

4

5

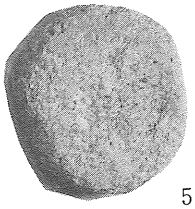
6

北の内遺跡出土石器(4)

図版44

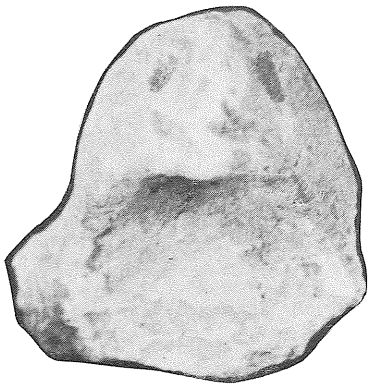
4

7



5

6



1

北の内遺跡出土土製品

栃木県埋蔵文化財報告　第 31 号

北の内遺跡発掘調査報告

発行日　昭 和 54 年 10 月
発行者　栃 木 県 教 育 委 員 会
印　刷　㈱松井ピ・テ・オ印刷